(015)

一生成仏抄

建長7年('55)　34歳
(富木常忍)

夫れ、無始の生死を留めて、この度決定して無上菩提を証せんと思わば、すべからく衆生本有の妙理を観ずべし。衆生本有の妙理とは、妙法蓮華経これなり。故に、妙法蓮華経と唱えたてまつれば、衆生本有の妙理を観ずるにてあるなり。

文理真正の経王なれば、文字即実相なり、実相即妙法なり。ただ詮ずるところは、一心法界の旨を説き顕すを妙法と名づく。故に、この経を「諸仏の智慧」とは云うなり。一心法界の旨とは、十界三千の依正・色心・非情草木・虚空刹土、いずれも除かずちりも残らず一念の心に収めて、この一念の心、法界に遍満するを指して、万法とは云うなり。この理を覚知するを、一心法界とも云うなるべし。

ただし、妙法蓮華経と唱え持つというとも、もし己心の外に法ありと思わば、全く妙法にあらず、麤法なり。麤法は今経にあらず。今経にあらざれば、方便なり、権門なり。方便・権門の教えならば、成仏の直道にあらず。成仏の直道にあらざれば、多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に、一生成仏叶いがたし。故に、妙法と唱え蓮華と読まん時は、我が一念を指して妙法蓮華経と名づくるぞと深く信心を発すべきなり。

すべて一代八万の聖教、三世十方の諸の仏菩薩も、我が心の外に有りとはゆめゆめ思うべからず。しかれば、仏教を習うといえども、心性を観ぜざれば、全く生死を離るることなきなり。もし心外に道を求めて万行万善を修せんは、譬えば、貧窮の人、日夜に隣の財を計えたれども、半銭の得分もなきがごとし。

しかれば、天台の釈の中には「もし心を観ぜざれば、重罪滅せず」とて、もし心を観ぜざれば、無量の苦行となると判ぜり。故に、かくのごときの人をば、「仏法を学して外道となる」と恥じしめられたり。ここをもって、止観には「仏教を学すといえども、還って外見に同ず」と釈せり。しかるあいだ、仏の名を唱え、経巻をよみ、花をちらし、香をひねるまでも、皆、我が一念に納めたる功徳・善根なりと信心を取るべきなり。

これによって、浄名経の中には「諸仏の解脱を衆生の心行に求めば、衆生即菩提なり、生死即涅槃なり」と明かせり。また「衆生の心けがるれば土もけがれ、心清ければ土も清し」とて、浄土といい穢土というも、土に二つの隔てなし、ただ我らが心の善悪によると見えたり。衆生というも仏というも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名づけ、悟る時をば仏と名づけたり。譬えば、闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるがごとし。只今も、一念無明の迷心は磨かざる鏡なり。これを磨かば、必ず法性真如の明鏡と成るべし。

深く信心を発して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。いかようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華経と唱えたてまつるを、これをみがくとはいうなり。

そもそも、妙とは何という心ぞや。ただ我が一念の心不思議なるところを妙とは云うなり。不思議とは、心も及ばず語も及ばずということなり。しかればすなわち、起こるところの一念の心を尋ね見れば、有りと云わんとすれば色も質もなし。また無しと云わんとすれば様々に心起こる。有りと思うべきにあらず、無しと思うべきにもあらず。有無の二つの語も及ばず、有無の二つの心も及ばず。有無にあらずしてしかも有無に遍して、中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名づくるなり。この妙なる心を名づけて法ともいうなり。この法門の不思議を表わすに、譬えを事法にかたどりて蓮華と名づく。一心を妙と知りぬればまた転じて余心をも妙法と知るところを、妙経とはいうなり。しかればすなわち、善悪に付いて起こりところの念心の当体を指して、これ妙法の体と説き宣べたる経王なれば、成仏の直道とはいうなり。

この旨を深く信じて妙法蓮華経と唱えば、一生成仏さらに疑いあるべからず。故に、経文には「我滅度して後において、応にこの経を受持すべし。この人は仏道において、決定して疑いあることなけん」と宣べたり。ゆめゆめ不審をなすべからず。あなかしこ、あなかしこ。一生成仏の信心、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

日蓮　花押

(016)

主師親御書

建長7年('55)　34歳

釈迦仏は、我らがためには、主なり、師なり、親なり。一人してすくい護ると説き給えり。阿弥陀仏は、我らがためには、主ならず、親ならず、師ならず。しかれば、天台大師これを釈して曰わく「西方は仏別にして縁異なり。仏別なるが故に隠顕の義成ぜず、縁異なるが故に子父の義成ぜず。またこの経の首末に全くこの旨無し。眼を閉じて穿鑿せよ」と。

実なるかな、釈迦仏は中天竺の浄飯大王の太子として、十九の御年、家を出で給いて、檀特山と申す山に籠もらせ給い、高峰に登っては妻木をとり、深谷に下っては水を結び、難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ給いて一代聖教を説き給いしに、上べには華厳・阿含・方等・般若等の種々の経々を説かせ給えども、内心には法華経を説かばやとおぼしめされしかども、衆生の機根まちまちにして一種ならざるあいだ、仏の御心をば説き給わで、人の心に随い万の経を説き給えり。

かくのごとく、四十二年がほどは心苦しく思しめししかども、今、法華経に至って、「我が願、既に満足しぬ。我がごとくに衆生を仏になさん」と説き給えり。久遠より已来、あるいは鹿となり、あるいは熊となり、ある時は鬼神のために食われ給えり。かくのごとき功徳をば、法華経を信じたらん

衆生は、「これ真の仏子なり」とて、「これ実の我が子なり。この功徳をこの人に与えん」と説き給えり。これほどに思しめしたる親の釈迦仏をばないがしろに思いなして、「ただ一大事をもって」と説き給える法華経を信ぜざらん人は、いかでか仏になるべきや。能く能く心を留めて案ずべし。

二の巻に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至余経の一偈をも受けざれ」と。文の心は、仏にならんためには、ただ法華経を受持せんことを願って、余経の一偈一句をも受けざれと。三の巻に云わく「飢えたる国より来って、たちまちに大王の膳に遇うがごとし」と。文の心は、飢えたる国より来って、たちまちに大王の膳にあえり。心は、「犬・野干の心を致すとも、迦葉・目連等の小乗の心をば起こさざれ。破れたる石は合うとも、枯れ木に花はさくとも、二乗は仏になるべからず」と仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢をなげ、迦葉は涕泣の声大千界を響かすと申して歎き悲しみしが、今、法華経に至って、迦葉尊者は光明如来の記別を授かりしかば、目連・須菩提・摩訶迦旃延等はこれを見て、「我らも定めて仏になるべし。飢えたる国より来って、たちまちに大王の膳にあえるがごとし」と喜びし文なり。

我ら衆生、無始曠劫より已来、妙法蓮華経の如意宝珠を片時も相離れざれども、無明の酒にたぼらかされて、衣の裏にかけたりとしらずして、少なきを得て足りぬと思いぬ。南無妙法蓮華経とだに唱え奉りたらましかば速やかに仏に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわずかなる戒をもって、あるいは天に生まれて大梵天・帝釈の身と成っていみじきことと思い、ある時は人に生まれて諸の国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成って、これ程のたのしみなしと思い、少なきを得て足りぬと思

い、悦びあえり。これを仏は、「夢の中のさかえ、幻まぼろしのたのしみなり。ただ法華経を持ち奉り、速やかに仏になるべし」と説き給えり。

また、四の巻に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」云々。釈迦仏は、師子頬王の孫、浄飯王には嫡子なり。十善の位をすて、五天竺第一なりし美女・耶輸多羅女をふりすてて、十九の御年出家して勤め行い給いしかば、三十の御年成道し御坐しまして、三十二相八十種好の御形にて、御幸なる時は、大梵天王・帝釈左右に立ち、多聞・持国等の四天王先後囲繞せり。法を説き給う御時は、四弁八音の説法は祇園精舎に満ち、三智五眼の徳は四海に敷しけり。しかれば、いずれの人か仏を悪むべき。なれども、なお怨嫉するもの多し。まして滅度の後、一毫の煩悩をも断ぜず少しの罪をも弁えざらん法華経の行者を悪み嫉む者多からんことは、雲霞のごとくならんと見えたり。しからば則ち、末代悪世にこの経をありのままに説く人には敵多からんと説かれて候に、世間の人々、我も持ちたり我も読み奉り行じ候に、敵なきは、仏の虚言か、法華経の実ならざるか。また実の御経ならば、当世の人々、経をよみまいらせ候は虚よみか、実の行者にてはなきか、いかん。能く能く心得べきことなり。明らむべきものなり。

四の巻に、多宝如来は、釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給うに、初めには華厳経と申す経を実報華王のみぎりにして、別円頓大の法輪、法慧・功徳林・金剛幢・金剛蔵の四菩薩に対して三七日の間説き給いしにも来り給わず。その二乗の機根叶わざりしかば、瓔珞細軟の衣をぬぎすて、麤弊垢膩の衣を着、波羅奈国鹿野苑に趣いて、十二年の間生滅四諦の法門を説き給いしに、阿若倶隣等の五人

証果し、八万の諸天は無生忍を得たり。次に欲・色二界の中間、大宝坊の儀式、浄名の御室には三万二千の牀を立て、般若・白鷺池の辺、十六会の儀式、尽浄虚融の旨をのべ給いしにも来り給わず。法華経にも、一の巻乃至四の巻の人記品までも来り給わず、宝塔品に至って初めて来り給えり。

釈迦仏、先四十余年の経を我と虚事と仰せられしかば、人用いることなく、法華経を真実なりと説かせ給えども、「仏というは無虚妄の人とて永く虚言し給わずと聞きしに、一日ならず二日ならず、一月ならず二月ならず、一年二年ならず、四十余年の程まで虚言したりと仰せられしかば、またこの経を実と説き給うも、虚言にやあらんずらん」と不審をなししかば、この不審、釈迦仏一人しては、舎利弗を始め、事はれがたかりしに、この多宝仏、宝浄世界よりはるばると来らせ給いて、「法華経は、皆これ真実なり」と証明し給いしに、先の四十余年の経を虚言と仰せらるること、実の虚言に定まるなり。

また、法華経より外の一切経を空に浮かべて、文々句々、阿難尊者のごとく覚り、富楼那の弁舌のごとくに説くとも、それを難事とせず。また、須弥山と申す山は、十六万八千由旬の金山にて候を、他方世界へつぶてになぐる者ありとも、難事には候わじ。仏滅度して後、当世・末代悪世に法華経をありのままに能く説かん、これを難しとすと説かせ給えり。五天竺第一の大力なりし提婆達多も、長三丈五尺、広さ一丈二尺の石をこそ仏になげかけて候いしか。また漢土第一の大力、楚の項羽と申せし人も、九石入りの釜に水満ち候いしをこそひさげ候いしか。それにこれは、「須弥山をばなぐる者は有りとも、この経を説のごとく読み奉らん人は有りがたし」と説かれて候に、人ごとにこの経を

読
よみ書き説き候。経文を虚言に成して、当世の人々を皆法華経の行者と思うべきか。能く能く御心得あるべきことなり。

五の巻の提婆品に云わく「もし善男子・善女人有って、妙法華経の提婆達多品を聞いて、浄心に信敬して、疑惑を生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生に堕ちずして、十方の仏前に生ぜん」と。この品には二つの大事あり。

一には、提婆達多と申すは、阿難尊者には兄、斛飯王には嫡子、師子頬王には孫、仏にはいとこにてありしが、仏は一閻浮提第一の道心者にてましましに、怨をなして、「我はまた閻浮提第一の邪見・放逸の者とならん」と誓って、万の悪人を語らって仏に怨をなして、三逆罪を作して、現身に大地破れて無間大城に堕ちて候いしを、天王如来と申す記別を授けらるる品にて候。しかれば、善男子と申すは、男この経を信じまいらせて聴聞するならば、提婆達多程の悪人だにも仏になる。まして末代の人は、たとい重罪なりとも、多分は十悪をすぎず。まして深く持ち奉る人、仏にならざるべきや。

二には、娑竭羅竜王のむすめ竜女と申す八歳のくちなわ、仏に成りたる品にて候。このことめずらしく貴きことにて候。その故は、華厳経には「女人は地獄の使いなり。能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心は夜叉のごとし」と。文の心は、女人は地獄の使い、よく仏の種をたつ、外面は菩薩に似たれども、内心は夜叉のごとしと云えり。また云わく「一度女人を見る者は、よく眼の功徳を失う。たとい大蛇をば見るとも、女人を見るべからず」と云い、またある経には「あらゆる三千界の男子の諸の煩悩を合わせ集めて、一人の女人の業障となす」と。三千大千世界にあらゆる男子の

諸の煩悩を取り集めて女人一人の罪とすと云えり。ある経には「三世の諸仏の眼は脱けて大地に堕つとも、女人は仏に成るべからず」と説き給えり。しかるに、この品の意は、人・畜をいわば畜生たる竜女だにも仏に成れり。まして我らは形のごとく人間の果報なり。彼の果報にはまされり。いかでか仏にならざるべきやと思しめすべきなり。

中にも、「三悪道におち堕ず」と説かれて候。

その地獄と申すは、八寒・八熱、乃至八大地獄の中に、初め浅き等活地獄を尋ぬれば、この一閻浮提の下一千由旬なり。その中の罪人は、互いに常に害心をいだけり。もしたまたま相見れば、猟師が鹿にあえるがごとし。各々鉄の爪をもって、互いにつかみさく。血肉皆尽きて、ただ残って骨のみあり。あるいは獄卒、棒をもって頭より足裏に至るまで皆打ちくだく。身も破れくだけて、なお沙のごとし。焦熱なんど申すは、譬えんかたなき苦なり。鉄城四方に回って門を閉じたれば、力士も開きがたく、猛火高くのぼって金翅の翼のつばさもかけるべからず。

餓鬼道と申すは、その住処に二つあり。一には地の下五百由旬の閻魔王宮にあり。二には人天の中にもまじわれり。その相、種々なり。あるいは腹は大海のごとく、喉のんどは鍼のごとくなれば、明けても暮れても食すともあくべからず。まして五百生・七百生なんど飲食の名をだにもきかず。あるいは己が頭をくだきて脳を食するもあり、あるいは一夜に五人の子を生んで夜の内に食するもあり。万菓、林に結べり。取らんとすれば、ことごとく剣の林となり。万水、大海に流れ入りぬ。飲まんとすれば、猛火となる。いかにしてか、この苦をまぬかるべき。

次に畜生道と申すは、その住所に二つあり。根本は大海に住す。枝末は人天に雑われり。短き物は長き物にのまれ、小さき物は大なる物に食らわれ、互いに相食んでしばらくもやすむことなし。あるいは鳥獣と生まれ、あるいは牛馬と成っても重き物をおおせられ、西へ行かんと思えば東へやられ、東へ行かんとすれば西へやらる。山野に多くある水と草をのみ思って、余は知るところなし。

しかるに、善男子・善女人、この法華経を持ち、南無妙法蓮華経と唱え奉らば、この三罪を脱るべしと説き給えり。何事か、これにしかん。たのもしきかな、たのもしきかな。

また、五の巻に云わく「我は大乗の教えを闡いて、苦の衆生を度脱せん」と。心は、「われ大乗の教えをひらいて」と申すは、法華経を申す。「苦の衆生」とは何ぞや。地獄の衆生にもあらず、餓鬼道の衆生にもあらず、ただ女人を指して、「苦の衆生」と名づけたり。五障・三従と申して、三つしたがう事有って、五つの障りあり。竜女、「我、女人の身を受けて、女人の苦をつみしれり。しかれば、余をば知るべからず、女人を導かん」と誓えり。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

日蓮　花押

(017)

一代聖教大意

正嘉2年('58)2月14日　37歳

四教

一には三蔵教、二には通教、三には別教、四には円教なり。

始めに三蔵教とは、阿含経の意なり。この経の意は、六道より外を明かさず、ただ六道〈地・餓・畜・修・人・天〉の内の因果の道理を明かす。ただし、正報は十界を明かすなり。地・餓・畜・修・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏なり。依報が六つにてあれば、六界と申すなり。この教えの意は、六道より外を明かさざれば、三界より外に浄土と申す生処ありと云わず。また三世に仏は次第次第に出世すとは云えども、横に十方に並べて仏有りとも云わず。

三蔵とは、一には経蔵〈また云わく定蔵〉、二には律蔵〈また云わく戒蔵〉、三には論蔵〈また云わく慧蔵〉なり。ただし、経・律・論の定・戒・慧、戒・定・慧、慧・定・戒ということあるなり。戒蔵とは、五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり。定蔵とは、味禅〈定の名なり〉・浄禅・無漏禅なり。慧蔵とは、苦・空・無常・無我の智慧なり。

戒・定・慧の勝劣というは、ただ上の戒ばかりを持つ者は、三界の内の欲界の人・天に生を受くる

凡夫なり。ただ上の定ばかりを修する人は、戒を持たざれども、定の力に依って上の戒を具するなり。この定の内に、味禅・浄禅は、三界の内、色界・無色界へ生ず。無漏禅は、声聞・縁覚と成って見思を断じ尽くし、灰身滅智するなり。慧はまた苦・空・無常・無我と我が色心を観ずれば、上の戒・定を自然に具足して、声聞・縁覚とも成るなり。故に、戒より定は勝れ、定より慧は勝れたり。しかれども、この三蔵教の意は、戒が本体にてあるなり。されば、阿含経を総結する遺教経には戒を説けるなり。

この教えの意は、依報には六界、正報には十界を明かせども、依報に随って、六界を明かす経と名づくるなり。また正報に十界を明かせども、縁覚・菩薩・仏も声聞の覚りを過ぎざれば、ただ声聞教と申す。されば、仏も菩薩も縁覚も灰身滅智する教えなり。

声聞について七賢・七聖の位あり。六道は凡夫なり。

七賢　智ということなり
- 三賢
  - 一、五停心
  - 二、別想念処
  - 三、総想念処
- 四善根
  - 一、煖法
  - 二、頂法
  - 三、忍法
  - 四、世第一法

この七賢の位は、六道の凡夫より賢く、生死を厭い、煩悩を具しながら煩悩を発さざる賢き人なり。

例せば、外典の許由・巣父がごとし。

五停心
- 一、数息 —— 息を数えて散乱を治す
- 二、不浄 —— 身の不浄を観じて貪欲を治す
- 三、慈悲 —— 慈悲を観じて嫉妬を治す
- 四、因縁 —— 十二因縁を観じて愚癡を治す
- 五、界方便 —— 地・水・火・風・空・識の六界を観じて障道を治す

また云わく「念仏」と

別想念処に四つ
- 一、身 —— 外道は身を浄と云い、仏は不浄と説きたもう
- 二、受 —— 外道は三界を楽と云い、仏は苦と説きたもう
- 三、心 —— 外道は心を常と云い、仏は無常と説きたもう
- 四、法 —— 外道は一切衆生に我有りと云い、仏は無我と説きたもう

外道は常〈心〉・楽〈受〉・我〈法〉・浄〈身〉、仏は苦・不浄・無常・無我と説く

総想念処 —— 先の苦・不浄・無常・無我を修練して観ずるなり

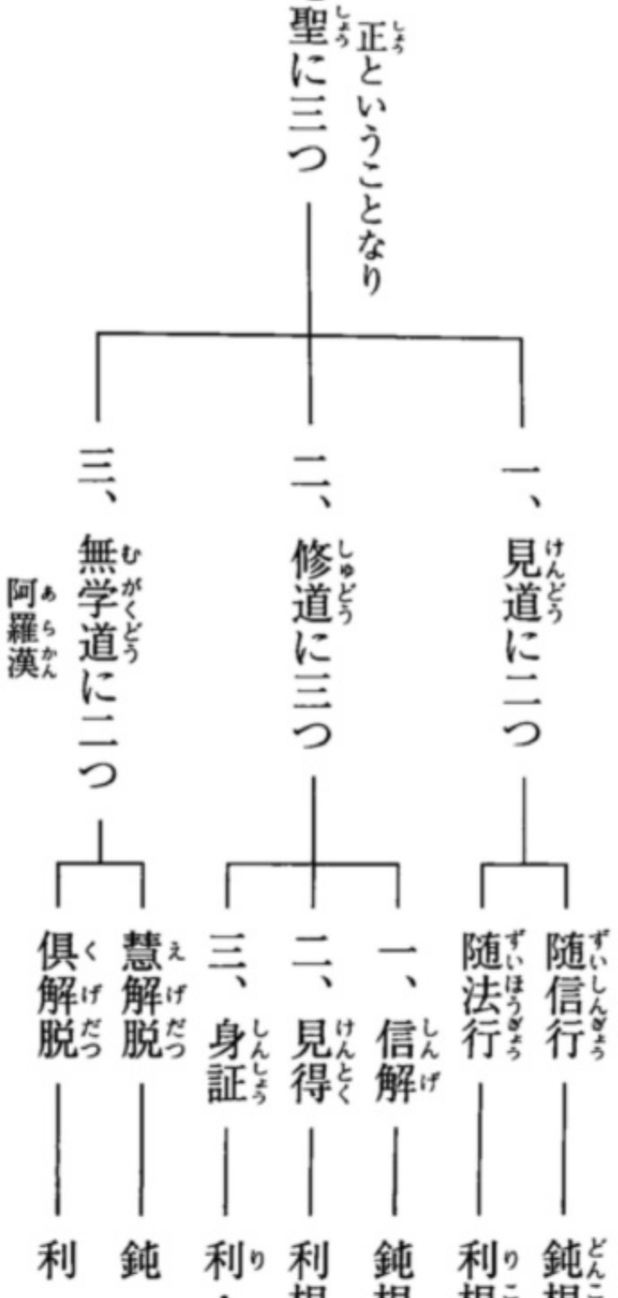
煙法 —— 智慧の火、煩悩の雛を蒸せば、煙の立つなり。故に煙法と云う

頂法 —— 山の頂に登って四方を見るに曇り無きがごとし。世間・出世間の因果の道理を委しく知って闇きこと無きに譬えたるなり。始め五停心よりこの

頂法に至るまでは退位と申して、悪縁に値えば悪道に堕つ。しかれども、この頂法の善根は失せずと習うなり

忍法――この位に入る人は永く悪道に堕ちず

世第一法――この位に至るまでは賢人なり。但今、聖人と成るべきなり



見思の煩悩を断ずる者を聖と云う。この聖人に三道あり。

見道とは、見思の内の見惑を断じ尽くす。この見惑を尽くす人をば、初果の聖者と申す。この人は、欲界の人・天には生まるれども、永く地・餓・畜・修の四悪趣には堕ちず。天台云わく「見惑を破るが故に、四悪趣を離る」文。この人は、いまだ思惑を断ぜざれば、貪・瞋・癡身に有り。貪欲ある故に、妻

を帯す。しかれども、他人の妻を犯さず。瞋恚あれども、ものを殺さず。鋤をもって地をすけば、耕虫自然に四寸去る。愚癡なる故に、我が身初果の聖者と知らず。婆沙論に云わく「初果の聖者は、妻を八十一度一夜に犯す」取意。天台の解釈に云わく「初果、地を耕くに虫四寸離る。道共の力なり」。第四果の聖者・阿羅漢を無学と云い、また不生と云う。永く見思を断じ尽くして、三界六道にこの生の尽きて後、生ずべからず。見思の煩悩の無きが故なり。

またこの教えの意は、三界六道より外に処を明かさざれば、外の生処有りと知らず、身に煩悩有りと知らず。また、生因なく、ただ灰身滅智と申して、身も心もうせ、虚空のごとく成るべしと習う。法華経にあらずば永く仏になるべからずと云うは、二乗これなり。

この教えの修行の時節は、声聞は、三生〈鈍根〉・六十劫〈利根〉なり。また一類の最上利根の声聞は、一生の内に阿羅漢の位に登ることあり。縁覚は、四生〈鈍根〉・百劫〈利根〉なり。菩薩は、一向凡夫にて見思を断ぜず、しかも、四弘誓願を発し、六度万行を修し、三僧祇・百大劫を経て、三蔵教の仏と成る。仏と成る時、始めて見思を断じ尽くすなり。

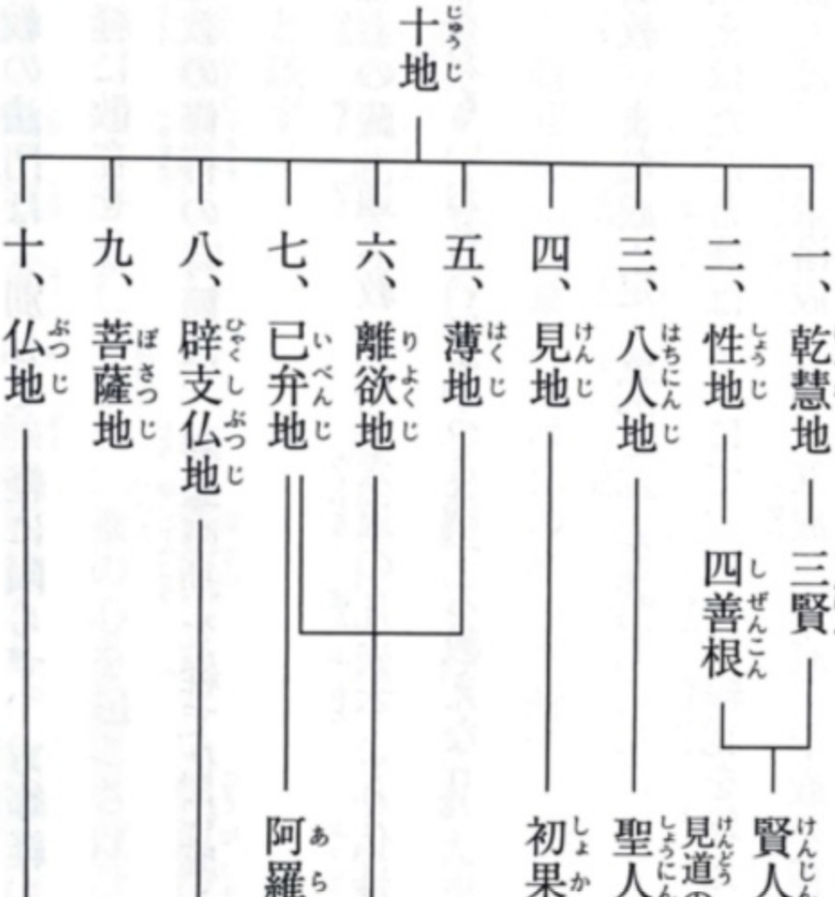
見惑とは、一には身見〈また云わく、我見〉、二には辺見〈断見・常見〉、三には邪見〈また云わく、撥無見と〉、四には見取見〈また云わく、劣れるを勝ると謂う見と〉、五には戒禁取見〈また云わく、因にあらざるを因と計し、道にあらざるを道と計する見と〉なり。見惑は八十八有れども、この五つが本にてあるなり。思惑とは、一には貪、二には瞋、三には癡、四には慢なり。思惑は八十一有れども、この四つが本にてあるなり。

この法門は、阿含経四十巻・婆沙論二百巻・正理論・顕宗論・倶舎論につぶさに明かせり。別して倶

舎宗と申す宗有り。また諸の大乗にこの法門少々明かしたることあり。謂わく、方等部の経、涅槃経等なり。ただし、華厳・般若・法華にはこの法門無し。

次に通教〈大乗の始めなり〉。また戒・定・慧の三学あり。この教えのおきて、大旨は六道を出でず。少分利根なる菩薩、六道より外に推し出だすことあり。声聞・縁覚・菩薩、共に一つ法門を習い、見思を三人共に断ず。しかれども声聞・縁覚、灰身滅智の意いに入る者もあり、入らざる者もあり。

この教えに十地あり。



この通教の法門は、別して一経に限らず、方等経・般若経・心経・観経・阿弥陀経・双観経・金剛般若経等の経に散在せり。

この通教の修行の時節は、動逾塵劫を経て仏に成ると習うなり。また一類の疾く成るという辺もあり。

已上、上の蔵・通二教には、六道の凡夫本より仏性ありとも談ぜず、始めて修すれば声聞・縁覚・菩薩・仏とおもいおもいに成ると談ずる教えなり。

次に別教。また戒・定・慧の三学を談ず。

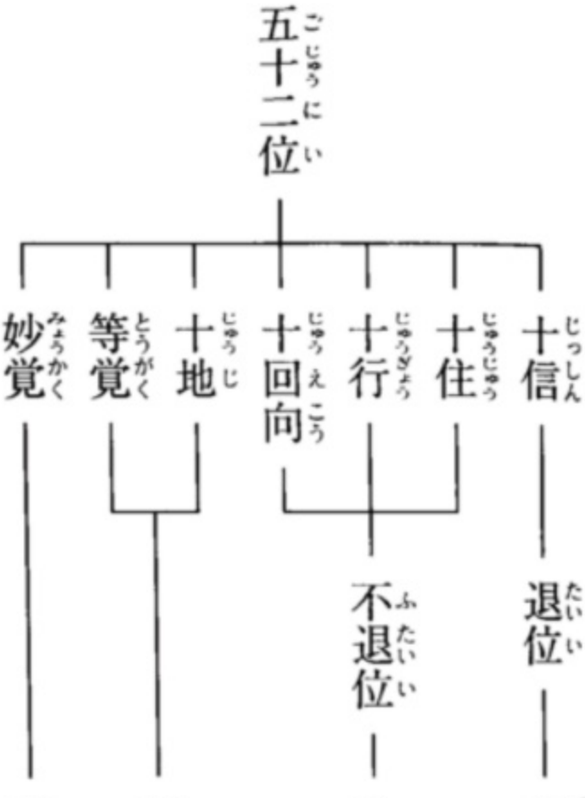
この教えはただ菩薩ばかりにて、声聞・縁覚を雑えず。

菩薩戒とは、三聚浄戒なり。五戒、八戒、十戒・十善戒、二百五十戒、五百戒、梵網の五十八の戒、瓔珞の十無尽戒、華厳の十戒、涅槃経の自行の五支戒・護他の十戒、大論の十戒、これらは皆、菩薩の三聚浄戒の内、摂律儀戒なり。

摂善法戒とは、八万四千の法門を摂す。饒益有情戒とは、四弘誓願なり。定とは、観・練・薫・修の四種の禅定なり。慧とは、心生十界の法門なり。

五十二位を立つ。

五十二位とは、一には十信、二には十住、三には十行、四には十回向、五には十地、等覚〈一つの位なり〉、妙覚〈一つの位〉、已上、五十二位なり。



この教えは大乗なり。戒・定・慧を明かす。戒は前の蔵・通二教に似ず、尽未来際の戒、金剛法戒なり。

この教えの菩薩は、三悪道をば恐ろしとせず、二乗の道を三悪道と云う。地・餓・畜等の三悪道は仏の種子を断ぜず、二乗の道は仏の種子を断ず。大荘厳論に云わく「つねに地獄に処るといえども、大菩提を障えず。もし自利の心を起こさば、これ大菩提の障りなり」。この教えの習いは、真の悪道とは三無為の火阬なり、真の悪人とは二乗を立つるなり。されば、「悪をば造るとも、二乗の戒をば持たじ」と談ず。

故に、大般若経に云わく「もし菩薩、たとい恒河沙劫に妙なる五欲を受くとも、菩薩戒においてはなお犯と名づけず。もし一念に二乗の心を起こさば、即ち名づけて犯となす」文。この文に「妙なる五欲」とは、色・声・香・味・触の五欲なり。色欲とは青黛・珂雪・白歯等、声とは糸竹管絃、香とは

懐香なつかしきかおり、味とは猪鹿等の味、触とは羶らかなる膚等なり。ここに恒河沙劫に著すとも菩薩戒は破れず、一念の二乗の心を起こすに菩薩戒は破ると云える文なり。太賢、古迹に云わく「貪に汚さるといえども、大心尽きず。無余の犯無きが故に、無犯と名づく」文。二乗界に趣くを、菩薩の破とは申すなり。

華厳・般若・方等、総じて爾前の経には、あながちに二乗をきらうなり。定・慧これを略す。梵網経に云わく「戒をば謂って平地となし、定をば謂って室宅となし、智慧をば灯明となす」文。

この菩薩戒は、人・畜・黄門・二形の四種を嫌わず、ただ一種の菩薩戒を授く。この教えの意は、五十二位を一々の位に多倶低劫を経て、衆生界を尽くして仏に成るべし。一人として一生に仏に成るもの無し。また一行をもって仏に成ることなし。一切行を積んで仏と成る。微塵を積んで須弥山と成るがごとし。

華厳・方等・般若・梵網・瓔珞等の経にこの旨分明なり。ただし、二乗界のこの戒を受くることを嫌う。妙楽、釈して云わく「あまねく法華已前の諸教を尋ぬるに、実に二乗作仏の文無し」文。

次に円教。この円教に二つ有り。一には爾前の円、二には法華涅槃の円なり。爾前の円に五十二位、また戒・定・慧あり。

爾前の円とは、華厳経の法界唯心の法門。文に云わく「初発心の時、便ち正覚を成ず」。また云わく「円満修多羅」文。浄名経に云わく「我無く造無く受者無けれども、善悪の業、敗亡せず」文。般

若経の「初発心より即ち道場に坐す」の文。観経の「韋提希、ただちに即ち無生法忍を得」の文。梵網経に云わく「衆生、仏戒を受くれば、位大覚位に同じ、即ち諸仏の位に入り、真にこれ諸仏の子なり」文。これは皆、爾前の円の証文なり。

この教えの意は、また五十二位を明かす。名は別教の五十二位のごとし。ただし、義はかわれり。変その故は、五十二位互いに具して、浅深も無く、勝劣も無し。凡夫も、位を経ずとも仏にも成る。また往生するなり。煩悩も断ぜざれども仏に成るに障り無く、一善一戒をもっても仏に成る。少々開会の法門を説く処もあり。いわゆる浄名経には凡夫を会す。煩悩・悪法も皆会す。ただし、二乗を会せず。般若経の中には、二乗の人と悪人をば開会して、二乗の学するところの法門をば開会せず。観経等の経に「凡夫、一毫の煩悩をも断ぜずして往生す」と説くは、皆、爾前の円教の意なり。法華経の円教は、後に至って書くべし。

已上、四教。

次に五時

五時とは、一には華厳経〈結経は梵網経〉。別・円二教を説く。二には阿含〈結経は遺教経〉。ただ三蔵教の小乗の法門を説く。三には方等経。宝積経・観経等にして説時を知らざる大乗経なり〈結経は瓔珞経〉。ただし、蔵・通・別・円の四教を皆説く。四には般若経〈結経は仁王経〉。通教・別教・円教の後三教を説く。三蔵教を説かず。

華厳経は三七日の間の説、阿含経は十二年の説、方等・般若は三十年の説。已上、華厳より般若に至るまでは四十二年なり。山門の義には、方等は説時定まらず説処定まらず、般若経三十年と申す。寺門の義には、方等十六年、般若十四年と申す。秘蔵の大事の義には、方等・般若は説時三十年、ただし方等は前、般若は後と申すなり。

仏は十九出家、三十成道と定むることは、大論に見えたり。一代聖教五十年と申すことは、涅槃経に見えたり。法華経已前四十二年と申すことは、無量義経に見えたり。法華経八箇年と申すことは、涅槃経の五十年の文と無量義経の四十二年の文の間を勘うれば八箇年なり。已上、十九出家、三十成道、五十年の転法輪、八十入滅と定むべし。

これらの四十二年の説教は、皆、法華経の汲引の方便なり。その故は、無量義経に云わく「我は先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり○方便力をもって、四十余年にはいまだ真実を顕さず○初めに四諦〈阿含経なり〉を説いて、次に方等十二部経・摩訶般若・華厳海空を説く」文。

私に云わく、説の次第に順ずれば、華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃なり。法門の浅深の次第を列ねば、阿含・方等・般若・華厳・法華涅槃と列ぬべし。されば、法華経・涅槃経には、かくのごとく見えたり。

華厳宗と申す宗は、智儼法師・法蔵法師・澄観法師等の人師、華厳経に依って立てたり。倶舎宗・成実宗・律宗は、宝法師・光法師・道宣等の人師、阿含経に依って立てたり。法相宗と申す宗は、玄

奘三蔵・慈恩法師等、方等部の内に上生経・下生経・成仏経・深密経・解深密経・瑜伽論・唯識論等の経論に依って立てたり。三論宗と申す宗は、般若経・百論・中論・十二門論・大論等の経論に依って、吉蔵大師立て給えり。

華厳宗と申すは、華厳と法華・涅槃は同じく円教と立つ。余は皆劣ると云うなるべし。法相宗には、深密・解深密経と華厳・般若・法華・涅槃は同じ程の経と云う。三論宗とは、般若経と華厳・法華・涅槃は同じ程の経なり、ただし、法相の依経と諸の小乗経とは劣るなりと立つ。

これらは、皆、法華已前の諸経に依って立てたる宗なり。爾前の円を極として立てたる宗どもなり。宗々の人々の諍いは有れども、経々に依って勝劣を判ぜん時は、いかにも法華経は勝れたるべきなり。人師の釈をもって勝劣を論ずることは、この法華経を知らんがためなり。法華経の習いとしては、前の諸経を習わずしては永く心を得ることなきなり。爾前の諸経は、一経一経を習うに、また余経を沙汰せざれども苦しからず。故に、天台の御釈に云わく「もし余経を弘むるには、教相を明かさざれども、義において傷うことなし。もし法華を弘むるには、教相を明かさずんば、文義闕くることあり」文。

五には、法華経と申すは、開経には無量義経〈一巻〉、法華経八巻、結経には普賢経〈一巻〉。上の四教・四時の経論を書き挙ぐることは、この法華経を知らんがためなり。法華経の習いとしては、前の諸経を習わずしては永く心を得ることなきなり。爾前の諸経は、一経一経を習うに、また余経を沙汰せざれども苦しからず。故に、天台の御釈に云わく「もし余経を弘むるには、教相を明かさざれども、義において傷うことなし。もし法華を弘むるには、教相を明かさずんば、文義闕くることあり」文。

法華経に云わく「種々の道を示すといえども、それ実には仏乗のためなり」文。「種々の道」と申すは、爾前の一切諸経なり。「仏乗のため」とは、法華経のために一切の経をば説くと申す文なり。

問う。諸経のごときは、あるいは菩薩のため、あるいは人・天のため、あるいは声聞・縁覚のため、

機に随って法門もかわり、益もかわる。この経はいかなる人のためぞや。

答う。この経は相伝にあらずんば知り難し。悪人・善人、有智・無智、有戒・無戒、男子・女人、四趣・八部、総じて十界の衆生のためなり。いわゆる、悪人は提婆達多・妙荘厳王・阿闍世王、善人は韋提希等の人・天の人。有智は舎利弗、無智は須利槃特どく。有戒は声聞・菩薩、無戒は竜・畜なり。女人は竜女なり。総じて十界の衆生、円の一法を覚るなり。このことを知らずして、学者、「法華経は我ら凡夫のためにはあらず」と申す。仏意恐れあり。

この経に云わく「一切の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提は、皆この経に属せり」と文。この文の菩薩とは、九界の衆生、善人・悪人、女人・男子、三蔵教の声聞・縁覚・菩薩、通教の三乗、別教の菩薩、爾前の円教の菩薩、皆この経の力にあらずんば仏に成るまじと申す文なり。またこの経に云わく「薬王よ。多く人有って在家・出家にて菩薩の道を行ぜんに、もしこの法華経を見・聞・読・誦・書・持・供養することを得ること能わずんば、当に知るべし、この人はいまだ善く菩薩の道を行ぜず。もしこの経典を聞くことを得ることあらば、乃ちよく菩薩の道を行ず」。この文は、顕然に権教の菩薩の三祇百劫・動逾塵劫・無量阿僧祇劫の間の六度万行・四弘誓願は、この経に至らざれば、菩薩の行にはあらず、善根を修したるにもあらずという文なり。また菩薩の行無ければ、仏にも成らざることも顕然なり。

天台・妙楽の末代の凡夫を勧進する文。文句に云わく「好堅、地に処して牙すでに百囲せり。頻伽、穀に在って、声衆鳥に勝れたり」文。

この文は、法華経の五十展転の第五十の功徳を釈する文なり。仏苦ろに五十展転にて説き給うこと、権教の多劫の修行また大聖の功徳よりも、この経の須臾の結縁、愚人の随喜の百千万億勝れたること経に見えつれば、この意を大師譬えをもって顕し給えり。好堅樹と申す木は、一日に百囲にて高くお生う。頻伽と申す鳥は、幼きだも諸の大小の鳥の声に勝れたり。権教の修行の久しきに諸の草木の遅く生長するを譬え、法華の行の速やかに仏に成ることを一日に百囲なるに譬う。権教の大小の聖を諸鳥に譬え、法華の凡夫のはかなきを穀の声の衆鳥に勝るるに譬う。

妙楽大師、重ねて釈して云わく「恐らくは、人謬って解せる者、初心の功徳の大なることを測らずして、功を上位に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、もって経力を顕す」文。末代の愚者、「法華経は深理にしていみじけれども、我が機に叶わず」と云って、法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

また、妙楽大師、末代にこの法の捨てられんことを歎いて云わく「この円頓を聞いて崇重せざるは、良に近代に大乗を習う者の雑濫に由るが故なり。いわんや、像末は情澆く信心寡薄にして、円頓の教法蔵に溢ち函に盈つれども、しばらくも思惟せず、便ち冥目に至る。いたずらに生じ、いたずらに死す。一に何ぞ痛ましきや。ある人云わく『聞いて行ぜずんば、汝において何ぞ預からん』。これはいまだ深く久遠の益を知らず。善住天子経のごとくんば、『文殊は舎利弗に告ぐ。法を聞き謗を生じて地獄に堕つるは、恒沙の仏を供養する者に勝る。地獄に堕つといえども、地獄より出でて還って法を聞くことを得』と。これは、仏を供し法を聞かざる者をもって校量とせり。聞いて謗を生ずる、なお

遠種となる。いわんや、聞いて思惟し、勤めて修習せんをや」。

また云わく「一句も神に染めぬれば、ことごとく彼岸を資く。思惟・修習すれば、永く舟航に用たり。随喜・見聞すれば、つねに主伴となる。もしは取、もしは捨、耳に経て縁と成り、あるいは順、あるいは違、終にこれに因って脱す」文。私に云わく「もしは取、もしは捨」「あるいは順、あるいは違」の文は、肝に銘ずるなり。

法華翻経後記〈釈僧肇記す〉に云わく「什〈羅什三蔵なり〉、姚興〈王〉に対えて曰わく『予、昔天竺三国に在りし時、あまねく五竺に遊んで大乗を尋討し、大師・須梨耶蘇摩に従って理味を餐受す。頂を摩でてこの経を嘱累して言わく、仏日西に隠れ、遺光東北を照らす。この典、東北の諸国に有縁なり。汝、慎んで伝弘せよと』と」文。私に云わく、天竺よりは、この日本は東北の州なり。恵心の一乗要決に云わく「日本一州、円機純熟せり。朝野・遠近同じく一乗に帰し、綴素・貴賤ことごとく成仏を期す。ただ一師等あって、もし信受せずんば、権とやせん、実とやせん。権ならば貴ぶべし。浄名に云わく『衆の魔事を覚知して、その行に随うを示す。善力方便をもって、意に随って皆度す』。実ならば憐れむべし。この経に云わく『当来世の悪人は、仏の一乗を説きたもうを聞いて、迷惑して信受せず。法を破して悪道に堕ちん』と」文。

妙法蓮華経

妙は、玄義〈天台〉に云わく「言うところの妙とは、妙は不可思議に名づくるなり」。また云わく「秘

密の奥蔵を発く。これを称して妙となす」。また云わく「妙とは、最勝修多羅、甘露の門なり。故に妙と言うなり」。

法は、玄義に云わく「言うところの法とは、十界十如、権実の法なり」。また云わく「権実の正軌を示す。故に号して法となす」。

蓮華は、玄義に云わく「蓮華とは、権実の法に譬うるなり」。また云わく「久遠の本果を指す。これを喩うるに蓮をもってす。不二の円道に会す。これを譬うるに華をもってす」文。

経は、玄義に云わく「声、仏事をなす。これを称して経となす」文。

私に云わく、法華已前の諸経に、小乗は心生ずれば六界、心滅すれば四界なり。通教もってかくのごとし。爾前の別・円の二教は、心生の十界なり。小乗の意は、六道四生の苦楽は衆生の心より生ずと習う。されば、心滅すれば、六道の因果は無きなり。大乗の心は、心より十界を生ず。華厳経に云わく「心は工みなる画師の種々の五陰を造るがごとく、一切世間の中に法として造らざることなし」文。「種々の五陰」とは、十界の五陰なり。仏界をも心法をも造ると習う。心が過去・現在・未来の十方の仏と顕ると習うなり。華厳経に云わく「もし人、三世の一切の仏を了知せんと欲せば、応当にかくのごとく観ずべし、心は諸の如来を造ると」。

法華已前の経のおきては、上品の十悪は地獄の引業、中品の十悪は餓鬼の引業、下品の十悪は畜生の引業、五常は修羅の引業、三帰五戒は人の引業、三帰十善は六欲天の引業なり。有漏の坐禅は色界・無色界の引業、五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の観は声

聞・縁覚の引業、五戒・八戒乃至三聚浄戒の上に六度・四弘の菩提心を発すは菩薩なり、仏界の引業なり。蔵・通二教には、仏性の沙汰なし。ただ菩薩の発心を仏性という。別・円の二教には、衆生に仏性を論ず。ただし、別教の意は、二乗に仏性を論ぜず。爾前の円教は、別教に附して二乗の仏性の沙汰無し。これらは皆、麤法なり。

今の妙法とは、これらの十界を互いに具すと説く時、妙法と申す。十界互具と申すことは、十界の内に、一界に余の九界を具し、十界互いに具すれば百法界なり。玄義の二に云わく「一法界有って九法界を具すれば、即ち百法界有り」文。法華経とは別のことなし。十界の因果は爾前の経に明かす。今は十界の因果互具をおきてたるばかりなり。

爾前の経の意は、菩薩をば仏に成るべし、声聞は仏に成るまじなんど説けば、菩薩は悦び、声聞は歎なげき、人天等はおもいもかけずなんどある経も有り。あるいは二乗は見思を断じて六道を出でんと念い、菩薩はわざと煩悩を断ぜず六道に生まれて衆生を利益せんと念う。あるいは菩薩の頓悟成仏を見、あるいは菩薩の多倶低劫の修行を見、あるいは凡夫往生の旨を説けば菩薩・声聞のためにはあらずと見て、人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏、凡夫の往生は我が往生、聖人の見思断は我ら凡夫の見思断とも知らずして、四十二年は過ぎしなり。

しかるを、今の経にして十界互具を談ずる時、声聞の自調自度の身に菩薩界を具すれば、六度万行も修せず多倶低劫も経ぬ声聞が、諸の菩薩のからくして修したりし無量無辺の難行道が声聞に具するあいだ、おもわざる外に、声聞が菩薩と云われ、人をせむる獄卒、慳貪なる凡夫もまた菩薩と云わ

る。仏もまた因位に居して菩薩界に摂められ、妙覚ながら等覚なり。薬草喩品に声聞を説いて云わく「汝等が行ずるところは、これ菩薩の道なり」。また我ら六度をも行ぜざるが六度満足の菩薩なる文。経に云わく「いまだ六波羅蜜を修行することを得ずといえども、六波羅蜜は自然に在前す」。我ら一戒をも受けざるが持戒の者と云わるる文。経に云わく「これは則ち勇猛なり。これは則ち精進なり。これを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」文。

問うて云わく、諸経にも、悪人の仏に成るは、華厳経の調達の授記、普超経の闍王の授記、大集経の婆藪天子の授記。また女人の仏に成るは、胎経の釈・女の成仏。畜生の仏に成るは、阿含経の鴿雀の授記。二乗の仏に成るは、方等陀羅尼経、首楞厳経等なり。菩薩の仏に成るは、華厳経等。具縛の凡夫の往生は、観経の下品下生等。女人の女身を転ずるは、双観経の四十八願の中の三十五の願。これらは法華経の二乗・竜女・提婆・菩薩の授記にいかなるか変目わりめかある。また、たといかわり変目めはありとも、諸経にても成仏はうたがいなし、いかん。

答う。予の習い伝うるところの法門、この答えに顕るべし。この答えに、法華経の諸経に超過し、また諸経の成仏を許し許さずは聞こうべし。秘蔵の故に顕露に書かず。

問うて曰わく、妙法を一念三千と云うこと、いかん。

答えて曰わく、天台大師、この法門を覚り給いて後、玄義十巻・文句十巻・覚意三昧・小止観・浄名疏・四念処・次第禅門等の多くの法門を説き給いしかども、この一念三千をば談義し給わず。ただ十界・百界・千如の法門ばかりにておわしましなり。御年五十七の夏四月の比、荊州の玉泉寺と申す

処にて、御弟子・章安大師と申す人に説きき(聞)かせ給いし止観十巻あり。上の四帖になおおしみ(惜)給いて、ただ六即・四種三昧等ばかりの法門にてありしに、五の巻より十境十乗を立てて一念三千の法門は書き給えり。これを妙楽大師、末代の人に勧進してのたまわく(宣)「ならびに三千をもって指南となす○請う、尋ね読まん者、心に異縁無かれ」文。六十巻・三千丁の多くの法門も由無し。ただこの初めの二・三行を意得べきなり。

止観〈天台〉に云わく「夫れ、一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具すれば、百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界には即ち三千種の世間を具す。この三千、一念の心に在り」文。妙楽承け、釈して云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、成道の時、この本理に称って、一身一念法界に遍し」文。

日本の伝教大師、比叡山の立ちし時、根本中堂の地を引き給いし時、地中より舌八つある鑰を引き出だしたりき。この鑰をもって入唐の時に、天台大師より第七代、妙楽大師の御弟子・道邃和尚に値い奉って天台の法門を伝えし時、天機秀発の人たりしあいだ、道邃和尚悦んで天台の造り給える十五の経蔵を開き見せしめ給いしに、十四を開いて一蔵を開かず。その時、伝教大師云わく「師、この一蔵を開き給え」と請い給いしに、邃和尚云わく「この一蔵は開くべき鑰無し。天台大師自ら世に出でて開き給うべし」云々。その時、伝教大師、日本より随身の鑰をもって開き給いしに、この経蔵開きたりしかば、経蔵の内より、光、室に満ちたりき。その光の本を尋ぬれば、この一念三千の文より光を放ちたりしなり。ありがたかりしことなり。その時、邃和尚は返って伝教大師を礼拝し給いき。

「天台大師の後身」云々。よって、天台の経蔵の所釈は、遺り無く日本に亘りしなり。天台大師の御自筆の観音経、章安大師の自筆の止観、今比叡山の根本中堂に収めたり。

外道に三人あり。一には仏法外の外道〈九十五種の外道〉、二に附仏法の外道〈小乗〉、三には学仏法成の外道〈妙法を知らざる大乗の外道なり〉。

今の法華経は、自力も定めて自力にあらず。十界の一切衆生を具する自なるが故に。我が身に本より、自の仏界、一切衆生の他の仏界、我が身に具せり。されば、今、仏に成るに、新仏にあらず。また他力も定めて他力にあらず。他仏も我ら凡夫の自ら具せるが故に。また他仏が我らがごとくの自に現同するなり。共と無因は略す。

法華経已前の諸経は、十界互具を明かさざれば、仏に成らんと願うには必ず九界を厭う。九界を仏界に具せざるが故なり。されば、必ず悪を滅し煩悩を断じて仏には成ると談ず。凡夫の身を仏に具すと云わざるが故に。されば、人天・悪人の身をば失って仏に成ると申す。これをば、妙楽大師は厭離断九の仏と名づく。されば、爾前の経の人々は、仏の九界の形を現すは、ただ仏の不思議の神変と思い、仏の身に九界が本よりありて現ずるとは云わず。

されば、実をもってさぐり給うに、法華已前にはただ権者の仏のみ有って、実の凡夫が仏に成りたりけることは無きなり。煩悩を断じ九界を厭って仏に成らんと願うは、実には九界を離れたる仏無き故に、往生したる実の凡夫も無し。人界を離れたる菩薩界無き故に。ただ法華の仏の、爾前にして十界の形を現して、所化とも能化とも、悪人とも善人とも外道とも云いしなり。実の悪人・善人・外道・凡夫は、方便の権を行じて真実の教えとうち思いなしてすぎしほどに、法華経に来って、「方便にてありけり。実には見思・無明も断ぜざりけり。往生もせざりけり」なんど覚知するなり。

一念三千は別に委しく書くべし。

この経には二妙あり。釈に云わく「この経はただ二妙のみを論ず」。一には相待妙、二には絶待妙なり。相待妙の意は、前の四時の一代聖教に法華経を対して爾前とこれを嫌い、爾前をば当分と云い法華を跨節と申す。絶待妙の意は、一代聖教は法華なりと開会す。

また法華経に二つのことあり。一には所開、二には能開なり。開示悟入の文、あるいは「皆すでに仏道を成じたり」等の文、一部八巻二十八品六万九千三百八十四字、一々の字の下に皆妙の文字あるべし。これ能開の妙なり。この法華経は、知らずして習い談ずるものは、ただ爾前の経の利益なり。阿含経開会の文は、経に云わく「我がこの九部の法は、衆生に随順して説く。大乗に入ることを牟尼仏は」等の文。般若経開会の文は、安楽行品の十八空の文。観経等の往生安楽開会の文は、「ここにおいて命終して、即ち安楽世界に往く」等の文。散善開会の文は、「一たび南無仏と称えば、皆

すでに仏道を成じたり」の文。一切衆生開会の文は、「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」。外典開会の文は、「もし俗間の経書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」文。兜率開会の文、人天の開会するところの文、しげきゆえにいださず。

この経を意得ざる人は、経の文にこの経を読んで、人天に生ずと説く文を見、あるいは兜率・忉利なんどにいたる文を見、あるいは安養に生ずる文を見て、「穢土において法華を行ぜば、経はいみじけれども、行者、不退地に至らざれば、穢土にして流転し、久しく五十六億七千万歳の晨を期し、あるいは人・畜等に生まれて隔生する間、自らの苦しみ限り無し」なんど云々。あるいは「自力の修行なり。難行道なり」等云々。これは、恐らくは爾前・法華の二途を知らずして、自身癡かの闇に迷うのみにあらず、一切衆生の仏眼これを閉ずる人なり。

兜率を勧めたることは、小乗経に多し。少しは大乗経にも勧めたり。西方を勧めたることは、大乗経に多し。これらは皆所開の文なり。法華の意は、兜率に即して「十方仏土の中」、西方に即して「十方仏土の中」、人天に即して「十方仏土の中」云々。法華経は、悪人に対しては、十界の悪を説けば悪人五眼を具しなんどすれば、悪人のきわまりを救い、女人に即して十界を談ずれば、十界皆女人なることを談ず。いずれにも法華円実の菩提心を発さん人は、迷いの九界へ業力に引かるることなきなり。

この意を存じ給いけるやらん、法然上人も、一向念仏の行者ながら、選択と申す文には、雑行・難行道には法華・大日経等をば除きたる処も有り。委しく見よ。また恵心の往生要集にも、法華経を除きたり。たとい法然上人・恵心、法華経を雑行・難行道、末代の機に叶わずと書き給うとも、日蓮は

全くもちいべからず。一代聖教のおきてに違い、三世十方の仏陀の誠言に違する故に。況いおうや、その義のぎ無し。しかるに、後の人々の消息に、法華経を難行道、経はいみじけれども末代の機に叶わず、謗ぼうぜばこそ罪にてもあらめ、浄土に過わたって法華経をば覚さとるべしと云うんぬん々。日蓮が心は、いかにもこのことはひが事ごとと覚おぼゆるなり。こう申すもひが事にやあるらん。能よく能く智ちじん人に習うべし。

正嘉しょうか二年二月十四日　　日蓮撰せんす。

(018) 一念三千理事（いちねんさんぜんりじ）

正嘉2年（'58）　37歳

十二因縁図（じゅうにいんねんず）

問う。流転るてんの十二因縁じゅうにいんねんとは何らぞや。

答う。一には無明むみょう。倶舎くしゃに云いわく「宿惑しゅくわくの位は無明なり」文もん。無明とは、昔愛欲あいよくの煩悩ぼんのう起こりしを云うなり。男は父に瞋いかりを成して母に愛を起こす。女は母に瞋りを成して父に愛を起こすなり。倶舎の第九に見えたり。

二には行ぎょう。倶舎に云いわく「宿むかしの諸業しょごうを行と名づく」文もん。昔の造業ぞうごうを行とは云うなり。業ごうに二つ有り。

全くもちいべからず。一代聖教のおきてに違い、三世十方の仏陀の誠言に違する故に。況いおうや、その義のぎ無し。しかるに、後の人々の消息に、法華経を難行道、経はいみじけれども末代の機に叶わず、謗ぼうぜばこそ罪にてもあらめ、浄土に過わたって法華経をば覚さとるべしと云うんぬん々。日蓮が心は、いかにもこのことはひが事ごとと覚おぼゆるなり。こう申すもひが事にやあるらん。能よく能く智ちじん人に習うべし。

正嘉しょうか二年二月十四日　　日蓮撰せんす。

(018) 一念三千理事（いちねんさんぜんりじ）

正嘉2年（'58）　37歳

十二因縁図（じゅうにいんねんず）

問う。流転るてんの十二因縁じゅうにいんねんとは何らぞや。

答う。一には無明むみょう。倶舎くしゃに云いわく「宿惑しゅくわくの位は無明なり」文もん。無明とは、昔愛欲あいよくの煩悩ぼんのう起こりしを云うなり。男は父に瞋いかりを成して母に愛を起こす。女は母に瞋りを成して父に愛を起こすなり。倶舎の第九に見えたり。

二には行ぎょう。倶舎に云いわく「宿むかしの諸業しょごうを行と名づく」文もん。昔の造業ぞうごうを行とは云うなり。業ごうに二つ有り。

一には牽引の業なり。我らが正しく生を受くべき業を云うなり。二には円満の業なり。余の一切の造業なり。いわゆる足を折り手を切る先業を云うなり。これは円満の業なり。

三には識。倶舎に云わく「識とは、正しく生を結する蘊なり」文。正しく母の腹の中に入る時の五蘊なり。五蘊とは、色・受・想・行・識なり。また五陰とも云うなり。

四には名色。倶舎に云わく「六処の前は名色なり」文。

五には六処。倶舎に云わく「眼等の根を生ずるより三和の前は六処なり」文。六処とは、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根出来するを云うなり。

六には触。倶舎に云わく「三受の因の異なるにおいて、いまだ了知せざるを触と名づく」文。火は熱しとも知らず、水は寒しとも知らず、刀は人を切る物とも知らざる時なり。

七には受。倶舎に云わく「婬愛の前に在るは受なり」文。寒熱を知って、いまだ婬欲を発さざる時なり。

八には愛。倶舎に云わく「資具と婬とを貪るは愛なり」文。女人を愛して婬欲等を発すを云うなり。

九には取。倶舎に云わく「諸の境界を得んがためにあまねく馳求するを取と名づく」文。今世に有る時、世間を営んで他人の物を貪り取る時を云うなり。

十には有。倶舎に云わく「有は、正しく能く当の有の果を牽く業を造るを謂う」文。未来にまたかくのごとく生を受くべき業を造るを有とは云うなり。

十一には生。倶舎に云わく「当の有を結するを生と名づく」文。未来に正しく生を受けて母の腹に

入る時を云うなり。

十二には老死。倶舎に云わく「当の受に至るまでは老死なり」文。生老死を受くるを老死・憂悲・苦悩とは云うなり。

問う。十二因縁を三世両重に分別する方、いかん。

答う。無明と行とは、過去の二因なり。識と名色と六入と触と受とは、現在の五果なり。愛と取と有とは、現在の三因なり。生と老死とは、未来の両果なり。私の略頌に云わく、過去の二因〈無明・行〉、現在の五果〈識・名色・六入・触・受〉、現在の三因〈愛・取・有〉、未来の両果〈生・老死〉と。

問う。十二因縁流転の次第、いかん。

答う。無明は行に縁たり。行は識に縁たり。識は名色に縁たり。名色は六入に縁たり。六入は触に縁たり。触は受に縁たり。受は愛に縁たり。愛は取に縁たり。取は有に縁たり。有は生に縁たり。生は老死・憂悲・苦悩に縁たり。これその生死海に流転する方なり。かくのごとくして凡夫とは成るなり。

問う。還滅の十二因縁の様、いかん。

答う。無明滅すれば則ち行滅す。行滅すれば則ち識滅す。識滅すれば則ち名色滅す。名色滅すれば則ち六入滅す。六入滅すれば則ち触滅す。触滅すれば則ち受滅す。受滅すれば則ち愛滅す。愛滅すれば則ち取滅す。取滅すれば則ち有滅す。有滅すれば則ち生滅す。生滅すれば則ち老死・憂悲・苦悩滅す。これその還滅の様なり。仏は、還って煩悩を失って行く方なり。

私に云わく、中夭の人には十二因縁つぶさにこれ無し。また天上にもつぶさにはこれ無く、また無色界にもつぶさにはこれ無し。

一念三千理事

十如是とは、「如是相」は身なり〈玄の二に云わく「相はもって外に拠る。覧て別つべし」文。籤の六に云わく「相はただ色のみに在り」文〉。「如是性」は心なり〈玄の二に云わく「性はもって内に拠る。自分改めず」文。籤の六に云わく「性はただ心のみに在り」文〉。「如是体」は身と心となり〈玄の二に云わく「主質を名づけて体となす」文〉。「如是力」は身と心となり〈止に云わく「力は堪任を用となす」文〉。「如是作」は身と心となり〈止に云わく「建立を作と名づく」文〉。「如是因」は心なり〈止に云わく「因とは果を招くを因となす。また名づけて業となす」文〉。「如是縁」〈止に云わく「縁とは縁由なり。業を助く」文〉。「如是果」〈止に云わく「果とは剋獲を果となす」文〉。「如是報」〈止に云わく「報とは酬因を報と曰う」文〉。「如是本末究竟等」〈玄の二に云わく「初めの相を本となし、後の報を末となす」文〉。

三種世間とは、五陰世間〈止に云わく「十種の陰・界、不同をもっての故に、五陰世間と名づくるなり」文〉、国土世間〈止に云わく「十種の所居、通じて国土世間と称す」文〉。

五陰とは、新訳には五蘊と云うなり。陰とは聚集の義なり。一に色陰。五色これなり。二に受陰。領納これなり。三に想陰。倶舎に云わく「想は像を取るを体となす」文。四に行陰。造作これ行なり。五に識陰。了別これ識なり。止の五に婆沙を引いて云わく「識はまず了別し、次に受は領納し、想は

相貌を取り、行は違従を起こし、色は行に由って感ず」。

百界千如・三千世間のこと

十界互具、即ち百界と成るなり。

地獄	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	地の下の赤鉄
餓鬼	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	地の下
畜生	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	水・陸・空
修羅	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	海の畔と底
人	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	須弥の四州
天	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	宮殿
声聞	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	同居土
縁覚	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	同居土
菩薩	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	同居・方便・実報
仏	衆生世間	十如是・五陰世間 十如是・国土世間 十如是	寂光土

止観の五に云わく「心、縁と合すれば、則ち三種の世間、三千の性相、皆心より起こる」文。

弘の五に云わく「故に、止観の『正しく観法を明かす』に至って、ならびに三千をもって指南となす。乃ちこれ終窮究竟の極説なり。故に、序の中に『己心の中に行ずるところの法門を説く』と云えり。

良に以有るなり。請う、尋ね読まん者、心に異縁無かれ」文。また云わく「妙境の一念三千を明かさずんば、いかんぞ一に一切を摂むることを識るべけん。三千は一念の無明を出でず。この故に、ただ苦因苦果のみ有り」文。また云わく「一切の諸業は、十界・百界千如・三千世間を出でざるなり」文。

籤の二に云わく「仮は即ち衆生、実は即ち五陰、および国土、即ち三世間なり。千の法は皆三なり。故に三千有り」文。弘の五に云わく「一念の心において、十界に約せずんば、事を収むること遍からず。三諦に約せずんば、理を摂むること周からず。十如を語らずんば、因果備わらず。三世間無くんば、依正尽きず」文。記の一に云わく「もし三千にあらずんば、摂むること則ち遍からず。もし円心にあらずんば、三千を摂めず」文。

玄の二に云わく「ただし衆生法ははなはだ広く、仏法ははなはだ高し。初学において難しとなす。心は則ち易しとなす」文。弘の五に云わく「初めに華厳を引くは、『心は工みなる画師の種々の五陰を造るがごとく、一切世界の中に法として造らざることなし。心のごとく仏もまたしかなり。仏のごとく衆生もしかなり。心、仏および衆生、この三つは差別無し。もし人、三世の一切の仏を知らんと欲求せば、応当にかくのごとく観ずべし、心は諸の如来を造ると』と」。金錍論に云わく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土なり」文。

三身釈のこと

まず法身とは、大師、大経を引いて「一切の世諦は、もし如来においては即ちこれ第一義諦なり。

衆生顚倒して仏法にあらずと謂えり」と釈せり。しからば則ち、自他・依正・魔界仏界・染浄・因果は異なれども、ことごとく皆諸仏の法身に乖くことにあらざれば、善星比丘が不信なりしも楞伽王の信心に同じく、般若蜜外道が意の邪見なりしも須達長者が正見に異ならず。即ち知んぬ、この法身の本は衆生の当体なり。十方諸仏の行願は、実に法身を証するなり。

次に報身とは、大師云わく「法如々の智、如々真実の道に乗じ、来って妙覚を成ず。智、如の理に称う。理に従って『如』と名づけ、智に従って『来』と名づく。即ち報身如来なり。盧舎那と名づけ、ここには浄満と翻ず」と釈せり。これは如々法性の智、如々真実の道に乗じて、妙覚究竟の理智、法界と冥合したる時、理を如と名づく。智は来なり。

(019) 十如是事

正嘉2年('58) 37歳

我が身が三身即一の本覚の如来にてありけることを、今経に説いて云わく「如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」文。

初めに「如是相」とは、我が身の色形に顕れたる相を云うなり。これを応身如来とも、または解脱

衆生顚倒して仏法にあらずと謂えり」と釈せり。しからば則ち、自他・依正・魔界仏界・染浄・因果は異なれども、ことごとく皆諸仏の法身に乖くことにあらざれば、善星比丘が不信なりしも楞伽王の信心に同じく、般若蜜外道が意の邪見なりしも須達長者が正見に異ならず。即ち知んぬ、この法身の本は衆生の当体なり。十方諸仏の行願は、実に法身を証するなり。

次に報身とは、大師云わく「法如々の智、如々真実の道に乗じ、来って妙覚を成ず。智、如の理に称う。理に従って『如』と名づけ、智に従って『来』と名づく。即ち報身如来なり。盧舎那と名づけ、ここには浄満と翻ず」と釈せり。これは如々法性の智、如々真実の道に乗じて、妙覚究竟の理智、法界と冥合したる時、理を如と名づく。智は来なり。

(019) 十如是事

正嘉2年('58) 37歳

我が身が三身即一の本覚の如来にてありけることを、今経に説いて云わく「如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」文。

初めに「如是相」とは、我が身の色形に顕れたる相を云うなり。これを応身如来とも、または解脱

とも、または仮諦とも云うなり。次に「如是性」とは、我が心性を云うなり。これを報身如来とも、または般若とも、または空諦とも云うなり。三に「如是体」とは、我がこの身体なり。これを法身如来とも、または中道とも法性とも寂滅とも云うなり。されば、この三如是を三身如来とは云うなり。この三如是が三身如来にておわしましけるをよそに思いへだてつるが、はや我が身の上にてありけるなり。かく知りぬるを、法華経をさとれる人とは申すなり。

この三如是を本として、これよりのこりの七つの如是はいでて、十如是とは成りたるなり。この十如是が、百界にも千如にも三千世間にも成りたるなり。かくのごとく多くの法門と成って八万法蔵と云われども、すべてただ一つの三諦の法にて、三諦より外には法門なきことなり。

その故は、百界というは仮諦なり。千如というは空諦なり。三千というは中諦なり。空と仮と中とを三諦ということなれば、百界・千如・三千世間まで多くの法門と成りたりといえども、ただ一つの三諦にてあることなり。

されば、始めの三如是の三諦と終わりの七如是の三諦とは、ただ一つの三諦にて、始めと終わりと、我が一身の中の理にて、ただ一つ物にて不可思議なりければ、「本と末とは究竟して等し」とは説き給えるなり、これを「如是本末究竟等」とは申したるなり。始めの三如是を本とし終わりの七如是を末として十の如是にてあるは、我が身の中の三諦にてあるなり。この三諦を三身如来とも云えば、我が心身より外には善悪に付けてかみすじばかりの法もなきものを。されば、我が身がやがて三身即一の本覚の如来にてはありけることなり。

余所

これをよそに思うを、衆生とも迷いとも凡夫とも云うなり。これを我が身の上と知りぬるを、如来とも覚りとも聖人とも智者とも云うなり。こう解り、明らかに観ずれば、この身頓て今生の中に本覚の如来を顕して、即身成仏とはいわるるなり。譬えば、春夏、田を作りうえつれば、秋冬は蔵に収めて心のままに用いるがごとし。春より秋をまつほどは久しきようなれども、一年の内に待ち得るがごとく、この覚りに入って仏を顕すほどは久しきようなれども、一生の内に顕して我が身が三身即一の仏となりぬるなり。

この道に入りぬる人にも上中下の三根はあれども、同じく一生の内に顕すなり。上根の人は、聞くところにて覚りを極めて顕す。中根の人は、もしは一日、もしは一月、もしは一年に顕すなり。下根の人は、のびゆく所なくてつまりぬれば、一生の内に限りたることなれば、臨終の時に至って、諸のみえつる夢も覚めてうつつになりぬるがごとく、只今までみつるところの生死妄想の邪思い、ひがめの理はあと形もなくなりて、本覚のうつつの覚りにかえりて法界をみれば、皆寂光の極楽にて、日来賤しと思いし我がこの身が、三身即一の本覚の如来にてあるべきなり。秋のいねには早と中と晩との三つのいね有れども、一年が内に収むるがごとく、これも上中下の差別ある人なれども、同じく一生の内に諸仏如来と一体不二に思い合わせてあるべきことなり。

「妙法蓮華経の体のいみじくおわしますは、いかようなる体にておわしますぞ」と尋ね出だしてみれば、我が心性の八葉の白蓮華にてありけることなり。されば、我が身の体性を妙法蓮華経とは申しけることなれば、経の名にてはあらずして、はや我が身の体にてありけると知りぬれば、我が身頓て

法華経にて、法華経は我が身の体をよび顕し給いける仏の御言にてこそありければ、やがて我が身三身即一の本覚の如来にてあるものなり。

かく覚りぬれば、無始より已来、今まで思いならわししひが思いの妄想は、昨日の夢を思いやるがごとく、あとかたもなく成りぬることなり。

これを信じて一遍も南無妙法蓮華経と申せば、法華経を覚って如法に一部をよみ奉るにてあるなり。十遍は十部、百遍は百部、千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべきなり。かく信ずるを如説修行の人とは申すなり。南無妙法蓮華経。

(020) 一念三千法門

正嘉2年('58) 37歳

法華経の余経に勝れたること、いかなることぞ。この経に一心三観・一念三千ということあり。薬王菩薩、漢土に出世して天台大師と云われ、この法門を覚り給いしかども、まず玄義十巻・文句十巻・覚意三昧・小止観・浄名疏・四念処・次第禅門等の多くの法門を説きしかども、この一念三千の法門を談じ給わず。百界千如の法門ばかりなり。御年五十七の夏四月の比、荊州玉泉寺と申す処にて、御

法華経にて、法華経は我が身の体をよび顕し給いける仏の御言にてこそありければ、やがて我が身三身即一の本覚の如来にてあるものなり。

かく覚りぬれば、無始より已来、今まで思いならわししひが思いの妄想は、昨日の夢を思いやるがごとく、あとかたもなく成りぬることなり。

これを信じて一遍も南無妙法蓮華経と申せば、法華経を覚って如法に一部をよみ奉るにてあるなり。十遍は十部、百遍は百部、千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべきなり。かく信ずるを如説修行の人とは申すなり。南無妙法蓮華経。

(020) 一念三千法門

正嘉2年('58) 37歳

法華経の余経に勝れたること、いかなることぞ。この経に一心三観・一念三千ということあり。薬王菩薩、漢土に出世して天台大師と云われ、この法門を覚り給いしかども、まず玄義十巻・文句十巻・覚意三昧・小止観・浄名疏・四念処・次第禅門等の多くの法門を説きしかども、この一念三千の法門を談じ給わず。百界千如の法門ばかりなり。御年五十七の夏四月の比、荊州玉泉寺と申す処にて、御

弟子・章安大師に教え給う止観と申す文十巻あり。上四帖になお秘し給いて、ただ六即・四種三昧等ばかりなり。五の巻に至って十境十乗・一念三千の法門を立て、「夫れ、一心に具す」等云々。これより二百年の後に、妙楽大師釈して云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、成道の時、この本理に称って、一身一念法界に遍し」云々。この一念三千・一心三観の法門は、法華経の一の巻の十如是より起これり。文の心は、百界千如・三千世間云々。

さて一心三観と申すは、余宗には「如是」とあそばす。これ僻事にて二義かけたり。天台・南岳の御義を知らざる故なり。されば、当宗には天台の所釈のごとく三遍読むに功徳まさる。

第一に「是相如（この相は如なり）」と、相・性・体・力以下の十を「如」と云う。「如」というは空の義なるが故に、十法界、皆空諦なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち報身如来なり。八万四千または般若とも申す。第二に「如是相（かくのごとき相）」。これ我が身の色形に顕れたる相なり。これ皆仮なり。相・性・体・力以下の十なれば、十法界皆仮諦と申して仮の義なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち応身如来なり。または解脱とも申す。第三に「相如是（相は是に如す）」と云うは、中道と申して仏の法身の形なり。これを読み観ずる時は、我が身即ち法身如来なり。または中道とも法性とも涅槃とも寂滅とも申す。

この三つを法・報・応の三身とも、空・仮・中の三諦とも、法身・般若・解脱の三徳とも申す。この三身如来全く外になし。我が身即ち三徳究竟の体にて、三身即一身の本覚の仏なり。これをしるを、如来とも聖人とも悟りとも云う。知らざるを、凡夫とも衆生とも迷いとも申す。

十界の衆生、各互いに十界を具足す。合すれば百界なり。百界に各々十如を具すれば、千如なり。この千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば、三千なり。百界と顕れたる色相は、皆総じて仮の義なれば、仮諦の一なり。千如は、総じて空の義なれば、空諦の一なり。三千世間は、総じて法身の義なれば、中道の一なり。法門多しといえども、ただ三諦なり。この三諦を、三身如来とも三徳究竟とも申すなり。

始めの三如是は、本覚の如来なり。終わりの七如是と一体にして無二無別なれば、「本末究竟等」とは申すなり。「本」と申すは仏性、「末」と申すは未顕の仏、九界の名なり。「究竟等」と申すは、妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我らと差別無きを、「究竟等」とも「平等大慧の法華経」とも申すなり。

始めの三如是は、本覚の如来なり。本覚の如来を悟り出だし給える妙覚の仏なれば、我らは妙覚の父母なり。仏は我らが生むところの子なり。止の一に云わく「止は則ち仏の母、観は即ち仏の父なり」云々。譬えば、人十人あらんずるが、面々に蔵々に宝をつみ、我が蔵に宝のあることを知らず、餓かつえ死し、凍こごえ死す。あるいは一人、この中にかしこき人ありて、悟り出だすがごとし。九人は終に知らず。しかるに、あるいは教えられて食し、あるいはくくめられて食するがごとし。弘の一に「止観の二字は、正しく聞体を示す」と。聞かざる者は、「本末究竟等」もいたずらか。

子なれども、親にまさること多し。重華はかたくなわしき父を敬って賢人の名を得たり。沛公は帝王と成って後も、その父を拝す。その敬われし父をば全く王といわず、敬いし子をば王と仰ぐがごと

し。それ、仏は子なれども、賢くましまして悟り出だし給えり。凡夫は親なれども、愚癡にしていまだ悟らず。委しき義を知らざる人、「毘盧の頂上をふむ（踏）」なんど悪口す。大いなる僻事なり。

一心三観に付いて、次第の三観、不次第の三観ということあり。委しく申すに及ばず候。この三観を心得すまし成就したるところを、華厳経に「三界は、ただ一心なり」云々。天台は「諸水、海に入る（澄入）」とのぶ。仏と我らと総じて一切衆生、理性一にてへだてなきを（隔）、平等大慧と云うなり。「平等」と書いては、「おしなべて」と読む。

この一心三観・一念三千の法門、諸経にたえてこれ無し（絶）。法華経に遇わざれば、いかでか成仏すべきや。余経には六界・八界より十界を明かせども、さらに具を明かさず。法華経は念々に一心三観・一念三千の謂れを観ずれば、我が身本覚の如来なること悟り出だされ、無明の雲晴れて法性の月明らかに、妄想の夢醒めて本覚の月輪いさぎよく（潔）、父母の生むところの肉身、煩悩具縛の身、即ち本有常住の如来となるべし。これを即身成仏とも、煩悩即菩提とも、生死即涅槃とも申す。この時、法界を照らし見れば、ことごとく中道の一理にて、仏も衆生も一なり。されば、天台の所釈に「一色一香も中道にあらざることなし」と釈し給えり。この時は、十方世界皆寂光浄土にて、いずれの処をか弥陀・薬師等の浄土とは云わん。ここをもって法華経に「この法は法位に住して、世間の相は常住なり」と説き給う。

さては経をよまずとも心地の観念ばかりにて成仏すべきかと思いたれば、一念三千の観念も一心三観の観法も、妙法蓮華経の五字に納まれり。妙法蓮華経の五字は、また我らが一心に納まって候いけ

り。天台の所釈に「この妙法蓮華経は本地甚深の奥蔵、三世の如来の証得したもうところなり」と釈したり。さて、この妙法蓮華経を唱うる時、心中の本覚の仏顕る。我らが身と心をば蔵に譬え、妙の一字を印に譬えたり。天台の御釈に「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙となす。権実の正軌を示す。故に号して法となす。久遠の本果を指す。これを喩うるに蓮をもってす。不二の円道に会す。これを譬うるに華をもってす。声、仏事をなす。これを称して経となす」と釈し給う。また「妙とは不可思議の法を褒美するなり。また妙とは十界・十如・権実の法なり」云々。

「経の題目を唱うると観念と一なること、心得がたし」と愚癡の人は思い給うべし。されども、天台、止の二に「而於説黙」と云えり。説とは経、黙とは観念なり。また、四教義の一に云わく「ただ功の唐捐ならざるのみにあらず、また能く理に契うの要なるかな」云々。天台大師と申すは、薬王菩薩なり。この大師、「説而観而」と釈し給う。元より、天台の所釈に、因縁・約教・本迹・観心の四種の御釈あり。四種の重を知らずして一しなを見たる人、一向本迹をむねとし、一向観心を面とす。法華経に法・譬・因縁ということあり。法説の段に至って、諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道と定む。我のみならず一切衆生直至道場の因縁なりと定め給いしは、題目なり。されば天台、玄の一に「衆善の小行を会して、広大の一乗に帰す」と。「広大」と申すは、残らず引導し給うを申すなり。たとい釈尊一人本懐と宣べ給うとも等覚以下は仰いでこの経を信ずべし。いわんや、諸仏出世の本懐なり。

禅宗は「観心を本懐と仰ぐ」とあれども、それは四種の一面なり。一念三千・一心三観等の観心ば

かり法華経の肝心なるべくば、題目に十如是を置くべきところに、題目に妙法蓮華経と置かれたる上は、子細に及ばず。また当世の禅宗は、「教外に別伝す」と云い給うかと思えば、また捨てられたる円覚経等の文を引かるる上は、実経の文において御綺えに及ぶべからず候。智者は読誦に観念をも並ぶべし。愚者は題目ばかりを唱うとも、この理に会うべし。

この妙法蓮華経とは、我らが心性、総じては一切衆生の心性、八葉の白蓮華の名なり。これを教え給う仏の御詞なり。無始より以来、我が身中の心性に迷って生死を流転せし身、今この経に値い奉って三身即一の本覚の如来を唱うるに顕れて現世にその内証成仏するを、即身成仏と申す。死すれば光を放つ。これ外用の成仏と申す。「来世に作仏することを得ん」とは、これなり。

「略して経題を挙ぐるに、玄に一部を収む」とて、一遍は一部なり云々。妙法蓮華経と唱うる時、心性の如来顕る。耳にふれし類いは、無量阿僧祇劫の罪を滅す。一念も随喜する時、即身成仏す。たとい信ぜざれども、種と成り、熟と成り、必ずこれに依って成仏す。妙楽大師云わく「もしは取、もしは捨、耳に経て縁と成り、あるいは順、あるいは違、終にこれに因って脱す」云々。日蓮云わく「もしは取、もしは捨、あるいは順、あるいは違」の文、肝に銘ずる詞なり。法華経に「もし法を聞くことあらば」等と説かれたるは、これか。既に「聞くことあらば」と説かれたり。観念ばかりにて成仏すべくば、「もし法を観ずることあらば」と説かるべし。ただ天台の御料簡に十如是と云うは十界なりけり。この十界は、一念より事起こり十界の衆生は出で来りけり。この十如是というは、妙法蓮華経にてありけり。

この娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申すごとく、「当に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に百界千如・三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これを耳に触るる一切衆生は功徳を得る衆生なり。一切衆生と申すは、草木・瓦礫も一切衆生の内なるか〈有情・非情〉。そもそも草木は何ぞ。金錍論に云わく「一草・一木・一礫・一塵、各一仏性、各一因果あり。縁・了を具足す」等云々。法師品の始めに云わく「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽、人と非人、および比丘・比丘尼、妙法華経の一偈一句を聞いて、乃至一念も随喜せば、我は皆ために阿耨多羅三藐三菩提の記を授く」云々。非人とは、総じて人界の外、一切有情界とて心あるものなり。いわんや人界をや。

法華経の行者は、如説修行せば、必ず一生の中に一人も残らず成仏すべし。譬えば、春夏、田を作るに、早・晩あれども、一年の中には必ずこれを納む。法華の行者も、上・中・下根あれども、必ず一生の中に証得す。玄の一に云わく「上・中・下根、皆記別を与う」云々。

観心ばかりにて成仏せんと思う人は、一方かけたる人なり。いわんや、教外別伝の坐禅をや。法師品に云わく「薬王よ。多く人有って在家・出家にて菩薩の道を行ぜんに、もしこの法華経を見・聞・読・誦・書・持・供養することを得ること能わずんば、当に知るべし、この人はいまだ善く菩薩の道を行ぜず。もしこの経典を聞くことを得ることあらば、乃ちよく菩薩の道を行ず」云々。観心ばかりに成仏すべくんば、いかでか「見・聞・読・誦」と云わんや。この経は専ら「聞」をもって本となす。およそこの経は、悪人・女人・二乗・闡提を簡わず。故に、「皆成仏道」とも云い、また「平等大

慧」とも云う。善悪不二・邪正一如と聞くところに、やがて内証成仏す。故に、即身成仏と申す。一生に証得するが故に、一生妙覚と云う。義を知らざる人なれども、唱うれば、ただ仏とのみ悦び給う。「我は即ち歓喜す。諸仏もまたしかなり」云々。百千合わせたる薬も口にのまざれば病愈えず、蔵に宝を持てども開くことをしらずしてかつえ、懐に薬を持っても飲まんことをしらずして死するがごとし。如意宝珠という玉は、五百弟子品のこの経の徳もまたかくのごとし。

観心を並べて読めば申すに及ばず。観念せずといえども、始めに申しつるごとく「所謂諸法如是相如云々」と読む時は、如は空の義なれば、我が身の先業にうくるところの相・性・体・力、その具するところの八十八使の見惑、八十一品の思惑、その空は報身如来なり。「所謂諸法如是相云々」とよめば、これ仮の義なれば、我がこの身、先業によって受けたる相・性・体・力云々。その具したる塵沙の惑ことごとく即身応身如来なり。「所謂諸法如是」と読む時は、これ中道の義に順じて、業によって受くるところの相・性等云々。それに随いたる無明皆退いて、即身法身の如来と心を開く。この十如是、三転によまるること、三身即一身・一身即三身の義なり。三つに分かるれども一つなり。一つに定まれども三つなり。

(021) 十法界事

正元元年（'59）　38歳

二乗、三界を出でざれば、即ち十法界の数量を失う云々。

問う。十界互具を知らざる者、六道流転の分段の生死を出離して、変易の土に生ずべきか。

答う。二乗は既に見思を断じ、三界の生因無し。底に由ってか界内の土に生ずることを得ん。この故に、二乗永く六道に生ぜず。故に、玄の第二に云わく「夫れ、変易に生ずるに、則ち三種有り。三蔵の二乗、通教の三乗、別教の三十心なり」已上。かくのごとき等の人は、皆、通惑を断じ、変易の土に生ずることを得て、界内の分段の不浄の国土に生ぜず。

難じて云わく、小乗の教えは、ただこれ心生の六道を談ずるのみにして、これ心具の六界を談ずるにあらず。この故に、二乗は六界を顕さず、心具を談ぜず。いかんぞ、ただ六界の見思を断ずるのみにして六道を出ずべきや。故に、寿量品に「一切世間の天・人・阿修羅」と云うは、爾前・迹門両教の二乗、三教の菩薩、ならびに五時の円人を皆「天・人・修羅」と云う。あに未断見思の人と云うにあらずや。

答う。十界互具とは、法華の淵底、この宗の沖微なり。四十余年の諸経の中には、これを秘して伝

えず。ただし、四十余年の諸の経教の中に、無数の凡夫、見思を断じて無漏の果を得、能く二種の涅槃の無為を証し、塵数の菩薩、通・別の惑を断じ、頓に二種の生死の縛を超ゆ。無量義経の中に四十余年の諸経を挙げて「いまだ真実を顕さず」と説くといえども、しかもなお爾前の三乗の益を許す。法華の中において「正直に方便を捨つ」と説くといえども、なお「諸の菩薩の記を授かって作仏するを見る」と説く。かくのごとき等の文、爾前の説において当分の益を許すにあらずや。

ただし、爾前の諸経に二事を説かず。謂わく、実の円仏無く、また久遠実成を説かず。故に、等覚の菩薩に至るまで近成を執する思い有り。この一辺において、天・人と同じく能迷の門を挙げ、生死・煩悩一時に断壊することを証せず。故に、ただ「いまだ真実を顕さず」とのみ説けり。六界の互具を明かさざるが故に出ずべからずとは、この難はなはだ不可なり。六界互具せば、即ち十界互具すべし。何となれば、権果の心生とは、六凡の差別なり。心生を観ずるに、何ぞ四聖の高下無からんや。

第三重の難に云わく、立つるところの義、誠に道理有るに似たれども、委しく一代聖教の前後を撿うるに、法華本門ならびに観心の智慧を起こさざれば、円仏と成らず。故に、実の凡夫にして、権果をも得ず。所以は、彼の外道、五天竺に出でて四顚倒を立つ。如来世に出でて、四顚倒を破せんがために、苦・空等を説く。これ則ち外道の迷情を破せんがためなり。この故に、外道の我見を破して無我に住するは、火を捨ててもって水に随うがごとし。堅く無我を執して、見思を断じ六道を出ずると謂えるは、これ迷いの根本なり。故に、色心倶滅の見に住す。大集等の経々に「断・常の二見」と説くは、これなり。例せば、有漏外道の自らは得道すと念えども、無漏智に望めば、いまだ三界を出でざるが

ごとし。仏教に値わずして三界を出ずるといわば、この処有ることなし。小乗の二乗もまたまたかくのごとし。鹿苑施小の時、外道の我を離れて、無我の見に住す。この情を改めずして四十余年、草庵に止宿するの思い、しばらくも離るる時無し。また大乗の菩薩において、心生の十界を談ずといえども、しかも心具の十界を論ぜず。またある時は、九界の色心を断じ尽くして、仏界の一理に進む。この故に自ら念わく「三惑を断じ尽くして変易の生を離れ、応に寂光に生ずべし」。しかるに、九界を滅すれば、これ則ち断見なり。進んで仏界に昇れば、即ち常見となす。九界の色心の常住を滅せんと欲うは、あに九法界に迷惑するにあらずや。

また妙楽大師云わく「ただ心を観ずと言うのみならば、則ち理に称わず」文。この釈の意は、小乗の観心は小乗の理に称わざるのみ。また天台、文句の第九に云わく「七方便は、ならびに究竟の滅にあらず」已上。この釈は、これ爾前の前の三教の菩薩も実には成仏せずと云えるなり。

ただし、「いまだ真実を顕さず」と説くといえどもしかも「諸の菩薩の記を授かって作仏するを見る」と云うは、天台宗において三種の教相有り。第二の化導の始終の時、過去世において法華結縁の輩有り。爾前の中においてしばらく法華のために三乗当分の得道を許す。いわゆる種・熟・脱の中の熟益の位なり。これはなお迹門の説なり。本門・観心の時は、これ実義にあらず、一往許すのみ。その実義を論ずれば、如来久遠の本に迷い一念三千を知らざれば、永く六道の流転を出ずべからず。故に、釈に云わく「円乗の外を名づけて外道となす」文。また「諸の善男子よ。小法を楽える徳薄・垢重の者」と説く。もししからば、経釈共に

道理必然なり。

答う。執難有りといえども、その義は不可なり。所以は、如来の説教は機に備わって虚しからず。ここをもって、頓等の四教、蔵等の四教は、八機のために設くるところにして、得益無きにあらず。故に、無量義経には「この故に衆生は得道差別す」と説く。誠に知んぬ、「終に無上菩提を成ずることを得ず」と説くといえども、しかも三法四果の益無きにあらず。ただこれ速疾頓成と歴劫迂回との異なるのみ。これ一向に得道無きにあらざるなり。

この故に、あるいは三明六通も有り。あるいは普現色身の菩薩も有り。たとい、一心三観を修して、もって同体の三惑を断ぜずとも、既に析智をもって見思を断ず。何ぞ二十五有を出でざらん。この事は不可となす。この故に、解釈に云わく「もし衆生に遇って小乗を修せしめば、我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可となす。ただ二十五有を出ずるのみ」已上。当に知るべし、「この事は不可となす」と説くといえども、しかも出界有り。ただこれ不思議の空を観ぜざるが故に不思議の空智を顕さずといえども、何ぞ小分の空解を起こさざらん。もし空智をもって見思を断ぜずと云わば、開善の無声聞の義に同ずるにあらずや。いわんや、今経は正直捨権・純円一実の説なり。諸の爾前の声聞の得益を挙げて、「諸の漏すでに尽き、また煩悩無し」と説き、また「実に阿羅漢を得て、もしこの法を信ぜずんば、この処有ることとなけん」と云い、また「三百由旬を過ぎ、一城を化作す」と説く。もし諸の声聞全く凡夫に同ぜば、五百由旬一歩も行くべからず。

また云わく「自ら得るところの功徳において、滅度の想いを生じて、当に涅槃に入るべし。我は

において作仏して、さらに異名有らん。この人は滅度の想いを生じて、涅槃に入るといえども、彼の土において、仏の智慧を求め、この経を聞くことを得ん」已上。この文、既に証果の羅漢、法華の座に来らずして無余涅槃に入り、方便土に生じて法華を説くを聞くと見えたり。もししからば、既に方便土に生じて、何ぞ見思を断ぜざらん。この故に、天台・妙楽も「彼の土に聞くことを得ん」と釈す。また爾前の菩薩において、「始め我が身を見、我が説くところを聞き、即ち皆信受して、如来の慧に入り き」と説く。故に知んぬ、爾前の諸の菩薩、三惑を断除して仏慧に入ることを。故に、解釈に云わく「初後の仏慧、円頓の義は斉し」已上。あるいは云わく「故に、始終を挙ぐるに、意は仏慧に在り」。

もし、これらの説相、経釈共に非義ならば、「正直に権を捨つ」の説、「ただ一大事をもって」の文、「妙法華経は、皆これ真実なり」の証誠、皆もって無益なり。「皆これ真実なり」の言は、あに一部八巻に亘るにあらずや。釈迦・多宝・十方分身の「舌相は梵天に至る」の神力、三世諸仏の誠諦不虚の証誠、空しく泡沫に同ぜん。

ただし、小乗の断常の二見に至っては、しばらく大乗に対して小乗をもって外道に同ず。小益無きにあらざるなり。また「七方便は、ならびに究竟の滅にあらず」の釈、あるいはまた「ただ心を観ずと言うのみならば、則ち理に称わず」とは、またこれ円実の大益に対して七方便の益を下して、「ならびに究竟の滅にあらず」「即ち理に称わず」と釈するなり。

第四重の難に云わく、法華本門の観心の意をもって一代聖教を按ずるに、菴羅果を取って掌中に捧ぐるがごとし。所以はいかん。迹門の大教起これば爾前の大教亡じ、本門の大教起これば迹門・爾前

亡じ、観心の大教起これば本迹・爾前共に亡ず。これはこれ如来の説くところの聖教、浅きより深きに至って次第に迷いを転ずるなり。

しかれども、如来の説は一人のためにせず。この大道を説いて迷情除かずんば、生死出で難し。もし爾前の中に八教有りとは、頓は則ち華厳、漸は則ち三味、秘密と不定とは前四味に亘る。蔵は則ち阿含・方等に亘る。通はこれ方等・般若、円・別はこれ則ち前四味の中に鹿苑の説を除く。かくのごとく八機各々不同なれば、教説もまた異なり。四教の教主またこれ不同なれば、当教の機根、余仏を知らず。故に、解釈に云わく「各々仏独りその前に在すと見る」已上。

人天は五戒十善、二乗は四諦・十二、菩薩は六度にして三祇百劫あるいは動逾塵劫あるいは無量阿僧祇劫、円教の菩薩は「初発心の時、便ち正覚を成ず」。明らかに知んぬ、機根別なるが故に、説教もまた別なり。教え別なるが故に、行もまた別なり。行別なるが故に、得果も別なり。これ則ち各別の得益にして不同なり。しかるに、今、法華方便品に「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」と説きたもう。その時、八機ならびに悪趣の衆生、ことごとく皆同じく釈迦如来と成り、互いに五眼を具し、一界に十界を具し、十界に百界を具せり。

この時、爾前の諸経を思惟するに、諸経の諸仏は自界の二乗を、二乗もまた菩薩界を具せず。三界の人天のごときは、成仏の望み絶えて、二乗・菩薩の断惑即ちこれ自身の断惑なりと知らず。三乗・四乗の智慧は四悪趣を脱るるに似たりといえども、互いに界々を隔つ。しかも皆これ一体なり。昔の経は、二乗はただ自界の見思を断除すると思って、六界の見思を断ずることを知らず。菩薩もまたか

くのごとし。自界の三惑を断じ尽くさんと欲すといえども、六界・二乗の三惑を断ずることを知らず。真実に証する時は、一衆生即ち十衆生、十衆生即ち一衆生なり。もし六界の見思を断ぜずんば、二乗の見思を断ずべからず。

かくのごとく説くといえども、迹門はただ九界の情を改め十界互具を明かすが故に、即ち円仏と成るなり。爾前当分の益を嫌うことなきが故に、「三界の諸の漏すでに尽き」「三百由旬を過ぎ」「始め我が身を見る」と説けり。

また爾前入滅の二乗は、実には見思を断ぜず、故に、六界を出でずといえども、迹門は二乗作仏が本懐なり。故に「彼の土において、この経を聞くことを得ん」と説く。既に「彼の土に聞くことを得ん」と云う。故に知んぬ、爾前の諸経には方便土無し。故に、実には実報ならびに常寂光も無し。菩薩の成仏を明かさんが故に、実報・寂光を仮立す。しかれども、菩薩に二乗を具す。二乗成仏せずんば、菩薩も成仏すべからざるなり。衆生無辺誓願度も満ぜず、二乗の沈空尽滅は、即ちこれ菩薩の沈空尽滅なり。凡夫、六道を出でざれば、二乗も六道を出ずべからず。なお下劣の方便土を明かさず。いわんや、勝れたる実報・寂光を明かさんや。実に見思を断ぜば、何ぞ方便を明かさざらん。菩薩、実に実報・寂光に至らば、何ぞ方便土に至ること無からん。ただ「無明を断ず」と云うが故に、仮に実報・寂光を立つといえども、上の二土無きが故に、同居の中において影現の実報・寂光を仮立す。しかるに、この「三百由旬」は、実には三界を出ずることなし。

迹門にはただこれ始覚の十界互具を説いて、いまだ必ずしも本覚本有の十界互具を明かさず。故に、

所化の大衆、能化の円仏、皆これことごとく始覚なり。もししからば、本無今有の失何ぞ免るることを得んや。当に知るべし、四教の四仏則ち円仏と成るは、しばらく迹門の所談なり。この故に無始の本仏を知らず。故に無始無終の義欠けて具足せず。また無始の色心常住の義無し。ただし「この法は法位に住して」と説くことは、未来常住にして、これ過去常にあらざるなり。本有の十界互具を顕さざれば、本有の大乗菩薩界無きなり。故に知んぬ、迹門の二乗はいまだ見思を断ぜず、迹門の菩薩はいまだ無明を断ぜず、六道の凡夫は本有の六界に住せざれば、有名無実なり。

故に、涌出品に至って爾前・迹門の無明を断ぜる菩薩を、「五十小劫、半日のごとしと謂わしむ」と説く。これ則ち寿量品の久遠円仏の非長非短にして不二の義に迷うが故なり。爾前・迹門の断惑とは、外道の有漏断の退すれば起こるがごとし。いまだ久遠を知らざるをもって惑者の本となすなり。故に、四十一品断の弥勒は、本門立行の発起・影響・当機・結縁の地涌千界の衆を知らず。既に一分の無始の無明を断じて十界の一分の無始の法性を得れば、何ぞ等覚の菩薩を知らざらん。たとい等覚の菩薩を知らざるも、いかでか当機・結縁の衆を知らざらん。「いまし一人をも識らず」の文は、最も「いまだ三惑をも断ぜず」の故か。ここをもって、本門に至っては則ち爾前・迹門において随他意の釈を加え、また天・人・修羅に摂め、「五欲に貪著す」「妄見の網の中に」「凡夫は顚倒せるがために」と説き、釈の文には「我、道場に坐して一法をも得ず」と云う。蔵・通両仏の見思断も別・円二仏の無明断も、ならびに皆、見思・無明を断ぜず。故に随他意と云う。所化の衆生、三惑を断ずと謂えるは、これ実の断にあらず。

答えの文に「開善の無声聞の義に同ず」とは、汝もまた光宅の有声聞の義に同ずるか。天台は有無共に破すなり。開善は爾前において無声聞と判じ、光宅は法華において有声聞と判ず。故に有無共に難有り。天台は「爾前には則ち有り、今経には則ち無し。所化の執情には則ち有り、長者の見には則ち無し」。かくのごときの破の文、皆これ爾前・迹門相対の釈にて、有無共に今の難にはあらざるなり。ただし、「七方便は、ならびに究竟の滅にあらず」また「ただ心を観ずと言うのみならば、則ち理に称わず」との釈は、円益に対し当分の益を下して「ならびに究竟の滅にあらず」「即ち理に称わず」と云うなりといわば、金錍論の「ひとえに清浄の真如を指すは、なお小の真を失えり。仏性いずくんぞ在らん」という釈をば、いかんが会すべき。ただし、この「なお小の真を失えり」の釈は常には出だすべからず。最も秘蔵すべし。

ただし、「妙法蓮華経は、皆これ真実なり」の文をもって、迹門において爾前の得道を許すが故に爾前得道の義有りというは、これはこれ迹門を爾前に対して真実と説くか。しかもいまだ久遠実成を顕さず。これ則ち彼の「いまだ真実を顕さず」の分域なり。ゆえに、無量義経に大荘厳等の菩薩の四十余年の得益を挙ぐるを、仏答えたもうに、「いまだ真実を顕さず」の言をもってす。また涌出品の中に弥勒疑って云わく「如来は太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず乃至四十余年を過ぎたり」已上。仏答えて云わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、三菩提を得たまえりと謂えり。我は実に成仏してより以来」已上。「我は実に成仏してより」とは、寿量品已前を「いまだ真実を顕さず」と云うにあらずや。

この故に、記の九に云わく「『昔の七方便』より『誠諦』に至るまでは、七方便の権と言うは、しばらく昔の権に寄す。もし果門に対せば、権実ともにこれ随他意なり」已上。この釈は明らかに知んぬ、迹門をもなお随他意と云うなり。

寿量品の「皆実にして虚しからず」を、天台釈して云わく「円頓の衆生に約せば、迹本二門において一実一虚なり」已上。記の九に云わく「故に知んぬ、迹の実は本においてなお虚なることを」已上。迹門既に虚なること、論に及ぶべからず。

ただし、「皆これ真実なり」とは、もし本門に望むれば迹はこれ虚なりといえども、一座の内において虚実を論ずるが故に、本迹両門ともに真実と言うなり。例せば、迹門法説の時の譬説・因縁の二周も、この一座において聞知せざること無きが故に、名づけて顕となすがごとし。記の九に云わく「もし方便の教えならば、二門ともに虚なり。因門開し竟わって果門に望むれば、則ち一実一虚なり。本門顕れ竟われば、則ち二種ともに実なり」已上。この釈の意は、本門いまだ顕れざる以前は、本門に対すればなお迹門をもって名づけて虚となす。もし本門顕れ已わりぬれば、迹門の仏因は即ち本門の仏果なるが故に、天月・水月本有の法と成って、本迹ともに三世常住と顕るるなり。一切衆生の始覚を名づけて迹門の円因と言い、一切衆生の本覚を名づけて本門の円果となす。「一円因を修して、一円果を感ず」とは、これなり。

かくのごとく法門を談ずるの時、迹門・爾前は、もし本門顕れずんば六道を出でず。何ぞ九界を出でんや。

(022)

爾前二乗菩薩不作仏事

正元元年（'59）　38歳

問うて云わく、二乗の永不成仏の教えに菩薩の作仏を許すべしや。

答えて云わく、楞伽経第二に云わく「『大慧よ。何者か無性乗なる。謂わく一闡提なり。大慧よ。一闡提とは涅槃の性無し。何をもっての故に。解脱の中において信心を生ぜず、涅槃に入らず。大慧よ。一闡提とは二種あり。何らをか二つとなす。一には一切の善根を焚焼す。二には一切衆生を憐愍して一切衆生界を尽くさんとの願を作す。大慧よ。いかんが一切の善根を焚焼する。謂わく、菩薩蔵を謗じてかくのごときの言を作す。彼は修多羅・毘尼・解脱に随順する説にあらずと。諸の善根を捨つ。この故に涅槃を得ず。大慧よ。衆生を憐愍して衆生界を尽くさんとの願を作す者、これを菩薩となす。大慧よ。菩薩は方便もて願を作す。もし諸の衆生、涅槃に入らずんば、我もまた涅槃に入らじと。この故に菩薩摩訶薩は涅槃に入らず。大慧よ。これを二種の一闡提と名づく。涅槃の性無し。この義をもっての故に、決定して一闡提の行を取る』。大慧菩薩、仏に白して言さく『世尊よ。この二種の一闡提、何らの一闡提か常に涅槃に入らざる』。仏、大慧に告げたまわく『菩薩摩訶薩の一闡提は常に涅槃に入らず。何をもっての故に。よく一切諸法は本来涅槃なりと知るをもって、この故に涅

槃に入らず。一切の善根を捨つる闡提にはあらず。何をもっての故に。大慧よ。彼の一切の善根を捨つる闡提は、もし諸仏・善知識等に値いたてまつらば、菩提心を発し、諸の善根を生じて、便ち涅槃を証す』と」等云々。

この経文に「もし諸の衆生、涅槃に入らずんば、我もまた涅槃に入らじ」等云々。前四味の諸経に二乗作仏を許さず。これをもってこれを思うに、四味の諸経の四教の菩薩も作仏有り難きか。華厳経に云わく「衆生界尽きざれば、我が願もまた尽きず」等云々。一切の菩薩必ず四弘誓願を発すべし。その中の衆生無辺誓願度の願これを満ぜざれば、無上菩提誓願証の願また成じ難し。これをもってこれを案ずるに、「四十余年」の文二乗に限れば、菩薩の願また成じ難きか。

問うて云わく、二乗の成仏これ無ければ菩薩の成仏もこれ無きの正しき証文、いかん。

答えて云わく、涅槃経三十六に云わく「仏性はこれ衆生に有りと信ずといえども、必ずしも一切みなこれ有るにはあらずとす。この故に名づけて信不具足となす」〈三十六本の三十二〉。この文のごとくんば、先四味の諸の菩薩は皆、一闡提の人なり。二乗作仏を許さざるは、二乗の作仏を成ぜざるのみにあらず、はたまた菩薩の作仏もこれを許さざるものなり。これをもってこれを思うに、「四十余年」の文、二乗作仏を許さずんば、菩薩の成仏もまたこれ無きものなり。

一乗要決の中に云わく「涅槃経三十六に云わく『仏性はこれ衆生に有りと信ずといえども、必ずしも一切みなこれ有るにはあらずとす。この故に名づけて信不具足となす』〈三十六本の三十二〉。第三十一に説かく『一切衆生および一闡提ことごとく仏性有りと信ずるを、菩薩の十法の中の第一の信心具

足と名づく』〈三十六本の第三十〉。『一切衆生ことごとく仏性有り』と明かすは、これ少分にあらず。もしなお堅く少分の一切なりと執せば、ただ経に違するのみにあらず、また信不具なり。何に因ってか、楽って一闡提と作るや。これに由って、応に全分の有性を許すべし。理また応に一切の成仏を許すべし〇慈恩、心経玄賛に云わく『大悲の辺に約すれば、常に闡提となる。大智の辺に約すれば、また当に作仏すべし』。宝公云わく『大悲闡提は、これ前経の所説なり。前説をもって後説を難ずべからざるなり』。諸師の釈意、大途これに同じ」文。

金錍の註に云わく「境は謂わく四諦なり。百界三千の生死は即ち苦なり。この生死即ちこれ涅槃なりと達するを、衆生無辺誓願度と名づく。百界三千に三惑を具足す。この煩悩即ちこれ菩提なりと達するを、煩悩無辺誓願断と名づく。生死即ち涅槃にして円の仏性を証するは、即ち仏道無上誓願成なり。惑即ち菩提にして般若にあらざること無きは、即ち法門無尽誓願知なり。惑・智は無二にして、生・仏は体同じ。苦・集はただ心のみにして、四弘は融摂す。一即一切、この言に徴有り」文。

慈覚大師、速証仏位集に云わく「第一に、ただ今経の力用のみ仏の下化衆生の願を満たすが故に、世に出でてこれを説く。いわゆる諸仏の因位の四弘の願とは、利生・断惑・知法・作仏なり。しかるに、因円果満なれば、後の三つの願は満ず。利生の一願は、はなはだこれ満じ難し。彼の華厳の力、十界皆仏道を成ずること能わず。阿含・方等・般若もまたしかなり。後番の五味、皆成仏道の本懐なること能わず。今この妙経は、十界皆仏道を成ずること分明なり。彼の達多、無間に堕つるに天王仏の記を授かり、竜女成仏し、十羅刹女も仏道を悟り、阿修羅も成仏の総記を受け、人・天・二乗・三

教の菩薩も円妙の仏道に入る。経に云わく『我が昔の願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ。一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ』云々。衆生界尽きざるが故にいまだ仏道に入らざる衆生有りといえども、しかも十界皆成仏すること、ただ今経の力にのみ在り。故に利生の本懐なり」云々。

また云わく「第一に妙経の大意を明かせば、諸仏はただ一大事の因縁をもっての故に世に出現し、『一切衆生ことごとく仏性有り』と説きたまい、法を聞き観行するに、皆当に作仏すべし。そもそも、仏、何の因縁をもって『十界の衆生ことごとく三因仏性有り』と説きたもうや。天親菩薩、仏性論縁起分の第一に云わく『如来は、五種の過失を除き、五種の功徳を生ぜんがための故に、一切衆生ことごとく仏性有りと説きたもう』已上。謂わく、五種の過失とは、一には下劣心、二には高慢心、三には虚妄の執、四には真法を謗ず、五には我執を起こす。五種の功徳とは、一には正勤、二には恭敬、三には般若、四には闍那、五には大悲なり。生ずることなしと疑うが故に大菩提心を発すこと能わざるを下劣心と名づけ、我に性有って能く菩提心を発すと謂えるを高慢と名づけ、一切法の無我なる中において有我の執を作すを虚妄の執と名づけ、一切諸法の清浄の智慧・功徳を違謗するを真法を謗ずと名づけ、意ただ己を存するのみにして一切衆生を憐れむことを欲せざるを我執を起こすと名づく。この五つに翻対して、定めて性有りと知って菩提心を発す」。

日蓮　花押

(023)

守護国家論

正元元年('59)　38歳

夫れ以んみれば、たまたま十方微塵の三悪の身を脱れて、希に閻浮日本の爪上の生を受く。また閻浮日域の爪上の生を捨てて十方微塵の三悪の身を受けんこと、疑いなきものなり。しかるに、生を捨てて悪趣に堕つる縁は一つにあらず。あるいは妻子・眷属の哀憐により、あるいは殺生・悪逆の重業により、あるいは国主と成って民衆の歎きを知らざるにより、あるいは法の邪正を知らざるにより、あるいは悪師を信ずるによる。この中において、世間の善悪は眼前に在り。愚人もこれを弁うべし。仏法の邪正、師の善悪においては、証果の聖人すら、なおこれを知らず。いわんや末代の凡夫においてをや。

しかのみならず、仏日西山に隠れ余光東域を照らしてより已来、四依の慧灯は日に減じ、三蔵の法流は月に濁る。実教に迷える論師は真理の月に雲を副え、権経に執する訳者は実経の珠を砕いて権経の石と成す。いかにいわんや、震旦の人師の宗義、その誤り無からんや。いかにいわんや、日本辺土の末学、誤りは多く実は少なきものか。したがって、その教えを学する人、数は竜鱗よりも多けれども、得道の者は麟角よりも希なり。あるいは権教に依るが故に、あるいは時機不相応の教えに依るが

故に、あるいは凡聖の教えを弁えざるが故に、あるいは権実二教を弁えざるが故に、あるいは権教を実教と謂うによるが故に、あるいは位の高下を知らざるが故なり。凡夫の習い、仏法に就いて生死の業を増すこと、その縁は一つにあらず。

中昔、邪智の上人有って、末代の愚人のために一切の宗義を破して選択集一巻を造る。名を鸞・綽・導の三師に仮りて一代を二門に分かち、実経を録して権経に入れ、法華・真言の直道を閉じて浄土三部の隘路を開く。また浄土三部の義にも順わずして権実の謗法を成し、永く四聖の種を断じて阿鼻の底に沈むべき僻見なり。しかるに、世人これに順うこと、譬えば大風の小樹の枝を吹くがごとく、門弟この人を重んずること、天衆の帝釈を敬うに似たり。

この悪義を破らんがために、また多くの書有り。いわゆる浄土決疑抄・弾選択・摧邪輪等なり。この書を造る人、皆、碩徳の名一天に弥るといえども、恐らくは、いまだ選択集の謗法の根源を顕さず。故に、還って悪法の流布を増す。譬えば、盛んなる旱魃の時に小雨を降らせば草木いよいよ枯れ、兵者を打つ刻に弱兵を先んずれば強敵ますます力を得るがごとし。

予このことを歎くあいだ、一巻の書を造って選択集の謗法の縁起を顕し、名づけて守護国家論と号す。願わくは、一切の道俗、一時の世事を止めて永劫の善苗を種えよ。今、経論をもって邪正を直す。信・謗は仏説に任せ、あえて自義を存することなし。

分かちて七門となす。一には如来の経教において権実二教を定むることを明かし、二には正像末の興廃を明かし、三には選択集の謗法の縁起を明かし、四には謗法の者を対治すべき証文を出だすこと

を明かし、五には善知識ならびに真実の法には値い難きことを明かし、六には法華・涅槃に依る行者の用心を明かし、七には問いに随って答うることを明かす。

大文の第一に、如来の経教において権実二教を定むることを明かさば、これにおいて四つ有り。一には大部の経の次第を出だして流類を摂むることを明かし、二には諸経の浅深を明かし、三には大小乗を定むることを明かし、四にはしばらく権を捨てて実に就くべきことを明かす。

第一に、大部の経の次第を出だして流類を摂むることを明かさば、

問うて云わく、仏は最初にいかなる経を説きたもうや。

答えて云わく、華厳経なり。

問うて云わく、その証いかん。

答えて云わく、六十華厳経の離世間浄眼品に云わく「かくのごときを我聞きき。一時、仏、摩竭提国寂滅道場に在して、始めて正覚を成ず」。

法華経の序品に、放光瑞の時、弥勒菩薩、十方世界の諸仏の五時の次第を見る時、文殊師利菩薩に問うて云わく「また諸仏・聖主師子、経典の微妙第一なるを演説したまいて、その声は清浄に、柔軟の音を出だして、諸の菩薩を教えたもうこと、無数億万なるを睹る」。また方便品に仏自ら初成道の時を説いて云わく「我は始め道場に坐し、樹を観じまた経行す乃至その時に諸の梵王および諸の天帝釈、護世の四天王および大自在天、ならびに余の諸の天衆、眷属百千万は、恭敬・合掌し礼して、我

に法輪を転ぜんことを請ず」。これらの説は、法華経に華厳経の時を指す文なり。故に、華厳経の第一に云わく「毘沙門天王 略 月天子 略 日天子 略 釈提桓因 略 大梵 略 摩醯首羅等 略」已上。

涅槃経に華厳経の時を説いて云わく「既に成道し已わって梵天勧請すらく『ただ願わくは、如来よ、当に衆生のために広く甘露の門を開きたもうべし』乃至梵王また言さく『世尊よ。一切衆生におよそ三種有り。いわゆる利根・中根・鈍根なり。利根は能く受く。ただ願わくはために説きたまえ』。仏言わく『梵王よ。諦らかに聴け、諦らかに聴け。我は今当に一切衆生のために甘露の門を開くべし』と」。また三十三に華厳経の時を説いて云わく「十二部経・修多羅の中の微細の義を、我は先にすでに諸の菩薩のために説くがごとし」。

かくのごとき等の文は、皆、諸仏世に出でたまいて、一切経の初めには必ず華厳経を説きたもう証文なり。

問うて云わく、無量義経に云わく「初めに四諦を説いて乃至次に方等十二部経・摩訶般若・華厳海空を説く」。この文のごとくんば、般若経の後に華厳経を説くと。相違いかん。

答えて云わく、浅深の次第なるか、あるいは後分の華厳経なるか。法華経の方便品に一代の次第浅深を列ねて云わく「余乗〈華厳経なり〉の、もしは二〈般若経なり〉、もしは三〈方等経なり〉有ることなし」と、この意なり。

問うて云わく、華厳経の次に、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、阿含経を説きたもうなり。

問うて云わく、何をもってこれを知るや。

答えて云わく、法華経の序品に華厳経の次の経を説いて云わく「もし人、苦に遭って、老・病・死を厭わば、ために涅槃を説く」。方便品に云わく「即ち波羅奈に趣く乃至五比丘のために説きぬ」。涅槃経に華厳経の次の経を定めて云わく「即ち波羅奈国において正法輪を転じて中道を宣説す」。これらの経文は、華厳経より後に阿含経を説くなり。

問うて云わく、阿含経の後に、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、方等経なり。

問うて云わく、何をもってこれを知るや。

答えて云わく、無量義経に云わく「初めに四諦を説いて乃至次に方等十二部経を説く」。涅槃経に云わく「修多羅より方等を出だす」。

問うて云わく、「方等」とは天竺の語なり、ここには大乗と云う。華厳・般若・法華・涅槃等は、皆、大乗方等なり。何ぞ独り方等部に限って方等の名を立つるや。

答えて曰わく、実には華厳・般若・法華等は、皆、方等なり。しかりといえども、今、方等部において別して方等の名を立つることは、私の義にあらず、無量義経・涅槃経の文に顕然たり。阿含の証果は一向小乗なり。次に大乗を説く。方等より已後をば皆大乗と云うといえども、大乗の始めなるが故に、初めなるによって方等部を方等と云うなり。例せば、十八界の十半は色なりといえども初めなるによって色境の名を立つるがごとし。

問うて曰わく、方等部の諸経の後に、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、般若経なり。

問うて曰わく、何をもってこれを知るや。

答えて曰わく、涅槃経に云わく「方等より般若を出だす」。

問うて曰わく、般若経の後には、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、無量義経なり。

問うて曰わく、何をもってこれを知るや。

答えて曰わく、仁王経に云わく「二十九年の中」。無量義経に云わく「四十余年」。

問うて曰わく、無量義経には般若経の後に華厳経を列ね、涅槃経には般若経の後に涅槃経を列ぬ。今立つるところの次第は般若経の後に無量義経を列ぬ。相違いかん。

答えて曰わく、涅槃経第十四の文を見るに、涅槃経より已前の諸経を列ねて涅槃経に対して勝劣を論じ、しかも法華経を挙げず。第九の巻において、法華経は涅槃経より已前なりとこれを定めたもう。法華経の序品を見るに、無量義経は法華経の序分なり。無量義経には般若の次に華厳経を列ぬれども、華厳経を初時に遣れば般若経の後は無量義経なり。

問うて曰わく、無量義経の後に、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、法華経を説きたもうなり。

問うて曰わく、何をもってこれを知るや。

答えて曰わく、法華経の序品に云わく「諸の菩薩のために、大乗経の、無量義と名づけ、菩薩を教うる法にして、仏の護念したもうところを説きたもう。仏はこの経を説き已わって、結跏趺坐し、無量義処三昧に入りたもう」。

問うて曰わく、法華経の後に、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、普賢経を説きたもうなり。

問うて曰わく、何をもってこれを知るや。

答えて曰わく、普賢経に云わく「却って後三月あって、我は当に般涅槃すべし乃至如来は昔、耆闍崛山、および余の住処において、すでに広く一実の道を分別せしかども、今この処において」。

問うて曰わく、普賢経の後に、いずれの経を説きたもうや。

答えて曰わく、涅槃経を説きたもうなり。

問うて曰わく、何をもってこれを知るや。

答えて曰わく、普賢経に云わく「却って後三月あって、我は当に般涅槃すべし」。涅槃経三十に云わく「如来は、何が故ぞ二月に涅槃したもうや」。また云わく「如来は初生・出家・成道・転妙法輪、皆八日をもってしたもう。何ぞ仏の涅槃独り十五日なるや」。

大部の経、大概かくのごとし。これより已外の諸の大小乗経は次第不定なり。あるいは阿含経より已後に華厳経を説き、法華経より已後に方等・般若を説く。皆、義類をもってこれを収めて一処に置くべし。

第二に、諸経の浅深を明かさば、

無量義経に云わく「初めに四諦〈阿含〉を説いて、次に方等十二部経・摩訶般若・華厳海空を説いて、菩薩の歴劫修行を宣説す」。また云わく「四十余年にはいまだ真実を顕さず」。また云わく「無量義経は、尊にして過上無し」。これらの文のごとくんば、四十余年の諸経は無量義経に劣ること疑いなきものなり。

問うて曰わく、密厳経に云わく「一切経の中に勝れたり」。大雲経に云わく「諸経の転輪聖王なり」。金光明経に云わく「諸経の中の王なり」。これらの文を見るに、諸大乗経の常の習いなり。何ぞ、一文を瞻て、無量義経は四十余年の諸経に勝ると云うや。

答えて云わく、教主釈尊、もし諸経において互いに勝劣を説かずんば、大小乗の差別、権実の不同有るべからず。もし実に差別無きに互いに差別・浅深等を説かば、諍論の根源、悪業起罪の因縁なり。爾前の諸経の第一は、縁に随って不定なり。あるいは小乗の諸経に対して第一、あるいは報身の寿を説くに諸経の第一、あるいは俗諦・真諦・中諦等を説くに第一なり、と。一切の第一にはあらず。今の無量義経のごときは、四十余年の諸経に対して第一なり。

問うて云わく、法華経と無量義経と、いずれか勝れたるや。

答えて云わく、法華経勝れたり。

問うて云わく、何をもってこれを知るや。

答えて云わく、無量義経には、いまだ二乗作仏と久遠実成とを明かさず。故に法華経に嫌われて今

説の中に入るなり。

問うて云わく、法華経と涅槃経と、いずれか勝れたるや。

答えて云わく、法華経勝れたるなり。

問うて曰わく、何をもってこれを知るや。

答えて曰わく、涅槃経に自ら「法華の中のごとし」等と説き「さらに所作無し」と云い、法華経に当説を指して難信難解と云わざるが故なり。

問うて云わく、涅槃経の文を見るに、涅槃経已前をば「皆邪見なり」と云う、いかん。

答えて云わく、法華経は如来の出世の本懐なるが故に「今、すでに満足しぬ」「今正しくこれその時なり」「しかるに、善男子よ、我は実に成仏してより已来」等と説く。ただし、諸経の勝劣においては、仏自ら「我が説くところの経典は無量千万億なり」と挙げ了わって「已に説き、今説き、当に説くべし」等と説く時、多宝仏、地より涌現して「皆これ真実なり」と定め、分身の諸仏は舌相を梵天に付けたもう。かくのごとく諸経と法華経との勝劣を定め了わんぬ。この外は釈迦如来一仏の説くところなれば、先後の諸経に対して法華経の勝劣を論ずべきにあらず。故に、涅槃経に諸経を嫌う中に法華経を入れず。法華経は諸経に勝るる由、これを顕すが故なり。ただし、「邪見」の文に至っては、法華経を覚知せざる一類の人、涅槃経を聞いて悟りを得るが故に、迦葉童子自身ならびに所引を指して、涅槃経より已前を「邪見」等と云うなり。経の勝劣を論ずるにはあらず。

第三に、大小乗を定むることを明かさば、

問うて曰わく、大小乗の差別いかん。

答えて云わく、常途の説のごとくんば、阿含部の諸経は小乗なり。華厳・方等・般若・法華・涅槃等は大乗なり。あるいは六界を明かすは小乗、十界を明かすは大乗なり。その外、法華経に対して実義を論ずる時、法華経より外の四十余年の諸大乗経は皆小乗にして、法華経は大乗なり。

問うて云わく、諸宗に亘って、我が拠るところの経を実大乗と謂い、余宗の拠るところの経を権大乗と云うこと、常の習いなり。末学においては是非定め難し。いまだ法華経に対して諸大乗経を小乗と称することを聞知せず。証文いかん。

答えて云わく、宗々の立義、互いに是非を論ず。なかんずく末法において、世間・出世について非を先とし、是を後とす。自ら是非を知らざるは愚者の歎くべきところなり。ただし、しばらく我らが智をもって四十余年の現文を看るに、この文を破する文無ければ、人の是非を信用すべからざるなり。その上、法華経に対して諸大乗経を小乗と称することは、自答を存すべきにあらず。法華経の方便品に云わく「仏は自ら大乗に住したまえり乃至自ら無上道・大乗平等の法を証して、もし小乗をもって乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可となす」。この文の意は、法華経より外の諸経を皆小乗と説けるなり。また寿量品に云わく「小法を楽う」。これらの文は、法華経より外の四十余年の諸経をば皆小乗と説けるなり。天台・妙楽の釈において四十余年の諸経を小乗と釈すとも、他師これを許すべからず。故に、ただ経文を出だすなり。

第四に、しばらく権経を閣いて実経に就くことを明かさば、

問うて曰わく、証文いかん。

答えて曰わく、十の証文有り。法華経に云わく「ただ楽って大乗経典を受持するのみにして、乃至、余経の一偈をも受けざれ」〈これ一〉。

涅槃経に云わく「了義経に依って不了義経に依らざれ」〈四十余年をば不了義経と云う〉〈これ二〉。

法華経に云わく「この経は持ち難し。もししばらくも持たば、我は即ち歓喜す。諸仏もまたしかなり。かくのごときの人は、諸仏の歎めたもうところなり。これは則ち勇猛なり。これは則ち精進なり。これを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」〈末代においては、四十余年の持戒無し。ただ法華経を持つを持戒となす〉〈これ三〉。

涅槃経に云わく「乗において緩なる者は乃ち名づけて緩となす。戒において緩なる者は名づけて緩となさず。菩薩摩訶薩よ。この大乗において心懈慢せずんば、これを奉戒と名づく。正法を護らんがために、大乗の水をもって自ら澡浴す。この故に、菩薩は破戒を現ずといえども、名づけて緩となさず」〈この文は、法華経の戒を流通する文なり〉〈これ四〉。

法華経第四に云わく「妙法華経乃至皆これ真実なり」〈この文は、多宝の証明なり〉〈これ五〉。

法華経第八の普賢菩薩の誓いに云わく「如来滅して後において、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめん」〈これ六〉。

法華経第七に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に断絶せしむることなけん」〈釈迦如来の誓いなり〉〈これ七〉。

法華経第四に多宝ならびに十方諸仏の来集の意趣を説いて云わく「法をして久しく住せしめんが故に、ここに来至したまえり」〈これ八〉。

法華経第七に法華経を行ずる者の住処を説いて云わく「如来滅して後において、応当に一心に受持・読・誦・解説・書写し、説のごとく修行すべし。在るところの国土に乃至もし経巻の住するところの処ならば、もしは園中においても、もしは林中においても、もしは樹の下においても、もしは僧坊においても、もしは白衣の舎にても、もしは殿堂に在っても、もしは山谷曠野にても、この中に皆応に塔を起てて供養すべし。所以はいかん。当に知るべし、この処は即ちこれ道場なればなり。諸仏はここにおいて阿耨多羅三藐三菩提を得たもう」〈これ九〉。

法華経の流通たる涅槃経の第九に云わく「我涅槃して後、正法いまだ滅せず。八十年を余す。その時、この経、閻浮提において当に広く流布すべし。この時、当に諸の悪比丘有って、この経を抄掠し、分かちて多分と作し、能く正法の色香味美を滅すべし。この諸の悪人、またかくのごとき経典を読誦すといえども、如来の深密の要義を滅除して世間の荘厳の文飾・無義の語を安置す。前を抄って後に著け、後を抄って前に著け、中を前後に著けん。当に知るべし、かくのごときの諸の悪比丘は、これ魔の伴侶なり乃至譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるがごとく、諸の悪比丘もまたかくのごとし。雑うるに世語をもってし、錯ってこの経を定む。多くの衆生をして正説・正写・正取・尊重・讃歎・供養・恭敬することを得ざらしむ。この悪比丘は、利養のための故に、この経を広宣流布すること能わず。分流すべきところ、少なきこと言うに足らず。彼の牧牛の貧窮の女人、展転し

て乳を売り、乃至糜と成すに乳味無きがごとし。この大乗経典の大涅槃経もまたかくのごとし。展転して薄淡にして気味有ることなし。気味無しといえども、なお余経に勝るることこれ一千倍なると、彼の乳味の諸の苦味より千倍勝るとなすがごとし。何をもっての故に。この大乗経典の大涅槃経は声聞の経において最も上首となせばなり」〈これ十〉。

問うて云わく、不了義経を捨てて了義経に就けば、大円覚修多羅了義経・大仏頂如来密因修証了義経、かくのごとき諸大乗経は皆、了義経なり。依用となすべきや。

答えて曰わく、了義・不了義は、所対に随って不同なり。二乗・菩薩等の所説の不了義に対すれば、一代の仏説は皆了義なり。仏説について、また小乗経は不了義、大乗経は了義なり。大乗について、また四十余年の諸経は不了義経、法華・涅槃・大日経等は了義経なり。しかるに、円覚・大仏頂等の諸経は、小乗および歴劫修行の不了義経に対すれば了義経なり。法華経のごとき了義にはあらざるなり。

問うて曰わく、華厳・法相・三論等の、天台・真言より以外の諸宗の高祖、各その依憑の経々に依って、その経々の深義を極めんと欲す。これしかるべしや、いかん。

答えて云わく、華厳宗のごときは、華厳経に依って諸経を判じて華厳経の方便となすなり。法相宗のごときは、阿含・般若等を卑しめ、華厳・法華・涅槃をもって深密経に同じて同じく中道教と立つといえども、また法華・涅槃は一類の一乗を説くが故に不了義経なり、深密経には五性各別を存するが故に了義経と立つるなり。三論宗のごときは、二蔵を立てて一代を摂め、大乗において浅深を論ぜ

ず。しかるに般若経をもって依憑となす。これらの諸宗の高祖、多分は四依の菩薩なるか。定めて所存有らん。是非に及ばず。

しかりといえども、自身の疑いを晴らさんがために、しばらく人師の異解を閣いて諸宗の依憑の経々を開き見るに、華厳経は旧訳は五十・六十、新訳は八十・四十なり。その中に、法華・涅槃のごとく一代聖教を集めて方便となす文無し。四乗を説くといえども、その中の仏乗において十界互具・久遠実成を説かず。ただし、人師に至っては五教を立てて、先の四教に諸経を収めて華厳経の方便となす。

法相宗のごときは、三時教を立つる時、法華等をもって深密経に同ずといえども、深密経五巻を開き見るに、全く法華等をもって中道の内に入れず。

三論宗のごときは、二蔵を立つる時、菩薩蔵において華厳・法華等を収めて般若経に同ずといえども、新古の大般若経を開き見るに、全く大般若をもって法華・涅槃に同ずる文無し。「華厳は頓教、法華は漸教」等とは、人師の意楽にして仏説にあらざるなり。

法華経のごときは、序分の無量義経に、たしかに四十余年の年限を挙げ、華厳・方等・般若等の大部の諸経の題名を呼んで「いまだ真実を顕さず」と定め、正宗の法華経に至って一代の勝劣を定むる時「我が説くところの経典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし」の金言を吐いて「しかもその中において、この法華経は最もこれ難信難解なり」と説きたもう時、多宝如来、地より涌出して「妙法華経乃至皆これ真実なり」と証誠し、分身の諸仏、十方よりことごとく一処に集まっ

て舌を梵天に付けたもう。

今この義をもって余推察を加うるに、唐土・日本に渡れるところの五千・七千余巻の諸経、以外の天竺・竜宮・四王天・過去の七仏等の諸経、ならびに阿難の未結集の経、十方世界の塵に同ずる諸経の、勝劣・浅深・難易、掌中に在り。「無量千万億」の中に、あに釈迦如来の説くところの諸経漏らすべけんや。已説・今説・当説の年限に入らざる諸経これ有るべきや。願わくは末代の諸人、しばらく諸宗の高祖の弱文・無義を閣いて、釈迦・多宝・十方の諸仏の強文・有義を信ずべし。いかにいわんや、諸宗の末学の偏執を先となし末代の愚者の人師を本となして経論を抛つ者に依憑すべきや。故に、法華の流通たる双林最後の涅槃経に、仏、迦葉童子菩薩に遺言して言わく「法に依って人に依らざれ。義に依って語に依らざれ。智に依って識に依らざれ。了義経に依って不了義経に依らざれ」云々。

予、世間を見聞するに、自宗の人師をもって「三昧発得・智慧第一」と称うれども、無徳の凡夫にして実経に依って法門を信ぜしめず、不了義の観経等をもって時機相応の教えと称え、了義の法華・涅槃を閣き譏って理深解微の失を付く。如来の遺言に背いて「人に依って法に依らざれ。語に依って義に依らざれ。識に依って智に依らざれ。不了義経に依って了義経に依らざれ」と談ずるにあらずや。請い願わくは、心有らん人は思惟を加えよ。

如来の入滅は既に二千二百余の星霜を送れり。文殊・迦葉・阿難、経を結集してより已後、四依の菩薩は重ねて世に出でて、論を造り、経の意を申ぶ。末の論師に至って漸く誤り出来す。また訳者においても、梵漢にいまだ達せざる者、権教の宿習の人有って、実の経論の義を曲げて権の経論の義を

存せり。これに就いて、また唐土の人師は、過去の権教の宿習の故に権の経論心に叶うあいだ、実の経論を用いず。あるいは少し自義に違う文有れば、理を曲げて会通を構え、もって自身の義に叶わしむ。たとい後に道理と念うといえども、あるいは名利により、あるいは檀那の帰依によって、権宗を捨てて実宗に入らず。世間の道俗、また無智の故に理非を弁えず、ただ人に依って法に依らず。たとい悪法たりといえども、多人の邪義に随って一人の実説に依らず。

しかるに、衆生の機、多くは流転に随う。たとい出離を求むとも、また多分は権経に依る。ただ恨むらくは悪業の身、善に付け悪に付け生死を離れ難きのみ。しかりといえども、今の世の一切の凡夫、たとい今生を損ずといえども、上に出だすところの涅槃経第九の文に依って、しばらく法華・涅槃を信ぜよ。その故は、世間の浅きことすら、展転多き時は、虚は多く実は少なし。いわんや仏法の深義においてをや。如来の滅後二千余年の間、仏経に邪義を副え来れり。万に一も正義無きか。一代の聖教、多分は誤り有るか。ゆえに、心地観経の法爾無漏種子、正法華経の嘱累の経末、婆沙論の一十六字、摂論の識を八・九に分かつ、法華論と妙法華経との相違、涅槃論の「法華は煩悩の汚すところなり」の文、法相宗の定性・無性の不成仏、摂論宗の法華経の「一たび南無と称う」の別時意趣、これらは皆、訳者・人師の誤りなり。この外に、また四十余年の経々において多くの誤り有るか。たとい法華・涅槃において誤り有るも誤り無きも、四十余年の諸経を捨てて法華・涅槃に随うべし。その証、上に出だし了わんぬ。いわんや、誤り有る諸経において信心を致す者、生死を離るべしや。

大文の第二に、正像末について仏法の興廃有ることを明かさば、これについて二つ有り。一には爾前四十余年の内の諸経と浄土三部経との末法における久住・不久住を明かす。二には法華・涅槃と浄土三部経ならびに諸経との久住・不久住を明かす。

第一に、爾前四十余年の内の諸経と浄土三部経との末法における久住・不久住を明かさば、問うて云わく、如来の教法は、大小・浅深・勝劣を論ぜず、ただ時機に依ってこれを行ぜば、定めて利益有るべきなり。しかるに、賢劫・大術・大集等の諸経を見るに、仏の滅後二千余年已後は仏法皆滅して、ただ教のみ有って行・証有るべからず。したがって、伝教大師の末法灯明記を開くに「我が延暦二十年辛巳まで一千七百五十歳なり」〈一説なり〉。延暦二十年より已後、また四百五十余歳なり。既に末法に入れり。たとい教法有りといえども、行・証無けん。しかるにおいては、仏法を行ずる者、万が一も得道有り難きか。しかるに、双観経の「当来の世、経道滅尽せんに、我慈悲・哀愍をもって、特りこの経のみを留めて、止住せんこと百歳ならん。それ衆生有ってこの経に値わば、意の願うところに随って皆得度すべし」等の文を見るに、釈迦如来一代の聖教皆滅尽して後、ただ特り双観経の念仏のみを留めて衆生を利益すべしと見え了わんぬ。

この意趣に依って、ほぼ浄土家の諸師の釈を勘うるに、その意無きにあらず。道綽禅師は「当今末法はこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみ有って通入すべき路なり」と書き、善導和尚は「万年に三宝滅し、この経のみ住すること百年なり」と宣べ、慈恩大師は「末法万年に余経ことごとく滅し、弥陀の一教のみ、物を利することひとえに増さん」と定め、日本国の叡山の先徳・恵心僧都は、一代

聖教の要文を集めて末代の指南を教うる往生要集の序に云わく「夫れ、往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗・貴賤、誰か帰せざる者あらん。ただし、顕密の教法、その文、一つにあらず。事理の業因、その行これ多し。利智・精進の人はいまだ難しとなさず、予がごとき頑魯の者、あにあえてせんや」。乃至、次下に云わく「なかんずく念仏の教えは、多く末代に経道滅尽して後の濁悪の衆生を利する計らいなり」。総じて諸宗の学者もこの旨を存すべし。殊に天台一宗の学者、誰かこの義に背くべけんや、いかん。

答えて云わく、爾前四十余年の経々は各時機に随って興廃有るが故に、多分は浄土三部経より已前に滅尽有るべきか。諸経においては多く三乗現身の得道を説くが故に、末代においては現身得道の者これ少なし。十方の往生浄土は、多くは末代の機に蒙らしむ。これについて、西方極楽は娑婆に隣近なるが故に、最下の浄土なるが故に、日輪東に出で西に没するが故に、諸経に多くこれを勧む。したがって、浄土の祖師のみ独りこの義を勧むるにあらず、天台・妙楽等もまた爾前の経に依る日はしばらくこの筋有り。また独り人師のみにあらず、竜樹・天親もこの意有り。これ一義なり。また仁王経等のごときは、浄土三部経よりなお久しく、末法万年の後、八千年住すべしとなり。故に、爾前の諸経においては一定なるべからず。

第二に、法華・涅槃と浄土三部経との久住・不久住を明かさば、

問うて云わく、法華・涅槃と浄土三部経と、いずれか先に滅すべきや。

答えて云わく、法華・涅槃より已前に浄土三部経は滅すべきなり。

問うて云わく、何をもってこれを知るや。

答えて云わく、無量義経に四十余年の大部の諸経を挙げ了わって「いまだ真実を顕さず」と云うが故に、双観経等の「特りこの経のみを留む」の言は皆、方便なり虚妄なり。華厳・方等・般若・観経等の速疾・歴劫の往生・成仏は、無量義経の実義をもってこれを撿うるに、「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提を成ずることを得ず乃至険逕を行くに、留難多きが故なり」の経なり。往生・成仏ともに別時意趣なり。大集・双観経等の住滅の先後は皆、随宜の一説なり。法華経に来らざるより前は、彼の外道の説に同じ。譬えば、江河の大海に趣かず、民臣の大王に随わざるがごとし。身を苦しめ行を作すとも、法華・涅槃に至らずんば一分の利益無く、有因無果の外道なり。在世・滅後、ともに教有って人無く、行有って証無きなり。諸木は枯るといえども松柏は萎まず、衆草は散るといえども菊竹は変ぜず。法華経もまたまたかくのごとし。釈尊の三説、多宝の証明、諸仏の舌相、ひとえに令法久住に在るが故なり。

問うて云わく、諸経滅尽の後、特り法華経のみ留まるべき証文いかん。

答えて云わく、法華経の法師品に釈尊自ら流通せしめて云わく「我が説くところの経典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし。しかもその中において、この法華経は最もこれ難信難解なり」云々。文の意は、一代五十年の已・今・当の三説において最第一の経なり。八万聖教の中に殊に未来に留めんと欲して説きたまいしなり。故に、次の品に多宝如来は地より涌出し、分身の諸仏は十方より一処に来集し、釈迦如来は諸仏を御使いとして八方の四百万億那由他の世界に充満せる菩

薩・二乗・人天・八部等を責めて「多宝如来ならびに十方の諸仏、涌出・来集の意趣は、ひとえに令法久住のためなり。各三説の諸経滅尽の後、たしかに未来の五濁・難信の世界においてこの経を弘めんと誓言を立てよ」と云える時に、二万の菩薩、八十万億那由他の菩薩、各誓状を立てて云わく「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」。千世界の微塵の菩薩、文殊等、皆誓って云わく「我らは仏滅して後において乃至当に広くこの経を説くべし」云々。その後、仏十喩を挙げたもう。その第一の喩えは、川流江河をもって四十余年の諸経に譬え、法華経をもって大海に譬う。末代濁悪の無慙・無愧の大旱魃の時、四味の川流江河は竭くといえども、法華経の大海は減少せず等と説き了わって、次下に正しく説いて云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」と定め了わんぬ。

つらつら文の次第を案ずるに、「我滅度して後」の次の「後」の字は、四十余年の諸経滅尽の後の「後」の字なり。故に、法華経の流通たる涅槃経に云わく「応に無上の仏法をもって諸の菩薩に付すべし。諸の菩薩は、よくかくのごとき法宝を問答すれば、則ち無量千世に久住し増益熾盛にして衆生を利安することを得るをもってなり」已上。これらの文のごとくんば、法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆべからざる経なり。この義を知らざる世間の学者は、大集権門の「五の五百歳」の文をもってこの経に同じ、浄土三部経より已前に滅尽すべしと立義を存して、一経の先後・起尽を忘れたるなり。

問うて云わく、上に挙ぐるところの曇鸞・道綽・善導・恵心等の諸師は、皆、法華・真言等の諸経において末代不相応の釈を作る。これに依って、源空ならびに所化の弟子、法華・真言等をもって雑行

と立て、難行道と疎み、行者をば群賊・悪衆・悪見の人等と罵り、あるいは祖父が履に類し〈聖光房の語〉、あるいは絃歌等にも劣ると云う〈南無房の語〉。その意趣を尋ぬれば、ひとえに時機不相応の義を存するが故なり。これらの人師の釈をば、いかにこれを会すべきや。

答えて云わく、釈迦如来一代五十年の説教、一仏の金言において、権実二教を分かち、権経を捨て実経に入らしむる仏語顕然たり。ここにおいて「もしただ仏乗を讃むるのみならば、衆生は苦に没す」の道理を恐れ、しばらく四十二年の権経を説くといえども、「もし小乗をもって乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん」の失を脱れんがために、「大乗に入ることを本となす」の義を存し、本意を遂げ、法華経を説きたもう。

しかるに、涅槃経に至って、我滅度せば必ず四依を出だして権実二教を弘通せしめんと約束し了わんぬ。故に、竜樹菩薩は如来の滅後八百年に世に出で、十住毘婆沙等の権論を造って華厳・方等・般若等の意を宣べ、大論を造って般若・法華の差別を分かち、天親菩薩は如来の滅後九百年に世に出で、倶舎論を造って小乗の意を宣べ、唯識論を造って方等部の意を宣べ、最後に仏性論を造って法華・涅槃の意を宣べ、了教・不了教を分かちて、あえて仏の遺言に違わず。末の論師ならびに訳者の時に至っては、一向に権経に執するが故に、実経を会して権経に入れ、権実雑乱の失出来せり。また人師の時に至っては、各依憑の経をもって本となすが故に、余経をもって権経となす。これよりいよいよ仏意に背く。

しかるに、浄土の三師においては、鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に依って難易・聖浄の二道を立つ。

もし本論に違して法華・真言等をもって難易の内に入れば、信用に及ばじ。したがって、浄土論註ならびに安楽集を見るに、多分は本論の意に違わず。善導和尚はまた浄土三部経に依って弥陀称名等の一行一願の往生を立つる時、梁・陳・隋・唐の四代の摂論師は総じて一代聖教をもって別時意趣と定む。善導和尚の存念に違するが故に、摂論師を破する時、彼の人を群賊等に譬う。順次往生の功徳を賊むが故に。その所行を雑行と称す。必ず万行をもって往生の素懐を遂ぐるが故に。この人を責むる時に千中無一と嫌えり。この故に、善導和尚も雑行の言の中にあえて法華・真言等を入れず。

日本国の源信僧都は、また叡山第十八代の座主・慈恵大師の御弟子なり。多くの書を造れることは、皆、法華を弘めんがためなり。しかるに、往生要集を造る意は、爾前四十余年の諸経において往生・成仏の二義有り。成仏の難行に対して往生易行の義を存し、往生の業の中において菩提心観念の念仏をもって最上となす。故に、大文第十の問答料簡の中、第七の諸行勝劣門においては、念仏をもって最勝となし、次下に爾前最勝の念仏をもって法華経の一念信解の功徳に対して勝劣を判ずる時、一念信解の功徳は念仏三昧より勝ること百千万倍なりと定めたまえり。当に知るべし、往生要集の意は、爾前最上の念仏をもって法華最下の功徳に対して、人をして法華経に入らしめんがために造るところの書なり。故に、往生要集の後に一乗要決を造って自身の内証を述ぶる時、法華経をもって本意となすなり。

しかるに、源空ならびに所化の衆、この義を知らざるが故に、法華・真言をもって三師ならびに源信破するところの難・聖・雑ならびに往生要集の序の顕密の中に入れて、三師ならびに源信を法華・

真言の謗法の人と作す。その上、日本国の一切の道俗を化して、法華・真言において時機不相応の旨を習わしめ、在家・出家の諸人において法華・真言の結縁を留む。あに、仏の記したもうところの「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲なり」の人にあらずや。また「則ち一切世間の仏種を断ぜん」の失を免るべけんや。

その上、山門・寺門・東寺・天台ならびに日本国中に法華・真言等を習う諸人を「群賊」「悪衆」「悪見の人」等に譬うる源空が重罪、いずれの劫にかその苦果を経尽くすべきや。法華経の法師品に持経者を罵る罪を説いて云わく「もし悪人有って、不善の心をもって、一劫の中において、現に仏前において、常に仏を毀罵せば、その罪はなお軽し。もし人、一つの悪言をもって、在家・出家の法華経を読誦する者を毀訾せば、その罪ははなはだ重し」〈已上、経文〉。一人の持者を罵る罪すら、なおかくのごとし。いわんや書を造り、日本国の諸人をして罵らしむる罪をや。いかにいわんや、この経を捨てて観経等の権経に遷らしむる謗法の罪をや。願わくは、一切の源空が所化の四衆よ、頓に選択集の邪法を捨ててたちまちに法華経に遷り、今度阿鼻の炎を脱れよ。

問うて云わく、正しく源空が法華経を誹謗する証文いかん。

答えて云わく、法華経の第二に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」〈経文〉。不信の相貌は、人をして法華経を捨てしむればなり。故に、天親菩薩の仏性論の第一にこの文を釈して云わく「もし大乗に憎背せば、これはこれ一闡提の因なり。衆生をしてこの

法を捨てしむるがための故に」〈論文〉。謗法の相貌は、この法を捨てしむるが故なり。選択集は人をして法華経を捨てしむる書にあらずや。閣・抛の二字は仏性論の「憎背」の二字にあらずや。

また法華経誹謗の相貌は、四十余年の諸経のごとく小善の成仏をもって別時意趣と定むる等なり。故に、天台、釈して云わく「もし小善の成仏を信ぜずんば、則ち世間の仏種を断ずるなり」。妙楽重ねてこの義を宣べて云わく「この経はあまねく六道の仏種を開く。もしこの経を謗ぜば、義、断に当たるなり」。釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・天台・妙楽の意のごとくんば、源空は謗法の者なり。詮ずるところ、選択集の意は、人をして法華・真言を捨てしめんと定めて書き了わんぬ。謗法の義、疑いなきものなり。

大文の第三に、選択集の謗法の縁起を出ださば、

問うて云わく、いずれの証拠をもって源空を謗法の者と称するや。

答えて云わく、選択集の現文を見るに、一代聖教をもって二つに分かつ。一には聖道・難行・雑行、二には浄土・易行・正行なり。その中に、聖・難・雑というは、華厳・阿含・方等・般若・法華・涅槃・大日経等なり〈取意〉。浄・易・正というは、浄土三部経の称名念仏等なり〈取意〉。聖・難・雑の失を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば「百の時に希に一・二を得、千の時に希に三・五を得ん」、あるいは「千の中に一りも無し」、あるいは「群賊・悪衆・邪見・悪見・邪雑の人」等と定むるなり。浄・易・正の得を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば「十は即ち十生じ、百は即ち百生ぜん」等なり。謗法

の邪義これなり。

問うて云わく、一代聖教を聖道・浄土、難行・易行、正行・雑行と分かち、その中に難・聖・雑をもって時機不相応と称することは、ただ源空一人の新義にあらず。曇鸞・道綽・善導の三師の義なり。これまたこれらの人師の私の案にあらず。その源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論より出でたり。もし源空を謗法の者と称せば、竜樹菩薩ならびに三師を謗法の者と称するにあらずや。

答えて云わく、竜樹菩薩ならびに三師の意は、法華已前の四十余年の経々において難易等の義を存す。しかるに、源空より已来、竜樹ならびに三師の難行等の語を借りて、法華・真言等をもって難・雑等の内に入れぬ。所化の弟子、師の失を知らずして、この邪義をもって正義と存じ、この国に流布せしむるが故に、国中の万民ことごとく法華・真言等において時機不相応の想いを作す。その上、世間を貪る天台・真言の学者、世の情に随わんがために、法華・真言等において時機不相応の悪言を吐いて選択集の邪義を扶け、一旦の欲心によって釈迦・多宝ならびに十方諸仏の御評定の「法をして久しく住せしめん」「閻浮提に広宣流布せん」の誠言を壊り、一切衆生をして一切の三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せしむ。ひとえにこれ、「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし乃至悪鬼その身に入って、仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず」の故なり。

問うて云わく、竜樹菩薩ならびに三師は法華・真言等をもって難・聖・雑の内に入れざるを、源空私にこれを入るとは、何をもってこれを知るや。

答えて云わく、遠く余処に証拠を尋ぬべきにあらず。即ち選択集にこれ見えたり。

問うて云わく、その証文、いかん。

答えて云わく、選択集の第一篇に云わく「道綽禅師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨て正しく浄土に帰するの文」と約束し了わって、次下に安楽集を引いて私の料簡の段に云わく「初めに聖道門とは、これについて二つ有り。一には大乗、二には小乗なり。大乗の中について顕密・権実等の不同有りといえども、今この集の意はただ顕大および権大のみを存す。故に、歴劫迂回の行に当たる。これに準じてこれを思うに、応に密大および実大をも存すべし」已上。選択集の文なり。この文の意は、道綽禅師の安楽集の意は法華已前の大小乗経において聖道・浄土の二門を分かつといえども、我私に法華・真言等の実大・密大をもって四十余年の権大乗に同じて聖道門と称す。「準之思之（これに準じてこれを思うに）」の四字これなり。この意に依るが故に、また曇鸞の難易の二道を引く時、私に法華・真言をもって難行道の中に入れ、善導和尚の正雑二行を分かつ時も、また私に法華・真言をもって雑行の内に入る。総じて、選択集の十六段に亘って無量の謗法を作す根源は、ひとえにこの四字より起こる。誤れるかな、畏ろしきかな。

ここに、源空の門弟、師の邪義を救って云わく、諸宗の常の習い、たとい経論の証文無しといえども、義類の同じきを聚めて一処に置く。しかるに選択集の意は、法華・真言等を集めて雑行の内に入れ、正行に対してこれを捨つ。ひとえに経の法体を嫌うにあらず。ただ風勢無き末代の衆生を常没の凡夫と定め、この機に易行の法を撰ぶ時、称名の念仏をもってその機に当て、力行の法をもって諸教

に勝ると立つ。権実・浅深等の勝劣を詮ずるにあらず。雑行と云うも、嫌って雑と云うにあらず。雑と云うは、不純を雑と云う。その上、諸の経論ならびに諸師もこの意無きにあらず。故に、叡山の先徳の往生要集の意、ひとえにこの義なり。

ゆえに、往生要集の序に云わく「顕密の教法、その文、一つにあらず。事理の業因、その行これ多し。利智・精進の人はいまだ難しとなさず、予がごとき頑魯の者、あにあえてせんや。この故に念仏の一門に依る」云々。この序の意は、恵心先徳も法華・真言等を破するにあらず、ただひとえに我ら頑魯の者の機に当つ。法華・真言は聞き難く行じ難きが故なり、我が身鈍根なるが故なり。あえて法体を嫌うにはあらず。その上、序より已外、正宗に至るまで、十門有り。大文第八の門に述べて云わく「今、念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮するにあらず。ただこれ男女・貴賤の、行住坐臥を簡ばず、時・処・諸縁を論ぜず、これを修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、その便宜を得ること、念仏にしかざればなり」已上。これらの文を見るに、源空の選択集と源信の往生要集と一巻・三巻の不同有りといえども、一代聖教の中には易行を撰んで末代の愚人を救わんと欲する意趣はただ同じことなり。源空上人、法華・真言を難行と立てて悪道に堕つれば、恵心先徳もまたこの失を免るべからず、いかん。

答えて云わく、汝、師の謗法の失を救わんがために、事を源信の往生要集に寄せて、謗法の上にいよいよ重罪を招く者なり。その故は、釈迦如来五十年の説教に、総じて先四十二年の意を無量義経に定めて云わく「険逕を行くに、留難多きが故なり」。無量義経より已後を定めて云わく「大直道を行

くに、留難無きが故なり」。仏自ら難易勝劣の二道を分かちたまえり。仏より外、等覚より已下末代の凡師に至るまで、自義をもって難易の二道を分かちてこの義に背く者は、外道・魔王の説に同じきか。したがって、四依の大士たる竜樹菩薩の十住毘婆沙論には、法華より已前において難易の二道を分かち、あえて四十余年より已後の経において難行の義を存せず。その上、もし修し易きをもって易行と定めば、法華経の五十展転の行は称名念仏より行じ易きこと百千万億倍なり。もしまた勝をもって易行と定めば、分別功徳品に爾前四十余年の八十万億劫の間の檀・戒・忍・進・念仏三昧等の先の五波羅蜜の功徳をもって法華経の一念信解の功徳に比するに、一念信解の功徳は念仏三昧等の先の五波羅蜜に勝ること百千万億倍なり。難易勝劣と謂い、行浅功深と謂い、観経等の念仏三昧を法華経に比するに、難行の中の極難行、勝劣の中の極劣なり。

その上、悪人・愚人を扶くること、また教の浅深に依る。阿含十二年の戒門には、現身に四重・五逆の者に得道を許さず。華厳・方等・般若・双観経等の諸経は、阿含経より教え深き故に勧門の時は重罪の者を摂むといえども、なお戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず。しかりといえども、決定性の二乗、無性の闡提においては、戒・勧共にこれを許さず。法華・涅槃等には、ただ五逆・七逆・謗法の者を摂むるのみにあらず、また定性・無性をも摂む。なかんずく、末法においては、常没の闡提これ多し。あに観経等の四十余年の諸経においてこれを扶くべけんや。無性の常没、決定性の二乗は、ただ法華・涅槃等に限れり。四十余年の経に依る人師は、彼の経の機と取る。この人はいまだ教相を知らざるが故なり。

ただし往生要集は、一往序文を見る時は、法華・真言等をもって顕密の内に入れてほとんど末代の機に叶わずと書くといえども、文に入って委細に一部三巻の始末を見るに、第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時、観仏三昧・般舟三昧・十住毘婆沙論・宝積・大集等の爾前の経論を引いて、一切の万行に対して念仏三昧をもって王三昧と立て了わんぬ。最後に一つの問答有り。爾前の禅定・念仏三昧をもって法華経の一念信解に対するに、百千万億倍劣ると定む。復問を通ずる時、念仏三昧を万行に勝ると云うは爾前の当分なりと云々。

当に知るべし、恵心の意は往生要集を造って末代の愚機を調えて法華経に入れんがためなり。例せば、仏の四十余年の経をもって権機を調えて法華経に入れたもうがごとし。故に、最後に一乗要決を造る。その序に云わく「諸乗の権実は古来の諍いなり。ともに経論に拠って互いに是非を執す。余、寛弘丙午歳の冬十月、病中に歎いて曰わく、仏法に遇うといえども、仏意を了せず。もし終に手を空しゅうせば、後悔何ぞ追わん。ここに経論の文義、賢哲の章疏、あるいは人をして尋ねしめ、あるいは自ら思択し、全く自宗・他宗の偏党を捨てて専ら権智・実智の深奥を探るに、ついに一乗真実の理、五乗方便の説を得る者なり。既に今生の蒙を開けば、何ぞ夕死の恨みを遺さん」已上。この序の意はひとえに恵心の本意を顕すなり。自宗・他宗の偏党を捨つる時、浄土の法門を捨てざらんや。一乗真実の理を得る時、専ら法華経に依るにあらずや。

源信僧都は永観二年甲申の冬十一月、往生要集を造り、寛弘二年丙午の冬十月の比、一乗要決を作る。その中間二十余年なり。権を先にし実を後にす。あたかも仏のごとく、また竜樹・天親・天台等

のごとし。汝、往生要集を便りとして師の謗法の失を救わんと欲すれども、あえてその義類に似ず。義類の同じきをもって一処に聚むとならば、何らの義類同じきや。華厳経のごときは、二乗界を隔つるが故に十界互具無し。方等・般若の諸経は、また十界互具を許さず。観経等の往生極楽もまた、方便の往生なり。成仏・往生ともに法華経のごとき往生にあらず、皆、別時意趣の往生・成仏なり。

その上、源信僧都の意は、四威儀に行じ易きが故に念仏をもって易行と云い、四威儀に行じ難きが故に法華をもって難行と称せば、天台・妙楽の釈を破する人なり。所以は、妙楽大師は末代の鈍者・無智の者等の法華経を行ずるに、普賢菩薩ならびに多宝・十方の諸仏を見奉るを易行と定めて云わく「散心に法華を誦し、禅三昧に入らず、坐立行に一心に法華の文字を念ず」已上。この釈の意趣は末代の愚者を摂めんがためなり。「散心」とは定心に対する語なり。「法華を誦す」とは、八巻・一巻・一字・一句・一偈・題目、一心一念随喜の者、五十展転等なり。「坐立行」とは四威儀を嫌わざるなり。「一心」とは定の一心にあらず、理の一心にあらず、散心の中の一心なり。「法華の文字を念ず」とは、この経は諸経の文字に似ず、一字を誦すといえども、八万宝蔵の文字を含み、一切諸仏の功徳を納むるなり。

天台大師、玄義の八に云わく「手に巻を執らざれども常にこの経を読み、口に言声無けれどもあまねく衆典を誦し、仏説法せざれどもつねに梵音を聞き、心に思惟せざれどもあまねく法界を照らす」已上。この文の意は、手に法華経一部八巻を執らざれども、この経を信ずる人は昼夜十二時の持経者なり。口に読経の声を出ださざれども、法華経を信ずる者は、日々、時々、念々に一切経を読む者

なり。

仏の入滅は既に二千余年を経たり。しかりといえども、法華経を信ずる者の許に仏の音声を留めて、時々、刻々、念々に、我死せざる由を聞かしむ。心に一念三千を観ぜざれども、あまねく十方法界を照らすものなり。これらの徳はひとえに法華経を行ずる者に備わるなり。この故に、法華経を信ずる者は、たとい臨終の時、心に仏を念ぜず、口に経を誦せず、道場に入らざれども、心無くして法界を照らし、音無くして一切経を誦し、巻軸を取らずして法華経八巻を拳る徳これ有り。これあに、権教の念仏者の臨終正念を期して十念の念仏を唱えんと欲する者に百千万倍勝るるの易行にあらずや。

故に、天台大師、文句の十に云わく「すべて諸教に勝るるが故に、随喜功徳品と言う」。妙楽大師は、法華経は諸経より浅機を取れども、人師この義を弁えざるが故に法華経の機を深く取ることを破して云わく「恐らくは、人謬って解せる者、初心の功徳の大なることを測らずして、功を上位に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、もって経力を顕す」已上。「もって経力を顕す」の釈の意趣は、法華経は観経等の権経に勝れたるが故に、行浅く功深し。浅機を摂むるが故なり。もし恵心先徳、法華経をもって念仏より難行と定めて、愚者・頑魯の者を摂めずと云わば、恐らくは逆路伽耶陀の罪を招かざらんや。また「恐らくは、人謬って解す」の内に入らざらんや。

総じて天台・妙楽の三大部の本末の意には、法華経は諸経に漏れたる愚者・悪人・女人・常没闡提等を摂めたもう。他師は、仏意を覚らざるが故に、法華経を諸経に同じ、あるいは地・住の機を取り、あるいは凡夫においても別時意趣の義を存す。これらの邪義を破して、人天・四悪をもって法華経の

機と定む。就類・相対をもって過去の善悪を収む。「人天に生ずる人、あに過去の五戒十善無からんや」等と定め了わんぬ。もし恵心この義に背かば、あに天台宗を知れる人ならんや。

しかるに、源空、深くこの義に迷うが故に、往生要集において僻見を起こし、自ら失ち他をも誤るものなり。たまたま宿善有って実教に入りながら、一切衆生を化して権教に還らしめ、あまつさえ実教を破せしむ。あに悪師にあらずや。彼の久遠下種、大通結縁の者の、五百・三千の塵点を経るがごときは、法華の大教を捨てて爾前の権小に遷るが故に、後には権経をも捨てて六道に回りぬ。不軽軽毀の衆は、千劫阿鼻地獄に堕つ。権師を信じ、実経を弘むる者に誹謗を作したるが故なり。しかるに、源空は、我が身ただ実経を捨てて権経に入るのみにあらず、人を勧めて実経を捨てて権経に入らしめ、また権人をして実経に入らしめず。あまつさえ実経の行者を罵るの罪、永劫にも浮かび難からんか。

問うて云わく、十住毘婆沙論は一代の通論なり。難易の二道の内に、何ぞ法華・真言・涅槃を入れざるや。

答えて云わく、一代の諸大乗経において、華厳経のごときは初頓・後分有り。初頓の華厳は二乗の成・不成を論ぜず。方等部の諸経には、一向に二乗・無性闡提の成仏を斥う。般若部の諸経もこれに同じ。総じて四十余年の諸大乗経の意は、法華・涅槃・大日経等のごとくには二乗・無性の成仏を許さず。これらをもってこれを撿うるに、爾前・法華の相違は水火のごとし。

滅後の論師たる竜樹・天親もまた、ともに千部の論師なり。造るところの論に通別の二論有り。通論においてもまた二つ有り。四十余年の通論と一代五十年の通論となり。その差別を分かつに、決定

性の二乗・無性闡提の成・不成をもって論の権実を定むるなり。しかるに、大論は、竜樹菩薩の造、羅什三蔵の訳なり。般若経に依る時は二乗作仏を許さず、法華経に依れば二乗作仏を許す。十住毘婆沙論もまた竜樹菩薩の造、羅什三蔵の訳なり。この論にもまた二乗作仏を許さず。これをもって知んぬ、法華已前の諸大乗経の意を申べたる論なることを。

問うて云わく、十住毘婆沙論のいずれの処に、二乗作仏を許さざる文、出でたるや。

答えて云わく、十住毘婆沙論〈竜樹菩薩造、羅什訳〉の第五に云わく「もし声聞地および辟支仏地に堕ちなば、これを菩薩の死と名づく。則ち一切の利を失う。もし地獄に堕つとも、かくのごとき畏れを生ぜじ。もし二乗地に堕ちなば、則ち大怖畏となす。地獄の中に堕つとも、畢竟して仏に至ることを得。もし二乗地に堕ちなば、畢竟して仏道を遮る」已上。この文、二乗作仏を許さず。あたかも浄名等の「仏法の中において、もって敗種のごとし」の文のごとし。

問うて云わく、大論は般若経に依って二乗作仏を許す法華経に依って二乗作仏を許す文、いかん。

答えて曰わく、大論〈竜樹菩薩造、羅什三蔵訳〉の一百に云わく「問うて曰わく、さらにいずれの法か甚深にして般若に勝れたるもの有って、般若をもって阿難に嘱累し、余経をもって菩薩に嘱累するや。答えて曰わく、般若波羅蜜は秘密の法にあらず。しかるに、法華等の諸経は阿羅漢の受決作仏を説く。ゆえに大菩薩能く受けて持用す。譬えば、大薬師の能く毒をもって薬となすがごとし」。また九十三に云わく「阿羅漢の成仏は、論義者の知るところにあらず。ただ仏のみ能く了したもう」已上。これらの文をもってこれを思うに、論師の権実はあたかも仏の権実のごとし。しかるを、権経に依る人師、

みだりに法華等をもって観経等の権説に同じ、法華・涅槃等の義を仮りて浄土三部経の徳と作し、決定性の二乗、無性闡提、常没等の往生を許す。権実雑乱の失脱れ難し。例せば、外典の儒者の内典を賊んで外典を荘るがごとし。謗法の失免れ難きか。

仏、自ら権実を分かちたもう。その詮を探るに、決定性の二乗、無性有情の成・不成これなり。しかるに、この義を弁えざる訳者、爾前の経々を訳する時、二乗の作仏、無性の成仏を許す。これによって、仏意を覚らざる人師も、また爾前の経において決定性・無性の成仏を明かすと見て、法華と爾前と同じとの思いを作し、あるいは爾前の経において決定・無性を嫌う文を見て、この義をもって了義経となし、法華・涅槃をもって不了義経となす。共に仏意を覚らず、権実二経に迷えり。これらの誤りを出ださば、ただ源空一人のみに限るにあらず。天竺の論師ならびに訳者より唐土の人師に至るまで、その義有り。いわゆる、地論師・摂論師の一代の別時意趣、善導・懐感の法華経の「一たび南無仏と称う」の別時意趣、これらは皆、権実を弁えざるが故に出来するところの誤りなり。論を造る菩薩、経を訳する訳者、三昧発得の人師、なおもってかくのごとし。いかにいわんや末代の凡師においてをや。

問うて云わく、汝、末学の身として、何ぞ論師ならびに訳者・人師を破するや。

答えて云わく、あえてこの難を致すことなかれ。摂論師ならびに善導等の釈は、権実二教を弁えずしてみだりに法華経をもって別時意趣と立つるが故に、天台・妙楽の釈と水火を作すあいだ、しばらく人師の相違を閣いて経論に付いて是非を撿うる時、権実の二教は仏説より出でたり。天親・竜樹重

ねてこれを定む。この義に順ずる人師をばしばらくこれを仰ぎ、この義に順ぜざる人師をばしばらくこれを用いず。あえて自義をもって是非を定むるにあらず、ただ相違を出だすばかりなり。

大文の第四に、謗法の者を対治すべき証文を出ださば、これに二つ有り。一には仏法をもって国王・大臣ならびに四衆に付嘱することを明かし、二には正しく謗法の人の王地に処るをば対治すべき証文を明かす。

第一に、仏法をもって国王・大臣ならびに四衆に付嘱することを明かさば、

仁王経に云わく「仏、波斯匿王に告げたまわく乃至この故に諸の国王に付嘱して、比丘・比丘尼・清信男・清信女に付嘱せず。何をもっての故に。王の威力無きが故に乃至この経の三宝をば、諸の国王・四部の弟子に付嘱す」已上。大集経二十八に云わく「もし国王有って、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、無量世において施・戒・慧を修すとも、ことごとく滅失して、その国三種の不祥の事を出ださん乃至命終して、大地獄に生ぜん」已上。

仁王経の文のごとくんば、仏法をもってまず国王に付嘱し、次に四衆に及ぼす。王位に居る君、国を治むる臣は、仏法をもって先となし国を治むべきなり。大集経の文のごとくんば、王臣等、仏道のために無量劫の間、頭目等の施を施し八万の戒行を持ち無量の仏法を学ぶといえども、国に流布するところの法の邪正を直さざれば、国中に大風・旱魃・大雨の三災起こって万民をして逃脱せしめ、王臣定めて三悪に堕ちん。

また双林最後の涅槃経の第三に云わく「今、正法をもって諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付嘱す乃至法を護らざる者をば、禿居士と名づく」。また云わく「善男子よ。正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修せず、応に刀剣・弓箭・鉾槊を持すべし」。また云わく「五戒を受けざれども、ために正法を護るを乃ち大乗と名づく。正法を護る者は、応当に刀剣器杖を執持すべし」云々。

四十余年の内にも梵網等の戒のごとくんば、国王・大臣の諸人等も一切の刀杖・弓箭・矛斧・闘戦の具を畜うることを得ず。もしこれを畜えば、定めて現身に国王の位・比丘比丘尼の位を失い、後生は三悪道の中に堕つべしと定め了わんぬ。しかるに、今の世は道俗を択ばず、弓箭・刀杖を帯せり。涅槃経の文無くんば、いかにしてかこれを救わん。また涅槃経の先後の文のごとくんば、弓箭・刀杖を帯して悪法の比丘を治し正法の比丘を守護せば、先世の四重五逆を滅して必ず無上道を証せんと定む。

また金光明経の第六に云わく「もし人有って、その国土において、この経有りといえども、いまだかつて流布せしめず、捨離の心を生じて聴聞せんことを楽わず、また供養・尊重・讃歎せず。四部の衆・持経の人を見て、また尊重乃至供養すること能わず。ついに、我らおよび余の眷属の無量の諸天をして、この甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流れを失い、威光および勢力有ることなからしむ。悪趣を増長して人天を損減し、生死の河に墜ちて、涅槃の路に乖かん。世尊よ。我ら四王ならびに諸の眷属および薬叉等、かくのごとき事を見て、その国土を捨てて擁護の心無け

ん。ただ我らのみこの王を捨棄するにあらず、また無量の国土を守護する諸大善神有らんも、みな捨て去らん。既に捨離し已われば、その国、当に種々の災禍有って国位を喪失すべし。一切の人衆、皆善心無く、ただ繋縛・殺害・瞋諍のみ有って、たがいに讒諂し、枉げて辜無きに及ぼさん。疫病流行し、彗星しばしば出で、両日並び現じ、薄蝕恒無く、黒白の二虹不祥の相を表し、星流れ地動き、井の内に声を発し、暴雨・悪風、時節に依らず、常に飢饉に遭って苗実成らず、多く他方の怨賊有って国内を侵掠し、人民は諸の苦悩を受け、土地に楽しむところの処有ることなけん」已上。

この経文を見るに、世間の安穏を祈るとも国に三災起こるは、悪法流布する故なりと知るべし。しかるに、当世は随分国土の安穏を祈るといえども、去ぬる正嘉元年には大地大いに動き、同二年に大雨・大風苗実を失えり。定めて国を喪ぼす悪法この国に有るかと勘うるなり。

選択集のある段に云わく「第一に読誦雑行とは、上の観経等の往生浄土の経を除いてより已外、大小・顕密の諸経において受持・読誦するを、ことごとく読誦雑行と名づく」と書き了わって、次に書いて云わく「次に二行の得失を判ずれば、法華・真言等の雑行は失、浄土三部経は得なり」。次下に善導和尚の往生礼讃の「十即十生、百即百生」「千中無一」の文を書き載せて云わく「私に云わく、この文を見るに、いよいよすべからく雑を捨てて専を修すべし。あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや。行者能くこれを思量せよ」已上。これらの文を見るに、世間の道俗あに諸経を信ずべけんや。

次下にまた書いて、法華経等の雑行と念仏の正行との勝劣難易を定めて云わく「一には勝劣の義、

二には難易の義なり。初めに勝劣の義とは、念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。次に難易の義とは、念仏は修し易く、諸行は修し難し」と。また次下に法華・真言等の失を定めて云わく「故に知んぬ、諸行は機にあらず、時を失う。念仏往生のみ機に当たり、時を得たり」。また次下に法華・真言等の雑行の門を閉じて云わく「随他の前にはしばらく定散の門を開くといえども、随自の後には還って定散の門を閉ず。一たび開いてより以後永く閉じざるは、ただこれ念仏の一門のみなり」已上。

最後の本懐に云わく「夫れ、速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣いて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正・雑の二行の中に、しばらく諸の雑行を抛って、選んで応に正行に帰すべし」已上。

門弟、この書を伝えて日本六十余州に充満するが故に、門人、世間の無智の者に語って云わく「上人は智慧第一の身としてこの書を造り、真実の義を定め、法華・真言の門を閉じて後に開く文無く、抛って後に還って取る文無し」等と立つるあいだ、世間の道俗一同に頭を傾け、その義を訪ぬる者には仮字をもって選択の意を宣べ、あるいは法然上人の物語を書くあいだ、法華・真言において難を付けて、あるいは去年の暦、祖父の履に譬え、あるいは法華経を読むは管絃より劣るとす。

かくのごとき悪書、国中に充満するが故に、法華・真言等国に在りといえども聴聞せんことを楽わず、たまたま行ずる人有りといえども尊重を生ぜず。一向念仏の者は、法華等の結縁を作すをば往生の障りと成ると云うが故に、捨離の意を生ず。この故に、諸天、妙法を聞くことを得ず、法味を嘗めざれば、威光勢力有ることなし。四天王ならびに眷属はこの国を捨て、日本国守護の善神も捨離し已

わんぬ。故に、正嘉元年に大地大いに震い、同二年に春の大雨苗を失い、夏の大旱魃草木を枯らし、秋の大風菓実を失い、飢渇たちまちに起こって万民をして逃脱せしむること、金光明経の文のごとし。あに選択集の失にあらずや。仏語虚しからざるが故に、悪法の流布有って、既に国に三災起これり。しかるに、この悪義を対治せずんば、仏の説くところの三悪を脱るべけんや。

しかるに、近年より、予、「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」の文を瞻るあいだ、雪山・常啼の心を起こし、命を大乗の流布に替え、強言を吐いて云わく「選択集を信じて後世を願わんの人は、無間地獄に堕つべし」。その時法然上人の門弟、選択集における上に出だすところの悪義を隠し、あるいは諸行往生と立て、あるいは選択集において法華・真言等を破らざる由を称し、あるいは在俗において選択集の邪義を知らしめざらんがために、妄語を構えて云わく「日蓮は、念仏を称うる人は三悪道に堕ちんと云う」。

問うて云わく、法然上人の門弟、諸行往生を立つるに失有りや否や。

答えて曰わく、法然上人の門弟と称して諸行往生を立つるは、逆路伽耶陀の者なり。当世もまた、諸行往生の義を立て、しかも内心には一向に念仏往生の義を存し、外には諸行不謗の由を聞かしむるなり。そもそも、この義を立つる者は、選択集の法華・真言等において失を付けし捨閉閣抛・群賊・邪見・悪見・邪雑人・千中無一等の語を見ざるや否や。

第二に、正しく謗法の人の王地に処るをば対治すべき証文を出ださば、

涅槃経第三に云わく「懈怠にして戒を破し正法を毀る者をば、王者・大臣・四部の衆は応当に苦治

すべし。善男子よ。この諸の国王および四部の衆は、当に罪有るべきや不や。不なり、世尊よ。善男子よ、この諸の国王および四部の衆は、なお罪有ることなし」。また第十二に云わく「我往昔を念うに、閻浮提において大国の王と作り、名づけて仙予と曰いき。大乗経典を愛念し敬重し、その心純善にして、麤悪・嫉妬・慳悋有ることなし乃至善男子よ。我はその時において心に大乗を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已わって即時にその命根を断ず。善男子よ。この因縁をもって、これより已来、地獄に堕ちず」已上。

問うて云わく、梵網経の文を見るに、比丘等の四衆を誹謗するは波羅夷罪なり。しかるに、源空が謗法の失を顕すは、あに阿鼻の業にあらずや。

答えて曰わく、涅槃経の文に云わく「迦葉菩薩、世尊に言さく『如来よ。何が故ぞ彼は当に阿鼻地獄に堕つべしと記するや』と。『善男子よ。善星比丘は多く眷属有り。皆、善星はこれ阿羅漢なり、これ道果を得つと謂えり。我、彼が悪邪の心を壊らんと欲するが故に、彼の善星は放逸をもっての故に地獄に堕ちんと記す』と」已上。この文に「放逸」とは、謗法の名なり。源空もまた、彼の善星のごとく、謗法をもっての故に無間に堕つ。所化の衆、この邪義を知らざるが故に、源空をもって一切智人と号し、あるいは勢至菩薩、あるいは善導の化身なりと云う。彼の悪邪の心を壊らんがための故に、謗法の根源を顕す。

梵網経の説は謗法の者の外の四衆なり。仏誡めて云わく「謗法の人を見てその失を顕さざれば、仏弟子にあらず」。故に涅槃経に云わく「我涅槃して後、その方面に随い、持戒の比丘有らん。威儀具

足し正法を護持し、法を壊る者を見て即ち能く駆遣し呵責し徴治せん。当に知るべし、この人は福を得んこと無量にして称計すべからず」。また云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」已上。

予、仏弟子の一分に入らんがために、この書を造り、謗法の失を顕し、世間に流布す。願わくは十方の仏陀、この書において力を副え、大悪法の流布を止め、一切衆生の謗法を救わしめたまえ。

大文の第五に、善知識ならびに真実の法には値い難きことを明かさば、これについて三つ有り。一には受け難き人身、値い難き仏法なることを明かし、二には受け難き人身を受け値い難き仏法に値うといえども、悪知識に値うが故に三悪道に堕つることを明かし、三には正しく末代凡夫のための善知識を明かす。

第一に、受け難き人身、値い難き仏法なることを明かさば、

涅槃経三十三に云わく「その時、世尊は、地の少しの土を取ってこれを爪上に置いて、迦葉に告げて言わく『この土多しや、十方世界の地の土多しや』。迦葉菩薩、仏に白して言さく『世尊よ。爪上の土は十方のあらゆる土に比せざるなり』と。『善男子よ。人有って、身を捨てて還って人身を得、三悪の身を捨てて人身を受くることを得、諸根完く具して中国に生まれ、正信を具足して能く道を修習し、道を修習し已わって能く正道を修し、正道を修し已わって能く解脱を得、解脱を得已わって能

く涅槃に入るは爪上の土のごとく、人身を捨て已わって三悪の身を得、三悪の身を捨てて三悪の身を得、諸根具せずして辺地に生じ、邪倒の見を信じ、邪道を修習し、解脱・常楽の涅槃を得ざるは十方界のあらゆる地の土のごとし』と」〈已上、経文〉。

この文は、多く法門を集めて一具となせり。人身を捨てて還って人身を受くるは爪上の土のごとく、人身を捨てて三悪道に堕つるは十方の土のごとし。三悪の身を捨てて人身を受くるは爪上の土のごとく、三悪の身を捨てて還って三悪の身を得るは十方の土のごとし。人身を受けて六根欠けざるは爪上の土のごとし。人身を受けて六根欠けざれども辺地に生ずるは十方の土のごとく、中国に生ずるは爪上の土のごとし。中国に生ずるは十方の土のごとく、仏法に値うは爪上の土のごとし。

また云わく「一闡提と作らず、善根を断ぜず、かくのごとき等の涅槃経典を信ずるは、爪上の土のごとし乃至一闡提と作って、諸の善根を断じ、この経を信ぜざる者は、十方界のあらゆる地の土のごとし」〈已上、経文〉。この文のごとくんば、法華・涅槃を信ずるは爪上の土のごとく、法華・涅槃を信ずるは爪上の土のごとし。この経文を見て、いよいよ感涙押さえ難し。

今、日本国の諸人を見聞するに、多分は権教を行ず。たとい身・口には実教を行ずといえども、心にはまた権教を存す。故に、天台大師、摩訶止観の五に云わく「その癡鈍なる者は、毒気深く入って本心を失うが故に、既にそれ信ぜざれば、則ち手に入らず乃至大罪聚の人なり乃至たとい世を厭う者も下劣の乗を翫び、枝葉に攀附し、狗の作務に狎れ、獼猴を敬って帝釈となし、瓦礫を崇めてこれ

明珠なりとす。この黒闇の人、あに道を論ずべけんや」已上。源空ならびに所化の衆、深く三毒の酒に酔って大通結縁の本心を失う。法華・涅槃において不信の思いを作し、一闡提と作り、観経等の下劣の乗に依って方便・称名等の瓦礫を翫び、法然房の獼猴を敬って智慧第一の帝釈と思い、法華・涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を褊するは、権実二教を弁えざるが故なり。

故に、弘決の第一に云わく「この円頓を聞いて崇重せざるは、良に近代に大乗を習う者の雑濫に由るが故なり」。大乗において権実二教を弁えざるを「雑濫」と云うなり。故に、末代において法華経を信ずる者は爪上の土のごとく、法華経を信ぜずして権教に堕落する者は十方の微塵のごとし。故に、妙楽歎いて云わく「像末は情澆く信心寡薄にして、円頓の教法蔵に溢れ函に盈つれども、しばらくも思惟せず、便ち瞑目に至る。いたずらに生じ、いたずらに死す。一に何ぞ痛ましきや」已上。この釈は、ひとえに妙楽大師、権者たるのあいだ、遠く日本国の当代を鑑みて記し置くところの未来記なり。

問うて云わく、法然上人の門弟の内にも、一切経蔵を安置し法華経を行ずる者有り。何ぞ皆謗法の者と称せんや。

答えて曰わく、一切経を開き見て法華経を読むは、難行道の由を称し、選択集の悪義を扶けんがためなり。経論を開くに付いていよいよ謗法を増すこと、例せば、善星が十二部経、提婆達多が六万蔵のごとし。智者の由を称するは、自身を重くし悪法を扶けんがためなり。

第二に、受け難き人身を受け値い難き仏法に値うといえども、悪知識に値うが故に三悪道に堕つることを明かさば、

仏蔵経に云わく「大荘厳仏の滅後に五比丘あり。一人は正道を知って多億の人を度し、四人は邪見に住す。この四人、命終の後、阿鼻地獄に堕つ。仰ぎ臥し、伏しに臥し、左脇に臥し、右脇に臥すこと、各九百万億歳なり乃至もしは在家・出家のこの人に親近せしもの、ならびに諸の檀越、およそ六百四万億の人あり。この四師とともに生じともに死して、大地獄に在って諸の焼煮を受く。大劫もし尽けば、この四悪人および六百四万億の人、この阿鼻地獄より他方の大地獄の中に転生す」已上。

涅槃経三十三に云わく「その時に城中に一りの尼乾有り、名づけて苦得と曰う乃至善星、苦得に問う。答えて曰わく『我は食吐鬼の身を得たり。善星よ。諦らかに聴け』乃至その時、善星は即ち我が所に還ってかくのごとき言を作す。『世尊よ。苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜり』乃至その時、如来は即ち迦葉とともに善星の所に往きたもう。善星比丘は遥かに我が来るを見、見已わって即ち悪邪の心を生ず。悪心をもっての故に、生身にして陥ち入って阿鼻地獄に堕つ」已上。

善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり。仏に随い奉り、出家して十二部経を受け、欲界の煩悩を壊り、四禅定を獲得せり。しかりといえども、悪知識たる苦得外道に値い、仏法の正義を信ぜざるによって、出家の受戒・十二部経の功徳を失い、生身に阿鼻地獄に堕つ。苦岸等の四比丘に親近せし六百四万億の人は、四師とともに十方の大阿鼻地獄を経。今の世の道俗は、選択集を貴ぶが故に、源空の影像を拝して一切経は難行なりとの邪義を読む。例せば、尼乾の所化の弟子、尼乾の遺骨を礼して三悪道に堕ちしがごとし。願わくは、今の世の道俗、選択集の邪正を知って後に供養・恭敬を致せ。しからずんば、定めて後悔有らん。

故に、涅槃経に云わく「菩薩摩訶薩は、悪象等においては心に怖畏無く、悪知識においては怖畏の心を生ず。何をもっての故に。この悪象等はただ能く身を壊るのみにして、心を壊ること能わず、悪知識は二つともに壊るが故に。この悪象等はただ一身を壊るのみにして、悪知識は無量の善身、無量の善心を壊る。この悪象等はただ能く不浄の臭き身を破壊するのみにして、悪知識は能く浄身および浄心を壊る。この悪象等は能く肉身を壊り、悪知識は法身を壊る。悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至る。この悪象等はただ身の怨となるのみにして、悪知識は善法の怨とならん。この故に、菩薩は、常に当に諸の悪知識を遠離すべし」已上。

請い願わくは、今の世の道俗、たといこの書を邪義なりと思うといえども、しばらくこの念を抛って十住毘婆沙論を開き、その難行の内に法華経の入・不入を撿え、選択集の「準之思之」の四字を案じて後に、是非を致せ。謬って悪知識を信じ、邪法を習い、この生を空しゅうすることなかれ。

第三に、正しく末代の凡夫のための善知識を明かさば、

問うて云わく、善財童子は五十余の知識に値いき。その中に普賢・文殊・観音・弥勒等有り。常啼・班足・妙荘厳・阿闍世等は、曇無竭・普明・耆婆・二子・夫人に値い奉って生死を離れたり。これらは皆、大聖なり。仏、世を去っての後、かくのごときの師を得ること難しとなす。滅後においてまた竜樹・天親も去りぬ。南岳・天台にも値わず。いかにしてか生死を離るべきや。

答えて曰わく、末代において真実の善知識有り。いわゆる法華・涅槃これなり。

問うて云わく、人をもって善知識となすは常の習いなり。法をもって知識となす証有りや。

答えて云わく、人をもって知識となすは常の習いなり。しかりといえども、末代において真の知識無ければ、法をもって知識となすに多くの証有り。摩訶止観に云わく「あるいは知識に従い、あるいは経巻に従い、上に説くところの一実の菩提を聞く」已上。この文の意は、経巻をもって善知識となす。

法華経に云わく「もし法華経の閻浮提に行わるるを受持することあらば、応にこの念を作すべし、『皆これ普賢の威神の力なり』と」已上。この文の意は、末代の凡夫、法華経を信ずるは普賢の善知識の力なり。

また云わく「もしこの法華経を受持・読誦し、正憶念し、修習し書写することあらば、当に知るべし、この人は則ち釈迦牟尼仏を見る。仏の口よりこの経典を聞くがごとし。当に知るべし、この人は釈迦牟尼仏を供養す」已上。この文を見るに、法華経は釈迦牟尼仏なり。法華経を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り、この経を信ずる者の前には滅後たりといえども仏の在世なり。

また云わく「もし我成仏して、滅度するの後、十方の国土において、法華経を説く処有らば、我が塔廟はこの経を聴かんがための故に、その前に涌現して、証明をなさん」已上。この文の意は、我ら法華の名号を唱うれば、多宝如来は本願の故に必ず来りたもう。

また云わく「諸仏の十方の世界に在して説法したもうを、ことごとく一処に還し集めたもう」已上。釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等は、我らが善知識なり。もしこの義に依らば、我らはまた宿善、善財・常啼・班足等にも勝れたり。彼は権経の知識に値い、我らは実経の知識に値えばなり。彼は権

経の菩薩に値い、我らは実経の仏菩薩に値い奉ればなり。

涅槃経に云わく「法に依って人に依らざれ。智に依って識に依らざれ」已上。「法に依って」と云うは、法華・涅槃の常住の法なり。「人に依らざれ」とは、法華・涅槃に依らざる人なり。たとい仏菩薩たりといえども、法華・涅槃に依らざる仏菩薩は善知識にあらず。いわんや、法華・涅槃に依らざる論師・訳者・人師においてをや。「智に依って」とは、仏に依る。「識に依らざれ」とは、等覚より已下なり。

今の世の世間の道俗、源空の謗法の失を隠さんがために、徳を天下に挙げて権化なりと称す。依用すべからず。外道は、五通を得て能く山を傾け海を竭くすとも、神通無き阿含経の凡夫に及ばず。羅漢を得、六通を現ずる二乗は、華厳・方等・般若の凡夫に及ばず。華厳・方等・般若の等覚の菩薩も、法華経の名字・観行の凡夫に及ばず。たとい神通・智慧有りといえども、権教の善知識をば用いるべからず。

我ら常没の一闡提の凡夫の法華経を信ぜんと欲するは、仏性を顕さんがための先表なり。故に、妙楽大師云わく「内薫にあらざるよりは、何ぞ能く悟りを生ぜん。故に知んぬ、悟りを生ずること、力は真如に在り。故に、冥薫をもって外護となすなり」已上。法華経より外の四十余年の諸経には、十界互具無し。十界互具を説かざれば、内心の仏界を知らず。内心の仏界を知らざれば、外の諸仏も顕れず。故に、四十余年の権行の者は仏を見ず。たとい仏を見るといえども、他仏を見るなり。二乗は自仏を見ざるが故に成仏無し。爾前の菩薩もまた、自身の十界互具を見ざれば、二乗界の成仏を見ず。

故に、衆生無辺誓願度の願も満足せず。故に、菩薩も仏を見ず。凡夫もまた、十界互具を知らざるが故に、自身の仏界も顕れず。故に、阿弥陀如来の来迎もなく、諸仏如来の加護もなし。譬えば、盲人の自身の影を見ざるがごとし。

今、法華経に至って九界の仏界を開くが故に、四十余年の菩薩・二乗・六凡、始めて自身の仏界を見る。この時、この人の前に始めて仏・菩薩・二乗立ちたもう。この時に二乗・菩薩始めて成仏し、凡夫も始めて往生す。この故に、在世・滅後の一切衆生の誠の善知識は、法華経これなり。常途の天台宗の学者は、爾前において当分の得道を許せども、自義においてはなお当分の得道を許さず。しかりといえども、この書においてはその義を尽くさず。略してこれを記せば、追ってこれを記せん。

大文の第六に、法華・涅槃に依る行者の用心を明かさば、一代教門の勝劣・浅深・難易等においては、先の段に既にこれを出だす。この一段においては、一向に後世を念う末代の常没の五逆・謗法・一闡提等の愚人のためにこれを注す。略して三つ有り。一には在家の諸人、正法を護持するをもって生死を離れ、悪法を持つによって三悪道に堕つべきことを明かし、二にはただ法華経の名字ばかりを唱えて三悪道を離るべきことを明かし、三には涅槃経は法華経のための流通と成ることを明かす。

第一に、在家の諸人、正法を護持するをもって生死を離れ、悪法を持つによって三悪道に堕つべきことを明かさば、

涅槃経第三に云わく「仏、迦葉に告げたまわく『能く正法を護持する因縁をもっての故に、この金

剛身を成就することを得たり』と」。また云わく「時に国王有り。名づけて有徳と曰う乃至護法のための故に乃至この破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す乃至王、この時において法を聞くことを得已わって、心大いに歓喜し、ついで即ち命終して阿閦仏の国に生ず」已上。この文のごとくんば、在家の諸人、別の智行無しといえども、謗法の者を対治する功徳によって生死を離るべきなり。

問うて云わく、在家の諸人、仏法を護持すべき様、いかん。

答えて曰わく、涅槃経に云わく「もし衆生有って財物に貪著せば、我当に財を施し、しかして後、この大涅槃経をもってこれを勧め読ましむべし乃至先に愛語をもってその意に随い、しかして後、漸く当にこの大乗大涅槃経をもってこれを勧め読ましむべし。もし凡庶の者ならば、当に威勢をもってこれに逼って読ましむべし。もし憍慢なる者ならば、我当にそれがために僕使と作り、その意に随順し、それをして歓喜せしむべし。しかして後、また当に大涅槃をもってこれを教導すべし。もし大乗経を誹謗する者有らば、当に勢力をもってこれを摧いて伏せしめ、既に摧伏し已わって、しかして後、勧めて大涅槃を読ましむべし。もし大乗経を愛楽する者有らば、我躬ら当に往って恭敬・供養・尊重・讃歎すべし」已上。

問うて云わく、今の世の道俗、ひとえに選択集に執して、法華・涅槃においては自身不相応の念を作すのあいだ、護惜建立の心無く、たまたま邪義の由を称する人有らば、念仏誹謗の者と称して悪名を天下に雨らす。これらはいかん。

答えて曰わく、自答を存すべきにあらず。仏自らこのことを記して云わく、仁王経に云わく「大王

よ。我滅度して後、未来世の中の四部の弟子、諸の小国の王・太子・王子乃ちこれ住持して三宝を護る者、転たさらに三宝を滅し破せんこと、師子身中の虫の自ら師子を食むがごとし。外道にはあらざるなり。多く我が仏法を壊り、大罪過を得ん。正教衰薄し、民に正行無く、漸く悪をなすをもって、その寿日に減じて百歳に至らん。人、仏教を壊らば、また孝子無く、六親不和にして天神も祐けず、疾疫・悪鬼、日に来って侵害し、災怪首尾し、連禍縦横し、死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」。また次下に云わく「大王よ。未来世の中の諸の小国の王、四部の弟子、自らこの罪を作るは、破国の因縁なり乃至諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し乃至その時に当たって正法将に滅せんとすることを久しからず」已上。

余、選択集を見るに、あえてこの文の未来記に違わず。選択集は法華・真言等の正法を定めて雑行・難行と云い、末代の我らにおいては時機相応せず、これを行ずる者は千中無一にして、仏還って法華等を説くといえども、法華・真言の諸行の門を閉じて念仏の一門を開く。末代においてこれを行ずる者を「群賊」等と定め、当世の一切の道俗をしてこの書を信じ、この義をもって如来の金言と思わしむ。この故に、世間の道俗に仏法建立の意無く、法華・真言の正法の法水たちまちに竭き、天人減少して三悪日に増長す。ひとえに、選択集の悪法の催すところ、起こすところの邪見なり。

この経文に仏記して「我滅度して後」と云えるは、正法の末八十年、像法の末八百年、末法の末八千年なり。選択集の出ずる時は、像法の末・末法の始めなれば、八百年の内なり。仁王経に記すると

ころの時節に当たれり。「諸の小国の王」とは、日本国の王なり。中・下品の善は粟散王これなり。「師子身中の虫のごとし」とは、仏弟子の源空これなり。「諸の悪比丘」とは、所化の衆これなり。「破仏法の因縁、破国の因縁を説く」とは、上に挙ぐるところの選択集の語これなり。「その王別えずしてこの語を信聴す」とは、今の世の道俗、邪義を弁えずしてみだりにこれを信ずるなり。請い願わくは、道俗、法の邪正を分別して、その後正法に付いて後世を願え。今度人身を失い、三悪道に堕ちて後に後悔すとも、何ぞ及ばん。

第二に、ただ法華の題目ばかりを唱えて三悪道を離るべきことを明かさば、

法華経の第五に云わく「文殊師利よ。この法華経は無量の国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」。第八に云わく「汝等はただ能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら、福は量るべからず」。提婆品に云わく「妙法華経の提婆達多品を聞いて、浄心に信敬して、疑惑を生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生に堕ちず」。大般涅槃経名字功徳品に云わく「もし善男子・善女人有って、この経の名を聞いて悪趣に生ぜば、この処有ることなけん」〈涅槃経は法華経の流通なるが故に、これを引く〉。

問うて云わく、ただ法華経の題目を聞くといえども、解心無くんば、いかにして三悪趣を脱れんや。

答えて云わく、法華経流布の国に生まれて、この経の題名を聞き信を生ずるは、宿善の深厚なるによれり。たとい今生は悪人・無智なりといえども、必ず過去の宿善有るが故に、この経の名を聞いて信を致す者なり。故に悪道に堕ちず。

問うて云わく、過去の宿善とはいかん。

答えて曰わく、法華経の第二に云わく「もしこの経法を信受することあらば、この人はすでにかつて、過去の仏を見たてまつりて、恭敬・供養し、またこの法を聞けり」。法師品に云わく「また如来滅度するの後に、もし人有って妙法華経の乃至一偈一句を聞いて、一念も随喜せば乃至当に知るべし、この諸人等は、すでにかつて十万億の仏を供養せしなり」。流通たる涅槃経に云わく「もし衆生有って、熙連河沙等の諸仏において菩提心を発さば、乃ち能くこの悪世において、かくのごとき経典を受持して誹謗を生ぜず。善男子よ。もし能く一恒河沙等の諸仏世尊において菩提心を発すことあらば、しかる後に乃ち能く悪世の中において、この法を謗ぜず、この典を愛敬せん」〈已上、経文〉。

これらの文のごとくんば、たとい先に解心無くとも、この法華経を聞いて謗ぜざるは、大善の所生なり。夫れ、三悪の生を受くるは大地の微塵より多く、人間の生を受くるは爪上の土より少なし。乃至、四十余年の諸経に値うは大地の微塵よりも多く、法華・涅槃に値うは爪上の土より少なし。上に挙ぐるところの涅槃経の三十三の文を見るべし。たとい一字一句なりといえども、この経を信ずるは宿縁多幸なり。

問うて云わく、たとい法華経を信ずといえども悪縁に随わば、何ぞ三悪道に堕ちざらんや。

答えて曰わく、解心無き者、権教の悪知識に遇って実教を退せば、悪師を信ずる失によって、必ず三悪道に堕つべきなり。彼の不軽軽毀の衆は権人なり。大通結縁の者の三千塵点を歴しは、法華経を退して権教に遷りしが故なり。法華経を信ずるの輩は、法華経の信を捨てて権人に随わんより外は、世間の悪業においては法華の功徳に及ばざるが故に、三悪道に堕つべからざるなり。

問うて云わく、日本国は法華・涅槃有縁の地なりや否や。

答えて云わく、法華経第八に云わく「如来滅して後において、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめん」。七の巻に云わく「閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」。涅槃経第九に云わく「この大乗経典大涅槃経もまたかくのごとし。南方の諸の菩薩のための故に、当に広く流布すべし」〈已上、経文〉。三千世界広しといえども、仏自ら法華・涅槃をもって南方を流布の処と定む。南方の諸国の中においては、日本国は殊に法華経の流布すべき処なり。

問うて云わく、その証いかん。

答えて曰わく、肇公の法華翻経後記に云わく、羅什三蔵、須利耶蘇摩三蔵に値い奉って法華経を授かる時の語に云わく「仏日西山に隠れ、遺耀東北を照らす。この典、東北の諸国に有縁なり。汝、慎んで伝弘せよ」已上。「東北」とは、日本なり。西南の天竺より東北は、日本を指すなり。故に、恵心、一乗要決に云わく「日本一州、円機純一なり。朝野・遠近同じく一乗に帰し、緇素・貴賤ごとく成仏を期す」已上。願わくは、日本国の今の世の道俗、選択集の久習を捨てて法華・涅槃の現文に依り、肇公・恵心の日本の記を恃んで法華修行の安心を企てよ。

問うて云わく、法華経修行の者、いずれの浄土を期すべきや。

答えて曰わく、法華経二十八品の肝心たる寿量品に云わく「我は常にこの娑婆世界に在り」。また云わく「我は常にここに住す」。また云わく「我がこの土は安穏なり」文。この文のごとくんば、本地久成の円仏はこの世界に在せり。この土を捨てていずれの土を願うべきや。故に、法華経修行の者

の住するところの処を浄土と思うべし。何ぞ煩わしく他処を求めんや。故に、神力品に云わく「もし経巻の住するところの処ならば、もしは園中においても、もしは林中においても、もしは樹の下においても、もしは僧坊においても、もしは白衣の舎にても、もしは殿堂に在っても、もしは山谷曠野にても乃至当に知るべし、この処は即ちこれ道場なり」。涅槃経に云わく「善男子よ。この大涅槃微妙の経典の流布するところの処は、当に知るべし、その地は即ちこれ金剛なり。この中の諸人もまた金剛のごとし」已上。法華・涅槃を信ずる行者は、余処を求むべきにあらず。この経を信ずる人の住するところの処は、即ち浄土なり。

問うて云わく、華厳・方等・般若・阿含・観経等の諸経を見るに、兜率・西方・十方の浄土を勧む。その上、法華経の文を見るに、また兜率・西方・十方の浄土を勧む。何ぞ、これらの文に違して、ただこの瓦礫・荊棘の穢土を勧むるや。

答えて曰わく、爾前の浄土は久遠実成の釈迦如来の現すところの浄土にして、実には皆穢土なり。法華経はまた方便・寿量の二品なり。寿量品に至って実の浄土を定むる時、この土は即ち浄土と定め了わんぬ。ただし、兜率・安養・十方の難に至っては、爾前の名目を改めずして、この土において兜率・安養等の名を付く。例せば、この経に三乗の名有りといえども、三乗有らざるがごとし。「さらに観経等を指すを須いざるなり」の釈の意これなり。法華経に結縁無き衆生の当世に西方浄土を願うは、瓦礫の土を楽うこれなり。法華経を信ぜざる衆生は、誠に分添の浄土無きものなり。

第三に、涅槃経は法華経流通のためにこれを説きたもうことを明かさば、

問うて云わく、光宅の法雲法師ならびに道場の慧観等の碩徳は、法華経をもって第四時の経と定め、無常の熟蘇味と立つ。天台智者大師は法華・涅槃は同味なりと立つといえども、また捃拾の義を存す。二師共に権化なり、互いに徳行を具せり。いずれを正として我らが迷心を晴らすべきや。

答えて曰わく、たとい論師・訳者たりといえども、仏の教えに違して、権実二教を判ぜずんば、しばらく疑いを加うべし。いかにいわんや、唐土の人師たる天台・南岳・光宅・慧観・智儼・嘉祥・善導等の釈においてをや。たとい末代の学者たりといえども、「法に依って人に依らざれ」の義を存して、本経・本論に違わずんば、信用を加うべし。

問うて云わく、涅槃経の第十四巻を開きたるに、五十年の諸大乗経を挙げて前四味に譬え、涅槃経をもって醍醐味に譬う。諸大乗経は涅槃経より劣ること百千万倍なりと定め了わんぬ。その上、迦葉童子の領解に云わく「我、今日より始めて正見を得たり。これよりの前は我らことごとく邪見の人と名づく」と。この文の意は、涅槃経より已前の法華等の一切の衆典を皆「邪見」と云うなり。当に知るべし、法華経は邪見の経にして、いまだ正見の仏性を明らめざるなり。故に、天親菩薩の涅槃論に諸経と涅槃との勝劣を定むる時、法華経をもって般若経に同じて、同じく第四時に摂めたり。あに正見の涅槃経をもって邪見の法華経の流通とせんや、いかん。

答えて曰わく、法華経の現文を見るに、仏の本懐残すことなし。方便品に云わく「今正しくこれその時なり」。寿量品に云わく「毎に自らこの念を作す。何をもってか衆生をして、無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得しめんと」。神力品に云わく「要をもってこれを言わば、如来の一切

の所有の法乃至皆この経において宣示顕説す」已上。これらの現文は、釈迦如来の内証は皆この経に尽くしたもう。その上、多宝ならびに十方の諸仏、来集の庭において、釈迦如来の已今当の語を証し、法華経のごとき経無しと定め了わんぬ。しかるに、多宝・諸仏、本土に還って後に、ただ釈迦一仏のみ異変を存して、還って涅槃経を説いて法華経を卑しめば、誰人かこれを信ぜん。深くこの義を存せよ。したがって涅槃経の第九を見るに、法華経を流通して説いて云わく「この経、世に出ずるは、彼の菓実の利益するところ多く一切を安楽ならしむるがごとく、能く衆生をして仏性を見せしむ。法華の中の八千の声聞の記別を授かることを得て大菓実を成ずるがごとし。秋収冬蔵して、さらに所作なきがごとし」。

この文のごとくんば、法華経もし邪見ならば、涅槃経もあに邪見にあらずや。法華経は大収、涅槃経は捃拾なりと見え了わんぬ。涅槃経は自ら法華経より劣るの由を称す。法華経の当説の文、あえて相違なし。ただし、迦葉の領解ならびに第十四の文は、法華経を下す文にあらず。迦葉、自身ならびに所化の衆、今始めて法華経に説くところの常住仏性・久遠実成を覚るが故に、我が身を指して、これより已前は邪見なりと云う。法華経より已前の無量義経に嫌うところの諸経を、涅槃経に重ねてこれを挙げて嫌うなり。法華経を嫌うにはあらざるなり。また涅槃論に至っては、これらの論は書き付くるがごとく、天親菩薩の造、菩提流支の訳なり。法華論もまた、天親菩薩の造、菩提流支の訳なり。信用に及ばず。経文に違することこれ多し。涅槃論もまた本経に違す。当に知るべし、訳者の誤りなり。

問うて云わく、先の教えに漏れたる者を、後の教えにこれを承け取って得道せしむるを流通と称せば、阿含経は華厳経の流通と成るべしや。乃至、法華経は前四味の流通と成るべしや、いかん。

答えて曰わく、前四味の諸経は菩薩・人天等の得道を許すといえども、決定性の二乗、無性闡提の成仏を許さず。その上、仏意を探って実をもってこれを撿うるに、また菩薩・人天等の得道もなし。十界互具を説かざるが故に。久遠実成なきが故に。

問うて云わく、証文いかん。

答えて云わく、法華経方便品に云わく「もし小乗をもって乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可となす」已上。この文の意は、今選択集の邪義を破せんがために余事をもって詮となさざるが故に、爾前得道の有無の実義はこれを出ださず。追ってこれを撿えん。ただし、四十余年の諸経は実には凡夫の得道無きが故に、法華経は爾前の流通とはならず。法華経において十界互具・久遠実成を顕し了わんぬ。故に涅槃経は法華経のために流通と成るなり。

大文の第七に、問いに随って答えば、

もし末代の愚人、上の六門によって万が一も法華経を信ぜば、権宗の諸人、あるいは自惑により、あるいは偏執によって、法華経の行者を破せんがために、多く四十余年ならびに涅槃等の諸経を引いてこれを難ぜん。しかるに、権教を信ずる人はこれ多く、あるいは威勢により、あるいは世間の資縁により、人の意に随って世路を亘らんがために、あるいは権教には学者多く、実教には智者少なし、

是非について万が一も実教を信ずる者あるべからず。この故に、この一段を撰んで権人の邪難を防がん。

問うて云わく、諸宗の学者難じて云わく「華厳経は報身如来の説くところなり。七処八会、皆、頓極・頓証の法門なり。法華経は応身如来の説くところなり。教主既に優劣有れば、法門において何ぞ浅深無からん。したがって対告衆も法慧・功徳林・金剛幢等なり。永く二乗を雑えず。法華経は舎利弗等をもって対告衆となす」〈華厳宗の難〉。

法相宗のごときは解深密経等をもって依憑となし、難を加えて云わく「解深密経は文殊・観音等をもって対告衆となす。勝義生菩薩の領解には、一代を有・空・中と詮ず。その中の中とは、華厳・法華・涅槃・深密等なり。法華経の信解品の五時の領解は、四大声聞なり。菩薩と声聞との勝劣は天地なり」。

浄土宗のごときは道理を立てて云わく「我らは法華等の諸経を誹謗するにあらず。彼らの諸経は正には大人のため、傍には凡夫のためなり。断惑証理、理深の教えにして、末代の我らこれを行ずるに、千人の中に一人も彼の機に当たらず。在家の諸人、多分は文字を見ず。また華厳・法相等の名を聞かず。いわんや、その義を知らんや。浄土宗の意は、我ら凡夫はただ口に任せて六字の名号を称うれば、現在に阿弥陀如来は二十五の菩薩等を遣わし、身に影の随うがごとく百重千重に行者を囲繞してこれを守りたもう。故に、現世には七難は即ち滅し七福は即ち生じ、乃至、臨終の時は必ず来迎あって、観音の蓮台に乗じ、須臾の間に浄土に至り、業に随って蓮華開け、法華経を聞いて実相を覚る。

何ぞ煩わしく穢土において余行を行じて何の詮か有る。ただ万事を抛って一向に名号を称えよ」云々。

禅宗等の人云わく「一代聖教は月を指す指なり。天地・日月等も汝等が妄心より出でたり。十方の浄土も執心の影像なり。釈迦・十方の仏陀は汝が覚心の変ずるところなり。文字に執する者は株を守る愚人なり。我が達磨大師は文字を立てず、方便を仮らず。一代聖教の外に、仏、迦葉に印してこの法を伝う。法華経等はいまだ真実を宣べず」已上。

これらの諸宗の難、一にあらず。いかんぞ法華経の信心を壊らざるべきや。

答えて云わく、法華経の行者は心中に「四十余年」「已今当」「皆これ真実なり」「法に依って人に依らざれ」等の文を存し、しかも外に語にこれを出ださず、難に随ってこれを問うべし。「そもそも立つるところの宗義はいずれの経に依るや」と。彼、経を引かば、引くに随ってまたこれを尋ねよ。「一代五十年の間の説の中に法華経より先か、後か、同時なるか、また先後不定なるか」と。もし「先」と答えば、「いまだ真実を顕さず」の文をもってこれを責めよ。「同時」と答えば、「今説」の文をもってこれを責めよ。「後」と答えば、「当説」の文をもってこれを責めよ。「同時」と答えば、「今説」の文をもってこれを責めよ。「不定」と答えば、「不定の経は大部の経にあらず。一時一会の説にして、また物の数にあらず。その上、不定といえども三説を出でず」と。

たとい百千万の義を立つといえども、「四十余年」等の文を載せて虚妄と称せざるより外は用いるべからず。仏の遺言に「不了義経に依らざれ」と云うが故なり。また智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立てて難ずといえども、法華・涅槃に違する人師においては用いるべからず。「法に依って

人に依らざれ」の金言を仰ぐが故なり。

また法華経を信ぜん愚者のために、二種の信心を立つ。一には仏に就いて信を立て、二には経に就いて信を立つ。

仏に就いて信を立つとは、権宗の学者来り難じて云わん。「善導和尚は三昧発得の人師にして、本地弥陀の化身なり。慈恩大師は十一面観音の化身にして、また筆端より舎利を雨らす。これらの諸人は皆彼々の経々に依って皆証有り。何ぞ、汝、彼の経に依らず、また彼の師の義を用いざるや」と。答えて曰わく、汝聞け。一切の権宗の大師・先徳ならびに舎利弗・目連、普賢・文殊・観音、乃至、阿弥陀・薬師・釈迦如来、我らの前に集まって説いて「法華経は汝等が機に叶わず。念仏等の権経の行を修して往生を遂げ、後に法華経を覚れ」と云わん。かくのごとき説を聞くといえども、あえて用いるべからず。

その故は、四十余年の諸の経には法華経の名字を呼ばず。いずれの処にか機の堪・不堪を論ぜん。法華経においては釈迦・多宝・十方の諸仏、一処に集まって撰定して云わく「法をして久しく住せしむ」「如来滅して後において、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめん」。この外に今仏出来して法華経を末代不相応と定むれば、既に法華経に違す。知んぬ、この仏は涅槃経に出だすところの滅後の魔仏なり。これを信用すべからず。その已下の菩薩・声聞・比丘等は、また言論するに及ばず。これらは不審なし。涅槃経に記するところの滅後の魔の変ずるところの菩薩等なり。その故は、法華経の座は三千大千世界の外、四百万億阿僧祇の世界なり。その中に充満せる菩薩・二乗・人

天・八部等、皆、如来の告勅を蒙り、各々の在るところの国土に法華経を弘むべき由、これを願じぬ。善導等もし権者ならば、何ぞ竜樹・天親等のごとく権教を弘めて後に法華経を弘めざるや、法華経の告勅の数に入らざるや、何ぞ仏のごとく権教を弘めて後に法華経を弘めざるや。もしこの義なくんば、たとい仏たりといえども、これを信ずべからず。今は法華経の中の仏を信ず。故に、仏に就いて信を立つと云うなり。

問うて云わく、釈迦如来の説くところを他仏これを証するを実の説と称せば、何ぞ阿弥陀経を信ぜざるや。

答えて云わく、阿弥陀経においては法華経のごとき証明無きが故に、これを信ぜず。

問うて云わく、阿弥陀経を見るに、釈迦如来の説くところの一日七日の念仏を、六方の諸仏、舌を出だし三千を覆ってこれを証明せり。何ぞ証明無しと云うや。

答えて云わく、阿弥陀経においては全く法華経のごとき証明無し。ただ釈迦一仏、舎利弗に向かって説いて言わく「我一人阿弥陀経を説くのみにあらず、六方の諸仏、舌を出だし三千を覆って、阿弥陀経を説く」と云うといえども、これらは釈迦一仏の説なり。あえて諸仏来りたまわず。これらの権文は、四十余年の間は教主も権仏の始覚の仏なり。仏権なるが故に、所説もまた権なり。故に四十余年の権仏の説はこれを信ずべからず。今の法華・涅槃は、久遠実成の円仏の実説なり。十界互具の実言なり。また多宝・十方の諸仏来ってこれを証明したもう。故にこれを信ずべし。阿弥陀経の説は、無量義経の「いまだ真実を顕さず」の語に壊れ了わんぬ。全く釈迦一仏の語にして諸仏の証明にはあ

らざるなり。

二には経に就いて信を立つとは、無量義経に四十余年の諸経を挙げて云わく「いまだ真実を顕さず」。涅槃経に云わく「如来には虚妄の言無しといえども、もし衆生、虚妄の説に因って法利を得と知らば、宜しきに随って方便して、則ちためにこれを説きたもう」。また云わく「了義経に依って不了義経に依らざれ」已上。かくのごとき文、一つにあらず。皆、四十余年の自説の諸経を、虚妄・方便・不了義経・魔説と称す。これ皆、人をしてその経を捨てて法華・涅槃に入らしめんがためなり。しかるに何の恃み有って、妄語の経を留めて行儀を企て、得道を期するや。今、権教の情執を捨てて、ひとえに実経を信ず。故に、経に就いて信を立つと云うなり。

問うて云わく、善導和尚も人に就いて信を立て、行に就いて信を立つ。何の差別あらんや。

答えて曰わく、彼は阿弥陀経等の三部に依ってこれを立て、一代の経において了義経・不了義経を分かたずしてこれを立つ。故に、法華・涅槃の義に対してこれを難ずる時は、その義壊れ了わんぬ。

(024)

災難興起由来

正元2年('60)2月上旬　39歳

答えて曰わく、しかなり。謂えらく、夏の桀・殷の紂・周の幽等の世これなり。難じて云わく、彼の時、仏法無し。故に、また謗法の者無し。何に依るが故に国を亡ぼすや。

答えて曰わく、黄帝・孔子等、治国の作方は五常をもってす。愚王有って礼教を破るが故に、災難出来するなり。

難じて云わく、もししからば、今の世の災難、五常を破るに依るとならば、何ぞ必ずしも選択流布の失と云わんや。

答えて曰わく、仏法いまだ漢土に渡らざる前には、黄帝等、五常をもって国を治む。その五常は、仏法を渡して後にこれを見れば、即ち五戒なり。老子・孔子等もまた、仏遠く未来を鑑み、国土に和し、仏法を信ぜしめんがために、遣わすところの三聖なり。夏の桀・殷の紂・周の幽等、五常を破って国を亡ぼすは、即ち五戒を破るに当たるなり。

また、人身を受けて国主と成るは、必ず五戒十善による。外典は浅近なるが故に過去の修因・未来の得果を論ぜずといえども、五戒十善を持って国王と成る。故に、人有って五常を破れば、上に天変

しきりに顕れ、下に地妖、まま侵すものなり。

故に、今の世の変災もまた、国中の上下万人、多分は選択集を信ずるが故なり。弥陀仏より外の他仏・他経において拝信を至す者においては、面を背けて礼儀を至さず、言を吐いて随喜の心無し。故に、国土において、人民、殊に礼儀を破り、道俗、禁戒を犯す。例せば、阮籍に習う者は礼儀を亡ぼし、元嵩に随う者は仏法を破るがごときなり。

問うて曰わく、何をもってか、これを知る、仏法いまだ漢土に渡らざるより已前の五常は仏教の中の五戒たることを。いかん。

答えて曰わく、金光明経に云わく「一切世間のあらゆる善論は、皆この経に因る」。法華経に云わく「もし俗間の経書、治世の語言、資生等を説かんも、皆正法に順ぜん」。普賢経に云わく「正法もて国を治め、人民を邪枉せず。これを第三の懺悔を修すと名づく」。涅槃経に云わく「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」。

止観に云わく「もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり」。弘決に云わく「礼楽前に駆せて、真道後に啓く」。

広釈に云わく「仏、三人を遣わして、しばらく真旦を化す。五常はもって五戒を開くの方なり。昔、大宰、孔子に問うて云わく『三皇五帝は、これ聖人なるか』。孔子答えて云わく『聖人にあらず』。また問う『もししからば、誰かこれ聖人なる』。答えて云わく『吾聞く、西方に聖有り、釈迦と号す』と」文。

周書異記に云わく「周の昭王二十四年甲寅歳四月八日、江河泉池、忽然として泛漲し、井水、ならびに皆溢れ出ず。宮殿人舎・山川大地、ことごとく震動す。その夜、五色の光気有り。入って太微を貫き、四方に遍して、ことごとく青紅色と作る。昭王、太史蘇由に問うて曰わく『これ何の怪ぞや』。蘇由対えて曰わく『大聖人有り、西方に生まる。故にこの瑞を現ず』。昭王曰わく『天下においていかん』。蘇由曰わく『即時には化無し。一千年の外、声教この土に被及せん』。昭王、即ち人を遣わして、石を鐫ってこれを記し、西郊天祠の前に埋む。穆王五十二年壬申歳二月十五日、平旦に暴風たちまちに起こって、人舎を発損し、樹木を傷折し、山川大地みな震動す。午後、天陰り雲黒し。西方に白虹十二道あり。南北に通過して、連夜滅せず。穆王、太史扈多に問う『これ何の徴ぞや』。対えて曰わく『西方に聖人有り。滅度の衰相現るるのみ』と」已上。

今、これを勘うるに、金光明経に「一切世間のあらゆる善論は、皆この経に因る」と。仏法いまだ漢土に渡らざれば、まず黄帝等、玄女に五常を習う。即ち玄女の五常に源づいて、久遠の仏教を習い、黄帝、国を治めしむ。機いまだ熟さざれば、五戒を説くも、過去・未来を知らず、ただ現在に国を治め、至孝・至忠もて身を立つるばかりなり。余の経文も、もってまたかくのごとし。

また周書異記等は、仏法いまだ真旦に被らざる已前一千余年に、人、西方に仏有ること、これを知る。いかにいわんや、老子は殷の時に生まれ、周の列王の時に有り。孔子また老子の弟子、顔回また孔子の弟子なり。あに、周の第四の昭王、第五の穆王の時、蘇由・扈多記すところの「一千年の外、声教この土に被及せん」の文を知らざらんや。

また、内典をもってこれを勘うるに、仏たしかにこれを記したもう。「我、三聖を遣わして、彼の真旦を化す」と。仏、漢土に仏法を弘めんがために、まず三菩薩を漢土に遣わし、諸人に五常を教え、仏経の初門となす。

これらの文をもってこれを勘うるに、仏法已前の五常は仏教の内の五戒と知る。

疑って云わく、もししからば、何ぞ、選択集を信ずる謗法の者の中に、この難に値わざる者これ有るや。

答えて曰わく、業力は不定なり。現世に謗法を作し、今世に報有るは、即ち法華経に云わく「この人は現世に白癩の病を得ん乃至諸の悪重病あるべし」。仁王経に云わく「人、仏教を壊らば、また孝子無く、六親不和にして天神も祐けず、疾疫・悪鬼、日に来って侵害し、災怪首尾し、連禍あらん」。涅槃経に云わく「もしこの経典を信ぜざること有らば○もしは臨終の時、荒乱し、刀兵競い起こり、帝王の暴虐、怨家の讐隙の侵逼するところとならん」已上。順現業なり。

法華経に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば○その人は命終して、阿鼻獄に入らん」、仁王経に云わく「人、仏教を壊らば○死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」已上。順次生業なり。順後業等はこれを略す。

疑って云わく、もししからば、法華・真言等の諸大乗経を信ずる者、何ぞこの難に値うや。

答えて曰わく、金光明経に云わく「枉げて辜無きに及ぼさん」。法華経に云わく「横しまにその殃いに罹らん」等云々。止観に云わく「似解の位は、因の疾少軽なれば道心転た熟すれども、果の疾な

お重ければ衆災を免れず」。記に云わく「もし過・現の縁浅からば、微苦もまた徴無し」已上。これらの文をもってこれを案ずるに、法華・真言等を行ずる者も、いまだ位深からず、縁浅くして、口に誦うれどもその義を知らず、一向に名利のためにこれを読み、先生の謗法の罪いまだ尽きずして、外に法華等を行じて内に選択の意を存し、心に存せずといえども、世情に叶わんがために、在俗に向かって法華経は末代に叶い難き由を称すれば、この災難を免れ難きか。

問うて曰わく、いかなる秘術をもって、速やかにこの災難を留むべきや。

答えて曰わく、還って謗法の書ならびに学ぶところの人を治すべし。もししからずんば、無尽の祈請有りといえども、ただ費えのみ有って験無からんか。

問うて曰わく、いかんが対治すべき。

答えて曰わく、治方また経にこれ有り。大集経に云わく「もしは未来世の有信の諸王、もしは四姓等、むしろ如法の比丘一人を護り、無量の諸の悪比丘を護らざれ。能く法を護持せば、当に知るべし、この人は、乃至、十方諸仏世尊の大檀越なり」文。涅槃経に云わく「仏言わく『ただ一人のみをして、余の一切に施せ○正法を誹謗し、この重業を造る○ただかくのごとき一闡提の輩のみを除いて除いてその余の者に施さば、一切讃歎せん』と」已上。この文より外にもまた治方有り。つぶさに載するに暇あらず。

しかるに、当世の道俗、多く謗法の一闡提の人に帰して讃歎・供養を加うるあいだ、たまたま謗法の語を学せざる者をば、還って謗法の者と称して怨敵と作す。諸人、この由を知らざるが故に、正法

の者を還って謗法の者と謂えり。これひとえに、法華経勧持品に記すところの「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に○好んで我らが過を出ださん○国王・大臣・婆羅門・居士に向かって○誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん」の文のごとし。仏の讃歎するところの世の中の福田を捨てて、誠むるところの一闡提において讃歎・供養を加うるが故に、いよいよ貪欲の心盛んに、謗法の音天下に満てり。あに災難起こらざらんや。

問うて曰わく、謗法の者において供養を留め苦治を加うるに、罪有りや不や。

答えて曰わく、涅槃経に云わく「今、無上の正法をもって諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼に付嘱す○正法を毀る者をば、王者・大臣・四部の衆は応当に苦治すべし○なお罪有ることなし」已上。

一切衆生、螻蟻蚊虻に至るまで必ず小善有れども、謗法の人に小善無し。故に、施を留めて苦治を加うるなり。

問うて曰わく、汝、僧形をもって比丘の失を顕す。あに「四衆を謗ぜざれ」と「三宝を謗ぜざれ」との二つの重戒を破るにあらずや。

答えて曰わく、涅槃経に云う「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」已上の文を守ってこれを記す。

もしこの記、自然に国土に流布せしむる時、一度高覧を経ん人、必ずこの旨を存すべきか。もししからずんば、大集ならびに仁王経の「もし国王有って、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば

○その国の内に三種の不祥を出ださん乃至命終して、大地獄に生ぜん」「もし王の福尽きん時○七難必ず起こらん」の責めを免れ難きか。この文のごとくんば、しばらく万事を閣いて、まずこの災難起こるの由を慥かむべきか。もししからずんば、仁王経の「国土乱れん時はまず鬼神乱る。鬼神乱るが故に万民乱る」の文を見よ。当時、鬼神の乱れ、万民の乱れ有り。また、当に国土乱るべし。愚勘かくのごとし。取捨は人の意に任す。

正元二年太歳庚申二月上旬、これを勘う。

(025)

災難対治抄

正元2年('60)2月　39歳

国土に起こる大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の種々の災難の根源を知って対治を加うべき勘文。

金光明経に云わく「もし人有って、その国土において、この経有りといえども、いまだかつて流布せしめず、捨離の心を生じて聴聞せんことを楽わず、また供養・尊重・讃歎せず。四部の衆・持経の人を見て、また尊重乃至供養すること能わず。ついに、我らおよび余の眷属の無量の諸天をして、この甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流れを失い、威光および勢力有ることなからしむ。悪趣を増長して人天を損減し、生死の河に墜ちて、涅槃の路に乖かん。世尊よ。我ら四王ならびに諸の眷属および薬叉等、かくのごとき事を見て、その国土を捨てて擁護の心無けん。ただ我らのみこの王を捨棄するにあらず、必ず無量の国土を守護する諸大善神有らんも、みな捨て去らん。既に捨離し已われば、その国、当に種々の災禍有って国位を喪失すべし。一切の人衆、皆善心無く、ただ繋縛・殺害・瞋諍のみ有って、たがいに讒諂し、枉げて辜無きに及ぼさん。疫病流行し、彗星しばしば出で、両日並び現じ、薄蝕恒無く、黒白の二虹不祥の相を表し、星流れ地動き、井の内に声を発

し、暴雨・悪風、時節に依らず、常に飢饉に遭って苗実成らず、多く他方の怨賊有って国内を侵掠し、人民は諸の苦悩を受け、土地に楽しむところの処有ることなけん」文。

大集経に云わく「もし国王有って、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、無量世において施・戒・慧を修すとも、ことごとく滅失して、その国の内に三種の不祥の事を出ださん乃至命終して、大地獄に生ぜん」。

仁王経に云わく「大王よ。国土乱れん時はまず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る」文。また云わく「大王よ。我、今五眼もて明らかに三世を見るに、一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍うるによって帝王主となることを得たり。ここをもって、一切の聖人・羅漢、しかもために彼の国土の中に来生して大利益を作さん。もし王の福尽きん時は、一切の聖人、皆、ために捨て去らん。もし一切の聖人去らん時は、七難必ず起こらん」。

仁王経に云わく「大王よ。吾が今化するところ、百億の須弥、百億の日月あり。一々の須弥に四天下有り。その南閻浮提に十六の大国、五百の中国、十千の小国有り。その国土の中に七つの畏るべき難有り。一切の国王、この難のための故に〇いかなるを難となす。日月度を失い、時節返逆し、あるいは赤日出で、黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕して光無く、あるいは日輪一重、二・三・四・五重の輪現ずるを〇一の難となすなり。二十八宿度を失い、金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・刀星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星、かくのごとき諸星、各々変現するを〇二の難となすなり。大火国を焼き、万姓焼尽せん。あるいは鬼火・竜火・天火・山神火・

人火・樹木火・賊火あらん。かくのごとき変怪を〇三の難となすなり。大水百姓を漂没し、時節返逆して、冬雨り、夏雪ふり、冬時に雷電辟礰あり。六月に氷・霜・雹を雨らし、赤水・黒水・青水を雨らし、土山・石山を雨らし、沙・礫・石を雨らす。江河逆さまに流れ、山を浮かべ、石を流す。かくのごとき変の時を〇四の難となすなり。大風万姓を吹き殺し、国土の山河・樹木、一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん。かくのごとき変の時を〇五の難となすなり。天地・国土亢陽し、炎火洞然して百草亢旱し、五穀登らず、土地赫燃して万姓滅尽せん。かくのごとき変の時を〇六の難となすなり。四方の賊来って国を侵し、内外の賊起こり、火賊・水賊・風賊・鬼賊あって百姓荒乱し、刀兵の劫起こらん。かくのごとき怪の時を〇七の難となすなり」。

法華経に云わく「百由旬の内に諸の衰患無からしむ」。

涅槃経に云わく「この大涅槃微妙の経典流布するところの処は、当に知るべし、その地は即ちこれ金剛なり。この中の諸人もまた金剛のごとし」。

仁王経に云わく「この経は常に千の光明を放って、千里の内に七難をして起こらざらしむ」。また云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し、横しまに法制を作って仏戒に依らず。これを破仏・破国の因縁となす」。

今これを勘うるに、法華経に云わく「百由旬の内に諸の衰患無からしむ」。仁王経に云わく「千里の内に七難をして起こらざらしむ」。涅槃経に云わく「当に知るべし、その地は即ちこれ金剛なり。

この中の諸人もまた金剛のごとし」文。

疑って云わく、今この国土に種々の災難起こることを見聞す。いわゆる、建長八年八月より正元二年二月に至るまで、大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病等、種々の災難連々として今に絶えず。大体国土の人数尽くべきに似たり。これによって種々の祈請を致す人これ多しといえども、その験無きか。正直捨方便・多宝証明・諸仏出舌の法華経の文の「百由旬の内に」、双林最後の遺言の涅槃経の「その地は金剛なり」の文、七難不起の仁王経の「千里の内に」の文、皆、虚妄に似たり。いかん。

答えて曰わく、今愚案をもってこれを勘うるに、上に挙ぐるところの諸大乗経、国土に在り。しかも祈請を成ぜずして災難起こることは、少しその故有るか。

いわゆる、金光明経に云わく「その国土において、この経有りといえども、いまだかつて流布せしめず、捨離の心を生じて聴聞せんことを楽わず○我ら四王○みな捨て去らん○その国に当に種々の災禍有るべし」。大集経に云わく「もし国王有って、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば○その国の内に三種の不祥を出ださん」。仁王経に云わく「仏戒に依らず。これを破仏・破国の因縁となす○もし一切の聖人去らん時は、七難必ず起こらん」已上。

これらの文をもってこれを勘うるに、法華経等の諸大乗経、国中に在りといえども、一切の四衆、捨離の心を生じて、聴聞し供養する志を起こさざるが故に、国中の守護の善神、一切の聖人この国を捨てて去り、守護の善神・聖人等無きが故に出来するところの災難なり。

問うて曰わく、国中の諸人、諸大乗経において捨離の心を生じて供養する志を生ぜざることは、

何の故よりこれ起こるや。

答えて曰わく、仁王経に云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し、横しまに法制を作って仏戒に依らず」。法華経に云わく「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん○この人は悪心を懐き○国王・大臣・婆羅門・居士および余の諸の比丘に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん○悪鬼はその身に入る」等云々。

これらの文をもってこれを思うに、諸の悪比丘、国中に充満して、破国・破仏法の因縁を説く。国王ならびに国中の四衆、弁えずして信聴を加うるが故に、諸大乗経において捨離の心を生ずるなり。

問うて曰わく、諸の悪比丘等、国中に充満して破国・破仏戒等の因縁を説くことは、仏弟子の中に出来すべきか、外道の中に出来すべきか。

答えて曰わく、仁王経に云わく「三宝を護る者、転たさらに三宝を滅し破せんこと、師子身中の虫の自ら師子を食むがごとし。外道にはあらず」文。この文のごとくんば、仏弟子の中において破国・破仏法の者出来すべきか。

問うて曰わく、諸の悪比丘、正法を壊るに相似の法をもってこれを破らんか、はたまた悪法をもってこれを破らんか。

答えて曰わく、小乗をもって権大乗を破し、権大乗をもって実大乗を破し、師弟共に謗法・破国の

因縁を知らざるが故に、破仏戒・破国の因縁を成して三悪道に堕つるなり。

問うて曰わく、その証拠いかん。

答えて曰わく、法華経に云わく「仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」。涅槃経に云わく「我涅槃して後、当に百千無量の衆生有って誹謗してこの大涅槃を信ぜざるべし〇三乗の人もまたかくのごとく、無上の大涅槃経を憎悪せん」已上。勝意比丘の喜根菩薩を謗って三悪道に堕ち、尼思仏等の不軽菩薩を打って阿鼻の炎を招くも、皆、大小・権実を弁えざるよりこれ起これり。十悪五逆は、愚者皆罪たることを知るが故に、たやすく破国・破仏法の因縁を成ぜず。故に、仁王経に云わく「その王別えずしてこの語を信聴す」。涅槃経に云わく「もし四重を犯し五逆罪を作り、自ら定めてかくのごとき重事を犯すと知れども、心に初めより怖畏・懺悔無く、あえて発露せず」已上。これらの文のごとくんば、謗法は、自他共に子細を知らざるが故に、重罪を成して国を破し仏法を破するなり。

問うて曰わく、もししからば、この国土において権教をもって人の意を取り、実教を失う者これ有るか、いかん。

答えて曰わく、しかなり。

問うて曰わく、その証拠いかん。

答えて曰わく、法然上人所造等の選択集これなり。今、その文を出だして上の経文に合わせ、その失を露顕せしめん。もし対治を加えば、国土を安穏ならしむべきか。

選択集に云わく「道綽禅師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨て正しく浄土に帰するの文○初めに聖道門とは、これについて二つ有り。一には大乗、二には小乗なり。大乗の中について顕密・権実等の不同有りといえども、今この集の意はただ顕大および権大のみを存す。故に、歴劫迂廻の行に当たる。これに準じてこれを思うに、応に密大および実大をも存すべし。しからば則ち、今の真言・仏心・天台・華厳・三論・法相・地論・摂論、これらの八家の意、正しくここに在るなり○曇鸞法師、往生論註に云わく『謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云わく、菩薩、阿毘跋致を求むるに、二種の道有り。一には難行道、二には易行道なり』○この中、難行道とは、即ちこれ聖道門なり。易行道とは、即ちこれ浄土門なり○浄土宗の学者、まず、すべからくこの旨を知るべし。たとい先より聖道門を学ぶ人なりといえども、もし浄土門においてその志有らば、すべからく聖道を棄てて浄土に帰すべし」文。

また云わく「善導和尚、正・雑の二行を立てて、雑行を捨て正行に帰するの文。第一に読誦雑行とは、上の観経等の往生浄土の経を除いてより已外、大小乗・顕密の諸経において受持し読誦するを、ことごとく読誦雑行と名づく○第三に礼拝雑行とは、上の弥陀を礼拝するを除いてより已外、一切の諸余の仏菩薩等および諸の世天等において礼拝し恭敬するを、ことごとく礼拝雑行と名づく○私に云わく、この文を見るに、すべからく雑を捨てて専を修すべし。あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや。行者能くこれを思量せよ」と。

また云わく「貞元入蔵録の中に、始め大般若経六百巻より法常住経に終わるまでの顕密の大乗経、

総じて六百三十七部二千八百八十三巻なり。皆すべからく『大乗を読誦す』の一句に摂むべし○当に知るべし。随他の前にはしばらく定散の門を開くといえども、随自の後には還って定散の門を閉ず。一たび開いてより以後永く閉じざるは、ただこれ念仏の一門のみなり」文。

また最後結句の結文に云わく「夫れ、速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣いて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正・雑の二行の中に、しばらく諸の雑行を抛って、選んで応に正行に帰すべし」〈已上、選択集の文なり〉。

今これを勘うるに、日本国中の上下万人、深く法然上人を信じてこの書を拝ぶ。故に、無智の道俗、この書の中の捨閉閣抛等の字を見て、浄土三部経・阿弥陀仏より外の諸経・諸仏菩薩・諸天善神等において捨閉閣抛等の思いを作し、彼の仏経等において供養・受持等の志を起こさず、還って捨離の心を生ず。故に、古の諸大師等の建立せしところの鎮護国家の道場零落せしむといえども、護惜建立の心無し。護惜建立の心無きが故にまた読誦供養の音絶え、守護の善神も法味を嘗めざるが故に国を捨てて去り、四依の聖人も来らざるなり。ひとえに、金光明・仁王等の「一切の聖人去らん時は、七難必ず起こらん」「我ら四王、みな捨て去らん。既に捨離し已われば、その国に当に種々の災禍有るべし」の文に当たれり。あに「諸の悪比丘は、多く名利を求む」「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲なり」の人にあらずや。

疑って云わく、国土において選択集を流布せしむるによって災難起こると云わば、この書無き已前には国中において災難無かりしか。

答えて曰わく、彼の時もまた災難有り。云わく、五常を破り仏法を失う者これ有る故に。いわゆる周の宇文・元嵩等これなり。

難じて云わく、今の世の災難、五常を破るが故にこれ起こるといわば、何ぞ必ずしも選択集流布の失に依らんや。

答えて曰わく、仁王経に云わく「大王よ。未来の世の中に諸の小国王、四部の弟子○諸の悪比丘○横しまに法制を作って仏戒に依らず○また仏像の形、仏塔の形を造作することを聴さず○七難必ず起こらん」。金光明経に云わく「また供養・尊重・讃歎せず○その国に当に種々の災禍有るべし」。涅槃経に云わく「無上の大涅槃経を憎悪せん」等云々。あに、弥陀より外の諸仏・諸経等を供養・礼拝・讃歎するを、ことごとく雑行と名づくるに当たらざらんや。

難じて云わく、仏法已前、国において災難有り。何ぞ謗法の者の故ならんや。

答えて曰わく、仏法已前に五常をもって国を治むるは、遠く仏誓をもって国を治むるなり。礼儀を破るは仏の出だしたまえる五戒を破るなり。

問うて曰わく、その証拠いかん。

答えて曰わく、金光明経に云わく「一切世間のあらゆる善論は、皆この経に因る」。法華経に云わく「もし俗間の経書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」。普賢経に云わく「正法もて国を治め、人民を邪枉せず。これを第三の懺悔を修すと名づく」。涅槃経に云わく「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」。止観に云わく「もし深く世法を識らば、即

ちこれ仏法なり」。弘決に云わく「礼楽前に駆せて、真道後に啓く」。広釈に云わく「仏、三人を遣わして、しばらく真旦を化す。五常はもって五戒を開くの方なり。昔、大宰、孔子に問うて云わく『三皇五帝は、これ聖人なるか』。孔子答えて云わく『聖人にあらず』。また問う『夫子はこれ聖人なるか』。また答う『あらざるなり』。また問う『もししからば、誰かこれ聖人なる』。答えて云わく『吾聞く、西方に聖有り、釈迦と号す』と」文。

これらの文をもってこれを勘うるに、仏法已前の三皇五帝の五常をもって国を治め、夏の桀・殷の紂・周の幽等の礼儀を破って国を喪ぼすは、遠く仏誓の持破に当たるなり。

疑って云わく、もししからば、法華・真言等の諸大乗経を信ずる者は、何ぞこの難に値えるや。

答えて曰わく、金光明経に云わく「枉げて辜無きに及ぼさん」。法華経に云わく「横しまにその殃いに罹らん」等云々。これらの文をもってこれを推するに、法華・真言等を行ずる者も、いまだ位深からずして信心薄し。口に誦すれどもその義を知らずして、一向に名利のためにこれを誦す。先生の謗法の失いまだ尽きずして、外に法華等を行じ内に選択の心を存す。この災難の根源等を知らざれば、この難を免れ難きか。

疑って云わく、もししからば、何ぞ、選択集を信ずる謗法の者の中に、この難に値わざる者これ有りや。

答えて曰わく、業力は不定なり。

順現業は、法華経に云わく「この人は現世に白癩の病を得ん乃至諸の悪重病あるべし」。仁王経に

云わく「人、仏教を壊らば、また孝子無く、六親不和にして天神も祐けず、疾疫・悪鬼、日に来って侵害し、災怪首尾し、連禍あらん」。涅槃経に云わく「もしこの経典を信ぜざること有らば○もしは臨終の時、荒乱し、刀兵競い起こり、帝王の暴虐、怨家の讐隙の侵逼するところとならん」已上。順次生業は、法華経に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば○その人は命終して、阿鼻獄に入らん」。仁王経に云わく「人、仏教を壊らば○死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」已上。順後業等はこれを略す。

問うて曰わく、いかにして速やかにこの災難を留むべきや。

答えて曰わく、還って謗法の者を治すべし。もししからずんば、無尽の祈請有りといえども、災難を留むべからざるなり。

問うて曰わく、いかんが対治すべき。

答えて曰わく、治方また経にこれ有り。涅槃経に云わく「仏言わく『ただ一人のみを除いて余の一切に施せ○正法を誹謗し、この重業を造る○ただかくのごとき一闡提の輩のみを除いてその余に施さば、一切讃歎せん』と」已上。この文のごとくんば、施を留めて対治すべしと見えたり。この外にもまた治方これ多し。つぶさに出だすに暇あらず。

問うて曰わく、謗法の者において供養を留め、苦治を加うるは罪有りや不や。

答えて曰わく、涅槃経に云わく「今、無上の正法をもって諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼に付嘱す○正法を毀る者をば、王者・大臣・四部の衆は応当に苦治すべし○なお罪有ることなし」已上。

問うて曰わく、汝、僧形をもって比丘の失を顕すは罪業にあらずや。答えて曰わく、涅槃経に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」已上。予、この文を見るが故に「仏法の中の怨なり」との責めを免れんがために、見聞を憚らずして法然上人ならびに所化の衆等の阿鼻大城に堕つべき由を称う。

この道理を聞き解く道俗の中に、少々廻心の者有り。もし一度高覧を経ん人、上に挙ぐるところのごとくこれを行ぜずんば、大集経の文の「もし国王有って、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、無量世において施・戒・慧を修すとも、ことごとく滅失して、その国の内に三種の不祥を出だん乃至命終して、大地獄に生ぜん」との記の文を免れ難きか。仁王経に云わく「もし王の福尽きん時〇七難必ず起こらん」。この文に云わく「無量世において施・戒・慧を修すとも、ことごとく滅失す」等云々。この文を見るに、しばらく万事を閣いて、まずこの災難の起こる由を勘うべきか。もしからざれば、いよいよまた重ねて災難これ起こらんか。

愚勘かくのごとし。取捨は人の意に任す。

(026)

十法界明因果抄

文応元年（'60）4月21日　39歳

沙門日蓮撰す。

八十華厳経六十九に云わく「普賢道に入ることを得て、十法界を了知す」。法華経第六に云わく「地獄声、畜生声、餓鬼声、阿修羅声、比丘声・比丘尼声〈人道〉、天声〈天道〉、声聞声、辟支仏声、菩薩声、仏声」〈已上、十法界の名目なり〉。

第一に地獄界とは、観仏三昧経に云わく「五逆罪を造り、因果を撥無し、大乗を誹謗し、四重禁を犯し、虚しく信施を食するの者、この中に堕つ」〈阿鼻地獄なり〉。正法念経に云わく「殺・盗・婬欲・飲酒・妄語の者、この中に堕つ」〈大叫喚地獄なり〉。正法念経に云わく「昔、酒をもって人に与えて酔わしめ已わって、調戯してこれを翫び、彼をして羞恥せしむるの者、この中に堕つ」〈叫喚地獄なり〉。正法念経に云わく「殺生・偸盗・邪婬の者、この中に堕つ」〈衆合地獄なり〉。涅槃経に云わく「殺に三種有り。謂わく下・中・上なり。下とは、蟻子乃至一切の畜生なり乃至下殺の因縁をもって地獄に堕ち乃至つぶさに下の苦を受く」文。

問うて云わく、十悪五逆等を造って地獄に堕つることは、世間の道俗皆これを知れり。謗法によっ

て地獄に堕つることは、いまだその相貌を知らず、いかん。

答えて云わく、堅慧菩薩造、勒那摩提訳の究竟一乗宝性論に云わく「楽って小法を行じて法および法師を謗じ○如来の教えを識らず、説くこと修多羅に乖くも、これ真実義と言う」文。この文のごとくんば、小乗を信じて真実義と云い、大乗を知らざるは、これ謗法なり。天親菩薩説、真諦三蔵訳の仏性論に云わく「もし大乗に憎背せば、これはこれ一闡提の因なり。衆生をしてこの法を捨てしむるがための故に」文。この文のごとくんば、大小流布の世に一向に小乗を弘め、自身も大乗に背き、人においても大乗を捨てしむる、これを謗法と云うなり。天台大師、梵網経の疏に云わく「謗はこれ乖背の名なり。已が宗に乖くが故に罪を得」文。

法華経の譬喩品に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」文。この文の意は、小乗の三賢已前、大乗の十信已前、末代の凡夫の十悪・五逆・不孝父母・女人等を嫌わず、これらは法華経の名字を聞いて、あるいは題名を唱え、一字・一句・四句・一品・一巻・八巻等を受持し読誦し、乃至また上のごとく行ぜん人を随喜し讃歎する人は、法華経よりの外の一代聖教を深く習い義理に達し堅く大小乗の戒を持てる大菩薩のごとき者より勝れて、往生・成仏を遂ぐべしと説くを信ぜずして、還って、法華経は地・住已上の菩薩のため、あるいは上根・上智の凡夫のためにして、愚人・悪人・女人・末代の凡夫等のためにはあらずと言わん者は、即ち一切衆生の成仏の種を断じて、阿鼻獄に入るべしと説ける文なり。

涅槃経に云わく「仏の正法において永く護惜建立の心無し」文。この文の意は、この大涅槃経の大法世間に滅尽せんを惜しまざる者は、即ちこれ誹謗の者なり。天台大師、法華経の怨敵を定めて云わく「聞くことを喜ばざる者を怨となす」文。

謗法は多種なり。大小流布の国に生まれて、一向に小乗の法を学んで身を治め、大乗に遷らざるは、これ謗法なり。また華厳・方等・般若等の諸大乗経を習える人も、諸経と法華経と等同の思いを作し、人をして等同の義を学ばしめ、法華経に遷らざるは、これ謗法なり。また、たまたま円機有る人の法華経を学ぶをも、我が法に付けて世利を貪らんがために、汝が機は法華経に当たらざる由を称して、この経を捨てて権経に遷らしむるは、これ大謗法なり。これらのごときは皆、地獄の業なり。

人間に生ずること、過去の五戒は強く三悪道の業因は弱きが故に、人間に生ずるなり。また当世の人も、五逆を作る者は少なく、十悪は盛んにこれを犯す。また、たまたま後世を願う人の、十悪を犯さずして善人のごとくなるも、自然に愚癡の失によって、身・口は善けれども意は悪しき師を信ず。ただ我のみこの邪法を信ずるにあらず、国を知行する人、人民を聳めて我が邪法に同ぜしめ、妻子・眷属・所従の人をもってまた聳め従え、我が行を行ぜしむ。故に、正法を行ぜしむる人において結縁を作さず、また民・所従等においても随喜の心を至さしめず。故に、自他共に謗法の者と成って、善を修し悪を止むるがごとき人も自然に阿鼻地獄の業を招くこと、末法において多分これ有るか。

阿難尊者は、浄飯王の甥、斛飯王の太子、提婆達多の舎弟、釈迦如来の従子なり。如来に仕え奉ること二十年、覚意三昧を得て、一代聖教を覚れり。仏入滅して後、阿闍世王、阿難に帰依し奉る。

仏の滅後四十年の比、阿難尊者一つの竹林の中に至るに、一りの比丘有り。一つの法句の偈を誦して云わく「もし人生じて百歳なりとも、水の潦涸を見ずんば、生じて一日にしてこれを睹見することを得んにはしかず」已上。阿難この偈を聞き、比丘に語って云わく「これ仏説にあらず。汝、修行すべからず」。その時に比丘、阿難に問うて云わく「仏説はいかん」。阿難、答えて云わく「『もし人生じて百歳なりとも、生滅の法を解せずんば、生じて一日にしてこれを解了することを得んにはしかず』已上。この文、仏説なり。汝が唱うるところの偈は、この文を謬りたるなり」。その時に比丘、この偈を得て本師の比丘に語る。本師云わく「我汝に教うるところの偈は、真の仏説なり。阿難が唱うるところの偈は仏説にあらず。阿難、年老衰して言錯謬多し。信ずべからず」。この比丘、また阿難の偈を捨てて本の謬りたる偈を唱う。阿難、また竹林に入ってこれを聞くに、我が教うるところの偈にあらず。重ねてこれを語るに、比丘、信用せざりき等云々。

仏の滅後四十年にさえ、既に謬り出来せり。いかにいわんや、仏の滅後既に二千余年を過ぎたり。仏法、天竺より唐土に至り、唐土より日本に至る。論師・三蔵・人師等伝来せり。定めて謬り無き法は万が一なるか。いかにいわんや、当世の学者、偏執を先となして我慢を挿み、火を水と諍い、これを糾さず。たまたま仏の教えのごとく教えを宣ぶる学者をも、これを信用せず。故に、謗法ならざる者は、万が一なるか。

第二に餓鬼道とは、正法念経に云わく「昔財を貪って屠殺せるの者、この報いを受く」。また云わく「丈夫自ら美食を噉らい妻・子に与えず、あるいは婦人自ら食して夫・子に与えざりしは、この報

いを受く」。また云わく「名利を貪らんがために不浄説法せるの者、この報いを受く」。また云わく「昔酒を酤るに水を加えたる者、この報いを受く」。また云わく「もし人労して少かなる物を得たるを、誑惑して取り用いけるの者、この報いを受く」。また云わく「昔行路の人の病苦あって疲極せるに、その売れるを欺き取り、直を与うること薄少なりしの者、この報いを受く」。また云わく「昔刑獄を典主り、人の飲食を取りしの者、この報いを受く」。また云わく「昔陰涼樹を伐り、および衆僧の園林を伐りしの者、この報いを受く」文。

法華経に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば○常に地獄に処すること、園観に遊ぶがごとく、余の悪道に在ること、己が舎宅のごとし」文。慳貪・偸盗等の罪によって餓鬼道に堕つることは、世人知り易し。慳貪等無き諸の善人も、謗法により、また謗法の人に親近し、自然にその義を信ずるによって餓鬼道に堕つることは、智者にあらずんば、これを知らず。能く能く恐るべきか。

第三に畜生道とは、愚癡・無慙にして、いたずらに信施の他物を受けてこれを償わざるの者、この報いを受くるなり。法華経に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば○当に畜生に堕つべし」文〈已上、三悪道なり〉。

第四に修羅道とは、止観の一に云わく「もしその心、念々に常に彼に勝らんことを欲し、耐えざれば人を下し、他を軽しめ、己を珍ぶこと、鵄の高く飛んで下し視るがごとし。しかも、外には仁・義・礼・智・信を揚げて下品の善心を起こし、阿修羅の道を行ずるなり」文。

第五に人道とは、報恩経に云わく「三帰五戒は人に生まる」文。

第六に天道とは二つ有り。欲天には十善を持って生まる。色・無色天には、下地は麤・苦・障、上地は静・妙・離の六行観をもって生まる。

問うて云わく、六道の生因はかくのごとし。そもそも、同じき時に五戒を持って人界の生を受くるに、何ぞ、生盲・聾・瘖瘂・矬陋・癲躄・背傴・貧窮・多病・瞋恚等、無量の差別有りや。

答えて云わく、大論に云わく「もしは衆生の眼を破り、もしは衆生の眼を屈り、もしは正見の眼を破り、罪福無しと言わん。この人死して地獄に堕ち、罪畢わって人となり、生まれてより盲なり。もしはまた仏塔の中の火珠および諸の灯明を盗む。かくのごとき等の種々の先世の業の因縁もて眼を失うなり○聾とは、これ先世の因縁は、師父の教訓をば受けず、行ぜず、しかも反って瞋恚す。この罪をもっての故に聾となる。また次に衆生の耳を截り、もしは衆生の耳を破り、もしは仏塔・僧塔、諸の善人、福田の中の犍稚・鈴・貝および鼓を盗むが故に、この罪を得。先世に他の舌を截り、あるいはその口を塞ぎ、あるいは悪薬を与えて語ることを得ざらしめ、あるいは師の教え、父母の教勅を聞き、その語を断つ○世に生まれて人となり、唖にして言うこと能わず○先世に他の坐禅を破り、坐禅の舎を破り、諸の呪術をもって人を呪して、瞋らせ闘諍・婬欲あらしむ。今世に諸の結使厚重なること、婆羅門の、その稲田を失い、その婦また死して、即時に狂発し、裸形にして走りしがごとし○先世に仏・阿羅漢・辟支仏の食および父母・所親の食を奪えば、仏世に値うといえども、なお飢渇す。罪の重きをもっての故なり○先世に好んで鞭杖・拷掠・閉繋を行じ、種々に悩ますが故に、今世に病を得○先世に他の身を破り、その頭を截り、その手足を斬り、種々の身分を破り、あるいは仏像を壊

り、仏像の鼻および諸の賢聖の形像を毀り、あるいは父母の形像を破る。この罪をもっての故に、形を受くるに多く具足せず。また次に不善法の報い、身を受くること醜陋なり」文。

法華経に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば○もし人となることを得ば、諸根は闇鈍にして、盲・聾・背傴ならん○口の気常に臭く、鬼魅に著せられん。貧窮・下賤にして、人の使うところとなり、多病・瘠痩にして、依怙するところ無く○もしは他の叛逆し、抄劫し窃盗せん。かくのごとき等の罪は、横しまにその殃いに羅からん」文。

また八の巻に云わく「もしまたこの経典を受持せん者を見て、その過悪を出ださば、もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病を得ん。もしこれを軽笑することあらば、当に世々に牙歯疎欠、醜唇・平鼻、手脚繚戻し、眼目角睞に、身体臭穢にして、悪瘡・膿血、水腹・短気、諸の悪重病あるべし」文。

問うて云わく、いかなる業を修する者か六道に生じて、その中の王と成るや。

答えて云わく、大乗の菩薩戒を持ってこれを破る者は、色界の梵王・欲界の魔王・帝釈・四輪王・禽獣王・閻魔王等と成るなり。

心地観経に云わく「諸王の受くるところの諸の福楽は、往昔かつて三つの浄戒を持ち、戒徳薫修して招き感ずるところにして、人天の妙果、王の身を獲○中品に菩薩戒を受持すれば、福徳自在の転輪王として、心の所作に随ってことごとく成じ、無量の人天ことごとく遵奉す。下の上品に持てば、大鬼王として一切の非人ことごとく率伏す。戒品を受持して欠犯すといえども、戒の勝るるに由るが

故に、王となることを得。下の中品に持てば、禽獣の王として一切の飛走皆帰伏す。清浄の戒において欠犯有るも、戒の勝るるに由るが故に、王となることを得。下の下品に持てば、琰魔王として地獄の中に処して常に自在なり。禁戒を毀り悪道に生ずといえども、戒の勝るるに由るが故に、王となることを得○もし如来の戒を受けざることあらば、終に野干の身をも得ること能わず。いかにいわんや、能く人天の中の最勝の快楽を感じて王位に居せんをや」文。

安然和尚、広釈に云わく「菩薩の大戒は、持てば法王と成り、犯しても世王と成る。しかも戒の失せざること、譬えば、金銀を器となすに、用いるに貴く、器を破って用いざれども、宝は失せざるがごとし」。また云わく「無量寿観に云わく『劫初より已来、八万の王有ってその父を殺害す。これは則ち菩薩戒を受けて国王と作るといえども、今、殺の戒を犯して皆地獄に堕つ。犯すも、戒の力もて王と作る』。大仏頂経に云わく『発心の菩薩、罪を犯せども、しばらく天神地祇と作る』。大随求に云わく『天帝命尽きて、たちまち驢の腹に入れども、随求の力に由って、還って天上に生ず』。尊勝に云わく『善住天子、死後、七返応に畜生の身に堕つべきを、尊勝の力に由って、還って天の報いを得たり』。昔、国王有り、千車もて水を運び、仏塔の焼くるを救う。自ら憍心を起こして阿修羅王と作る。昔、梁の武帝、五百の袈裟を須弥山の五百の羅漢に施す。誌公云わく『往って施すに、五百に一りを欠く』。衆云わく『罪を犯して、しばらく人王と作る』。即ち武帝これなり。昔、国王有り、民を治むること等しからず。今天王と作れども、大鬼王となる。即ち東南西の三天王これなり。拘留孫の末に、菩薩と成って発誓し、現に北方の毘沙門と作る、これなり」云々。

これらの文をもってこれを思うに、小乗戒を持って破る者は六道の民と作り、大乗戒を破る者は六道の王と成り、持つ者は仏と成る、これなり。

第七に声聞道とは、この界の因果をば、阿含の小乗の十二年の経に分明にこれを明かせり。諸大乗経においても、大に対せんがために、またこれをば明かせり。

声聞において四種有り。一には優婆塞、俗男なり。五戒を持って苦・空・無常・無我の観を修し、自調自度の心強くして、あえて化他の意無く、見思を断じ尽くして阿羅漢と成る。かくのごとくする時、自然に髪を剃るに自ずから落つ。二には優婆夷、俗女なり。五戒を持って髪を剃るに自ずから落つること、男のごとし。三には比丘僧なり。二百五十戒〈具足戒なり〉を持って苦・空・無常・無我の観を修し、見思を断じて阿羅漢と成る。かくのごとくするの時、髪を剃らざれども生えず。四には比丘尼なり。五百戒を持つ。余は比丘のごとし。

一代諸経に列座せる舎利弗・目連等のごとき声聞これなり。永く六道に生ぜず。また仏菩薩とも成らず。灰身滅智し、決定して仏に成らざるなり。

小乗戒の手本たる尽形寿の戒は、一度依身を壊れば、永く戒の功徳無し。上品を持てば二乗と成り、中・下を持てば人天に生じて民となり、これを破れば三悪道に堕ちて罪人と成るなり。安然和尚、広釈に云わく「三善の世戒は、因生じて果を感じ、業尽きて悪に堕つ。譬えば、楊葉の、秋至れば金に似たれども、秋去れば地に落つるがごとし。二乗の小戒は、持つ時は果拙く、破る時は永く捨つ。譬えば、瓦器の、完きも用いるに卑しく、もし破れば永く失するがごとし」文。

第八に縁覚道とは二つ有り。一には部行独覚。仏前に在って声聞のごとく小乗の法を習い、小乗の戒を持ち、見思を断じて永不成仏の者と成る。二には麟喩独覚。無仏の世に在って飛花落葉を見て苦・空・無常・無我の観を作し、見思を断じて永不成仏の身と成る。戒もまた声聞のごとし。

この声聞・縁覚を二乗とは云うなり。

第九に菩薩界とは、六道の凡夫の中において、自身を軽んじ他人を重んじ、悪をもって己に向け、善をもって他に与えんと念う者有り。仏、この人のために、諸の大乗経において菩薩戒を説きたまえり。この菩薩戒において三つ有り。一には摂善法戒なり。いわゆる八万四千の法門を習い尽くさんと願う。二には饒益有情戒なり。一切衆生を度しての後に自ら成仏せんと欲する、これなり。三には摂律儀戒なり。一切の諸戒をことごとく持たんと欲する、これなり。華厳経の心を演ぶる梵網経に云わく「仏、諸の仏子に告げて言わく『十重の波羅提木叉有り。もし菩薩戒を受けてこの戒を誦せずんば、菩薩にあらず、仏種の子にあらず。我もまたかくのごとく誦す。一切の菩薩はすでに学し、一切の菩薩は当に学すべく、一切の菩薩は今学す』と」文。

菩薩というは、二乗を除いて一切の有情なり。小乗のごときは、戒に随って異なるなり。菩薩戒はしからず。一切の有心に必ず十重禁等を授く。一戒を持つを一分の菩薩と云い、つぶさに十分を受くるを具足の菩薩と名づく。故に、瓔珞経に云わく「一分の戒を受くることあれば一分の菩薩と名づけ、乃至二分・三分・四分、十分なるを具足の受戒という」文。

問うて云わく、二乗を除く文、いかん。

答えて云わく、梵網経に菩薩戒を受くる者を列ねて云わく「もし仏戒を受くる者は、国王・王子・百官・宰相・比丘・比丘尼・十八梵天・六欲天子・庶民・黄門・婬男・婬女・奴婢・八部・鬼神・金剛神・畜生、乃至変化人にもあれ、ただ法師の語のみを解せば、ことごとく戒を受得す。皆第一清浄の者と名づく」文。この中において二乗無きなり。方等部の結経たる瓔珞経にもまた二乗無し。

問うて云わく、二乗の持つところの不殺生戒と菩薩の持つところの不殺生戒と、差別いかん。

答えて云わく、持つところの戒の名は同じといえども、持つ様ならびに心念永く異なるなり。故に戒の功徳もまた浅深あり。

問うて云わく、異なる様、いかん。

答えて云わく、二乗の不殺生戒は、永く六道に還らんと思わず。故に化導の心無し。また仏菩薩と成らんと思わず、ただ灰身滅智の思いを成すなり。譬えば、木を焼き灰となしての後に一塵も無きがごとし。故に、この戒をば瓦器に譬う。破れて後、用いることなきが故なり。菩薩はしからず。饒益有情戒を発してこの戒を持つが故に、機を見て五逆・十悪を造り同じく犯せども、この戒は破れず。還っていよいよ戒体を全くす。故に、瓔珞経に云わく「犯すこと有れども、失せず、未来際を尽くす」文。故に、この戒をば金銀の器に譬う。完くして、持つ時も破る時も、永く失せざるが故なり。

問うて云わく、この戒を持つ人は、幾劫を経てか成仏するや。

答えて云わく、瓔珞経に云わく「いまだ住に上らざる前○もしは一劫二劫三劫乃至十劫を経て、初住の位の中に入ることを得」文。文の意は、凡夫においてこの戒を持つを、信位の菩薩と云う。しか

りといえども、一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し、十劫を経て不退の位に入り、永く六道の苦を受けざるを、不退の菩薩と云う。いまだ仏に成らず、還って六道に入れども、苦無きなり。

第十に仏界とは、菩薩の位において四弘誓願を発すをもって戒となす。三僧祇の間、六度万行を修し、見思・塵沙・無明の三惑を断じ尽くして仏と成る。故に、心地観経に云わく「三僧企耶大劫の中につぶさに百千の諸の苦行を修し、功徳円満して法界に遍く、十地究竟して三身を証す」文。因位において諸の戒を持ち、仏果の位に至って仏身を荘厳す。三十二相八十種好は、即ちこの戒の功徳の感ずるところなり。ただし、仏果の位に至れば、戒体失す。譬えば、花の果と成って花の形無きがごとし。故に、天台、梵網経疏に云わく「仏果に至って乃ち廃す」文。

問うて云わく、梵網経等の大乗戒は、現身に七逆を造れると、ならびに決定性の二乗とを許すや。答えて云わく、梵網経に云わく「もし戒を受けんと欲する時は、師、応に問うて言うべし。『汝、現身に七逆の罪を作らずや』と。菩薩の法師は、七逆の人のために現身に戒を受けしむることを得ず」文。この文のごとくんば、七逆の人は現身に受戒を許さず。大般若経に云わく「もし菩薩、たとい恒河沙劫に妙なる五欲を受くとも、菩薩戒においてはなお犯と名づけず。もし一念に二乗の心を起こさば、即ち名づけて犯となす」文。大荘厳論に云わく「つねに地獄に処るといえども、大菩提を障えず。もし自利の心を起こさば、これ大菩提の障りなり」文。これらの文のごとくんば、六凡においては菩薩戒を授け、二乗においては制止を加うるものなり。二乗戒を嫌うは、二乗の持つところの五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌うにあらず。彼の戒は菩薩も持つべし。ただ二乗の心念を

嫌うなり。

夫れ以んみれば、戒を持つは、父母・師僧・国王・主君・一切衆生・三宝の恩を報ぜんがためなり。父母は養育の恩深し。一切衆生は互いに相助くる恩重し。国王は正法をもって世を治むれば、自他安穏なり。これによって、善を修すれば恩重し。主君もまた、彼の恩を蒙って父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を養う。たといしからずといえども、一身を顧みる等の恩これ重し。師はまた、邪道を閉じ、正道に趣かしむる等の恩これ深し。仏恩は言うに及ばず。かくのごとき無量の恩分これ有り。しかるに、二乗は、これらの報恩皆欠けたり。故に、一念も二乗の心を起こすは、十悪五逆に過ぎたり。一念も菩薩の心を起こすは、一切諸仏の後心の功徳を起こせるなり。已上、四十余年の間の大小乗の戒なり。

法華経の戒と言うは、二つ有り。一には相待妙の戒、二には絶待妙の戒なり。

まず相待妙の戒とは、四十余年の大小乗の戒と法華経の戒と相対して、爾前を麤戒と云い法華経を妙戒と云って、諸経の戒をば、未顕真実の戒、歴劫修行の戒、決定性の二乗の戒と嫌うなり。法華経の戒は、真実の戒、速疾頓成の戒、二乗の成仏を嫌わざる戒等なり。相対して麤・妙を論ずるを相待妙の戒と云うなり。

問うて云わく、梵網経に云わく「衆生、仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入る。位、大覚に同じ已わって、真にこれ諸仏の子なり」文。華厳経に云わく「初発心の時、便ち正覚を成ず」文。大品経に云わく「初発心の時、即ち道場に坐す」文。これらの文のごとくんば、四十余年の大乗戒において、法華経のごとく速疾頓成の戒有り。何ぞただ歴劫修行の戒なりと云うや。

答えて云わく、これにおいて二義有り。

一義に云わく、四十余年の間において、歴劫修行の戒と速疾頓成の戒と有り。法華経においては、ただ一つの速疾頓成の戒のみ有り。その中において、四十余年の間の歴劫修行の戒においては法華経の戒に劣るといえども、四十余年の間の速疾頓成の戒においては法華経の戒に同じ。故に、上に出だすところの「衆生、仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入る」等の文は、法華経の「須臾もこれを聞かば、即ち究竟することを得」の文にこれ同じ。ただし、無量義経に四十余年の経を挙げて歴劫修行等と云えるは、四十余年の内の歴劫修行の戒ばかりを嫌うなり。速疾頓成の戒をば嫌わざるなり。

一義に云わく、四十余年の間の戒は一向に歴劫修行の戒、法華経の戒は速疾頓成の戒なり。ただし、上に出だすところの四十余年の諸経の速疾頓成の戒においては、凡夫地より速疾頓成するにあらず。凡夫地より無量の行を成じて、無量劫を経、最後において凡夫地より即身成仏す。故に、最後に従って速疾頓成とは説くなり。委悉にこれを論ずれば、歴劫修行の所摂なり。故に、無量義経には総じて四十余年の経を挙げて、仏、無量義経の速疾頓成に対して、「菩薩の歴劫修行を宣説す」と嫌いたまえり。大荘厳菩薩、この義を承けて領解して云わく「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提を成ずることを得ず。何をもっての故に。菩提の大直道を知らざるが故に、険逕を行くに、留難多きが故なり」乃至「大直道を行くに、留難無きが故なり」文。もし四十余年の間に、無量義経・法華経のごとく速疾頓成の戒これ有らば、仏みだりに四十余年の実義を隠したもうの失これ有り云々。

二義の中に後の義を作すは、存知の義なり。相待妙の戒これなり。

次に、絶待妙の戒とは、法華経においては別の戒無し。爾前の戒、即ち法華経の戒なり。その故は、爾前の人天の楊葉戒、小乗の阿含経の二乗の瓦器戒、華厳・方等・般若・観経等の歴劫菩薩の金銀戒の行者、法華経に至って互いに和会して一同と成る。ゆえに、人天の楊葉戒の人は、二乗の瓦器、菩薩の金銀戒を具し、菩薩の金銀戒に人天の楊葉、二乗の瓦器を具す。余はもって知んぬべし。

三悪道の人は、現身において戒無し。過去において人天に生まれし時、人天の楊葉、二乗の瓦器、菩薩の金銀戒を持ち、退して三悪道に堕つ。しかりといえども、その功徳、いまだ失せずしてこれ有り。三悪道の人、法華経に入る時、その戒これを起こすが故に、三悪道にもまた十界を具す。故に、爾前の十界の人、法華経に来至すれば、皆持戒なり。故に、法華経に云わく「これを戒を持つと名づく」文。安然和尚、広釈に云わく「法華に云わく『能く法華を説く、これを戒を持つと名づく』と」文。爾前経のごとく師に随って戒を持たず、ただこの経を信ずるが即ち持戒なり。爾前の経には十界互具を明かさず。故に、菩薩、無量劫を経て修行すれども、二乗・人天等の余戒の功徳無く、ただ一界の功徳を成ず。故に、一界の功徳をもって成仏を遂げず。故に、一界の功徳もまた成ぜず。

爾前の人、法華経に至りぬれば、余界の功徳を一界に具す。故に、爾前の経即ち法華経なり。法華経即ち爾前の経なり。法華経は爾前の経を離れず、爾前の経は法華経を離れず。これを妙法と言う。この覚り起こって後は、行者、阿含の小乗経を読むとも、即ち一切の大乗経を読誦し法華経を読む人なり。故に、法華経に云わく「声聞の法を決了して、これ諸経の王なり」文。阿含経即ち法華経という文なり。「一仏乗において分別して三を説きたもう」文。華厳・方等・般若即ち法華経という文な

り。「もし俗間の経書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」文。一切の外道・老子・孔子等の経は即ち法華経という文なり。

梵網経等の権大乗の戒と法華経の戒とに多くの差別有り。一には、彼の戒は二乗・七逆の者を許さず。二には、戒の功徳に仏果を具せず。三には、彼は歴劫修行の戒なり。かくのごとき等の多くの失有り。法華経においては、二乗・七逆の者を許す上、博地の凡夫、一生の中に仏位に入り妙覚に至って因果の功徳を具するなり。

正元二年庚申四月二十一日

日蓮　花押

(027) 同一鹹味御書

弘長元年('61)　40歳

夫れ、味に六種あり。一には淡き、二には鹹き、三には辛き、四には酸き、五には甘き、六には苦きなり。百味の餚膳を調うといえども、一つの鹹の味なければ、大王の膳とならず。山海の珍物も、鹹なければ気味なし。

大海に八つの不思議あり。一には漸々に転た深し。二には深くして底を得難し。三には同じ一つの

り。「もし俗間の経書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」文。一切の外道・老子・孔子等の経は即ち法華経という文なり。

梵網経等の権大乗の戒と法華経の戒とに多くの差別有り。一には、彼の戒は二乗・七逆の者を許さず。二には、戒の功徳に仏果を具せず。三には、彼は歴劫修行の戒なり。かくのごとき等の多くの失有り。法華経においては、二乗・七逆の者を許す上、博地の凡夫、一生の中に仏位に入り妙覚に至って因果の功徳を具するなり。

正元二年庚申四月二十一日

日蓮　花押

(027) 同一鹹味御書

弘長元年('61)　40歳

夫れ、味に六種あり。一には淡き、二には鹹き、三には辛き、四には酸き、五には甘き、六には苦きなり。百味の餚膳を調うといえども、一つの鹹の味なければ、大王の膳とならず。山海の珍物も、鹹なければ気味なし。

大海に八つの不思議あり。一には漸々に転た深し。二には深くして底を得難し。三には同じ一つの

鹹の味なり。四には潮限りを過ぎず。五には種々の宝蔵有り。六には大身の衆生、中に在って居住す。七には死屍を宿めず。八には万流・大雨、これを収めて不増不滅なり。

「漸々に転た深し」とは、法華経は、凡夫無解より聖人有解に至るまで、皆仏道を成ずるに譬うるなり。「深くして底を得難し」とは、法華経は唯仏与仏の境界にして、等覚已下は極むることなきが故なり。「同じ一つの鹹の味なり」とは、諸河に鹹なきは諸教に得道なきに譬う。諸河の水、大海に入って鹹となるは、諸教の機類、法華経に入って仏道を成ずるに譬う。「潮限りを過ぎず」とは、妙法を持つ人、むしろ身命を失するとも不退転を得るに譬う。「種々の宝蔵有り」とは、諸の仏菩薩の万行万善、諸波羅蜜の功徳、妙法に納まるに譬う。「大身の衆生の居住するところの処」とは、仏菩薩、大智慧あるが故に、大身の衆生と名づく。大身・大心・大荘厳・大調伏・大説法・大勢・大神通・大慈・大悲、おのずから法華経より生ずるが故なり。「死屍を宿めず」とは、永く謗法・一闡提を離るるが故なり。「不増不滅」とは、法華の意は一切衆生の仏性は同一の性なるが故なり。

蔓草漬けたる桶瓶の中の鹹は、大海の鹹に随って満ち干ぬ。禁獄を被る法華の持者は桶瓶の中の鹹のごとく、火宅を出で給える釈迦如来は大海の鹹のごとし。法華の持者を禁むるは、釈迦如来を禁むるなり。梵釈・四天もいかんが驚き給わざらん。十羅刹女の「頭七分に破れん」の誓い、この時にあらずんば、いずれの時か果たし給うべき。頻婆娑羅王を禁獄せし阿闍世、早く現身に大悪瘡を感得しき。法華の持者を禁獄する人、何ぞ現身に悪瘡を感ぜざらんや。

花押

(028)

教機時国抄

弘長2年('62)2月10日　41歳

本朝沙門日蓮これを註す。

一に教とは、釈迦如来の説くところの一切の経・律・論、五千四十八巻四百八十帙、天竺に流布すること一千年。仏の滅後一千一十五年に当たって、震旦国に仏経渡る。後漢の孝明皇帝の永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝の開元十八年庚午に至る六百六十四歳の間に、一切経渡り畢わんぬ。この一切の経・律・論の中に、小乗・大乗、権経・実経、顕教・密教あり。これらを弁うべし。この名目は、論師・人師よりも出でず、仏説より起こる。十方世界の一切衆生、一人も無くこれを用いる べし。これを用いざる者は外道と知るべきなり。阿含経を小乗と説くことは、方等・般若・法華・涅槃等の諸大乗経より出でたり。法華経には「一向に小乗を説いて法華経を説かざれば、仏慳貪に堕す」と説きたもう。涅槃経には「一向に小乗経を用いて仏を無常なりと云わん人は、舌口中に爛るべし」云々。

二に機とは、仏教を弘むる人は必ず機根を知るべし。舎利弗尊者は、金師に不浄観を教え浣衣の者には数息観を教うるあいだ、九十日を経て、化するところの弟子、仏法を一分も覚らずして還って邪

見を起こし、一闡提と成り畢わんぬ。仏は、金師に数息観を教え浣衣の者に不浄観を教えたもう。故に、須臾の間に覚ることを得たり。智慧第一の舎利弗すら、なお機を知らず。いかにいわんや、末代の凡師は、機を知り難し。ただし、機を知らざる凡師は、化するところの弟子に一向に法華経を教うべし。

問うて云わく、「無智の人の中にして、この経を説くことなかれ」との文は、いかん。

答えて云わく、機を知るは智人の説法することなり。また謗法の者に向かっては、一向に法華経を説くべし。毒鼓の縁と成さんがためなり。例せば不軽菩薩のごとし。また、智者と成るべき機と知れば、必ずまず小乗を教え、次に権大乗を教え、後に実大乗を教うべし。愚者と知れば、必ずまず実大乗を教うべし。信・謗共に下種となればなり。

三に時とは、仏教を弘めん人は必ず時を知るべし。譬えば、農人の秋冬に田を作るに、種と地と人の功労とは違わざれども、一分も益無く、還って損す。一段を作る者は少損なり。一町二町等の者は大損なり。春夏に耕作すれば、上・中・下に随って、皆分々に益有るがごとし。仏法もまたかくのごとし。時を知らずして法を弘めば、益無き上、還って悪道に堕つるなり。仏世に出でたまいて必ず法華経を説かんと欲するに、たとい機有れども時無きが故に、四十余年にはこの経を説きたまわず。故に、経に云わく「説時のいまだ至らざるが故なり」等云々。

仏の滅後の次の日より正法一千年は、持戒の者は多く破戒の者は少なし。正法一千年の次の日より

像法一千年は、破戒の者は多く無戒の者は少なし。像法一千年の次の日より末法一万年は、破戒の者は少なく無戒の者は多し。正法には、破戒・無戒を捨てて持戒の者を供養すべし。像法には、無戒の者を供養すること仏のごとくすべし。ただし、法華経を謗ぜん者をば、正像末の三時に亘って、持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも、共に供養すべからず。供養すれば、必ず国に三災七難起こり、供養せん者も必ず無間大城に堕つべきなり。法華経の行者の権経を謗ずるは、主君・親・師の、所従・子息・弟子等を罰するがごとし。権経の行者の法華経を謗ずるは、所従・子息・弟子等の、主君・親・師を罰するがごとし。また当世は、末法に入って二百一十余年なり。権経・念仏等の時か、法華経の時か、能く能く時刻を勘うべきなり。

四に国とは、仏教は必ず国によってこれを弘むべし。国には、寒国・熱国、貧国・富国、中国・辺国、大国・小国、一向偸盗国・一向殺生国・一向不孝国等これ有り。また一向小乗の国、一向大乗の国、大小兼学の国もこれ有り。しかるに、日本国は、一向小乗の国か、一向大乗の国か、大小兼学の国なるか、能く能くこれを勘うべし。

五に教法流布の先後とは、いまだ仏法渡らざる国には、いまだ仏法を聴かざる者あり。既に仏法渡れる国には、仏法を信ずる者あり。必ず先に弘まれる法を知って、後の法を弘むべし。先に小乗・権大乗弘まれば、後に必ず実大乗を弘むべし。先に実大乗弘まれば、後に小乗・権大乗を弘むべからず。瓦礫を捨てて金珠を取るべし。金珠を捨てて瓦礫を取ることなかれ已上。

この五義を知って仏法を弘めば、日本国の国師と成るべきか。

刻なり。これ、時を知れるなり。しかるに、日本国の当世の学者、あるいは法華経を抛って一向に称名念仏を行じ、あるいは小乗の戒律を教えて叡山の大僧を蔑り、あるいは教外を立てて法華の正法を軽しむ。これらは時に迷える者か。例せば、勝意比丘が喜根菩薩を謗じ、徳光論師が弥勒菩薩を蔑って、阿鼻の大苦を招きしがごとし。

日本国は一向法華経の国なり。例せば、舎衛国の一向大乗なりしがごとし。また天竺には、一向小乗の国、一向大乗の国、大小兼学の国もこれ有り。日本国は一向大乗の国なり。大乗の中にも法華経の国たるべきなり〈瑜伽論・肇公の記・聖徳太子・伝教大師・安然等の記、これ有り〉。これ、国を知れる者なり。しかるに、当世の学者、日本国の衆生に一向に小乗の戒律を授け、一向に念仏者等と成すは、「譬えば、宝器に穢食を入れたるがごとし」等云々〈宝器の譬えは、伝教大師の守護章に在り〉。

日本国には、欽明天皇の御宇に仏法百済国より渡り始めしより桓武天皇に至るまで、二百四十余年の間、この国に小乗・権大乗のみ弘まり、法華経有りといえども、その義いまだ顕れざりしがごとし。例せば、震旦国に法華経渡って三百余年の間、法華経有りといえども、その義いまだ顕れず。桓武天皇の御宇に伝教大師有して、小乗・権大乗の義を破して法華経の実義を顕せしより已来、また異義無く、純一に法華経を信ず。たとい華厳・般若・深密・阿含の大小の六宗を学する者も、法華経をもって所詮となす。いわんや天台・真言の学者をや。いかにいわんや在家の無智の者をや。例せば、崑崙山に石無く、蓬莱山に毒無きがごとし。

建仁より已来今に五十余年の間、大日・仏陀、禅宗を弘め、法然・隆寛、浄土宗を興し、実大乗を

破して権宗に付き、一切経を捨てて教外を立つ。譬えば、珠を捨てて石を取り、地を離れて空に登るがごとし。これは教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誡めて云わく「悪象に値うとも、悪知識に値わざれ」等云々。法華経の勧持品に「後の五百歳・二千余年に当たって、法華経の敵人に三類有るべし」と記し置きたまえり。当世は後の五百歳に当たれり。日蓮、仏語の実否を勘うるに、三類の敵人これ有り。これを隠せば、法華経の行者にあらず。これを顕せば、身命をば定めて喪わんか。

法華経第四に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」等云々。同じく第五に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。また云わく「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」。同第六に云わく「自ら身命を惜しまず」云々。涅槃経第九に云わく「譬えば、王使のよく談論して方便に巧みなるもの、命を他国に奉るに、むしろ身命を喪うとも、終に王の説くところの言教を匿さざるがごとく、智者もまたしかなり。凡夫の中において身命を惜しまず、かならず大乗方等を宣説すべし」云々。章安大師釈して云わく「『むしろ身命を喪うとも、教えを匿さず』とは、身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」等云々。

これらの本文を見れば、三類の敵人を顕さずんば、法華経の行者にあらず。これを顕すは、法華経の行者なり。しかれども、必ず身命を喪わんか。例せば師子尊者・提婆菩薩等のごとくならん云々。

二月十日

日蓮　花押

(029)

顕謗法抄

弘長2年('62)　41歳

本朝沙門日蓮撰す。

第一に八大地獄の因果を明かし、第二に無間地獄の因果の軽重を明かし、第三に問答料簡を明かし、第四に行者弘経の用心を明かす。

第一に八大地獄の因果を明かさば、

第一に等活地獄とは、この閻浮提の地の下一千由旬にあり。この地獄は、縦広斉等にして一万由旬なり。この中の罪人は、たがいに害心をいだく。もしたまたま相見れば、犬と猿とのあえるがごとし。各鉄の爪をもって互いにつかみさく。血肉既に尽きぬれば、ただ骨のみあり。あるいは獄卒手に鉄杖を取って、頭より足にいたるまで皆打ちくだく。身体くだけて沙のごとし。あるいは利刀をもって分々に肉をさく。しかれども、またよみがえり、よみがえりするなり。この地獄の寿命は、人間の昼夜五十年をもって第一四王天の一日一夜として、四王天の天人の寿命五百歳なり。四王天の五百歳を夜五十年をもって第一四王天の一日一夜として、その寿命五百歳なり。

この等活地獄の一日一夜として、その寿命五百歳なり。

この地獄の業因をいわば、ものの命をたつもの、この地獄に堕つ。螻・蟻・蚊・虻等の小虫を殺せる者も、懺悔なければ、必ずこの地獄に堕つべし。譬えば、はりなれども水の上におけば沈まざることなきがごとし。また懺悔すれども、懺悔の後に重ねてこの罪を作れば、後の懺悔にはこの罪きえがたし。譬えば、ぬすみをして獄に入りぬれば、出ずることゆるされがたきがごとし。また重ねて盗みをして獄に入りぬるものの、しばらく経て後に御免を蒙って獄を出ずれども、また重ねて盗みをして獄に入りぬれば、出ずることゆるされがたきがごとし。

されば、当世の日本国の人は、上一人より下万民に至るまで、この地獄をまぬかるる人は一人もあるべからず。いかに持戒のおぼえをとれる持律の僧たりとも、蟻・蝨なんどを殺さず、蚊・虻を過あやまたざるべきか。いわんや、その外、山野の鳥・鹿、江海の魚鱗を日々に殺すものをや。いかにいわんや、牛・馬・人等を殺す者をや。

第二に黒縄地獄とは、等活地獄の下にあり。縦広は等活地獄のごとし。獄卒、罪人をとらえて熱鉄の地にふせて、熱鉄の縄をもって身にすみうって、熱鉄の斧をもって縄に随ってきりさきけずる。また鋸をもってひく。また左右に大いなる鉄の山あり。山の上に鉄の幢を立て、鉄の縄をはり、罪人に鉄の山をおおせて縄の上よりわたす。縄より落ちてくだけ、あるいは鉄のかなえに堕とし入れてにらる。この苦は上の等活地獄の苦よりも十倍なり。人間の一百歳は、第二の忉利天の一日一夜なり。その寿一千歳なり。この天の寿一千歳を一日一夜として、この第二の地獄の寿命一千歳なり。

殺生の上に、偸盗とてぬすみをかさねたるもの、この地獄におつ。当世の偸盗のもの、ものをぬすむ上、物の主を殺すもの、この地獄に堕つべし。

第三に衆合地獄とは、黒縄地獄の下にあり。縦広は上のごとし。多くの鉄の山、二つずつ相向かえり。牛頭・馬頭等の獄卒、手に棒を取って罪人を駆って山の間に入らしむ。この時、両つの山迫り来って合わせ押す。身体くだけて、血流れて地にみつ。また種々の苦あり。人間の二百歳を第三の夜摩天の一日一夜として、この天の寿二千歳なり。この天の寿を一日一夜として、この地獄の寿命二千歳なり。

殺生・偸盗の罪の上に、邪婬とて他人のつまを犯す者、この地獄の中に堕つべし。しかるに、当世の僧尼士女、多分はこの罪を犯す。殊に僧にこの罪多し。士女は各々互いにまぼり、また人目をつつまざる故に、この罪をおかさず。僧は一人ある故に婬欲ともしきところに、もし有身らば父だだされ顕あらわれぬべきゆえに、独りある女人をおかさず。もしやかくると他人の妻をうかがい、ふかくか隠くれんとおもうなり。当世のほかとうとげなる僧の中に、ことにこの罪また多くあるらんとおぼゆ。されば、多分は、当世尊とうとげなる僧、この地獄に堕つべし。

第四に叫喚地獄とは、衆合の下にあり。縦広前に同じ。獄卒、悪声を出だして、弓箭をもって罪人をいる。また鉄の棒をもって頭を打って、熱鉄の地をはしらしむ。あるいは熱鉄のいりだなに、うち返し打ち返しこの罪人をあぶる。あるいは口を開けて、わける銅のゆを入るれば、五臓やけて下より直ちに出ず。寿命をいわば、人間の四百歳を第四の都率天の一日一夜とす。また都率天の寿四千歳なり。都率天の四千歳の寿を一日一夜として、この地獄の寿命四千歳なり。

この地獄の業因をいわば、殺生・偸盗・邪婬の上に、飲酒とて酒のむもの、この地獄に堕つべし。

当世の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆の大酒なる者、この地獄の苦免れがたきか。大論には、酒に三十六の失をいだし、梵網経には、「酒杯をすすめる者、五百生に手なき身と生まる」ととかせ給う。人師の釈には、「みみず(蚯蚓体)でいの者となる」とみえたり。いわんや、酒をうりて人にあたえたる者をや。いかにいわんや、酒に水を入れてうる(売)ものをや。当世の在家の人々、この地獄の苦まぬかれがたし。

第五に大叫喚地獄とは、叫喚の下にあり。縦広前に同じ。その苦の相は、上の四つの地獄の諸の苦に十倍して重くこれをうく(受)。寿命の長短を云わば、人間の八百歳は第五の化楽天の一日一夜なり。この天の寿八千歳なり。この天の八千歳を一日一夜として、この地獄の寿命八千歳なり。

殺生・偸盗・邪婬・飲酒の重罪の上に、妄語とてそらごと(虚言)せる者、この地獄に堕つべし。当世の諸人は、たとい賢人・上人なんどいわるる人々も、妄語(言)せざる時はありとも、妄語をせざる日はあるべからず。たとい日はありとも、月はあるべからず。たとい月はありとも、年はあるべからず。たとい年はありとも、一期生妄語せざる者はあるべからず。もししからば、当世の諸人、一人もこの地獄を免まぬかれがたきか。

第六に焦熱地獄とは、大叫喚地獄の下にあり。縦広前におなじ。この地獄に種々の苦あり。もしこの地獄の豆ばかりの火を閻浮提におけらん(置)に、一時にやけ(焼)尽きなん。いわんや、罪人の身の熬らかなることわたのごとくなるをや(綿)。この地獄の人は、前の五つの地獄の火を見ること雪のごとし。譬えば、人間の火の、薪の火よりも鉄銅の火の熱きがごとし。寿命の長短は、人間の千六百歳を第六の他化天

の一日一夜として、この天の寿一万六千歳なり。この天の一万六千歳を一日一夜として、この地獄の寿命一万六千歳なり。

業因を云わば、殺生・偸盗・邪婬・飲酒・妄語の上、邪見とて因果なしという者、この中に堕つべし。邪見とは、ある人云わく「人飢えて死ぬれば、天に生まるべし」等云々。総じて、因果をしらぬ者を邪見と申すなり。世間の法には、慈悲なき者を邪見の者という。当世の人々、この地獄を免れがたきか。

第七に大焦熱地獄とは、焦熱の下にあり。縦広前のごとし。前の六つの地獄の一切の諸苦に十倍して重く受くるなり。その寿命は半中劫なり。

業因を云わば、殺生・偸盗・邪婬・飲酒・妄語・邪見の上に、浄戒の比丘尼をおかせる者、この中に堕つべし。また比丘、酒をもって不邪婬戒を持てる婦女をたぼらかし、あるいは財物をあたえて犯せる者、この中に堕つべし。当世の僧の中に多くこの重罪あるなり。大悲経の文に「末代には士女は多くは天に生じ、僧尼は多くは地獄に堕つべし」ととかれたるは、これていのことか。心あらん人々は、恥はずべし、はずべし。

総じて、上の七大地獄の業因は、諸経論をもって勘え当世日本国の四衆にあて見るに、この七大地獄をはなるべき人を見ず、またきかず。涅槃経に云わく「末代に入って、人間に生ぜん者は、爪上の土のごとし。三悪道に堕つるものは、十方世界の微塵のごとし」と説かれたり。もししからば、我らが父母・兄弟等の死ぬる人は、皆、上の七大地獄にこそ堕ち給いては候らめ。あさましともいうば

かりなし。竜と蛇と鬼神と、仏・菩薩・聖人をば、いまだ見ず、ただ音にのみこれを聞きく。当世に上の七大地獄の業を造らざるものをば、いまだ見ず、またおとにもきかず。

しかるに、我が身よりはじめて一切衆生、七大地獄に堕つべしとおもえる者一人もなし。たとい言には堕つべきよしをさえずれども、心には堕つべしともおもわず。また僧尼士女、地獄の業をば犯すとはおもえども、あるいは地蔵菩薩等の菩薩を信じ、あるいは阿弥陀仏等の仏を恃み、あるいは種々の善根を修したる者もあり。皆おもわく「我はかかる善根をもてれば」なんどうちおもいて、地獄をもおじず。

あるいは宗々を習える人々は、各々の智分をたのみて、また地獄の因をおじず。しかるに、仏菩薩を信じたるも、愛子・夫婦なんどをあいし父母・主君なんどをうやまうには、雲泥なり。仏菩薩等をばかろくおもえるなり。されば、当世の人々の「仏菩薩を恃みぬれば、宗々を学したれば、地獄の苦はまぬかれなん」なんどおもえるは、僻案にや。心あらん人々は、よくよくはかりおもうべきか。

第八に大阿鼻地獄とは、または無間地獄と申すなり。欲界の最底、大焦熱地獄の下にあり。この地獄は縦広八万由旬なり。外に七重の鉄の城あり。地獄の極苦は、しばらくこれを略す。前の七大地獄ならびに別処の一切の諸苦をもって一分として、大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり。この地獄の罪人は、大焦熱地獄の罪人を見ること、他化自在天の楽しみのごとし。この地獄の香のくささを人かぐならば、四天下・欲界の六天の天・人、皆しなん。されども、出山・没山と申す山、この地獄の臭き気をおさえて人間へ来らせざるなり。故に、この世界の者死せずと見えぬ。もし、仏、この地獄の苦

をつぶさに説かせ給わば、人聴いて血をはいて死すべき故に、くわしく仏説き給わずとみえたり。

この無間地獄の寿命の長短は一中劫なり。一中劫と申すは、この人寿無量歳なりしが、百年に一寿を減じ、また百年に一寿を減ずるほどに、人寿十歳の時に減ずるを一減と申す。また十歳より百年に一寿を増し、また百年に一寿を増するほどに、八万歳に増するを一増と申す。この一増一減のほどを小劫として、二十の増減を一中劫とは申すなり。この地獄に堕ちたる者、これ程久しく無間地獄に住して、大苦をうくるなり。

業因を云わば、五逆罪を造る人、この地獄に堕つべし。五逆罪と申すは、一に殺父、二に殺母、三に殺阿羅漢、四に出仏身血、五に破和合僧なり。今の世には仏ましまさず。しかれば出仏身血あるべからず。和合僧なければ、破和合僧なし。阿羅漢なければ、殺阿羅漢これなし。ただ殺父・殺母の罪のみありぬべし。しかれども、王法のいましめきびしくあるゆえに、この罪おかしがたし。もししからば、当世には阿鼻地獄に堕つべき人すくなし。ただし、相似の五逆罪これあり。木画の仏像・堂塔等をやき、かの仏像等の寄進の所をうばいとり、率兜婆等をきりやき、智人を殺しなんどするもの多し。これらは大阿鼻地獄の十六の別処に堕つべし。されば、当世の衆生、十六の別処に堕つるもの多きか。また、謗法の者、この地獄に堕つべし。

第二に無間地獄の因果の軽重を明かさば、

問うて云わく、五逆罪より外の罪によりて、無間地獄に堕ちんことあるべしや。

答えて云わく、誹謗正法の重罪なり。

問うて云わく、証文いかん。

答えて云わく、法華経第二に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。この文に、謗法は阿鼻地獄の業と見えたり。

問うて云わく、五逆と謗法と、罪の軽重いかん。

答えて云わく、大品経に云わく「舎利弗、仏に白して言さく『世尊よ。五逆罪と破法罪と相似るや』。仏、舎利弗に告げたまわく『応に相似ると言うべからず。所以はいかん。もし般若波羅蜜を破らば、則ちこれ十方諸仏の一切智・一切種智を破る。仏宝を破るが故に、法宝を破るが故に、僧宝を破るが故に。三宝を破るが故に、則ち世間の正見を破る。世間の正見を破れば○則ち無量無辺阿僧祇の罪を得。無量無辺阿僧祇の罪を得已われば、則ち無量無辺阿僧祇の憂苦を受く』と」文。

また云わく「破法の業因縁集まるが故に、無量百千万億歳、大地獄の中に堕つ。この破法人の輩、一大地獄より一大地獄に至る。もし劫火起こる時は、他方の大地獄の中に至る。かくのごとく十方に遍く、彼の間に劫火起こるが故にかしこより死し、破法の業因縁いまだ尽きざるが故にこの間の大地獄の中に還来す」等云々。

法華経第七に云わく「四衆の中に、瞋恚を生じて心不浄なる者有って、悪口・罵詈して言わく『この無智の比丘』と。あるいは杖木・瓦石をもって、これを打擲す乃至千劫、阿鼻地獄において、大苦悩を受く」等云々。この経文の心は、法華経の行者を悪口しおよび杖をもって打擲せるもの、その後

に懺悔せりといえども、罪いまだ滅せずして、千劫、阿鼻地獄に堕ちたりと見えぬ。懺悔せる謗法の罪すら、五逆罪に千倍せり。いわんや、懺悔せざらん謗法においては、阿鼻地獄を出ずる期かたかるべし。故に、法華経第二に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん。一劫を具足して、劫尽きなば、さらに生まれん。かくのごとく展転して、無数劫に至らん」等云々。

第三に問答料簡を明かさば、

問うて云わく、五逆罪と謗法罪との軽重はしんぬ。謗法の相貌いかん。

答えて云わく、天台智者大師の梵網経の疏に云わく「謗とは背くなり」等云々。法に背くが謗法にてはあるか。天親の仏性論に云わく「もし憎背せば」等云々。この文の心は、正法を人に捨てさするが謗法にてあるなり。

問うて云わく、委細に相貌をしらんとおもう。あらあらしめすべし。

答えて云わく、涅槃経第五に云わく「もし人有って如来は無常なりと言わば、いかんぞ、この人、舌堕落せざらん」等云々。この文の心は、仏を無常といわん人は舌堕落すべしと云々。

問うて云わく、諸の小乗経に、仏を無常と説かるる上、また化するところの衆、皆無常と談じき。もししからば、仏ならびに化するところの衆の舌、堕落すべしや。

答えて云わく、小乗経の仏を小乗経の人が無常ととき談ずるは、舌ただれざるか。大乗経に向かっ

て仏を無常と談じ、小乗経に対して大乗経を破するが、舌は堕落するか。これをもっておもうに、おのれが依経には随えども依経よりすぐれたる経を破するは、破法となるか。もししからば、たとい観経・華厳経等の権大乗経の人々、依るところの経の文のごとく修行すとも、かの経にすぐれたる経々に随わず、またすぐれざる由を談ぜば、謗法となるべきか。されば、観経等の経のごとく法をえたりとも、観経等を破せる経の出来したらん時その経に随わずば、破法となるべきか。小乗経をもってなぞらえて心うべし。

問うて云わく、双観経等に「乃至十念するに、即ち往生することを得ん」なんどとかれて候が、彼のきょうの教えのごとく十念申して往生すべきを、後の経をもって申しやぶらば、謗法にては候まじきか。

答えて云わく、仏、観経等の四十余年の経々を束ねて「未顕真実」と説かせ給いぬれば、この経文に随って、「『乃至十念するに、即ち往生することを得ん』等は、実には往生しがたし」と申す。この経文なくば、謗法となるべし。

問うて云わく、ある人云わく「無量義経の『四十余年にはいまだ真実を顕さず』の文は、あえて四十余年の一切の経々ならびに文々句々を、皆『未顕真実』と説き給うにはあらず。ただ四十余年の経々に、処々に決定性の二乗を『永く成仏せず』ときらわせ給い、釈迦如来を『始めて正覚を成ず』と説き給いしを、その言ばかりをさして『未顕真実』とは申すなり。あえて余事にはあらず。しかるを、みだりに『四十余年』の文を見て、観経等の凡夫のために九品往生なんどを説きたるを、みだり

に『往生はなきことなり』なんど押し申す。あにおそろしき謗法の者にあらずや」なんど申すは、いかに。

答えて云わく、この料簡は、東土の得一が料簡に似たり。得一が云わく「『未顕真実』とは、決定性の二乗を、仏、爾前の経にして『永く成仏せず』ととかれしを、『未顕真実』とは嫌わるるなり。前四味の一切には亘るべからず」と申しき。伝教大師は、前四味に亘って、文々句々に「未顕真実」と立て給いき。されば、この料簡は古の謗法の者の料簡に似たり。

ただし、しばらく汝等が料簡に随って尋ね明らめん。問う。「法華已前に二乗作仏を嫌いけるを、今『未顕真実』という」とならば、まず決定性の二乗を仏の「永く成仏せず」ととかせ給いし処々の経文ばかりは、「未顕真実」の仏の妄語なりと承伏せさせ給うか。さては仏の妄語は勿論なり。もしからば、妄語の人の申すことは、有無共に用いぬことにてあるぞかし。「決定性の二乗は永く成仏せず」の語ばかり妄語となり、もし余の菩薩・凡夫の往生・成仏等は実語となるべきならば、信用しがたきことなり。譬えば、東方を西方と妄語し申さん人は、西方を東方と申すべし。「二乗は永く成仏せず」と説く仏は、余の菩薩の成仏をゆるすも、また妄語にあらずや。五乗はただ一仏性なり。二乗の仏性をかくし、菩薩・凡夫の仏性をあらわすは、返って菩薩・凡夫の仏性をかくすなり。

ある人云わく「『四十余年にはいまだ真実を顕さず』とは、成仏の道ばかり未顕真実なり。往生等は未顕真実にはあらず」。

また難じて云わく、四十余年が間の説の成仏を「未顕真実」と承伏せさせ給わば、双観経に云う

「正覚を取らじ」「成仏してより已来、およそ十劫を歴」等の文は「未顕真実」と承伏せさせ給うか。もししからば、四十余年の経々にして法蔵比丘の阿弥陀仏になり給わずば、法蔵比丘の成仏すでに妄語なり。もし成仏妄語ならば、いずれの仏か行者を迎え給うべきや。

また、かれ、この難を通じて云わく、「四十余年が間は成仏はなし。阿弥陀仏は今の成仏にはあらず、過去の成仏なり」等云々。

今難じて云わく、今日の四十余年の経々にして実の凡夫の成仏を許されずば、過去遠々劫の四十余年の権経にても成仏叶いがたきか。三世の諸仏の説法の儀式、皆同じきが故なり。

あるいは云わく「『疾く無上菩提を成ずることを得ず』ととかるれば、四十余年の経々にては疾くこそ仏にはならねども、遅く劫を経てはなるか」。

難じて云わく、次下の大荘厳菩薩等の領解に云わく「不可思議無量無辺阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提を成ずることを得ず」等と云々。この文のごとくならば、劫を経ても、爾前の経ばかりには成仏はかたきか。

あるいは云う。華厳宗の料簡に云わく「四十余年の内には、華厳経ばかりは入るべからず。華厳経にすでに往生・成仏これあり。なんぞ華厳経を行じて往生・成仏をとげざらん」。

答えて云わく、「四十余年の内に華厳経入るべからず」とは、華厳宗の人師の義なり。無量義経には、正しく四十余年の内に「華厳海空」と名目を呼び出だして、四十余年の内にかずえ入れられたり。人師を本とせば、仏に背くになりぬ。

問うて云わく、法華経をは離れて往生・成仏をとげずば、仏世に出でさせ給いては、ただ法華経ばかりをこそ説かせ給わめ。なんぞわずらわしく四十余年の経々を説かせ給うや。

答えて云わく、この難は仏自ら答え給えり。「もしただ仏乗を讃むるのみならば、衆生は苦に没し、法を破して信ぜざるが故に、三悪道に墜ちなん」等の経文これなり。

問うて云わく、いかなれば、爾前の経をば衆生謗ぜざるや。

答えて云わく、爾前の経々は万差なれども、束ねてこれを論ずれば、随他意と申して衆生の心をとかれてはんべり。故に違することなし。譬えば、水に石をなぐるにあらそうことなきがごとし。また品々しなじなの説教はんべれども、九界の衆生の心を出でず。衆生の心は皆、善につけ悪につけて、迷いを本とするゆえに、仏にはならざるか。

問うて云わく、衆生謗ずべきゆえに、仏、最初に法華経をとき給わずして四十余年の後に法華経をとき給わば、汝、なんぞ当世に権経をばとかずして左右なく法華経をといて、人に謗をなさせて悪道に堕とすや。

答えて云わく、仏在世には、仏、菩提樹の下に坐し給いて機をかがみ給うに、「当時、法華経を説くならば、衆生謗じて悪道に堕ちぬべし。四十余年すぎて後にとかば、謗ぜずして、初住不退、乃至妙覚にのぼりぬべし」と知見しましまし。

末代濁世には、当機にして初住の位に入るべき人は、万に一人もありがたかるべし。また、能化の人も仏にあらざれば、機をかがみんことも、これかたし。されば、逆縁・順縁のためにまず法華経を

説くべしと、仏ゆるし給えり。ただし、また滅後なりとも、当機衆になりぬべきものには、まず権経をとくべし。説くこともあるべし。

また、悲を先とする人は、まず権経を説くべし。不軽菩薩のごとし。また末代の凡夫は、なにとなくとも悪道を免れんことはかたかるべし。同じく悪道に堕つるならば、法華経を謗ぜさせて堕とすならば世間の罪をもって堕ちたるにはにるべからず。「法を聞き謗を生じて地獄に堕つるは、恒沙の仏を供養する者に勝る」等の文のごとし。この文の心は、法華経を謗じて地獄に堕ちたるは、釈迦仏・阿弥陀仏等の恒河沙の仏を供養し帰依・渇仰する功徳には、百千万倍すぎたりととかれたり。

問うて云わく、上の義のごとくならば、華厳・法相・三論・真言・浄土等の祖師は、みな謗法に堕すべきか。華厳宗には「華厳経は法華経には雲泥超過せり」。法相・三論もて、かくのごとし。真言宗には、日本国に二つの流れあり。東寺の真言は「法華経は華厳経におとれり。いかにいわんや大日経においてをや」。天台の真言には「大日経と法華経とは、理は斉等なり。印・真言等は超過せり」と云々。これらは皆悪道に堕つべしや。

答えて云わく、宗をたて経々の勝劣を判ずるに、二つの義あり。一は似破、二は能破なり。一に似破とは、他の義は吉しとおもえども、これをはす。かの正義を分明にあらわさんがためか。二に能破とは、実に他人の義の勝れたるをば弁えずして、迷って我が義すぐれたりとおもいて、心中よりこれを破するをば能破という。されば、彼の宗々の祖師に、似破・能破の二つの義あるべし。心中には法

華経は諸経に勝れたりと思えども、しばらく違して法華経の義を顕さんとおもいて、これをはすることあり。提婆達多・阿闍世王・諸の外道が仏のかたきとなりて仏徳を顕し、後には仏に帰せしがごとし。また実の凡夫が仏のかたきとなりて悪道に堕つることこれ多し。

されば、諸宗の祖師の中に回心の筆をかかずば、謗法の者、悪道に堕ちたりとしるべし。三論の嘉祥、華厳の澄観、法相の慈恩、東寺の弘法等は、回心の筆これあるか。よくよく尋ねならうべし。

問うて云わく、まことに今度生死をはなれんとおもわんに、なにものをかいとい、なにものをか願うべきや。

答う。諸の経文には女人等をいとうべしとみえたれども、双林最後の涅槃経に云わく「菩薩は、この身に無量の過患の具足充満すと見るといえども、涅槃経を受持せんと欲せんがための故に、なおよく将護して乏少ならしめず。菩薩は、悪象等においては心に恐怖なく、悪知識においては怖畏の心を生ず。何をもっての故に。この悪象等はただ能く身を壊るのみにして、心を壊ること能わず、悪知識は二つともに壊るが故に。悪象のごときはただ一身を壊るのみにして、悪知識は無量の身、無量の善心を壊る。悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至る」等云々。この経文の心は、後世を願わん人は一切の悪縁を恐るべし、一切の悪縁よりは悪知識をおそるべしとみえたり。

されば、大荘厳仏の末の四たりの比丘は、自ら悪法を行じて十方の大阿鼻地獄を経るのみならず、六百四万億人の檀那等をも十方の地獄に堕としぬ。鴦崛摩羅は、摩尼跋陀が教えに随って九百九十九人の指をきり、結句、母ならびに仏をがいせんとぎす。善星比丘は、仏の御子、十二部経を受持し、

四禅定を得え、欲界の結を断じたりしかども、苦得外道の法を習って、生身に阿鼻地獄に堕ちぬ。提婆が六万蔵・八万蔵を暗にしたりしかども、外道の五法を行じて、現に無間に堕ちにき。阿闍世王の父を殺し母を害せんと擬せし、大象を放って仏をうしないたてまつらんとせしも、悪師・提婆が教えなり。倶伽利比丘が舎利弗・目連をそしりて生身に阿鼻に堕せし、大族王の五竺の仏法僧をほろぼせし、大族王の舎弟は加湿弥羅国の王となりて健駄羅国の率都婆・寺塔一千六百所をうしないし、金耳国王の仏法をほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万人の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王の仏法を滅ぼし菩提樹をきり根をほりし、周の宇文王の四千六百余所の寺院を失い二十六万六百余の僧尼を還俗せしめし、これらは皆、悪師を信じ、悪鬼その身に入りし故なり。

問うて云わく、天竺・震旦は、外道が仏法をほろぼし、小乗が大乗をやぶるとみえたり。この日本国もしかるべきか。

答えて云わく、月支・尸那には外道あり、小乗あり。この日本国には外道なし、小乗の者なし。紀伝博士等これあれども、仏法の敵となるものこれなし。小乗の三宗これあれども、彼の宗を用いて生死をはなれんとおもわず、ただ大乗を心うる才覚とおもえり。

ただし、この国には大乗の五宗のみこれあり。人々皆おもえらく、彼の宗々にして生死をはなるべしとおもう故に、あらそいも多くいできたり、また檀那の帰依も多くあるゆえに、利養の心もふかし。

第四に行者仏法を弘むる用心を明かさば、

夫れ、仏法をひろめんとおもわんものは、必ず五義を存して正法をひろむべし。五義とは、一には教、二には機、三には時、四には国、五には仏法流布の前後なり。

第一に教とは、如来一代五十年の説教は大小・権実・顕密の差別あり。華厳宗には五教を立てて一代をおさめ、その中には華厳・法華を最勝とし、華厳・法華の中に華厳経をもって第一とす。南三北七ならびに華厳宗の祖師、日本国の東寺の弘法大師この義なり。法相宗は三時に一代をおさめ、その中に深密・法華経を一代の聖教にすぐれたりとす。深密・法華の中に、法華経は了義経の中の不了義経、深密経は了義経の中の了義経なり。三論宗にまた二蔵三時を立つ。三時の中の第三の中道教とは、般若・法華なり。般若・法華の中には般若最第一なり。

真言宗には日本国に二つの流れあり。東寺流は、弘法大師、十住心を立て、第八法華・第九華厳・第十真言。法華経は大日経に劣るのみならず、なお華厳経に下るなり。天台の真言は、慈覚大師等、大日経と法華経とは広・略の異、法華経は理秘密、大日経は事理倶密なり。

浄土宗には、聖道・浄土、難行・易行、雑行・正行を立てたり。浄土の三部経より外の法華経等の一切経は、難行・聖道・雑行なり。

禅宗には二つの流れあり。一流は、一切経・一切の宗の深義は禅宗なり。一流は、如来一代の聖教は皆言説、如来の口輪の方便なり。禅宗は如来の意密、言説におよばず教外の別伝なり。

倶舎宗・成実宗・律宗は小乗宗なり。天竺・震旦には小乗宗の者、大乗を破することこれ多し。日

本国にはその義なし。

問うて云わく、諸宗の異義区なり。一々にその謂れありて、得道をなるべきか。また、諸宗、皆謗法となりて、一宗ばかり正義となるべきか。

答えて云わく、異論・相違ありといえども、皆得道なるか。仏の滅後四百年にあたりて、健駄羅国の迦弐色迦王、仏法を貴み、一夏、僧を供し仏法をといしに、一々の僧、異義多し。この王不審して云わく「仏説は定めて一ならん」と。終に脇尊者に問う。尊者答えて云わく「金杖を折って種々の物につくるに、形は別なれども金杖は一なり。形の異なるをば諍うといえども、金たることをあらそわず。門々不同なれば、いりかどをば諍えども、入る理は一なり」等云々。また求那跋摩云わく「諸論各端を異にすれども、修行せば理に二無し。偏執せば是非有り。達せば違諍無し」等云々。また、五百羅漢の真因各異なれども、同じく聖理をえたり。大論の四悉檀の中の対治悉檀、摂論の四意趣の中の衆生意楽意趣、これらは、この善を嫌いこの善をほむ。檀・戒・進等、一々にそしり一々にほむる、皆得道をなる。これらをもってこれを思うに、護法・清弁のあらそい、智光・戒賢の空・中、南三北七の頓・漸・不定、一時・二時・三時・四時・五時、四宗・五宗・六宗、天台の五時・華厳の五教、真言教の東寺・天台の諍い、浄土宗の聖道・浄土、禅宗の教外・教内、入り門は差別せりというとも、実理に入ることはただ一なるべきか。

難じて云わく、「華厳の五教、法相・三論の三時、禅宗の教外、浄土宗の難行・易行、南三北七の五時等、門はことなりといえども、入る理は一にして皆仏意に叶い謗法とならず」といわば、謗法とい

うことあるべからざるか。謗法とは、法に背くということなり。法に背くと申すは、小乗は小乗経に背き、大乗は大乗経に背く。法に背かば、あに謗法とならざらん。謗法とならば、なんぞ苦果をまねかざらん。この道理にそむく。これひとつ。

大般若経に云わく「般若を謗ずる者は、十方の大阿鼻地獄に堕つべし」。法華経に云わく「もし人信ぜずして乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」。涅槃経に云わく「世に難治の病三つあり。一には四重、二には五逆、三には謗大乗なり」。これらの経文あにむなしかるべき。これらは証文なり。されば、無垢論師・大慢婆羅門・熙連禅師・嵩霊法師等は、正法を謗じて、現身に大阿鼻地獄に堕ち、舌口中に爛れたり。これは現証なり。

天親菩薩は小乗の論を作って諸大乗経をはしき。後に無著菩薩に対して、この罪を懺悔せんがために舌を切らんとくい給いき。謗法もし罪とならずば、いかんが千部の論師、懺悔をいたすべき。闡提とは天竺の語、ここには不信と翻ず。不信とは、「一切衆生悉有仏性を信ぜざるは、闡提の人」と見えたり。不信とは謗法の者なり。恒河の七種の衆生の第一は、一闡提謗法、常没の者なり。第二は、五逆謗法、常没等の者なり。あに謗法をおそれざらん。

答えて云わく、謗法とは、ただ由なく仏法を謗ずるを謗法というか。我が宗をたてんがために余法を謗ずるは、謗法にあらざるか。摂論の四意趣の中の衆生意楽意趣とは、たとい人ありて一生の間一善をも修せず、ただ悪を作る者あり、しかるに、小縁にあいて、いずれの善にてもあれ一善を修せんと申す。これは随喜・讃歎すべし。また善人あり、一生の間ただ一善を修す。しかるを、他の善へう

つさんがために、そのぜんをそしる。「一事の中において、あるいは呵め、あるいは讃む」という、これなり。大論の四悉檀の中の対治悉檀、またこれおなじ。浄名経の弾呵と申すは、阿含経の時ほめし法をそしるなり。

これらをもっておもうに、あるいは衆生多く小乗の機あれば大乗を謗って小乗経に信心をまし、あるいは衆生多く大乗の機なれば小乗経をそしりて大乗経に信心をあつくす。あるいは衆生弥陀仏に縁あれば諸仏をそしりて弥陀に信心をまさしめ、あるいは衆生多く地蔵に縁あれば諸の菩薩をそしりて地蔵をほむ。あるいは衆生多く華厳経に縁あれば諸経をそしりて華厳経をほむ。あるいは衆生大般若経に縁あれば諸経をそしりて大般若経をほむ。あるいは衆生法華経、あるいは衆生大日経等、同じく心うべし。機を見て、あるいは讃め、あるいは毀る。共に謗法とならず。しかるを、機をしらざる者、みだりに、あるいは毀るは、謗法となるべきか。例せば、華厳宗・三論・法相・天台・真言・禅・浄土等の諸師の諸経をはして我が宗を立つるは、謗法とならざるか。

難じて云わく、宗を立つるに諸経・諸宗を破し、仏菩薩を讃むるに仏菩薩を破し、他の善根を修せしめんがためにこの善根をはする、くるしからずば、阿含等の諸の小乗経に華厳経等の諸大乗経をはしたる文ありや。華厳経に法華・大日経等の諸大乗経をはしたる文、これありや。

答えて云わく、阿含の小乗経に諸大乗経をはしたる文はなけれども、華厳経には二乗・大乗・一乗をあげて二乗・大乗をはし、涅槃経には諸大乗経をあげて涅槃経に対してこれをはす。密厳経には「一切経の中の王なり」ととき、無量義経には「四十余年にはいまだ真実を顕さず」ととかれ、阿弥

陀経には念仏に対して諸経を「小善根」ととかる。これらの例、一にあらず。故にまた、彼の経々による人師、皆この義を存せり。これらをもって思うに、宗を立つる方は、我が宗に対して諸経を破するはくるしからざるか。

難じて云わく、華厳経には小乗・大乗・一乗とあげ、密厳経には「一切経の中の王なり」ととかれ、涅槃経には「この諸の大乗」とあげ、阿弥陀経には念仏に対して諸経を「小善根」とはとかれたれども、無量義経のごとく、四十余年と年限を指して、その間の大部の諸経、阿含・方等・般若・華厳等の名をよびあげて勝劣をとけること、これなし。涅槃経の「この諸の大乗」の文ばかりこそ、双林最後の経として「この諸の大乗」ととかれたれば、涅槃経には一切経は嫌わるかとおぼうれども、「この諸の大乗経」と挙げて、次下に諸大乗経を列ねたるに、十二部・修多羅・方等・般若等とあげたり。無量義経・法華経をば載せず。ただし、無量義経に挙ぐるところは、四十余年の阿含・方等・般若・華厳経をあげたり。いまだ法華経・涅槃経の勝劣はみえず。密厳に「一切経の中の王なり」とはあげたれども、一切経をあぐる中に華厳・勝鬘等の諸経の名をあげて「一切経の中の王なり」ととく故に、法華経等とはみえず。阿弥陀経の「小善根」は、時節もなし、小善根の相貌もみえず。たれかしる、小乗経を小善根というか、また人天の善根を小善根というか、また観経・双観経の説くところの諸善を小善根というか。いまだ一代を念仏に対して小善根というとはきこえず。また大日経・六波羅蜜経等の諸の秘教の中にも、一代の一切経を嫌ってその経をほめたる文はなし。

ただし、無量義経ばかりこそ、前四十余年の諸経を嫌い法華経一経に限って、已説の四十余年、今

説の無量義経、当説の未来にとくべき涅槃経を嫌って、法華経ばかりをほめたり。釈迦如来、過去・現在・未来の三世の諸仏、世にいで給いて各々一切経を説き給うに、いずれの仏も法華経第一なり。例せば、上郎・下郎は不定なり。田舎にしては百姓・郎従等は侍を上郎という。洛陽にして源平等已下を下郎という。三家を上郎という。また主を王といわば、百姓も宅中の王なり。地頭・領家等また村・郷・郡・国の王なり。しかれども大王にはあらず。

小乗経には無為涅槃の理、王なり。小乗の戒・定等に対して、智慧は王なり。諸大乗経には中道の理、王なり。また華厳経は円融相即の王、般若経は空理の王、大集経は守護正法の王、薬師経は薬師如来の別願を説く経の中の王、双観経は阿弥陀仏の四十八願を説く経の中の王、大日経は印・真言を説く経の中の王、一代一切経の王にはあらず。法華経は真諦・俗諦、空・仮・中、印・真言、無為の理、十二大願、四十八願、一切諸経の説くところの所詮の法門の大王なり。これは教をしれる者なり。

しかるを、善無畏・金剛智・不空・法蔵・澄観・慈恩・嘉祥・南三北七・曇鸞・道綽・善導・達磨等の我が立つるところの依経を一代第一といえるは、教をしらざる者なり。ただし、一切の人師の中には、天台智者大師一人、教をしれる人なり。曇鸞・道綽等の聖道・浄土、難行・易行、正行・雑行は、源、十住毘婆沙論に依る。彼の本論に難行の内に法華・真言等を入ると謂うは僻案なり。論主の心と、論の始中終をしらざる失あり。慈恩が深密経の三時に一代をおさめたること、また本経の三時に一切経の摂まらざることをしらざる失あり。法蔵・澄観等が、五教に一代をおさむる中に法華経・華厳経を円教と立て、また華厳経は法華経に勝れたりとおもえるは、依るところの華厳経に二乗作仏・

久遠実成をあかさざるに記小・久成ありとおもい、華厳よりも超過の法華経を我が経に劣ると謂うは、僻見なり。三論の嘉祥の二蔵等、また法華経に般若経すぐれたりとおもうことは、僻案なり。善無畏等の大日経は法華経に勝れたりという、法華経の心をしらざるのみならず、大日経をもしらざる者なり。

問うて云わく、これら皆謗法ならば、悪道に堕ちたるか、いかん。

答えて云わく、謗法に上・中・下・雑の謗法あり。慈恩・嘉祥・澄観等が謗法は、上・中の謗法か。その上、自身も謗法としれるかのあいだ、悔い還す筆これあるか。また他師をはするに二つあり。能破・似破これなり。教はまさりとしれども、是非をあらわさんがために法をはす。これは似破なり。能破とは、実にまされる経を劣れるとおもうてこれをはす。これは悪能破なり。また現におとれるをはす。これ善能破なり。

ただし、脇尊者の金杖の譬えは、小乗経は多しといえども、同じく苦・空・無常・無我の理なり。諸人同じくこの義を存して十八部・二十部相諍論あれども、ただ門の諍いにて理の諍いにはあらず。故に、共に謗法とならず。外道が小乗経を破するは、外道の理は常住なり、小乗経の理は無常なり空なり。故に、外道が小乗経をはするは謗法となる。大乗経の理は中道なり、小乗経は空なり。小乗経の者の大乗経をはするは謗法となる。大乗経の者が小乗経をはするは破法とならず。

諸大乗経の中の理は未開会の理、いまだ記小・久成これなし。法華経の理は開会の理、記小・久成これあり。諸大乗経の者が法華経をはするは、謗法となるべし。法華経の者の諸大乗経を謗ずるは、

謗法となるべからず。大日経・真言宗は、未開会にして記小・久成なくば、法華経已前なり。開会にして記小・久成を許さば、涅槃経とおなじ。ただし、善無畏三蔵・金剛智・不空・一行等の性悪の法門・一念三千の法門は、天台智者の法門を盗ぬすめるか。もししからば、善無畏等の謗法は似破か、また雑謗法か。五百羅漢の真因は、小乗の十二因縁のことなり。無明・行等を縁として空理に入ると見えたり。門は諍えども、謗法とならず。摂論の四意趣、大論の四悉檀等は、無著菩薩・竜樹菩薩、滅後の論師として法華経をもって一切経の心を得えて、四悉・四意趣等を用いて爾前の経々の意を判ずるなり。未開会の四意趣・四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を同ぜば、あに謗法にあらずや。これらをよくよくしるは、教をしれる者なり。

四句あり。一に「信じて解せず」、二に「解して信ぜず」、三に「また信じまた解す」、四に「信ずるにあらず解するにあらず」。

問うて云わく、「信じて解せず」の者は謗法なるか。

答えて云わく、法華経に云わく「信をもって入ることを得たり」等云々。涅槃経の九に云わく。難じて云わく、涅槃経三十六に云わく「我、契経の中において説く。二種の人有り、仏法僧を謗ず。一には、不信にして瞋恚の心の故に。二には、信ずといえども義を解せざるが故に。善男子よ。もし人信心あって智慧有ることなきは、この人は則ち能く無明を増長す。もし智慧有って信心有ることなきは、この人は則ち能く邪見を増長す。善男子よ。不信の人は、瞋恚の心の故に、説いて仏法僧の宝有ることなしと言わん。信ずる者にして慧無きは、顚倒して義を解するが故に、法を聞く者をして仏

法僧を謗ぜしむ」等云々。この二人の中には「信じて解せず」の者を謗法と説く、いかん。

答えて云わく、この「信じて解せず」の者は、涅槃経の三十六に、恒河の七種の衆生の第二の者を説くなり。この第二の者は、涅槃経の「一切衆生ことごとく仏性有り」の説を聞いてこれを信ずといえども、また不信の者なり。

問うて云わく、いかんぞ、信ずといえども不信なるや。

答えて云わく、「一切衆生ことごとく仏性有り」の説を聞いてこれを信ずといえども、また心を爾前の経に寄する一類の衆生をば、無仏性の者と云うなり。これ「信じて信ぜず」の者なり。

問うて云わく、証文いかん。

答えて云わく、恒河第二の衆生を説いて云わく、経に云わく「かくのごとき大涅槃経を聞くことを得て信心を生ずる、これを名づけて出となす」。また云わく「仏性はこれ衆生に有りと信ずといえども、必ずしも一切みなこれ有るにはあらずとす。この故に名づけて信不具足となす」文。この文のごとくんば、口には涅槃を信ずといえども、心に爾前の義を存する者なり。またこの第二の人を説いて云わく「信ずる者にして慧無きは、顚倒して義を解するが故に」等云々。「顚倒して義を解す」とは、実経の文を得て権経の義を覚る者なり。

問うて云わく、「信じて解せず」のものの得道の文いかん。

答えて云わく、涅槃経の三十二に云わく「この菩提の因はまた無量なりといえども、もし信心を説かば、すでに摂め尽くす」文。九に云わく「この経を聞き已わって、ことごとく菩提の因縁と作る。

法声・光明、毛孔に入る者は、必定して当に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云々。法華経に云わく「信をもって入ることを得たり」等云々。

問うて云わく、「解して信ぜず」の者はいかん。

答う。恒河の第一の者なり。

問うて云わく、証文いかん。

答えて云わく、涅槃経の三十六に第一を説いて云わく「人有って、この大涅槃経を聞く。『如来は常住にして変易有ることなく、常楽我浄なり。終に畢竟して涅槃に入るにあらず。一切衆生ことごとく仏性有り。一闡提の人、方等経を謗じ五逆罪を作し四重禁を犯すとも、必ず当に菩提の道を成ずることを得べし。須陀洹の人、斯陀含の人、阿那含の人、阿羅漢の人、辟支仏等、必ず当に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし』と。この語を聞き已わって、不信の心を生ず」等云々。

問うて云わく、この文には「不信」と見えたり、「解して信ぜず」とは見えず、いかん。

答えて云わく、第一の結文に云わく「もし智慧有って信心有ることなきは、この人は則ち能く邪見を増長す」文。

(030)

持妙法華問答抄

弘長3年('63)　42歳

そもそも、希に人身を受け、たまたま仏法をきけり。しかるに、法に浅深あり人に高下ありと云えり。いかなる法を修行してか、速やかに仏になり候べき。願わくは、その道を聞かんと思う。

答えて云わく、家々に尊勝あり、国々に高貴あり。皆その君を貴み、その親を崇むといえども、あに国王にまさるべきや。ここに知んぬ、大小・権実は家々の諍いなれども、一代聖教の中には法華独り勝れたり。これ、頓証菩提の指南、直至道場の車輪なり。

疑って云わく、人師は経論の心を得て釈を作る者なり。しからば則ち、宗々の人師、面々各々に、教門を設しつらい、釈を作り義を立てて菩提を証得せんと志す。何ぞ虚しかるべきや。しかるに、法華独り勝ると候わば、心せばくこそ覚え候え。

答えて云わく、法華独りいみじと申すが心せばく候わば、釈尊程心せばき人は世に候わじ。何ぞ誤りの甚だしきや。しばらく一経・一流の釈を引いて、その迷いをさとらせん。

無量義経に云わく「種々に法を説きき。種々に法を説くことは、方便力をもってす。四十余年には未だ真実を顕さず」云々。この文を聞いて、大荘厳等の八万人の菩薩、一同に「無量無辺不可思議

阿僧祇劫を過ぐとも、終に無上菩提を成ずることを得ず」と領解し給えり。この文の心は、華厳・阿含・方等・般若の四十余年の経に付いて、いかに念仏を申し禅宗を持って仏道を願い、無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、無上菩提を成ずることを得じと云えり。

しかのみならず、方便品には「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」と説き、また「ただ一乗の法のみ有り。二無くまた三無し」と説いて、この経ばかりまことなりと云い、また二の巻には「ただ我一人のみ、能く救護をなす」と教え、「ただ楽って大乗経典を受持するのみにして、乃至、余経の一偈をも受けざれ」と説き給えり。文の心は、ただわれ一人して、よくすくいまもることをなす。法華経をうけたもたんことをねがいて、余経の一偈をもうけざれと見えたり。また云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と云々。この文の心は、もし人この経を信ぜずしてこの経にそむかば、則ち一切世間の仏のたねをたつものなり。その人は、命おわらば無間地獄に入るべしと説き給えり。これらの文をうけて、天台は「『はた、魔の仏と作るにあらずや』の詞、正しくこの文によれり」と判じ給えり。ただ人師の釈ばかりを憑んで仏説によらずば、何ぞ仏法という名を付くべきや。言語道断の次第なり。これによって智証大師は「経に大小なく理に偏円なしと云って一切人によらば、仏説無用なり」と釈し給えり。天台は「もし深く所以有り、また修多羅と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべからず」と判じ給えり。また云わく「文証無ければ、ことごとくこれ邪の謂いなり」とも云えり。いかが心得べきや。

問うて云わく、人師の釈はさも候べし。爾前の諸経に「この経は第一」とも説き、「諸経の王」とも宣べたり。もししからば、仏説なりとも用いるべからず候か、いかん。

答えて云わく、たとい「この経は第一」とも「諸経の王」とも申し候え、皆これ権教なり。その語によるべからず。これによって、仏は「了義経により(依)て不了義経によらざれ」と説き、妙楽大師は「たとい経有って『諸経の王』と云うとも、『已今当の説に最もこれ第一なり』とは云わず。兼・但・対・帯なること、その義知るべし」と釈し給えり。この釈の心は、たとい経ありて「諸経の王」とは云うとも、「前に説きつる経にも、後に説かんずる経にも、この経はまされり(勝)」と云わずば方便の経としれ(知)という釈なり。されば、爾前の経の習いとして、今説く経より後にまた経を説くべき由を云わざるなり。ただ法華経ばかりこそ、最後の極説なるが故に、「已今当の中にこの経独り勝れたり」とは説かれて候え。されば、釈には「ただ法華に至って、前教の意を説いて今教の意を顕す」と申して、法華経にて如来の本意も教化の儀式も定まりたりと見えたり。これによって天台は「如来成道してよ(成)り四十余年には、いまだ真実を顕さず。法華に始めて真実を顕す」と云えり。この文の心は、如来、世に出でさせ給いて四十余年が間は真実の法をば顕さず、法華経に始めて仏になる実(成)の道を顕し給えりと釈し給えり。

問うて云わく、「已今当の中に法華経勝れたり」と云うことは、さも候べし。ただし、ある人師の云わく「『四十余年にはいまだ真実を顕さず』と云うは、法華経にて仏になる声聞(成)のためなり。爾前の得益の菩薩のためには、『いまだ真実を顕さず』と云うべからず」という義をば、いかが心

得候べきや。

答えて云わく、「法華経は二乗のためなり、菩薩のためにあらず。されば、『いまだ真実を顕さず』と云うこと、二乗に限るべし」と云うは、徳一大師の義か。これは法相宗の人なり。このことを伝教大師破し給うに、「現在の麤食者は、偽章数巻を作って、法を謗じ人を謗ず。何ぞ地獄に堕ちざらんや」と破し給いしかば、徳一大師は、その語に責められて、舌八つにさけてうせ給いき。

「『いまだ真実を顕さず』とは、二乗のためなり」と云わば、最も理を得たり。その故は、如来布教の元旨は、元より二乗のためなり。一代の化儀、三周の善巧、しかしながら二乗を正意とし給えり。されば、華厳経には「地獄の衆生は仏になるとも、二乗は仏になるべからず」と嫌い、方等には「高峰に蓮の生いざるように、二乗は仏の種をいりたり」と云われ、般若には「五逆罪の者は仏になるべし、二乗は叶うべからず」と捨てらる。かかるあさましき捨て者の仏になるをもって、如来の本意とし、法華経の規模とす。

これによって天台云わく「華厳・大品もこれを治すること能わず。ただ法華のみ有って、能く無学をして、還って善根を生じ、仏道を成ずることを得せしむ。ゆえに妙と称す。また、闡提は心有り。なお作仏すべし。二乗は智を滅す。心生ずべからず。法華能く治す。また称して妙となす」云々。この文の心は委しく申すに及ばず。誠に知んぬ、華厳・方等・大品等の法薬も二乗の重病をばいやさず。また三悪道の罪人をも菩薩ぞと爾前の経にはゆるせども、二乗をばゆるさず。これによって妙楽大師は「余趣を実に会すること、諸経にあるいは有れども、二乗は全く無し。故に、菩薩に合し、二乗に

対す。難きに従って説けばなり」と釈し給えり。

しかのみならず、「二乗の作仏は一切衆生の成仏を顕す」と天台は判じ給えり。修羅が大海を渡らんをば、これ難しとやせん。嬰児の力士を投げん、何ぞたやすしとせん。しからば則ち、仏性の種ある者は仏になるべしと爾前にも説けども、いまだ焦種の者作仏すべしとは説かず。かかる重病をたやすくいやすは、独り法華の良薬なり。ただすべからく汝仏にならんと思わば、慢のはたほこをたおし、忿りの杖をすてて、ひとえに一乗に帰すべし。名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしなり。ああ、恥ずべし恥ずべし、恐るべし恐るべし。

問うて云わく、一をもって万を察することなれば、あらあら法華のいわれを聞くに、耳目始めて明らかなり。ただし、法華経をばいかように心得候いてか、速やかに菩提の岸に到るべきや。伝え聞く、一念三千の大虚には慧日くもることなく一心三観の広池には智水にごることなき人こそ、その修行に堪えたる機にて候なれ。しかるに、南都の修学に臂をくたすことなかりしかば、瑜伽・唯識にもく暗し。北嶺の学文に眼をさらさざりしかば、止観・玄義にも迷えり。天台・法相の両宗は、ほとぎをらし。蒙って壁に向かえるがごとし。されば法華の機には既にもれて候にこそ、いかんがし候べき。

答えて云わく、「利智・精進にして観法修行するのみ法華の機ぞ」と云って無智の人を妨ぐるは、当世の学者の所行なり。これ還って愚癡・邪見の至りなり。「一切衆生皆成仏道」の教えなれば、上根・上機は観念観法もしかるべし、下根・下機はただ信心肝要なり。されば、経には「浄心に信敬して、疑惑を生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生に堕ちずして、十方の仏前に生ぜん」と説き給えり。いか

にも、信じて次の生の仏前を期すべきなり。

譬えば、高き岸の下に人ありて登ることあたわざらんに、また岸の上に人ありて縄をおろして、「この縄にとりつかば、我岸の上に引き登さん」と云わんに、引く人の力を疑い、縄の弱からんことをあやぶみて、手を納めてこれをとらざらんがごとし。いかでか岸の上に登ることをうべき。もし、そのことばに随いて手をのべこれをとらえば、即ち登ることをうべし。「唯我一人、能為救護（ただ我一人のみ、能く救護をなす）」の仏の御力を疑い、「以信得入」の法華経の教えの縄をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱え奉らざらんは、力及ばず、菩提の岸に登ること難かるべし。不信の者は「堕在泥梨」の根元なり。されば、経には「疑いを生じて信ぜずんば、則ち当に悪道に堕つべし」と説かれたり。受けがたき人身をうけ、値いがたき仏法にあいて、いかでか虚しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、また大小・権実のある中に、諸仏出世の本意、衆生成仏の直道の一乗をこそ信ずべけれ。

持つところの御経の諸経に勝れてましませば、能く持つ人もまた諸人にまされり。ここをもって経に云わく「能くこの経を持つ者は、一切衆生の中において、またこれ第一なり」と説き給えり。大聖の金言疑いなし。しかるに、人、この理をしらず見ずして名聞・狐疑・偏執を致せるは、堕獄の基なり。ただ願わくは、経を持ち、名を十方の仏陀の願海に流し、誉れを三世の菩薩の慈天に施すべし。しかれば、法華経を持ち奉る人は、天竜八部・諸大菩薩をもって我が眷属とする者なり。しかのみならず、因身の肉団に果満の仏眼を備え、有為の凡膚に無為の聖衣を着ぬれば、三途に恐れなく、八難に憚りなし。七方便の山の頂に登りて九法界の雲を払い、無垢地の園に花開け、法性の空に月明

らかならん。「是人於仏道、決定無有疑」の文、憑みあり。「唯我一人、能為救護」の説、疑いなし。「一念信解」の功徳は五波羅蜜の行に越え、「五十展転」の随喜は八十年の布施に勝れたり。「頓証菩提」の教えは遥かに群典に秀で、「顕本遠寿」の説は永く諸乗に絶えたり。ここをもって、八歳の竜女は大海より来って経力を刹那に示し、本化の上行は大地より涌出して仏寿を久遠に顕す。言語道断の経王、心行所滅の妙法なり。

しかるに、この理を忽いるかせにして余経に等ひとしむるは、謗法の至り、大罪の至極なり。譬えを取るに物なし。仏の神変にても、何ぞこれを説き尽くさん。菩薩の智力にても、いかでか、これを量るべき。されば、譬喩品に云わく「もしその罪を説かば、劫を窮むとも尽きじ」と云えり。文の心は、法華経を一度もそむける人の罪をば、劫を窮むとも説き尽くし難しと見えたり。しかるあいだ、三世の諸仏の化導にももれ、恒沙の如来の法門にも捨てられ、冥きより冥きに入って、阿鼻大城の苦患いかでか免れん。誰か心あらん人、長劫の悲しみを恐れざらんや。

ここをもって、経に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん。その人は命終して、阿鼻獄に入らん」云々。文の心は、法華経をよみたもたん者を見て、かろしめ、賤いやしみ、憎にくみ、嫉そねみ、うらみをむすばん、その人は、命おわりて阿鼻大城に入らんと云えり。大聖の金言、誰かこれを恐れざらんや。「正直に方便を捨つ」の明文、あにこれを疑うべきや。しかるに、人皆経文に背き、世ことごとく法理に迷えり。汝、何ぞ悪友の教えに随わんや。されば、邪師の法を信じ受くる者を名づけて、毒を飲む者なりと天台は釈し給えり。汝、能くこれを慎むべし、こ

れを慎むべし。

つらつら世間を見るに、法をば貴しと申せども、その人をば万人これを悪む。汝、能く法の源に迷えり。いかにと云うに、一切の草木は地より出生せり。これをもって思うに、一切の仏法もまた人によりて弘まるべし。これによって、天台は「仏世すらなお人をもって法を顕す。末代いずくんぞ法は貴けれども人は賤しと云わんや」とこそ釈して御坐しまし候え。されば、持たるる法だに第一ならば、持つ人随って第一なるべし、しからば則ち、その人を毀るは、その法を毀るなり。その子を賤しむるは、即ちその親を賤しむなり。ここに知んぬ、当世の人は詞と心とすべてあわず。孝経をもってその親を打つがごとし。あに冥の照覧恥ずかしからざらんや。地獄の苦しみ、恐るべし恐るべし、慎むべし慎むべし。上根に望めても卑下すべからず、下根を捨てざるは本懐なり。下根に望めても憍慢ならざれ、上根ももるることあり、心をいたさざるが故に。

およそ、その里ゆかしけれども、道たえ縁なきには通う心もおろそかに、その人恋しけれども、憑めず契らぬには待つ思いもなおざりなるように、彼の月卿雲客に勝れたる霊山浄土の行きやすきにも、いまだゆかず、「我は即ちこれ父なり」の柔軟の御すがた見奉るべきをも、いまだ見奉らず。これ誠に、袂をくたし胸をこがす歎きならざらんや。

暮れ行く空の色、有明方の月の光までも、心をもよおす思いなり。事にふれおりにつけても後世を心にかけ、花の春、雪の朝も、これを思い、風さわぎ村雲まよう夕べにも忘るる隙なかれ。出ずる息は入る息をまたず。いかなる時節ありてか「毎自作是念」の悲願を忘れ、いかなる月日ありてか

「無一不成仏」の御経を持たざらん。昨日が今日になり、去年の今年となることも、これ期するところの余命にはあらざるをや。すべて過ぎにし方をかぞえて年の積もるをば知るといえども、今行く末において、一日片時も誰か命の数に入るべき。臨終すでに今にありとは知りながら、我慢偏執・名聞利養に著して妙法を唱え奉らざらんことは、志の程無下にかいなし。さこそは、「皆成仏道」の御法とは云いながら、この人いかでか仏道にものうからざるべき。色なき人の袖には、そぞろに月のやどることかは。

また命すでに一念にすぎざれば、仏は一念随喜の功徳と説き給えり。もしこれ二念三念を期すと云わば、平等大慧の本誓、頓教・一乗・皆成仏の法とは云わるべからず。流布の時は末世・法滅に及び、機は五逆・謗法をも納めたり。故に、「頓証菩提」の心におきてられて、狐疑・執著の邪見に身を任することなかれ。

生涯いくばくならず。思えば一夜のかりの宿を忘れて、いくばくの名利をか得ん。また得たりとも、これ夢の中の栄え、珍しからぬ楽しみなり。ただ先世の業因に任せて営むべし。世間の無常をさとらんことは、眼に遮り、耳にみてり。雲とやなり、雨とやなりけん。昔の人はただ名をのみきく。露とや消え、煙とや登りけん。今の友もまたみえず。我いつまでか三笠の雲と思うべき。春の花の風に随い、秋の紅葉の時雨に染まる。これ皆、ながらえぬ世の中のためしなれば、法華経には「世は皆牢固ならざること、水沫泡焔のごとし」とすすめたり。

「何をもってか衆生をして無上道に入ることを得しめん」の御心のそこ、順縁・逆縁の御ことのは

すでに本懐なれば、しばらくも持つ者もまた本意にかないぬ。また本意に叶わば、仏の恩を報ずるなり。悲母深重の経文心安ければ、「ただ我一人のみ」の御苦しみも、且々つがつや休み給うらん。釈迦一仏の悦び給うのみならず、諸仏出世の本懐なれば、十方三世の諸仏も悦び給うべし。「我は即ち歓喜す。諸仏もまたしかなり」と説かれたれば、仏悦び給うのみならず、神も即ち随喜し給うなるべし。伝教大師これを講じ給いしかば、八幡大菩薩は紫の袈裟を布施し、空也上人これを読み給いしかば、松尾大明神は寒風を防せがせ給う。

されば、「七難即滅、七福即生（七難は即ち滅し、七福は即ち生ぜん）」と祈らんにも、この御経第一なり。「現世安穏」と見えたればなり。他国侵逼難、自界叛逆難の御祈禱にも、この妙典に過ぎたるはなし。「百由旬の内に諸の衰患無からしむ」と説かれたればなり。

しかるに、当世の御祈禱はさかさまなり。先代流布の権教なり。末代流布の最上真実の秘法にあらざるなり。譬えば、去年の暦を用い、烏を鵜につかわんがごとし。これひとえに、権教の邪師を貴んで、いまだ実教の明師に値わせ給わざる故なり。惜しいかな、文・武の卞和があら玉、いずくにか納めけん。嬉しいかな、釈尊出世の髻の中の明珠、今度我が身に得たることよ。十方諸仏の証誠としていることを忽かせならず。さこそは「一切世間に怨多くして信じ難し」と知りながら、いかでか一分の疑心を残して、「決定して疑いあることなけん」の仏にならざらんや。

過去遠々の苦しみは、いたずらにのみこそうけこしか。などか、しばらく不変常住の妙因をうえざらん。未来永々の楽しみはかつがつ心を養うとも、しいてあながちに電光朝露の名利をば貪るべからん。

ず。「三界は安きことなし、なお火宅のごとし」は如来の教え、「ゆえに諸法は幻のごとく化のごとし」は菩薩の詞なり。寂光の都ならずば、いずくも皆苦なるべし。本覚の栖を離れて、何事か楽しみなるべき。

願わくは、「現世安穏、後生善処」の妙法を持つのみこそ、ただ今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。すべからく、心を一にして南無妙法蓮華経と我も唱え他をも勧めんのみこそ、今生人界の思い出なるべき。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

日蓮　花押

(031) 女人成仏抄

文永2年('65)　44歳

提婆品に云わく「仏は諸の比丘に告げたまわく『未来世の中に乃至蓮華に化生せん』と」等云々。この提婆品に二箇の諫暁あり。いわゆる、達多の弘経・釈尊の成道を明かし、また文殊の通経・竜女の作仏を説く。されば、この品を長安宮に一品切り留めて、二十七品を世に流布するあいだ、秦の代よ り梁の代に至るまで七代の間の王は、二十七品の経を講読す。その後、満法師といいし人、この品法

ず。「三界は安きことなし、なお火宅のごとし」は如来の教え、「ゆえに諸法は幻のごとく化のごとし」は菩薩の詞なり。寂光の都ならずば、いずくも皆苦なるべし。本覚の栖を離れて、何事か楽しみなるべき。

願わくは、「現世安穏、後生善処」の妙法を持つのみこそ、ただ今生の名聞、後世の弄引なるべけれ。すべからく、心を一にして南無妙法蓮華経と我も唱え他をも勧めんのみこそ、今生人界の思い出なるべき。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

日蓮　花押

(031) 女人成仏抄

文永2年('65)　44歳

提婆品に云わく「仏は諸の比丘に告げたまわく『未来世の中に乃至蓮華に化生せん』と」等云々。この提婆品に二箇の諫暁あり。いわゆる、達多の弘経・釈尊の成道を明かし、また文殊の通経・竜女の作仏を説く。されば、この品を長安宮に一品切り留めて、二十七品を世に流布するあいだ、秦の代よ り梁の代に至るまで七代の間の王は、二十七品の経を講読す。その後、満法師といいし人、この品法

華経になき由を読み出だされ候いて後、長安城より尋ね出だし、今は二十八品にて弘まらせ給う。

さて、この品に浄心信敬の人のことを云うに、一には「三悪道に堕ちず」、二には「十方の仏前に生ぜん」、三には「生ずるところの処にて、常にこの経を聞かん」、四には「もし人天の中に生ぜば、勝妙の楽を受けん」、五には「もし仏前に在らば、蓮華に化生せん」となり。しかるに、一切衆生は、法性真如の都を迷い出でて妄想顚倒の里に入りしより已来、身・口・意の三業になすところ、善根は少なく悪業は多し。されば、経文には「一人一日の中に八億四千念あり。念々の中に作すところは、皆これ三途の業なり」等云々。我ら衆生、三界二十五有のちまたに輪回せしこと鳥の林に移るがごと く、死しては生じ生じては死し、車の場に回るがごとく、始め終わりもなく、死し生ずる悪業深重の衆生なり。

ここをもって、心地観経に云わく「有情の輪回して六道に生ずること、なお車輪の始終無きがごとし。あるいは父母となり、男女となり、生々世々互いに恩有り」等云々。法華経二十二に云わく「三界は安きことなし、なお火宅のごとし。衆苦は充満す」云々。涅槃経二十二に云わく「菩薩摩訶薩、諸の衆生を観ずるに、色・香・味・触の因縁のための故に、昔無量無数劫より以来、常に苦悩を受く。一々の衆生、一劫の中に積むところの身の骨は王舎城の毘富羅山のごとく、飲むところの乳汁は四海の水のごとく、身より出だすところの血は四海の水より多く、父母・兄弟・妻子・眷属の命終に涕泣して出だすところの目涙は四大海の水より多し。地の草木を尽くして四寸の籌となして、もって父母を数うるも、また尽くすこと能わじ。無量劫より已来、あるいは地獄・畜生・餓鬼に在って受くる

ところの行苦は称計すべからず。また一切衆生の骸骨をや」云々。

かくのごとく、いたずらに命を捨つるところの骸骨は、毘富羅山よりも多し。恩愛あわれみの涙は四大海の水よりも多けれども、仏法のためには一骨をもなげず。一句一偈を聴聞して一滴の涙をもおとさぬゆえに、三界の籠樊を出でずして、二十五有のちまたに流転する衆生にて候なり。

しかるあいだ、いかにとして三界を離るべきと申すに、仏法修行の功力によって、無明のやみはれて法性真如の覚りを開くべく候。さては仏法はいかなるをか修行して生死を離るべきぞと申すに、ただ一乗妙法にてあるべく候。されば、恵心僧都、七箇日賀茂に参籠して、「生死を出離するはいかなる教えにてか候べき」と祈請申され候いしに、明神の御託宣に云わく「釈迦の説教は一乗に留まり、諸仏の成道は妙法に在り。菩薩の六度は蓮華に在り。二乗の得道はこの経に在り」云々。普賢経に云わく「この大乗経典は、諸仏の宝蔵なり。十方三世の諸仏の眼目なり。三世の諸の如来を出生する種なり」云々。

この経より外はすべて成仏の期有るべからず候上、ことさら女人成仏のことは、この経より外はさらにゆるされず。結句、爾前の経にてはおびただしく嫌われたり。されば、華厳経に云わく「女人は地獄の使いなり。能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心は夜叉のごとし」云々。銀色女経に云わく「三世の諸仏の眼は大地に堕落すとも、法界の諸の女人は永く成仏の期無し」云々。あるいはまた、女人には五障三従の罪深しと申す。それは、内典には五障を明かし、外典には三従を教えたり。その三従とは、少くしては父母に従い、盛んにしては夫に従い、老いては子に従う。一期、身を

心に任せず。されば、栄啓期が三楽を歌いし中にも、女人と生まれざるをもって一楽とす。天台大師云わく「他経はただ菩薩にのみ記して二乗に記せず。ただ男にのみ記して女に記せず」とて、全く余経には女人の授記これなしと釈せり。

その上、釈迦・多宝の二仏、塔中に並坐し給いし時、文殊、妙法を弘めんために海中に入り給いて仏前に帰り参り給いしかば、宝浄世界の多宝仏の御弟子・智積菩薩は竜女の成仏を難じて云わく「我は釈迦如来を見たてまつるに、無量劫において、難行苦行し、功を積み徳を累ねて、菩薩の道を求むること、いまだかつて止息したまわず。三千大千世界を観るに、乃至芥子のごときばかりも、これ菩薩の身命を捨てたもうところにあらざることあることなし。衆生のための故なり」等云々。

いわゆる、智積・文殊、再三問答いたし給う間は、八万の菩薩、万二千の声聞等、いずれも耳をす澄まして御聴聞ばかりにて、一口の御助言に及ばず。しかるに、智慧第一の舎利弗、文殊のことをば難ずることなし。多くの故をもって竜女を難ぜらる。ゆえに、「女人は垢穢にして、これ法器にあらず」と小乗・権教の意をもって難ぜられ候いしかば、文殊「竜女成仏の有無の現証は、今、仏前にして見え候べし」と仰せられ候いしに、案にたがわず、八歳の竜女、蛇身を改めずして仏前に参詣し、「価直三千大千世界」と説かれて候如意宝珠を仏に奉りしに、仏悦んでこれを請け取り給いしかば、この時、智積菩薩も舎利弗も不審を開き、女人成仏の路をふみわけ候。されば、女人成仏の手本、これより起こって候。委細は五の巻の経文これを読むべく候。

伝教大師、秀句に云わく「能化の竜女に歴劫の行無く、所化の衆生も歴劫の行無し。能化・所化と

もに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」。天台、疏に云わく「智積は別教に執して疑いをなす。竜女は円を明かして疑いを釈く。身子は三蔵の権を挟んで難ず。竜女は一実をもって疑いを除く」。海竜王経に云わく「竜女作仏し、国土をば光明国と号し、名をば無垢証如来と号す」云々。法華已前の諸経のごときは、たとい人中・天上の女人なりというとも、成仏の思い絶たるべし。しかるに竜女、畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして即身成仏せしことは、不思議なり。これを始めとして、釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼等、勧持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り、羅睺羅の母・耶輸陀羅女も、眷属の比丘尼とともに具足千万光相如来と成り、鬼道の女人たる十羅刹女も成仏す。しかれば、なお殊に女性の御信仰あるべき御経にて候。

そもそも、この経の一文一句を読み一字一点を書く、なお生死を出離し大菩提を証するの因なり。しかれば、彼の字に結縁せし者、なお炎魔の庁より帰され、六十四字を書きし人は、その父を天上へ送る。いかにいわんや、阿鼻の依正は極聖の自心に処す。地獄・天宮皆これ果地の如来なり。毘盧の身土は凡下の一念を逾えず。遮那の覚体も衆生の迷妄を出でず。妙文は霊山浄土に増し、六万九千の露点は紫磨金の輝光を副え給うべし。殊に過去聖霊は、御存生の時より御信心他に異なる御事なりしかば、今日、講経の功力によって仏前に生を受け、仏果菩提の勝因に登り給うべし云々。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

(032)

薬王品得意抄

文永2年('65)　44歳

この薬王品の大意とは、この薬王品は、第七の巻、二十八品の中には第二十三の品なり。この第一の巻に序品・方便品の二品有り。序品は二十八品の序なり。方便品より人記品に至るまでの八品は、正には二乗作仏を明かし、傍には菩薩・凡夫の作仏を明かす。法師・宝塔・提婆・勧持・安楽の五品は、上の八品を末代の凡夫の修行すべき様を説くなり。また涌出品は寿量品の序なり。分別功徳品より十二品は、正には寿量品を末代の凡夫の行ずべき様を、傍には方便品等の八品を修行すべき様を説くなり。しかれば、この薬王品は、方便品等の八品ならびに寿量品を修行すべき様を説きし品なり。

この品に十の喩え有り。第一は大海の譬えなり。まず第一の譬えをほぼ申すべし。この南閻浮提に二千五百の河あり、西倶耶尼に五千の河あり、総じてこの四天下に二万五千九百の河あり。あるいは四十里乃至百里・一里・一町・一尋等の河これ有り。しかりといえども、この諸河は総じて深浅のこと大海に及ばず。法華已前の華厳経・阿含経・方等経・般若経・深密経・阿弥陀経・涅槃経・大日経・金剛頂経・蘇悉地経・密厳経等の釈迦如来の説くところの一切経、大日如来の説くところの一切経、阿弥陀如来の説くところの一切経、薬師如来の説くところの一切経、過去・現在・未来の三世諸仏の説

くところの一切経の中に、法華経第一なり。譬えば、諸経は大河・中河・小河等のごとし、法華経は大海のごとし等と説くなり。

河に勝れて、大海に十の徳有り。一に大海は漸次に深し、河はしからず。二に大海は死屍を留めず、河はしからず。三に大海は本の名字を失う、河はしからず。四に大海は一味なり、河はしからず。五に大海は宝等有り、河はしからず。六に大海は極めて深し、河はしからず。七に大海は広大無量なり、河はしからず。八に大海は大身の衆生等有り、河はしからず。九に大海は潮の増減有り、河はしからず。十に大海は大雨・大河を受けて盈溢無し、河はしからず。

この法華経には十の徳有り。諸経には十の失有り。この経は漸次深多にして五十展転なり。諸経にはなお一も無し、いわんや、二・三・四乃至五十展転をや。河は深けれども大海の浅きに及ばず。諸経は、一字・一句・十念等をもって十悪五逆等の悪機を摂むといえども、いまだ一字一句の随喜五十展転には及ばざるなり。この経の大海は死屍を留めずとは、法華経に背く謗法の者は、極善の人なりといえども、なおこれを捨つ。いかにいわんや、悪人なるの上、謗法をなさん者をや。たとい諸経を謗ずといえども、法華経に背かざれば必ず仏道を成ず。たとい一切経を信ずといえども、法華経に背かば、必ず阿鼻大城に堕つ。

乃至、第八に大海は大身の衆生等ありというは、大海には摩竭大魚等、大身の衆生これ有り。無間地獄と申すは縦広八万由旬なり。五逆の者、無間地獄に堕ちては一人にて必ず充満す。この地獄の衆生は五逆の者、大身の衆生なり。諸経の小河・大河の中には摩竭大魚これ無し。法華経の大海にはこ

れ有り。五逆の者、仏道を成ず。これ実には諸経にこれ無し。諸経にこれ有りと云うといえども、実には「未顕真実」なり。故に、一代聖教を謗んぜし天台智者大師、釈して云わく「他経は、ただ菩薩にのみ記して二乗に記せず。ただ善にのみ記して悪に記せず乃至今経は皆記す」等云々。余はしばらくこれを略す。

第二には山に譬う。十宝山等とは、山の中には須弥山第一なり。十宝山とは、一には雪山、二には香山、三には軻梨羅山、四には仙聖山、五には由乾陀山、六には馬耳山、七には尼民陀羅山、八には斫伽羅山、九には宿慧山、十には須弥山なり。先の九山とは諸経諸山のごとし。ただし、一々に財あり。須弥山は衆財を具して、その財に勝れたり。例せば、世間の金の閻浮檀金に及ばざるがごとし。華厳経の法界唯心、般若の十八空、大日経の五相成身、観経の往生より、法華経の即身成仏勝れたるなり。

須弥山は金色なり。一切の牛馬・人天・衆鳥等、この山に依れば、必ず本の色を失って金色なり。余山はしからず。一切の諸経は法華経に依れば本の色を失う。例せば、黒色の物の日月の光に値えば色を失うがごとし。諸経の往生・成仏等の色は、法華経に値えば必ずその義を無う。

第三には月に譬う。衆星は、あるいは半里、あるいは一里、あるいは八里、あるいは十六里には過ぎず。月は八百余里なり。衆星は光有りといえども、月に及ばず。たとい百千万億乃至一四天下・三千大千・十方世界の衆星これを集むとも、一つの月の光に及ばず。いかにいわんや、一つの星、月の光に及ぶべきや。華厳経・阿含経・方等・般若・涅槃経・大日経・観経等の一切の経これを集むとも、

法華経の一字に及ばざらん。

一切衆生の心中の見思・塵沙・無明の三惑ならびに十悪五逆等の業は暗夜のごとし。華厳経等の一切経は闇夜の星のごとし。法華経は闇夜の月のごとし。法華経を信ずれども、深く信ぜざる者は、半月の闇夜を照らすがごとし。深く信ずる者は、満月の闇夜を照らすがごとし。月無くしてただ星のみ有る夜には、強力の者・かたましき者なんどは行歩すといえども、老骨の者・女人なんどは行歩に叶わず。満月の時は、女人・老骨なんども、あるいは遊宴のため、あるいは人に値わんがごとき、行歩自在なり。諸経には、菩薩・大根性の凡夫はたとい得道なるとも、二乗・凡夫・悪人・女人乃至末代の老骨の懈怠・無戒の人々は、往生・成仏不定なり。法華経はしからず。二乗・悪人・女人等、なお仏に成る。いかにいわんや、菩薩・大根性の凡夫をや。また月は、宵よりも暁は光まさり、春夏より秋冬は光あり。法華経は正像二千年よりも、末法には殊に利生有るべし。

問うて云わく、証文いかん。

答えて云わく、道理顕然なり。その上、次下の文に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」等云々。この経文に、二千年の後、南閻浮提に広宣流布すべしととかれて候は、第三の月の譬えの意なり。この意を根本伝教大師、釈して云わく「正像説布すべしととかれて候は、第三の月の譬えの意なり。この意を根本伝教大師、釈して云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり」等云々。正法千年も、像法千年も、法華経の利益、諸経にこれ勝るべし。しかりといえども、月の光の、春夏の正像二千年より、末法の秋冬に至って光の勝るるがごとし。

第四の譬えは日の譬えなり。星の中に月の出でたるは、星の光には月の光は勝るとも、いまだ星の光を消さず。日中には星の光消ゆるのみにあらず、また月の光も奪って光を失う。爾前は星のごとく、法華経の迹門は月のごとし、寿量品は日のごとし。寿量品の時は迹門の月いまだ及ばず。いかにいわんや爾前の星をや。夜は星の時・月の時も衆務を作さず。夜暁けて必ず衆務を作す。爾前・迹門はなお生死を離れ難し。本門寿量品に至って必ず生死を離るべし。余の六譬これを略す。

この外にまた多くの譬えこの品に有り。その中に、「渡りに船を得たるがごとし」と。この譬えの意は、生死の大海には、爾前の経は、あるいは筏、あるいは小船なり。生死の此岸より生死の彼の岸には付くといえども、生死の大海を渡り、極楽の彼岸にはとずきがたし。例せば、世間の小船等が筑紫より坂東に至り、鎌倉より江の島なんどへとずけども、唐土へ至らず。唐船は必ず日本国より震旦国に至るに障り無きなり。また云わく「貧しきに宝を得たるがごとし」等云々。爾前の国は貧国なり。爾前の人は餓鬼なり。法華経は宝の山なり。人は富める人なり。

問うて云わく、爾前は貧国という証文いかん。

答えて云わく、授記品に云わく「飢えたる国より来って、たちまちに大王の膳に値うがごとし」等云々。

女人の往生・成仏の段。

経文に云わく「もし如来滅して後、後の五百歳の中に、もし女人有って、この経典を聞いて、説の

ごとく修行せば、ここにおいて命終して、即ち安楽世界の阿弥陀仏の大菩薩衆に囲遶せらるる住処に往って、蓮華の中の宝座の上に生ず」等云々。

問うて曰わく、この経、この品に殊に女人の往生を説く。何の故か有るや。

答えて曰わく、仏意測りがたし。この義、決し難きか。ただし、一つの料簡を加えば、女人は衆罪の根本、破国の源なり。故に、内外典に多くこれを禁む。その中に、外典をもってこれを論ぜば、三従あり。三従と申すは、三つしたがうというなり。一には幼にしては父母に従う。嫁しては夫に従う。老いては子に従う。この三障有って世間に自在ならず。内典をもってこれを論ぜば、五障有り。五障とは、一には六道輪回の間、男子のごとく大梵天王と作らず。二には帝釈と作らず。三には魔王と作らず。四には転輪聖王と作らず。五には常に六道に留まって三界を出でて仏に成らず〈超日明三昧経の文なり〉。銀色女経に云わく「三世の諸仏の眼は大地に堕落すとも、法界の諸の女人は永く成仏の期無し」等云々。

ただし、凡夫すら賢王・聖人は妄語せず。はんよきといいし者は、荊軻が塚に剣をかけたりき。これ、約束を違えず、妄語無き故なり。いかにいわんや、申せし人は、徐君が塚に剣をかけたりき。これ、約束を違えず、妄語無き故なり。いかにいわんや、声聞・菩薩・仏をや。仏は昔凡夫にましましし時、小乗経を習い給いし時、五戒を受け始め給いき。五戒の中の第四の不妄語の戒を固く持ち給いき。財を奪われ命をほろぼされし時も、この戒をやぶらず。大乗経を習い給いし時、また十重禁戒を持ち、その十重禁戒の中の第四の不妄語戒を持ち給いき。この戒を堅く持って、無量劫これを破りたまわず。終にこの戒の力によって仏身を成じ、三十二相の

中に広長舌相を得たまえり。

この舌、薄広長くながし。あるいは面におおい、あるいは髪際にいたり、あるいは梵天にいたる。舌の上に五つの画あり。印文のごとし。その舌の色は赤銅のごとし。舌の下に二つの珠あり。甘露を涌出す。これ不妄語戒の徳の至すところなり。仏この舌をもって、「三世の諸仏の御眼を大地に堕とすとも、法界の女人は仏になるべからず」ととかれしかば、一切の女人はいかなる世にも仏には成らせ給うまじきとこそおぼえて候え。さるにては、女人の御身を受けさせ給いては、たといきさき・さんこうの位にそなわりてもなにかはすべき。善根・仏事をなしてもよしなしとこそおぼえ候え。しかるを、この法華経の薬王品に女人の往生をゆるされ候いぬること、また不思議に候。彼の経の妄語か、この経の妄語か、いかにも一方は妄語たるべきか。もしまた一方妄語ならば、一仏に二言あり。信じ難きことなり。

ただし、無量義経の「四十余年にはいまだ真実を顕さず」、涅槃経の「如来には虚妄の言無しといえども、もし衆生、虚妄の説に因ると知ろしめさば」の文をもってこれを思わば、仏は女人は往生・成仏すべからずと説かせ給いけるは、妄語と聞こえたり。妙法華経の文に「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」「妙法華経乃至皆これ真実なり」と申す文をもってこれを思うには、女人の往生・成仏は決定せりと説かるる法華経の文は、実語・不妄語戒と見えたり。

世間の賢人も、ただ一人ある子が、不思議なる時、あるいは失有る時は、永く子たるべからざるの理、起請を書き、あるいは誓言を立つるとも、終の命終の時に臨んでこれを許す。しかりといえども、

賢人にあらずとは云わず。また妄語せし者とも云わず。仏もまたかくのごとし。爾前四十余年が間は、菩薩の得道、凡夫の得道、善人・男子等の得道は許すようなれども、二乗・悪人・女人なんどの得道はこれを許されず。あるいはまた許さるるに似たることもあり。いまだ定めがたかりしを、仏の説教四十二年すでにすぎて御年七十二、摩竭提国王舎城の耆舎崛山と申す山にして法華経をとかせ給うとおぼせし時、まず無量義経と申せし経を説かせ給う。無量義経の文に云わく「四十余年」云々。

(033)

法華経題目抄

(妙の三義の事)

文永3年('66)1月6日　45歳

根本大師門人日蓮撰す。

南無妙法蓮華経

問うて云わく、法華経の意をもし知らず、ただ南無妙法蓮華経とばかり、五字七字に限って一日に一遍、一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍なんど唱えても、軽重の悪に引かれずして四悪趣に赴おもむかず、ついに不退の位に至いたるべしや。

賢人にあらずとは云わず。また妄語せし者とも云わず。仏もまたかくのごとし。爾前四十余年が間は、菩薩の得道、凡夫の得道、善人・男子等の得道は許すようなれども、二乗・悪人・女人なんどの得道はこれを許されず。あるいはまた許さるるに似たることもあり。いまだ定めがたかりしを、仏の説教四十二年すでにすぎて御年七十二、摩竭提国王舎城の耆舎崛山と申す山にして法華経をとかせ給うとおぼせし時、まず無量義経と申せし経を説かせ給う。無量義経の文に云わく「四十余年」云々。

(033)

法華経題目抄

(妙の三義の事)

文永3年('66)1月6日　45歳

根本大師門人日蓮撰す。

南無妙法蓮華経

問うて云わく、法華経の意をもし知らず、ただ南無妙法蓮華経とばかり、五字七字に限って一日に一遍、一月乃至一年・十年・一期生の間にただ一遍なんど唱えても、軽重の悪に引かれずして四悪趣に赴おもむかず、ついに不退の位に至いたるべしや。

答えて云わく、しかるべきなり。

問うて云わく、「火、火」といえども、手にとらざればやけず、「水、水」といえども、口にのまざれば水のほしさもやまず。ただ南無妙法蓮華経と題目ばかりを唱うとも、義趣をさとらずば、悪趣をまぬかれんこと、いかがあるべかるらん。

答えて云わく、師子の筋を琴の絃として一度奏すれば余の絃ことごとくきれ、梅子のすき声をきけば口につたまりうるおう。世間の不思議すら、かくのごとし。いわんや、法華経の不思議をや。小乗の四諦の名ばかりをさやずる鸚鵡、なお天に生ず。三帰ばかりを持つ人、大魚の難をまぬかる。いかにいわんや、法華経の題目は八万聖教の肝心、一切諸仏の眼目なり。なんじ、これをとなえて四悪趣をはなるべからずと疑うか。

正直捨方便の法華経には「信をもって入ることを得たり」と云い、双林最後の涅槃経には「この菩提の因はまた無量なりといえども、もし信心を説かば、則ちすでに摂め尽くす」等云々。

夫れ、仏道に入る根本は信をもって本とす。五十二位の中には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たといさとりなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たといさとりあれども信心なき者は、誹謗・闡提の者なり。

善星比丘は二百五十戒を持ち、四禅定を得、十二部経を諳にせし者。提婆達多は六万・八万の宝蔵をおぼえ、十八変を現ぜしかども、これらは有解無信の者。今に阿鼻大城にありと聞く。迦葉・舎利弗等は無解有信の者なり。仏に授記を蒙って、華光如来・光明如来といわれき。仏説いて云わく「疑

いを生じて信ぜずんば、即ち当に悪道に堕つべし」等云々。これらは有解無信の者を説き給う。

しかるに、今の代に世間の学者の云わく「ただ信心ばかりにて解する心なく、南無妙法蓮華経と唱うるばかりにて、いかでか悪趣をまぬかるべき」等云々。この人々は、経文のごとくならば、阿鼻大城まぬかれがたし。

されば、させる解りなくとも、南無妙法蓮華経と唱うるならば、悪道をまぬかるべし。譬えば蓮華は日に随って回る。蓮に心なし。芭蕉は雷によりて増長す。この草に耳なし。我らは蓮華と芭蕉とのごとく、法華経の題目は日輪と雷とのごとし。犀の生角を身に帯して水に入りぬれば、水五尺、身に近づかず。栴檀の一葉開きぬれば、四十由旬の伊蘭を変ず。我らが悪業は伊蘭と水とのごとく、法華経の題目は犀の生角と栴檀の一葉とのごとし。金剛は堅固にして一切の物に破られず。されども羊の角と亀の甲に破らる。尼倶類樹は大鳥にも枝おれざれども、かのまつげにすくうしょうりょう鳥に枝おれぬ。我らが悪業は金剛のごとし、尼倶類樹のごとし。法華経の題目は羊の角のごとく、しょうりょう鳥のごとし。琥珀は塵をとり、磁石は鉄をすう。我らが悪業は塵と鉄とのごとく、法華経の題目は琥珀と磁石とのごとし。かくおもいて、常に南無妙法蓮華経と唱えさせ給うべし。

法華経の第一の巻に云わく「無量無数劫にも、この法を聞くこともまた難し」。第五の巻に云わく「この法華経は無量の国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」等云々。法華経の御名をきくことは、おぼろけにもありがたきことなり。されば、須仙多仏・多宝仏は、世にいでさせ給いたりしかども、法華経の御名をだにもとき給わず。釈迦如来は、法華経のために世にいでさせ給いた

りしかども、四十二年が間は名をひしてかたり出ださざりしかども、仏の御年七十二と申せし時、はじめて妙法蓮華経ととなえ出だせ給いたりき。しかりといえども、摩訶尸那・日本等の辺国の者は御名をもきかざりき。一千一十余年すぎて三百五十余年に及びてこそ、わずかに御名ばかりをば聞きたりしか。

されば、この経に値いたてまつることをば、三千年に一度花さく優曇華、無量無辺劫に一度値うなる一眼の亀にもたとえたり。大地の上に針を立てて、大梵天王宮より芥子をなぐるに、針のさきに芥子のつらぬかれたるよりも、法華経の題目に値うことはかたし。この須弥山に針を立てて、かの須弥山より大風つよく吹く日いとをわたさんに、いたりてはりの穴にいとのさきのいりたらんよりも、法華経の題目に値い奉ることかたし。されば、この経の題目をとなえさせ給わんには、おぼしめすべし、生盲の始めて眼あきて父母等をみんよりもうれしく、強きかたきにとられたる者の、ゆるされて妻子を見るよりもめずらしとおぼすべし。

問うて云わく、題目ばかりを唱うる証文これありや。

答えて云わく、妙法華経の第八に云わく「法華の名を受持せん者、福は量るべからず」。正法華経に云わく「もしこの経を聞いて、名号を宣持せば、徳は量るべからず」。添品法華経に云わく「法華の名を受持せん者、福は量るべからず」等云々。これらの文は、題目ばかりを唱うる福、計るべからずとみえぬ。一部八巻二十八品を受持・読誦し、随喜・護持等するは広なり。方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するは略なり。ただ一四句偈、乃至題目ばかりを唱え、となうる者を護持するは要な

り。広・略・要の中には題目は要の内なり。

問うて云わく、妙法蓮華経の五字には、幾(いく)ばくの功徳(くどく)をか納(おさ)めたるや。

答えて云わく、大海は衆流(しゅる)を納めたり。大地は有情(うじょう)・非情(ひじょう)を持(たも)てり。如意宝珠(にょいほうしゅ)は万財(まんざい)を雨(ふ)らし、梵王(ぼんのう)は三界(さんがい)を領す。妙法蓮華経の五字、またかくのごとし。一切(いっさい)の九界の衆生(しゅじょう)ならびに仏界を納(おさ)む。十界(じっかい)を納むれば、また十界の依報(えほう)の国土を収(おさ)む。

まず、妙法蓮華経の五字に一切(いっさい)の法を納(おさ)むることをいわば、経(きょう)の一字は諸経(しょきょう)の中の王なり。一切の群経(ぐんきょう)を納む。仏世に出(い)でさせ給(たま)いて、五十余年の間、八万聖教(はちまんしょうぎょう)を説き置(おか)せ給いき。仏は人寿百歳(にんじゅひゃくさい)の時壬申歳(みずのえさるのとし)、二月十五日の夜半に御入滅(ごにゅうめつ)あり。その後(のち)、四月八日より七月十五日に至るまで一夏九旬(いちげくじゅん)の間、一千人の阿羅漢(あらかん)、結集堂(けつじゅうどう)にあつまりて一切経(いっさいきょう)をかき置(おか)せ給いき。その後、正法(しょうほう)一千年の間は、五天竺(ごてんじく)に一切経広(ひろ)まらせ給いしかども、震旦国(しんたんこく)には渡(わた)らず。像法(ぞうほう)に入(い)って一十五年と申せしに、後漢(ごかん)の孝明皇帝(こうめいこうてい)・永平(えいへい)十年丁卯歳(ひのとうのとし)、仏経始めて渡って唐(とう)の玄宗皇帝(げんそう)・開元(かいげん)十八年庚午歳(かのえうまのとし)に至るまで、渡れる訳者一百七十六人、持(も)ち来(きた)る経(きょう)・律(りつ)・論(ろん)一千七十六部五千四十八巻四百八十帙(ちつ)。これ皆(みな)、法華経の経の一字の眷属(けんぞく)の修多羅(しゅたら)なり。

まず、妙法蓮華経の以前四十余年の間の経(きょう)の中に、大方広仏華厳経(だいほうこうぶつけごんぎょう)と申す経まします。竜宮城(りゅうぐうじょう)には三本あり。上本は十三世界微塵数(じゅうさんせかいみじんじゅ)の品(ほん)。中本は四十九万八千八百偈(げ)。下本は十万偈四十八品。この三本の外に震旦(しんたん)・日本にはわずかに八十巻(はちじっかん)・六十巻等あり。阿含(あごん)の小乗経(しょうじょうきょう)、方等(ほうどう)・般若(はんにゃ)の諸大乗経(しょだいじょうきょう)等、大日経(だいにちきょう)は、梵本(ぼんぼん)には阿嚩囉訶佉(あばらかきゃ)の五字ばかりを三千五百の偈をもってむすべり(結)。いわんや、余(よ)の諸尊

の種子・尊形・三摩耶、その数をしらず。知しかるに、漢土にはただわずかに六巻・七巻なり。涅槃経は双林最後の説、漢土にはただ四十巻、これも梵本これ多し。これらの諸経は皆、釈迦如来の説くところの法華経の眷属の修多羅なり。この外、過去の七仏・千仏、遠々劫の諸仏の所説、現在十方の諸仏の説経、皆、法華経の経の一字の眷属なり。

されば、薬王品に、仏、宿王華菩薩に対して云わく「譬えば、一切の川流江河の諸水の中に海はこれ第一、衆山の中に須弥山はこれ第一、衆の星の中に月天子は最もこれ第一なるがごとし」等云々。妙楽大師、釈して云わく「已今当の説に最もこれ第一なり」等云々。この経の一字の中に十方法界の一切経を納めたり。譬えば、如意宝珠の一切の財を納め、虚空の万象を含めるがごとし。経の一字は一代に勝る故に、妙法蓮華の四字もまた八万法蔵に超過するなり。

妙とは、法華経に云わく「方便の門を開いて、真実の相を示す」。章安大師、釈して云わく「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙となす」。妙楽大師、この文を受けて云わく「発とは開なり」等云々。

妙と申すことは、開ということなり。

世間に、財を積める蔵に鑰なければ、開くことかたし。難開かざれば、蔵の内の財を見ず。華厳経は、仏説き給いたりしかども、経を開く鑰をば、仏彼の経に説き給わず。阿含・方等・般若・観経等の四十余年の経々も、仏説き給いたりしかども、彼の経々の意をば開き給わず。門を閉じておかせ給いたりしかば、人、彼の経々をさとる者一人もなかりき。たといさとれりと覚思おもいしも、僻見にてありしなり。しかるに、仏、法華経を説かせ給いて、諸経の蔵を開かせ給いき。この時に四十余年の九界の

衆生、始めて諸経の蔵の内の財をば見しりたりしなり。譬えば、大地の上に人畜・草木等あれども、日月の光なければ、眼ある人も人畜・草木の色かたちをしらず、日月いで給いてこそ、始めてこれをばしることには候え。爾前の諸経は長夜のやみのごとし。法華経の本迹二門は日月のごとし。諸の菩薩の二目ある、二乗の眇目なる、凡夫の盲目なる、闡提の生盲なる、共に爾前の経々にては色形弁えずありしほどに、法華経の時、迹門の月輪始めて出で給いし時、菩薩の両眼先にさとり、二乗の眇目次にさとり、凡夫の盲目次に開き、生盲の一闡提、未来に眼の開くべき縁を結ぶ。これひとえに妙の一字の徳なり。

迹門十四品の一妙、本門十四品の一妙、合わせて二妙。迹門の十妙、本門の十妙、合わせて二十妙。迹門の三十妙、本門の三十妙、合わせて六十妙。迹門の四十妙、本門の四十妙、観心の四十妙、合わせて百二十重の妙なり。六万九千三百八十四字、一々の字の下に一つの妙あり。総じて六万九千三百八十四の妙あり。妙とは、天竺には薩と云い、漢土には妙と云う。

妙とは具の義なり。具とは円満の義なり。法華経の一々の文字、一字一字に余の六万九千三百八十が一切の如意宝珠の財を雨らすがごとし。

譬えば、秋冬枯れたる草木の、春夏の日に値って、枝葉・華菓出来するがごとし。爾前の秋冬の草木のごとくなる九界の衆生、法華経の妙の一字の春夏の日輪にあいたてまつりて、菩提心の華さき、成仏・往生の菓なる。竜樹菩薩、大論に云わく「譬えば、大薬師の能く毒をもって薬となすがごとし」

云々。この文は、大論に法華経の妙の徳を釈する文なり。妙楽大師、釈して云わく「治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。総じて成仏・往生のなりがたき者四人あり。第一には決定性の二乗、第二には一闡提人、第三には空心の者、第四には謗法の者なり。これらを法華経において仏になさせ給う故に、法華経を妙とは云うなり。

提婆達多は、斛飯王の第一の太子、浄飯王にはおい、阿難尊者がこのかみ、教主釈尊にはいとこ、南閻浮提にかろからざる人なり。須陀比丘を師として出家し、阿難尊者に十八変をならい、外道の六万蔵、仏の八万蔵を胸にうかべ、五法を行じて、ほとんど仏よりも尊きけしきなり。両頭を立てて破僧罪を犯さんために、象頭山に戒壇を築き、仏弟子を招きとり、阿闍世太子をかたらいて云わく「我は仏を殺して新仏となるべし。太子は父の王を殺して新王となり給え」。阿闍世太子、すでに父の王を殺せしかば、提婆達多はまた仏をうかがい、大石をもちて仏の御身より血をいだし、阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし、五逆の内たる三逆をつぶさにつくる。その上、瞿伽利尊者を弟子とし、阿闍世王を檀那とたのみ、五天竺・十六の大国・五百の中国等の一逆・二逆・三逆等をつくれる者、皆、提婆が一類にあらざることこれなし。たとえば、大海の諸河をあつめ、大山の草木をあつめたるがごとし。智慧の者は舎利弗にあつまり、神通の者は目連にしたがい、悪人は提婆にかたらいしなり。

されば、厚さ十六万八千由旬、その下に金剛の風輪ある大地すでにわれて、生身に無間大城に堕ちにき。第一の弟子・瞿伽梨も、また生身に地獄に入る。旃遮婆羅門女もおちにき。波瑠璃王もおちぬ。善星比丘も堕ちぬ。またこれらの人々の生身に堕ちしをば、五天竺・十六の大国・五百の中国・十千

の小国の人々も、皆これを見る。六欲・四禅・色・無色・梵王・帝釈・第六天の魔王も、閻魔法王等も、皆、御覧ありき。三千大千世界・十方法界の衆生も、皆、聞きしなり。

されば、大地微塵劫はすぐとも、無間大城を出ずべからず。劫石はひすらぐとも、阿鼻大城の苦はつきじとこそ思い合いたりしに、法華経の提婆品にして、教主釈尊の昔の師・天王如来と記し給うことこそ不思議におぼゆれ。爾前の経々実ならば法華経は大妄語、法華経実ならば爾前の諸経は大虚誑罪なり。提婆が三逆をつぶさに犯してその外無量の重罪を作りし、天王如来となる。いわんや、二逆・一逆等の諸の悪人の得道疑いなきこと、譬えば、大地をかえすに草木等のかえるがごとく、堅石を破わる者軟草をわるがごとし。故に、この経をば妙と云う。

女人をば内外典にこれを誹りしり、三皇五帝の三墳五典に諂曲の者と定む。されば、「災いは三女より起こる」と云えり。国の亡び人の損ずる源は、女人を本とす。内典の中には、初成道の大法たる華厳経には「女人は地獄の使いなり。能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心は夜叉のごとし」と云い、双林最後の大涅槃経には「一切の江河必ず回曲有り。一切の女人必ず諂曲有り」と。また云わく「あらゆる三千界の男子の諸の煩悩を合わせ集めて、一人の女人の業障となす」等云々。

大華厳経の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて候は、女人は仏になるべき種子をいれり。譬えば、大旱魃の時、虚空の中に大雲おこり大雨を大地に下らすに、かれたるがごとくなる無量無辺の草木、花さき菓なる。しかりといえども、いれる種はおいずして、結句、雨しげければくちうするがごとし。仏は大雲のごとく、説教は大雨のごとく、かれたるがごとくなる草木を一切衆生に譬えたり。

仏教の雨に潤い、五戒・十善・禅定等の功徳を修するは、花咲き菓なるがごとし。雨ふれどもいりたる種のおいず、かえりてくちうするは、女人の仏教にあいて生死をはなれずして、かえりて仏法を失い、悪道に堕つるに譬うべし。これを「能く仏の種子を断つ」とは申すなり。

涅槃経の文に「一切の江河のまがれるがごとく、女人もまたまがれり」と説かれたるは、水はやわらかなる物なれば、石山なんどのこわき物にさえられて水のさきひるむゆえに、あれへこれへ行くなり。女人もまたかくのごとし。女人の心をば水に譬えたり。心よわくして水のごとくなり。道理と思うことも、男のこわき心に値いぬれば、せかれてよしなき方へおもむく。また、水にえがくにとどまらざるがごとし。女人は不信を体とするゆえに、只今さあるべしと見ることも、またしばらくあれば、あらぬさまになるなり。仏と申すは正直を本とす。故に、まがれる女人は仏になるべからず。五障三従と申して、五つのさわり、三つしたがう事あり。されば銀色女経には「三世の諸仏の眼は大地に落つとも、女人は仏になるべからず」と説かれ、大論には「清風はとるといえども、女人の心はとりがたし」と云えり。

かくのごとく諸経に嫌われたりし女人を、文殊師利菩薩の妙の一字を説き給いしかば、たちまちに仏になりき。あまりに不審なりし故に、宝浄世界の多宝仏の第一の弟子・智積菩薩、釈迦如来の御弟子の智慧第一の舎利弗尊者、四十余年の大小乗経の経文をもって竜女の仏になるまじき由を難ぜしかども、終に叶わず仏になりにき。初成道の「能く仏の種子を断つ」、双林最後の「一切の江河必ず回曲有り」の文も破れぬ。銀色女経ならびに大論の亀鏡も空しくなりぬ。智積・舎利弗は舌を巻いて口

を閉じ、人天大会は歓喜せしあまりに掌を合わせたりき。これひとえに妙の一字の徳なり。

この南閻浮提の内に二千五百の河あり。一々に皆まがれり。南閻浮提の女人の心のまがれるがごとし。ただし娑婆耶と申す河あり。縄を引きはえたるがごとくして、直ちに西海に入る。法華経を信ずる女人、またまたかくのごとく、直ちに西方浄土へ入るべし。これ妙の一字の徳なり。

妙とは蘇生の義なり。蘇生と申すは、よみがえる義なり。譬えば、黄鵠の子死せるに、鶴の母「子安」となけば、死せる子還って活り、鳩鳥水に入れば、魚蚌ことごとく死す。犀の角これにふるれば、死せる者皆よみがえるがごとく、爾前の経々にて仏種をいりて死せる二乗・闡提・女人等、妙の一字を持ちぬれば、いれる仏種も還って生ずるがごとし。天台云わく「闡提は心有り。なお作仏すべし。二乗は智を滅す。心生ずべからず。法華能く治す。また称して妙となす」。妙楽云わく「ただ大とのみ云って妙と名づけざることは、一には有心は治し易く、無心は治し難し。治し難きを能く治す。ゆえに妙と称す」等云々。これらの文の心は、大方広仏華厳経・大集経・大品経・大涅槃経等は題目に大の字のみありて妙の字なし。ただ生ける者を治して死せる者をば治せず。法華経は死せる者をも治するが故に妙と云う釈なり。

されば、諸経にしては、仏になる者も仏になるべからず。その故は、法華は仏になりがたき者すらなお仏になりぬ。なりやすき者は云うにや及ぶという道理立ちぬれば、法華経をとかれて後は、諸経におもむく人一人もあるべからず。しかるに、正像二千年過ぎて末法に入って、当世の衆生の成仏・往生のとげがたきことは、在世の二乗・闡提等にも百千万億倍すぎたる衆生の、観経等の四十余年の

経々により生死をはなれんと思うは、はかなし、はかなし。女人は在世・正像末、総じて一切の諸仏の一切経の中に、法華経をはなれて仏になるべからず。

霊山の聴衆、道場開悟たる天台智者大師、定めて云わく「他経は、ただ男にのみ記して女に記せず。今経は皆記す」等云々。釈迦如来・多宝仏・十方諸仏の御前にして、摩竭提国王舎城の艮、鷲の山と申す所にて、八箇年の間説き給いし法華経を、智者大師まのあたり聞こしめしけるに、我五十余年の一代聖教を説きおくことは皆、衆生利益のためなり。ただし、その中に四十二年の経々には「女人、仏になるべからず」と説きたまいしなり。今、法華経にして「女人、仏に成るととく」となのらせ給いしを、仏の滅後一千五百余年に当たって、鷲の山より東北十万八千里の山海をへだてて摩訶尸那と申す国あり、震旦国これなり。この国に仏の御使いに出でさせ給い、天台智者大師となのりて、「女人は法華経をはなれて仏になるべからず」と定めさせ給いぬ。

尸那国より三千里をへだてて東方に国あり、日本国となづけたり。天台大師、御入滅二百余年と申せしに、この国に生まれて伝教大師となのらせ給いて、秀句と申す書を造り給いしに、「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」と、竜女が成仏を定め置き給いたり。しかるに、当世の女人は即身成仏こそかたからめ、往生極楽は法華を憑まば疑いなし。譬えば、江河の大海に入るより容易もたやすく、雨の空より落つるよりもはやくあるべきことなり。

しかるに、日本国の一切の女人は、南無妙法蓮華経とは唱えずして、女人の往生・成仏をとげざるなり。双観・観経等によりて、弥陀の名号を一日に六万返・十万返なんどとなうるは、仏の名号なれば巧み

なるにはにたれども、女人不成仏・不往生の経によれる故に、いたずらに他の財を数えたる女人なり。これひとえに悪知識にたぼらかされたるなり。されば、日本国の一切の女人の御かたきは、虎狼よりも、山賊・海賊よりも、父母の敵・とわり等よりも、法華経をばおしえずして念仏等をおしうるこそ、一切の女人の御かたきなれ。

南無妙法蓮華経と一日に六万・十万・千万等も唱えて後に、暇あらば時々弥陀等の諸仏の名号をも口ずさみなるように申し給わんこそ法華経を信ずる女人にてはあるべきに、当世の女人は、一期の間弥陀の名号をばしきりにとなえ、念仏の仏事をばひまなくおこない、法華経をばつやつや唱えず、供養せず。あるいはわずかに法華経を持経者によまれども、念仏者をば父母・兄弟なんどのようにおもいなし、持経者をば所従・眷属よりもかろくおもえり。かくして、しかも法華経を信ずる由をなのるなり。そもそも浄徳夫人は、二人の太子の出家を許して法華経をひろめさせ、竜女は、「我は大乗の教えを聞いて、苦の衆生を度脱せん」とこそ誓いしが、全く他経ばかりを行じてこの経を行ぜじとは習わず。今の女人はひとえに他経を行じて法華経を行ずる方をしらず。とくとく心をひるがえすべし、心をひるがえすべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

文永三年丙寅正月六日

日蓮　花押

(034)

聖愚問答抄 上

文永5年('68) 47歳

夫れ、生を受けしより死を免れざる理は、賢き御門より卑しき民に至るまで人ごとにこれを知るといえども、実にこれを大事としこれを歎く者、千万人に一人も有りがたし。無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親しきをば歎くといえども、先立つははかなく留まるはかしこきように思って、昨日は彼のわざ今日はこのこととて、いたずらに世間の五欲にほだされて、白駒のかげ過ぎやすく羊の歩み近づくことをしらずして、空しく衣食の獄につながれ、いたずらに名利の穴におち、三途の旧里に帰り六道のちまたに輪回せんこと、心有らん人、誰か歎かざらん、誰か悲しまざらん。

ああ、老少不定は娑婆の習い、会者定離は浮き世のことわりなれば、始めて驚くべきにあらねども、正嘉の初め世を早うせし人のありさまを見るに、あるいは幼き子をふりすて、あるいは老いたる親を留めおき、いまだ壮年の齢にて黄泉の旅に趣く心の中、さこそ悲しかるらめ。行くもかなしみ、留まるもかなしむ。彼の楚王が神女に伴いし、情けを一片の朝の雲に残し、劉氏が仙客に値いし、思いを七世の後胤に慰む。予がごとき者、底に縁って愁いを休めん。「かかる山左のいやしき心なれば、身には思いのなかれかし」と云いけん人の古事さえ思い出でられて、末の代のわすれがたみにもとて、

難波のもしお草をかきあつめ、水くきのあとを形のごとくしるしおくなり。

悲しいかな、痛ましいかな。我ら無始より已来、無明の酒に酔って六道四生に輪回して、ある時は焦熱・大焦熱の炎にむせび、ある時は紅蓮・大紅蓮の氷にとじられ、ある時は餓鬼の飢渇の悲しみに値って五百生の間飲食の名をも聞かず。ある時は畜生の残害の苦しみをうけて、小さきは大きなるに呑まれ、短きは長きにまかる。これを残害の苦と云う。ある時は修羅の闘諍の苦をうけ、ある時は人間に生まれて八苦をうく。受・生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五盛陰苦等なり。ある時は天上に生まれて五衰をうく。かくのごとく三界の間を車輪のごとく回り、父子の中にも、親の親たる、子の子たることをさとらず。夫婦の会い遇えるも、会い遇いたることをしらず。迷えることは羊目に等しく、暗きことは狼眼に同じ。我を生みたる母の由来をもしらず、生を受けたる我が身も、死の終わりをしらず。

ああ、受け難き人界の生をうけ、値い難き如来の聖教に値い奉れり。一眼の亀の浮き木の穴にあえるがごとし。今度もし生死のきずなをきらず、三界の籠樊を出でざらんこと、かなしかるべし、かなしかるべし。

ここに、ある智人来って示して云わく、汝が歎くところ実にしかなり。かくのごとく無常のことわりを思い知り善心を発す者は、麟角よりも希なり。このことわりを覚らずして悪心を発す者は、牛毛よりも多し。汝早く生死を離れ菩提心を発さんと思わば、吾最第一の法を知れり。志あらば、汝がためにこれを説いて聞かしめん。

その時、愚人座より起って掌を合わせて云わく、我は日来外典を学し風月に心をよせて、いまだ仏教ということを委細にしらず。願わくは上人、我がためにこれを説き給え。

その時、上人の云わく、汝、耳を伶倫が耳に寄せ、目を離朱が眼に借って、心をしずめて我が教えをきけ。汝がためにこれを説かん。

夫れ、仏教は八万の聖教多けれども、諸宗の父母たること、戒律にはしかず。されば、天竺には世親・馬鳴等の薩埵、唐土には慧曠・道宣といいし人、これを重んず。我が朝には人皇四十五代聖武天皇の御宇に、鑑真和尚この宗と天台宗と両宗を渡して、東大寺の戒壇これを立つ。しかしてより已来当世に至るまで、崇重年旧り尊貴日に新たなり。なかんずく極楽寺の良観上人は、上一人より下万民に至るまで、生身の如来とこれを仰ぎ奉る。彼の行儀を見るに、実にもってしかなり。飯島の津にて六浦の関米を取っては諸国の道を作り、七道に木戸をかまえて人別の銭を取っては諸河に橋を渡す。慈悲は如来に斉しく、徳行は先達に越えたり。汝、早く生死を離れんと思わば、五戒・二百五十戒を持ち、慈悲をふかくして物の命を殺さずして、良観上人のごとく、道を作り橋を渡せ。これ第一の法なり。汝持たんや否や。

愚人いよいよ掌を合わせて云わく、能く能く持ち奉らんと思う。つぶさに我がためにこれを説き給え。そもそも、五戒・二百五十戒ということは、我らいまだ存知せず。委細にこれを示し給え。

智人云わく、汝は無下に愚かなり。五戒・二百五十戒ということをば、孩児もこれをしる。しかれども、汝がためにこれを説かん。五戒とは、一には不殺生戒、二には不偸盗戒、三には不妄語戒、四

には不邪淫戒、五には不飲酒戒、これなり。二百五十戒のことは多きあいだ、これを略す。

その時に愚人、礼拝・恭敬して云わく、我、今日より深くこの法を持ち奉るべし。

ここに予が年来の知音、ある所に隠居せる居士一人あり。予が愁歎を訪わんために来れるが、始めには往事渺茫として夢に似たることをかたり、終わりには行く末の冥々として弁え難きことを談ず。鬱を散じ思いをのべて後、予に問うて云わく、そもそも人の世に有る、誰か後生を思わざらん。貴辺いかなる仏法をか持って出離をねがい、また亡者の後世をも訪い給うや。

予答えて云わく、一日、ある上人来って、我がために五戒・二百五十戒を授け給えり。実にもって心肝にそみて貴し。我深く良観上人のごとく、及ばぬ身にも、悪わろき道を作り、深き河には橋をわたさんと思えるなり。

その時、居士示して云わく、汝が道心貴きに似て愚かなり。今談ずるところの法は、浅ましき小乗の法なり。されば、仏は則ち八種の喩えを設け、文殊はまた十七種の差別を宣べたり。あるいは蛍火・日光の喩えを取り、あるいは水精・瑠璃の喩えあり。ここをもって三国の人師も、その破文一つにあらず。

次に行者の尊重のこと、必ず人の敬うによって法の貴きにあらず。されば、仏は、「法に依って人に依らざれ」と定め給えり。我伝え聞く、上古の持律の聖者の振る舞いは、殺を言い収を言うには知浄の語有り、行雲廻雪には死屍の想いを作す。しかるに、今の律僧の振る舞いを見るに、布絹・財宝をたくわえ、利銭・借り請けを業とす。教行既に相違せり。誰かこれを信受せん。

次に道を作り橋を渡すこと、還って人の歎きなり。飯島の津にて六浦の関米を取る。諸人の歎きこれ

多し。諸国七道の木戸、これも、旅人のわずらい、ただこのことに在り。眼前のことなり。汝見ざるや否や。

愚人色を作して云わく、汝が智分をもって上人を謗じ奉り、その法を誹ること、謂れ無し。知って云うか、愚かにして云うか。恐おそろし、おそろし。

その時、居士笑って云わく、ああ愚おろかなり、おろかなり。彼の宗の僻見を粗々あらあら申すべし。そもそも教に大小有り、宗に権実を分かてり。鹿苑施小の昔は化城の戸ぼそに導くといえども、鷲峰開顕の筵にはその得益さらにこれ無し。

その時、愚人茫然として居士に問うて云わく、文証・現証実にもってしかなり。さて、いかなる法を持ってか生死を離れ速やかに成仏せんや。

居士示して云わく、我在俗の身なれども、深く仏道を修行して、幼少より多くの人師の語を聞き、ほぼ経教をも開き見るに、末代我らがごとくなる無悪不造のためには、念仏往生の教えにしくはなし。されば、恵心僧都は「夫れ、往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり」と云い、法然上人は諸経の要文を集めて一向専修の念仏を弘め給う。中にも、弥陀の本願は諸仏超過の崇重なり。始め無三悪趣の願より終わり得三法忍の願に至るまで、いずれも悲願めでたけれども、第十八の願、殊に我らがために殊勝なり。また十悪・五逆をもきらわず、一念・多念をもえらばず。されば、上一人より下万民に至るまで、この宗をもてなし給うこと、他に異なり。また往生の人それいくばくぞや。

その時、愚人云わく、実に、小を恥じて大を慕い浅きを去って深きに就くは、仏教の理のみにあらず、世間にもこれ法なり。我早く彼の宗にうつらんと思う。委細に彼の旨を語り給え。彼の仏の悲

願の中に「五逆・十悪をも簡ばず」と云える五逆とは何らぞや、十悪とはいかん。

智人の云わく、五逆とは、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を出だし、和合僧を破す、これを五逆と云うなり。十悪とは、身に三つ、口に四つ、意に三つなり。身に三つとは殺・盗・婬、口に四つとは妄語・綺語・悪口・両舌、意に三つとは貪・瞋・癡、これを十悪と云うなり。

愚人云わく、我、今解しぬ。今日よりは他力往生に憑みを懸くべきなり。

ここに愚人また云わく、もっての外盛んにいみじき密宗の行人あり。これも予が歎きを訪わんがために来臨して、始めには狂言・綺語のことわりを示し、終わりには顕密二宗の法門を談じて、予に問うて云わく、そもそも汝は、いかなる仏法をか修行し、いかなる経論をか読誦し奉るや。予答えて云わく、我、一日、ある居士の教えによって、浄土の三部経を読み奉り、西方極楽の教主に憑みを深く懸くるなり。

行者云わく、仏教に二種有り。一には顕教、二には密教なり。顕教の極理は密教の初門にも及ばず云々。汝が執心の法を聞けば、釈迦の顕教なり。我が持つところの法は、大日覚王の秘法なり。実に三界の火宅を恐れ寂光の宝台を願わば、すべからく顕教をすてて密教につくべし。付捨

愚人驚いて云わく、我いまだ顕密二道ということを聞かず。いかなるを顕教と云い、いかなるを密教と云えるや。

行者云わく、予はこれ頑愚にして、あえて賢を存せず。しかりといえども、今、一・二の文を挙げて汝が矇昧を挑げん。顕教とは、舎利弗等の請いによって応身如来の説き給う諸教なり。密教とは、

自受法楽のために、法身大日如来の金剛薩埵を所化として説き給うところの大日経等の三部なり。

愚人云わく、実にもってしかなり。先非をひるがえして、賢き教えに付き奉らんと思うなり。

またここに、萍のごとく諸州を回り、蓬のごとく県々に転ずる非人の、それとも知らず来り、門の柱に寄り立って含笑み、語ることなし。あやしみをなしてこれを問うに、始めには云うことなし。後に強いて問いを立つる時、彼が云わく「月蒼々として風忙々たり」と。形質常に異に、言語また通ぜず。その至極を尋ぬれば、当世の禅法これなり。予、彼の人の有り様を見、その言語を聞いて仏道の良因を問う時、非人云わく、修多羅の教えは月をさす指、教網はこれ言語にとどこおる妄事なり。我が心の本分におちつかんと出で立つ法は、その名を禅と云うなり。

愚人云わく、願わくは、我聞かんと思う。

非人云わく、実にその志深くば、壁に向かい坐禅して、本心の月を澄ましめよ。ここをもって、西天には二十八祖系乱れず、東土には六祖の相伝明白なり。汝これを悟らずして教網にかかる。不便、不便。「是心即仏、即心是仏」なれば、この身の外に、さらにいずくにか仏あらんや。

愚人この語を聞いてつくづくと諸法を観じ、閑かに義理を案じて云わく、仏教万差にして、理非明らめ難し。宜なるかな、常啼は東に請い、善財は南に求め、薬王は臂を焼き、楽法は皮を剝ぐ。善知識実に値い難し。あるいは教内と談じ、あるいは教外と云う。このことわりを思うに、いまだ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懐き、人師を見る族は薄氷の心を成せり。ここをもって金言には、「法に依って人に依らざれ」と定め、また爪上の土の譬えあり。もし仏法の真偽をしる人あらば、尋

ねて師とすべし。求めて崇むべし。

夫れ、人界に生を受くるを天上の糸にたとえ、仏法の視聴は浮き木の穴に類いせり。身を軽くして法を重くすべしと思うによって衆山に攀じ、歎きに引かれて諸寺を回る。足に任せて一つの巌窟に至るに、後には青山峨々として松風常楽我浄を奏し、前には碧水湯々として岸うつ波四徳波羅蜜を響かす。深谷に開敷せる花も中道実相の色を顕し、広野に綻ぶる梅も界如三千の薫りを添う。言語道断・心行所滅せり。謂いつべし、商山の四皓の所居とも。また知らず、古仏経行の迹なるか。景雲朝に立ち、霊光夕べに現ず。ああ、心をもって計るべからず、詞をもって宣ぶべからず。予この砌に沈吟とさまよい、彷徨とたちもとおり、徙倚とたたずむ。この処に忽然として一りの聖人坐す。その行儀を拝すれば、法華読誦の声深く心肝に染みて、閑窓の戸ぼそを伺えば、玄義の牀に臂をくたす。

ここに聖人、予が求法の志を酌み知って詞を和らげ、予に問うて云わく、汝なにによって、この深山の窟に至れるや。

予答えて云わく、生をかろくして法をおもくする者なり。

聖人問うて云わく、その行法いかん。

予答えて云わく、本より我は、俗塵に交わっていまだ出離を弁えず。たまたま善知識に値って、始めには律、次には念仏・真言ならびに禅、これらを聞くといえども、いまだ真偽を弁えず。

聖人云わく、汝が詞を聞くに、実にもってしかなり。身をかろくして法をおもくするは先聖の教え、予が存するところなり。そもそも上は非想の雲の上、下は那落の底までも、生を受けて死をまぬかる

る者やはある。しかれば、外典のいやしき教おしえにも「朝に紅顔有って世路に誇るとも、夕べには白骨となって郊原に朽ちぬ」と云えり。雲上に交わって、雲のびんずら鮮あざやかに、雪のたもとをひるがえすとも、その楽しみをおもえば、夢の中の夢なり。山のふもと、蓬がもとはついの栖なり。玉の台、錦の帳も、後世の道にはなにかせん。小野小町・衣通姫が花の姿も無常の風にちり、樊噲・張良が武芸に達せしも獄卒の杖をかなしむ。されば、心ありし古人の云わく「あわれなり鳥べの山の夕煙おくる人ととまるべきかは」。「末のつゆ本のしずくや世の中のおくれさきだつためしなるらん」。先亡後滅の理、始めて驚くべきにあらず。願うても願うべきは仏道、求めても求むべきは経教なり。そもそも、汝が云うところの法門をきけば、あるいは小乗、あるいは大乗、位の高下はしばらくこれを置く、還って悪道の業たるべし。

ここに、愚人、驚いて云わく、如来一代の聖教はいずれも衆生を利せんがためなり。始め七処八会の筵より終わり跋提河の儀式まで、いずれか釈尊の所説ならざる。たとい一分の勝劣をば判ずとも、何ぞ悪道の因と云うべきや。

聖人云わく、如来一代の聖教に、権有り実有り、大有り小有り、また顕密二道相分かち、その品一つにあらず。すべからく、その大途を示して汝が迷いを悟らしめん。

夫れ、三界の教主・釈尊は、十九歳にして伽耶城を出でて、檀特山に籠もって難行苦行し、三十成道の刻みに三惑頓に破し、無明の大夜ここに明けしかば、すべからく本願に任せて一乗妙法蓮華経を宣ぶべしといえども、機縁万差にしてその機仏乗に堪えず。しかれば、四十余年に所被の機縁を調え

て、後八箇年に至って出世の本懐たる妙法蓮華経を説き給えり。

しかれば、仏の御年七十二歳にして、序分の無量義経に説き定めて云わく「我は先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。仏眼をもって一切の諸法を観ずるに、宣説すべからず。所以はいかん。諸の衆生の性欲の不同なることを知ればなり。性欲は不同なれば、種々に法を説きき。種々に法を説くことは、方便力をもってす。四十余年にはいまだ真実を顕さず」文。この文の意は、仏の御年三十にして寂滅道場菩提樹の下に坐して、仏眼をもって一切衆生の心根を御覧ずるに、衆生成仏の直道たる法華経をば説くべからず。ここをもって、空拳を挙げて嬰児をすかすがごとく、様々のたばかり（謀）をもって、四十余年が間はいまだ真実を顕さずと年紀をさして、青天に日輪の出で暗夜に満月のかかるがごとく説き定めさせ給えり。

この文を見て、何ぞ、同じ信心をもって、仏の虚事と説かるる法華已前の権教に執著して、めずらしからぬ三界の故宅に帰るべきや。されば、法華経の一の巻の方便品に云わく「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」文。この文の意は、前四十二年の経々、汝が語るところの念仏・真言・禅・律を正直に捨てよとなり。この文明白なる上、重ねていましめて、第二の巻の譬喩品に云わく「ただ楽って大乗経典を受持するのみにして、乃至、余経の一偈をも受けざれ」文。この文の意は、年紀かれこれ煩わし、詮ずるところ、法華経より自余の経をば一偈をも受くべからずとなり。しかるに、八宗の異義蘭菊に、道俗形を異にすれども、一同に法華経をば崇むる由を云う。されば、これらの文をばいかが弁えたる。正直に捨てよと云って余経の一偈をも禁むるに、あるいは念仏、あるいは

真言、あるいは禅、あるいは律、これ余経にあらずや。

今この妙法蓮華経とは、諸仏出世の本意、衆生成仏の直道なり。されば、釈尊は付嘱を宣べ、多宝は証明を遂げ、諸仏は舌相を梵天に付けて「皆これ真実なり」と宣べ給えり。この経は、一字も諸仏の本懐、一点も多生の助けなり。一言一語も虚妄あるべからず。この経の禁めを用いざる者は、諸仏の舌をきり、賢聖をあざむく人にあらずや。その罪実に怖るべし。されば、二の巻に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」文。この文の意は、もし人この経の一偈一句をも背かん人は、過去・現在・未来、三世十方の仏を殺さん罪と定む。経教の鏡をもって当世にあてみるに、法華経をそむかぬ人は実にもって有りがたし。

事の心を案ずるに、不信の人なお無間を免れず。いわんや、念仏の祖師・法然上人は、法華経をもって念仏に対して「抛てよ」と云々。五千・七千の経教に、いずれの処にか法華経を抛てよと云う文ありや。三昧発得の行者・生身の弥陀仏とあがむる善導和尚、五種の雑行を立てて、法華経をば「千の中に一りも無し」とて千人持つとも一人も仏になるべからずと立てたり。経文には、「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」と談じて、この経を聞けば、十界の依正、皆仏道を成ずと見えたり。ここをもって、五逆の調達は天王如来の記別に予かり、非器・五障の竜女も南方に頓覚成道を唱う。いわんやまた、蛣蜣の六即を立てて機を漏らすことなし。善導の言と法華経の文と、実にもって天地雲泥せり。いずれに付くべきや。なかんずくその道理を思うに、諸仏・衆経の怨敵、聖僧・衆人の讐敵なり。経文のごとくならば、いかでか無間を免るべきや。

ここに愚人色を作して云わく、汝賤しき身をもってほしいままに莠言を吐く。悟って言うか、迷って言うか、理非弁え難し。忝くも善導和尚は弥陀善逝の応化、あるいは勢至菩薩の化身と云えり。法然上人もまたしかなり。善導の後身といえり。上古の先達たる上、行徳秀発し、解了底を極めたり。何ぞ悪道に堕ち給うと云うや。

聖人云わく、汝が言しかなり。予も仰いで信を取ること、かくのごとし。ただし、仏法はあながちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文を先とすべし。身の賤しきをもって、その法を軽んずることなかれ。「有人楽生悪死。有人楽死悪生（人有って生を楽い死を悪む。人有って死を楽い生を悪む）」の十二字を唱えし毘摩大国の狐は、帝釈の師と崇められ、「諸行無常」等の十六字を談ぜし鬼神は、雪山童子に貴まる。これ必ず狐と鬼神との貴きにあらず。ただ法を重んずる故なり。

されば、我らが慈父・教主釈尊、双林最後の御遺言・涅槃経の第六には、「法に依って人に依らざれ」とて、普賢・文殊等の等覚已還の大薩埵、法門を説き給うとも、経文を手に把らずば用いざれとなり。天台大師云わく「修多羅と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべからず」文。釈の意は、経文に明らかならんを用いよ、文証無からんをば捨てよとなり。伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなかれ」文。前の釈と同意なり。竜樹菩薩云わく「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざるは黒論なり」文。意は、経の中にも法華已前の権教をすててこの経につけよとなり。経文にも論文にも、法華に対して諸余の経典を捨てよと云うこと分明なり。しかるに、開元の録に挙ぐるところの五千・七千の経巻に、「法華経を捨てよ、乃至抛てよ」と嫌うことも、また雑行

に摂めて「これを捨てよ」と云う経文も全く無し。されば、慥かの経文を勘え出だして、善導・法然の無間の苦を救わるべし。

今の世の念仏の行者、俗男・俗女、経文に違するのみならず、また師の教えにも背けり。その雑行とは、選択に云わく五種の雑行とて念仏申さん人のすつべき日記、善導の釈これ有り。

「第一に読誦雑行とは、上の観経等の往生浄土の経を除いてより已外、大小乗・顕密の諸経において受持・読誦するを、ことごとく読誦雑行と名づく乃至第三に礼拝雑行とは、上の弥陀を礼拝するを除いてより已外、一切の諸余の仏菩薩等および諸の世天において礼拝・恭敬するを、ことごとく礼拝雑行と名づく。第四に称名雑行とは、上の弥陀の名号を称うるを除いてより已外、自余の一切の仏菩薩等および諸の世天等の名号を称うるを、ことごとく称名雑行と名づく。第五に讃歎供養雑行とは、上の弥陀仏を除いてより已外、一切の諸余の仏菩薩等および諸の世天等において讃歎・供養するを、ことごとく讃歎供養雑行と名づく」文。

この釈の意は、第一の読誦雑行とは、念仏申さん道俗・男女、読むべき経あり、読むまじき経ありと定めたり。読むまじき経は、法華経・仁王経・薬師経・大集経・般若心経・転女成仏経・北斗寿命経、ことさらうち任せて諸人読まるる八巻の中の観音経、これらの諸経を一句一偈も読むならば、たとい念仏を志す行者なりとも、雑行に摂められて往生すべからず云々。予、愚眼をもって世を見るに、たとい念仏申す人なれども、この経々を読む人は、多く師弟敵対して七逆罪と成りぬ。

また第三の礼拝雑行とは、念仏の行者は弥陀三尊より外は、上に挙ぐるところの諸仏菩薩・諸天善

神を礼するをば、礼拝雑行と名づけ、またこれを禁ず。しかるを、日本は神国として伊弉諾・伊弉冉の尊この国を作り、天照太神垂迹し御坐しまして、御裳濯河の流れ久しくして今にたえず。あに、この国に生を受けてこの邪義を用ゆべきや。また普天の下に生まれて三光の恩を蒙りながら、誠に日月・星宿を破すること、もっとも恐れ有り。

また第四の称名雑行とは、念仏申さん人は、唱うべき仏菩薩の名あり、唱うまじき仏菩薩の名あり。唱うべき仏菩薩の名とは、弥陀三尊の名号、唱うまじき仏菩薩の名号とは、釈迦・薬師・大日等の諸仏、地蔵・普賢・文殊・日月星、二所と三島と熊野と羽黒と天照太神と八幡大菩薩と、これらの名を一遍も唱えん人は、念仏を十万遍・百万遍申したりとも、この仏菩薩・日月神等の名を唱うる過によって、無間にはおつとも、往生すべからずと云々。我世間を見るに、念仏を申す人も、これらの諸仏菩薩・諸天善神の名を唱うる故に、これまた師の教えに背けり。

第五の讃歎供養雑行とは、念仏申さん人は、供養すべき仏は弥陀三尊を供養せん外は、上に挙ぐるところの仏菩薩・諸天善神に香華のすこしをも供養せん人は、念仏の功は貴けれどもこの過によって雑行に摂すとこれをきらう。しかるに、世を見るに、社壇に詣でては幣帛を捧げ、堂舎に臨んでは礼拝を致す。これまた師の教えに背けり。汝もし不審ならば、選択を見よ。その文明白なり。

また善導和尚、観念法門経に云わく「酒肉五辛、誓って発願して手に捉らざれ、口に喫まざれ。もしこの語に違せば、即ち身・口ともに悪瘡を着けんと願ぜよ」文。この文の意は、念仏申さん男・女・尼・法師は、酒を飲まざれ、魚鳥を食わざれ、その外にら・ひる等の五つのからくくさき物を食わざ

れ、これを持たざる念仏者は、今生には悪瘡身に出で、後生には無間に堕つべしと云々。しかるに、念仏申す男・女・尼・法師、この誡めをかえりみず、ほしいままに酒をのみ、魚鳥を食らうこと、剣を飲む譬えにあらずや。

ここに愚人云わく、誠にこれこの法門を聞くに、念仏の法門実に往生すといえども、その行儀、修行し難し。いわんや、彼の憑むところの経論は、皆もって権説なり。往生すべからざるの条、分明なり。ただし、真言を破することは、その謂れ無し。夫れ、大日経とは大日覚王の秘法なり。大日如来より系も乱れず善無畏・不空これを伝え、弘法大師は日本に両界の曼陀羅を弘め、尊高三十七尊、秘奥なるものなり。しかるに、顕教の極理は、なお密教の初門にも及ばず。ここをもって、後唐院は「法華すらなお及ばず。いわんや自余の教えをや」と釈し給えり。このこと、いかんが心得うべきや。

聖人示して云わく、予も始めは大日に憑みを懸けて密宗に志を寄す。しかれども、彼の宗の最底を見るに、その立義もまた謗法なり。汝が云うところの高野の大師は、嵯峨天皇の御宇の人師なり。しかるに、皇帝より仏法の浅深を判釈すべき由の宣旨を給わって、十住心論十巻これを造る。この書広博なるあいだ、要を取って三巻にこれを縮め、その名を秘蔵宝鑰と号す。始め異生羝羊心より終わり秘密荘厳心に至るまで十に分別し、第八法華・第九華厳・第十真言と立てて、「法華は華厳にも劣れば、大日経には三重の劣」と判じて、「かくのごとき乗々は、自乗に仏の名を得れども、後に望めば戯論と作る」と書いて、法華経を「狂言・綺語」と云い、釈尊をば「無明に迷える仏」と下せり。よって、伝法院を建立せし弘法の弟子・正覚房は「法華経は大日経のはきものとりに及ばず、釈迦仏は

大日如来の牛飼いにも足らず」と書けり。

汝、心を静めて聞け。一代の五千・七千の経教、外典三千余巻にも、「法華経は戯論、三重の劣、華厳経にも劣り、釈尊は無明に迷える仏にて大日如来の牛飼いにも足らず」と云う慥かなる文ありや。

たといさる文有りというとも、能く能く思案あるべきか。

経教は西天より東土に泊ぼす時、訳者の意楽に随って経論の文不定なり。さて後秦の羅什三蔵は、「我漢土の仏法を見るに、多く梵本に違せり。我が訳するところの経、もし誤りなくば、我死して後、身は不浄なれば焼くるというとも、舌ばかりは焼けざらん」と常に説法し給いしに、焼き奉る時、御身は皆骨となるといえども、御舌ばかりは青蓮華の上に光明を放って日輪を映奪し給いき。有り難きことなり。さてこそ、ことさら彼の三蔵の訳するところの法華経は、唐土にやすやすと弘まらせ給いしか。しかれば、延暦寺の根本大師、諸宗を責め給いしには、「法華を訳する三蔵は舌の焼けざる験あり。汝等が依経は皆誤れり」と破し給うはこれなり。涅槃経にも「我が仏法は他国へ移らん時、誤り多かるべし」と説き給えば、経文にたとい「法華経はいたずらごと」、釈尊をば「無明に迷える仏なり」とありとも、権教・実教、大乗・小乗、説時の前後、訳者、能く能く尋ぬべし。いわゆる、老子・孔子は九思一言・三思一言、周公旦は食するに三度吐き沐するに三度にぎる。外典のあさき、なおかくのごとし。いわんや、内典の深義を習わん人をや。その上、この義、経論に迹形もなし。「人を毀り、法を謗じては、悪道に堕つべし」とは、弘法大師の釈なり。必ず地獄に堕ちんこと、疑いなきものなり。ここに愚人、茫然とほれ、忽然となげいて、やや久しゅうして云わく、この大師は内外の明鏡、衆

人の導師たり。徳行世に勝れ、名誉あまねく聞こえて、あるいは唐土より三鈷を八万余里の海上を投ぐるに即ち日本に至り、あるいは心経の旨をつづるに蘇生の族途に彳む。しかれば、この人ただ人にあらず、大聖権化の垂迹なり。仰いで信を取らんにはしかじ。

聖人云わく、予も始めはしかなり。ただし、仏道に入って理非を勘え見るに、仏法の邪正は必ず得通自在にはよらず。ここをもって、仏は「法に依って人に依らざれ」と定め給えり。前に示すがごとし。彼の阿伽陀仙は恒河を片耳にたたえて十二年、耆兔仙は一日の中に大海をすいほす。張階は霧を吐き、欒巴は雲を吐く。しかれども、いまだ仏法の是非を知らず、因果の道理をも弁えず。異朝の法雲法師は講経勤修の砌に須臾に天華をふらせしかども、妙楽大師は、「感応かくのごときも、なお理に称わず」とて、いまだ仏法をばしらずと破し給う。

夫れ、この法華経と申すは、已今当の三説を嫌って、已前の経をば「いまだ真実を顕さず」と打ち破り、肩を並ぶる経をば「今説」の文をもってせめ、已後の経をば「当説」の文をもって破る。実に三説第一の経なり。

第四の巻に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところの経典、しかもこの経の中において、法華は最も第一なり」文。この文の意は、霊山会上に薬王菩薩と申せし菩薩に仏告げて云わく、始め華厳より終わり涅槃経に至るまで、無量無辺の経、恒河沙等の数多し。その中には今の法華経最第一と説かれたり。しかるを、弘法大師は一の字を三と読まれたり。同巻に云わく「我は仏道のために、無量の土において、始めより今に至るまで、広く諸経を説く。しかもその中において、この経は第一な

り」。この文の意は、また釈尊無量の国土にして、あるいは名字を替え、あるいは年紀を不同になし、種々の形を現して説くところの諸経の中には、この法華経を第一と定められたり。同じき第五の巻には「最もその上に在り」と宣べて、大日経・金剛頂経等の無量の経の頂にこの経は有るべしと説かれたるを、弘法大師は「最もその下に在り」と謂えり。

釈尊と弘法と、法華経と宝鑰とは、実にもって相違せり。釈尊を捨て奉って弘法に付くべきか、また弘法を捨てて釈尊に付き奉るべきか。また経文に背いて人師の言に随うべきか、人師の言を捨て金言を仰ぐべきか、用捨心に有るべし。

また第七の巻の薬王品に十喩を挙げて教えを歎ずるに、第一は水の譬えなり。江河を諸経に譬え、大海を法華に譬えたり。しかるを、「大日経は勝れたり、法華は劣れり」と云う人は、即ち「大海は小河よりも少すくなし」と云わん人なり。しかるに、今の世の人は、海の諸河に勝ることをば知るといえども、法華経の第一なることをば弁えず。第二は山の譬えなり。衆山を諸経に譬え、須弥山を法華に譬えたり。須弥山は上下十六万八千由旬の山なり。いずれの山か肩を並ぶべき。法華経を「大日経に劣る」と云う人は、「富士山は須弥山より大なり」と云わん人なり。第三は星月の譬えなり。諸経を星に譬え、法華経を月に譬う。月と星とはいずれ勝りたりと思えるや。乃至、次下には、「この経もまたかくのごとく、一切の如来の所説、もしは菩薩の所説、もしは声聞の所説、諸の経法の中に、最もこれ第一なり」とて、この法華経はただ釈尊一代の第一と説き給うのみにあらず、大日および薬師・阿弥陀等の諸仏、普賢・文殊等の菩薩の一切の説くところの諸経の中に、この法華経第一と説け

り。されば、もしこの経に勝りたりと云う経有らば、外道・天魔の説と知るべきなり。

その上、大日如来というは、久遠実成の教主釈尊、四十二年和光同塵してその機に応ずる時、三身即一の如来しばらく毘盧遮那と示せり。この故に、開顕実相の前には、釈迦の応化と見えたり。ここをもって普賢経には「釈迦牟尼仏は、毘盧遮那遍一切処と名づけたてまつる。その仏の住処は、常寂光と名づく」と説けり。今、法華経は、十界互具・一念三千・三諦即是・四土不二と談ず。その上に一代聖教の骨髄たる二乗作仏・久遠実成は今経に限れり。汝語るところの大日経・金剛頂経等の三部の秘経にこれらの大事ありや。善無畏・不空等、これらの大事の法門を盗み取って、己が経の眼目とせり。本経・本論には迹形もなき誑惑なり。急ぎ急ぎこれを改むべし。

そもそも大日経とは、四教含蔵して尽形寿戒等を明かせり。唐土の人師は天台所立の第三時・方等部の経なりと定めたる権教なり。浅あさまし、あさまし。汝、実に道心あらば、急いで先非を悔ゆべし。夫れ以んみれば、この妙法蓮華経は一代の観門を一念に統すべ、十界の依正を三千につづめたり。縮

聖愚問答抄 下

ここに愚人いささか和らいで云わく、経文は明鏡なり、疑慮をいたすに及ばず。ただし、法華経は三説に秀で一代に超ゆるといえども、言説に拘らず経文に留まらざる我らが心の本分の禅の一法には

しくべからず。およそ万法を払遣して言語の及ばざるところを、禅法とは名づけたり。されば、跋提河の辺、沙羅林の下にして、釈尊、金棺より御足を出だし拈華微笑して、この法門を迦葉に付嘱ありしより已来、天竺二十八祖系乱れず、唐土には六祖次第に弘通せり。達磨は西天にしては二十八祖の終わり、東土にしては六祖の始めなり。相伝をうしなわず、教網に滞るべからず。ここをもって大梵天王問仏決疑経に云わく「吾に正法眼蔵、涅槃の妙心、実相無相、微妙の法門有り。教外に別伝し、文字を立てず、摩訶迦葉に付嘱す」とて、迦葉にこの禅の一法をば教外に伝うと見えたり。すべて修多羅の経教は月をさす指、月を見て後は指何かはせん。心の本分、禅の一理を知って後は、仏教に心を留むべしや。されば古人云わく「十二部経はすべてこれ閑文字」と云々。よって、この宗の六祖・慧能の壇経を披見するに、実にもってしかなり。言下に契会して後は、教は何かせん。この理いかんが弁えんや。

聖人示して云わく、汝まず法門を置いて道理を案ぜよ。そもそも、我、一代の大途を伺わず十宗の淵底を究めずして、国を諫め人を教うべきか。汝が談ずるところの禅は、我最前に習い極めてその至極を見るに、はなはだもって僻事なり。禅に三種あり。いわゆる、如来禅と教禅と祖師禅となり。汝が言うところの祖師禅等の一端、これを示さん。聞いてその旨を知れ。

もし教を離れてこれを伝うといわば、教を離れて理無く、理を離れて教無し。理全く教、教全く理という道理、汝これを知らざるや。「拈華微笑して、迦葉に付嘱し給う」というも、これ教なり。「不立文字」という四字も、即ち教なり、文字なり。このこと、和漢両国に事旧りぬ。今いえば事新しき

に似たれども、一・両の文を勘えて汝が迷いを払わしめん。

補註十一に云わく「また、もし言説に滞ると謂わば、しばらく娑婆世界には、将に何をもって仏事となさんや。禅徒あに言説もて人に示さざらんや。文字を離れて解脱の義を談ずることなし。あに聞かざらんや」。乃至、次下に云わく「あに達磨西より来って『直ちに人心を指し見性して成仏す』というに、しかも華厳等の諸大乗経にこのこと無からんや。ああ、世人、何ぞそれ愚かなるや。汝等当に仏の所説を信ずべし。諸仏如来は言に虚妄無し」。

この文の意は、もし教文にとどこおり言説にかかわるとて教の外に修行すといわば、この娑婆国にはさていかんがして仏事・善根を作すべき。さように云うところの禅人も、人に教うる時は言をもって云わざるべしや。その上、仏道の解了を云う時、文字を離れて義なし。また達磨西より来って直ちに人心を指して仏なりと云う。これ程の理は、華厳・大集・大般若等の法華已前の権大乗経にも在々処々にこれを談ぜり。これをいみじきこととせんは、無下に云うかいなきことなり。ああ、今の世の人、何ぞはなはだひがめるや。ただ中道実相の理に契当せる妙覚果満の如来の誠諦の言を信ずべきなり。

また妙楽大師、弘決の一に、この理を釈して云わく「世人、教を蔑ろにして理観を尚ぶは、誤れるかな、誤れるかな」と。この文の意は、今の世の人々は、観心・観法を先として経教を尋ね学ばず、還って教をあなずり経をかろしむる、これ誤れりと云う文なり。

その上、当世の禅人、自宗に迷えり。続高僧伝を披見するに、習禅の初祖・達磨大師の伝に云わく

「教に藉って宗を悟る」。如来一代の聖教の道理を習学し、法門の旨、宗々の沙汰を知るべきなり。また達磨の弟子、六祖の第二祖・慧可の伝に云わく「達磨禅師、四巻の楞伽をもって可に授けて云わく『我、漢の地を観るに、ただこの経のみ有り。仁者、依行せば、自ずから世を度することを得ん』と」。この文の意は、達磨大師天竺より唐土に来って、四巻の楞伽経をもって慧可に授けて云わく「我この国を見るに、この経殊に勝れたり。汝持ち修行して仏に成れ」となり。

これらの祖師、既に経文を前とす。もしこれによって経に依ると云わば、大乗か小乗か、権教か実教か、能く能く弁うべし。あるいは経を用いるには、禅宗も楞伽経・首楞厳経・金剛般若経等による。これ皆法華已前の権教、覆蔵の説なり。ただ諸経に「是心即仏、即心是仏」等の理の方を説ける一・両の文と句とに迷って、大小、権実、顕露・覆蔵をも尋ねず、ただ不二を立てて而二を知らず、「己仏に均しと謂う」の大慢を成せり。彼の月氏の大慢が迹を継ぎ、この尸那の三階禅師が古風を追う。しかりといえども、大慢は生きながら無間に入り、三階は死して大蛇と成りぬ。恐おそろし、おそろし。

釈尊は、三世了達の解了朗らかに、妙覚果満の智月潔くして、未来を鑑みたまい、像法決疑経に記して云わく「諸の悪比丘、あるいは禅を修すること有るも、経論に依らず。自ら己見を逐って、非をもって是となし、これ邪なりこれ正なりと分別すること能わず。あまねく道俗に向かって、かくのごとき言を作さん。『我能くこれを知り、我能くこれを見る』と。当に知るべし、この人は速やかに我が法を滅せん」。この文の意は、諸の悪比丘有って、禅を信仰して経論をも尋ねず、邪見を本として法門の是非をば弁えずして、しかも男・女・尼・法師等に向かって「我よく法門を知れり。人はし

らず」と云って、この禅を弘むべし。当に知るべし、この人は我が正法を滅すべしとなり。この文をもって当世を見るに、あたかも符契のごとし。汝慎むべし、汝畏るべし。

先に談ずるところの、天竺に二十八祖有ってこの法門を口伝すということ、その証拠いずれに出でたるや。仏法を相伝する人、二十四人あるいは二十三人と見えたり。しかるを、二十八祖と立つること、出だすところの翻訳いずれにかある。全く見えざるところなり。この付法蔵の人のこと、私に書くべきにあらず。如来の記文、分明なり。

その付法蔵伝に云わく「また比丘有り、名づけて師子と曰う。罽賓国において大いに仏事を作す。時に彼の国王をば弥羅掘と名づけ、邪見熾盛にして心に敬信無く、罽賓国において塔寺を毀壊し、衆僧を殺害す。即ち利剣をもって、もって師子を斬る。頸の中に血無く、ただ乳のみ流れ出ず。法を相付する人、ここにおいて便ち絶えん」。この文の意は、仏、我が入涅槃の後に我が法を相伝する人二十四人あるべし。その中に最後弘通の人に当たるをば師子比丘と云わん。罽賓国という国にて我が法を弘むべし。彼の国の王をば檀弥羅王と云うべし。邪見放逸にして、仏法を信ぜず、衆僧を敬わず、堂塔を破り失い、剣をもって諸僧の頸を切るべし。即ち師子比丘の頸をきらん時に、頸の中に血無く、ただ乳のみ出ずべし。この時に仏法を相伝せん人絶ゆべしと定められたり。案のごとく、仏の御言違わず、師子尊者頸をきられ給うこと、実にもってしかなり。王のかいな、共につれて落ち畢わんぬ。

二十八祖を立つること、はなはだもって僻見なり。禅の僻事、これより興るなるべし。今、慧能が壇経に二十八祖を立つることは、達磨を高祖と定むる時、師子と達磨との年紀遥かなるあいだ、三人

の禅師を私に作り入れて、「天竺より来れる付法蔵、系乱れず」と云って、人に重んぜさせんための僻事なり。このこと異朝にして事旧りぬ。補註の十一に云わく「今家は二十三祖を承用す。あに誤り有らんや。もし二十八祖を立つるは、いまだ出だすところの翻訳を見ざるなり。近来さらに石に刻み、版に鏤め、七仏・二十八祖を図状し、各一偈をもって伝授相付すること有り。ああ、仮託何ぞそれ甚だしきや。識者力有らば、よろしくこの弊を革むべし」。これも、二十八祖を立て、石にきざみ、刻版にちりばめて伝うること、はなはだもって誤れり、このことを知る人あらば、この誤りをあらため改直なおせとなり。

祖師禅、はなはだ僻事なること、ここにあり。先に引くところの大梵天王問仏決疑経の文を、教外別伝の証拠に汝これを引く。既に自語相違せり。その上、この経は説相権教なり。また開元・貞元の再度の目録にも全く載せず。これ録外の経なる上、権教と見えたり。しかれば、世間の学者用いざるところなり。証拠とするにたらず。足

そもそも、今の法華経を説かるる時益をうる得る輩、迹門界如三千の時、敗種の二乗、仏種を萌す。四十二年の間は「永く成仏せず」と嫌われて、在々処々の集会にして罵詈・誹謗の音をのみ聞き、人天大会に思いうとまれて既に飢え死ぬべかりし人々も、今の経に来って、舎利弗は華光如来、目連は多摩羅跋梅檀香如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百の羅漢は普明如来、二千の声聞は宝相如来の記別に予かる。顕本遠寿の日は、微塵数の菩薩、道を増し生を損じて、位大覚に疎成隣る。されば、天台大師の釈を披見するに、他経には、菩薩は仏になると云って二乗の得道は永くこ

れ無し。善人は仏になると云って悪人の成仏を明かさず。男子は仏になると説いて女人は地獄の使いと定む。人天は仏になると云って畜類は仏になるといわず。しかるを、今経はこれらが皆仏になると説く。たのもしきかな。

末代濁世に生を受くといえども、提婆がごとくに五逆をも造らず、三逆をも犯さず。しかるに、提婆なお天王如来の記別を得たり。いわんや、犯さざる我らが身をや。八歳の竜女、既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す。いわんや、人界に生を受けたる女人をや。ただ得難きは人身、値い難きは正法なり。汝、早く邪を翻して正に付き、凡を転じて聖を証せんと思わば、念仏・真言・禅・律を捨てて、この一乗妙典を受持すべし。もししからば、妄染の塵穢を払って清浄の覚体を証せんこと疑いなかるべし。

ここに愚人云わく、今、聖人の教誡を聴聞するに、日来の矇昧たちまちに開けぬ。天真発明とも云いつべし。理非顕然なれば、誰か信仰せざらんや。ただし、世上を見るに、上一人より下万民に至るまで、念仏・真言・禅・律を深く信受し御坐します。さる前には、国土に生を受けながら、いかでか王命を背かんや。その上、我が親といい、祖といい、かたがた念仏等の法理を信じて、他界の雲に交わり畢わんぬ。

また日本には上下の人数幾いくばくか有る。しかりといえども、権教・権宗の者は多く、この法門を信ずる人はいまだその名をも聞かず。よって、善処・悪処をいわず、邪法・正法を簡ばず、内典五千・七千の多きも外典三千余巻の広きも、ただ主君の命に随い父母の義に叶うが肝心なり。されば、

教主釈尊は天竺にして孝養・報恩の理を説き、孔子は大唐にして忠功・孝高の道を示す。師の恩を報ずる人は、肉をさき身をなぐ。主の恩をしる人は、弘演は腹をさき、予譲は剣をのむ。親の恩を思いし人は、丁蘭は木をきざみ、伯瑜は杖になく。儒・外・内、道は異なりといえども、報恩謝徳の教えは替わることなし。しかれば、主・師・親のいまだ信ぜざる法理を我始めて信ぜんこと、既に違背の過に沈みなん。法門の道理は、経文明白なれば、疑網すべて尽きぬ。後生を願わずば、来世苦に沈むべし。進退これ谷まれり。我いかんがせんや。

聖人云わく、汝この理を知りながら、なおこの語をなす。理の通ぜざるか、意の及ばざるか。我、釈尊の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已来、知恩をもって最とし、報恩をもって前とす。世に四恩あり。これを知るを人倫となづけ、知らざるを畜生とす。予、父母の後世を助け国家の恩徳を報ぜんと思うが故に身命を捨つること、あえて他事にあらず、ただ知恩を旨とするばかりなり。

まず、汝、目をふさぎ心を静めて道理を思え。我は善道を知りながら、親と主との悪道にかからんを諫めざらんや。また愚人狂い酔って毒を服せんを我知りながら、これをいましめざらんや。そのごとく法門の道理を存じて火血刀の苦を知りながら、いかでか恩を蒙る人の悪道におちんことを歎かざらんや。身をもなげ、命をも捨つべし。諫めてもあきたらず、歎きても限りなし。今生に眼を合わする苦しみ、なおこれを悲しむ。いわんや、悠々たる冥途の悲しみ、あに痛まざらんや。恐れても恐るべきは後世、慎んでも慎むべきは来世なり。しかるを、是非を論ぜず親の命に随い、邪正を簡ばず主の仰せに順わんと云うこと、愚癡の前には忠・孝に似たれども、賢人の意には不忠・不孝これに過ぐ

べからず。

されば、教主釈尊は、転輪聖王の末、師子頬王の孫、浄飯王の嫡子として五天竺の大王たるべしといえども、生死無常の理をさとり、出離解脱の道を願って世を厭い給いしかば、浄飯大王これを歎き、四方に四季の色を顕して太子の御意を留め奉らんと巧み給う。まず東には、霞たなびく春の気色を顕せり。南には、泉の色白たえにして、かの玉川の卯の花、信太の森のほととぎす、よりかりがねこしじに帰り、窓の梅の香玉簾の中にかよい、じょうじょうたる花の色、ももさえずりの鶯、夏のすがたを顕せり。西には、紅葉常葉に交わればさながら錦をおり交え、荻ふく風閑かにして松の嵐ものすごし。過ぎにし夏のなごりには、沢辺にみゆる蛍の光あまつ空なる星かと誤り、松虫・鈴虫の声々涙を催せり。北には、枯れ野の色いつしかものうく、池の汀につららいて、谷の小川もおとさびぬ。

かかるありさまを造って御意をなぐさめ給うのみならず、四門に五百人ずつの兵を置いて守護し給いしかども、終に太子の御年十九と申せし二月八日の夜半の比、車匿を召して金泥駒に鞍置かせ、伽耶城を出でて檀特山に入り、十二年、高山に薪をとり深谷に水を結んで難行苦行し給い、三十成道の妙果を感得して、三界の独尊、一代の教主と成って、父母を救い群生を導き給いしをば、さて不孝の人と申すべきか。仏を不孝の人と云いしは、九十五種の外道なり。父母の命に背いて無為に入り、還って父母を導くは、孝の手本なること、仏その証拠なるべし。

彼の浄蔵・浄眼は、父の妙荘厳王、外道の法に著して仏法に背き給いしかども、二人の太子は父の

命に背いて雲雷音王仏の御弟子となり、終に父を導いて沙羅樹王仏と申す仏になし申されけるは、不孝の人と云うべきか。経文には「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」と説いて、今生の恩愛をば皆すてて仏法の実の道に入る、これ実に恩をしれる人なりと見えたり。

また、主君の恩の深きこと、汝よりも能くしれり。汝もし知恩の望みあらば、深く諫め、強いて奏せよ。非道にも主命に随わんということ、佞臣の至り、不忠の極まりなり。殷の紂王は悪王、比干は忠臣なり。政事理に違いしを見て強いて諫めしかば、即ち比干は胸を割かる。紂王は比干死して後、周の王に打たれぬ。今の世までも比干は忠臣といわれ、紂王は悪王といわる。夏の桀王を諫めし竜逢は頭をきられぬ。されども、桀王は悪王、竜逢は忠臣とぞ云う。「主君を三度諫むるに用いずば山林に交われ」とこそ教えたれ。何ぞその非を見ながら黙せんと云うや。

古の賢人、世を遁れて山林に交わりし先蹤を集めて、いささか汝が愚耳に聞かしめん。殷の代の太公望は磻渓という谷に隠る。周の代の伯夷・叔斉は首陽山という山に籠もる。秦の綺里季は商洛山に入り、漢の厳光は孤亭に居し、晋の介子綏は綿上山に隠れぬ。これらをば不忠と云うべきか。愚かなり。汝、忠を存せば諫むべし。孝を思わば言うべきなり。

まず、汝「権教・権宗の人は多く、この宗の人は少なし。何ぞ多を捨てて少に付く」と云うこと、必ず多きが尊くして少なきが卑しきにあらず。賢善の人は希に、愚悪の者は多し。麒麟・鸞鳳は禽獣の奇秀なり。しかれども、これははなはだ少なし。牛羊・烏鴿は畜鳥の拙卑なり。されども、これは転た多し。必ず多きがたっとくして少なきがいやしくば、麒麟をすてて牛羊をとり、鸞鳳を閣いて烏

鴿をとるべきか。摩尼・金剛は金石の霊異なり。この宝は乏しく、瓦礫・土石は徒物の至り、これはまた巨多なり。汝が言のごとくならば、玉なんどをば捨てて瓦礫を用ゆべきか。はかなし、はかなし。聖君は希にして千年に一たび出で、賢佐は五百年に一たび顕る。摩尼は空しく名のみ聞く。麟鳳誰か実を見たるや。世間・出世、善き者は乏しく、悪しき者は多きこと眼前なり。しかれば、何ぞあながちに少なきをおろか（疎）にして多きを詮とするや。土沙は多けれども、米穀は希なり。木皮は充満すれども、布絹は些少なり。汝ただ正理をもって前とすべし。別して人の多きをもって本とすることなかれ。

ここに、愚人、席をさり袂をかい（去・掻）つくろい（繕）て云わく、誠に聖教の理をきく（聞）に、人身は得難く、天上の糸筋の海底の針に貫けるよりも希に、仏法は聞き難くして、一眼の亀の浮き木に遇うよりも難し。今既に、得難き人界に生をうけ、値い難き仏教を見聞しつ。今生をもだし（黙）ては、またいずれの世にか生死を離れ菩提を証すべき。夫れ、一劫受生の骨は山よりも高けれども、仏法のためにはいまだ一骨をもすてず（捨）。多生恩愛の涙は海よりも深けれども、なお後世のためには一滴をも落とさず。拙きが中に拙く、愚かなるが中に愚かなり。たとい命をすて（捨）身をやぶる（破）とも、生を軽くして仏道に入り、父母の菩提を資け、愚身が獄縛をも免るべし。能く能く教えを示し給え。

そもそも、法華経を信ずるその行相いかん。五種の行の中には、まずいずれの行をか修すべき。丁寧に尊教を聞かんことを願う。

聖人示して云わく、汝、蘭室の友に交わって麻畝の性と成る。誠に禿樹、禿にあらず、春に遇って

栄え花さく。枯れ草、枯るるにあらず、夏に入って鮮やかに注う。もし先非を悔いて正理に入らば、湛寂の潭に遊泳して無為の宮に優遊せんこと、疑いなかるべし。

そもそも、仏法を弘通し群生を利益せんには、まず教・機・時・国・教法流布の前後を弁うべきものなり。所以は、時に正・像・末あり、法に大・小乗あり、修行に摂・折あり。摂受の時、折伏を行ずるも非なり。折伏の時、摂受を行ずるも失なり。しかるに、今の世は摂受の時か折伏の時か、まずこれを知るべし。摂受の行は、この国に法華一純に弘まりて邪法・邪師一人もなしといわん、この時は、山林に交わって観法を修し、五種六種乃至十種等を行ずべきなり。折伏の時は、かくのごとくならず。経教のおきて蘭菊に、諸宗のおぎろ誉れを擅にし、邪正肩を並べ、大小先を争わん時は、万事を閣いて謗法を責むべし。これ折伏の修行なり。この旨を知らずして摂折途に違わば、得道は思いもよらず、悪道に堕つべしということ、法華・涅槃に定め置き、天台・妙楽の解釈にも分明なり。これ仏法修行の大事なるべし。

譬えば、文武両道をもって天下を治むるに、武を先とすべき時もあり、文を旨とすべき時もあり。天下無為にして国土静かならん時は、文を先とすべし。東夷・南蛮・西戎・北狄、蜂起して野心をさしはさまんには、武を先とすべきなり。文武のよきことばかりを心えて時をもしらず、万邦安堵の思いをなして世間無為ならん時、甲冑をよろい兵杖をもたんことも非なり。また王敵起こらん時、戦場にして武具をば閣いて筆硯を提えんこと、これもまた時に相応せず。

摂受・折伏の法門もまたかくのごとし。正法のみ弘まって邪法・邪師無からん時は、深谷にも入り

閑静にも居して、読誦・書写をもし、観念・工夫をも凝らすべし。これ天下の静かなる時筆硯を用いるがごとし。権宗・謗法、国にあらん時は、諸事を閣いて謗法を責むべし。これ合戦の場に兵杖を用ゆるがごとし。

しかれば、章安大師、涅槃の疏に釈して云わく「昔の時は平らかにして法弘まる。応に戒を持つべし。杖を持つことなかれ。今の時は嶮にして法翳くる。応に杖を持つべし。戒を持つことなかれ。今昔ともに嶮ならば、応にともに杖を持つべし。今昔ともに平らかならば、応にともに戒を持つべし。取捨宜しきを得て、一向にすべからず」。この釈の意、分明なり。昔は世もすなおに人もただしくして、邪法・邪義無かりき。されば、威儀をただし、穏便に行業を積んで、杖をもって人を責めず、邪法をとがむること無かりき。今の世は濁世なり。人の情もひがみゆがんで権教・謗法のみ多ければ、正法弘まりがたし。この時は、読誦・書写の修行も観念・工夫・修練も無用なり。ただ折伏を行じて、力あらば威勢をもって謗法をくだき、また法門をもっても邪義を責めよとなり。取捨その旨を得て、一向に執することなかれと書けり。

今の世を見るに、正法一純に弘まる国か、邪法の興盛する国か、勘うべし。しかるを、浄土宗の法然は、念仏に対して法華経を捨閉閣抛とよみ、善導は、法華経を雑行と名づけ、あまつさえ千中無一とて、千人信ずとも一人得道の者あるべからずと書けり。真言宗の弘法は、法華経を、華厳にも劣り、大日経には三重の劣と書き、戯論の法と定めたり。正覚房は、法華経は大日経のはきものとりにも及ばずと云い、釈尊をば大日如来の牛飼いにもたらずと判ぜり。禅宗は、法華経を、吐きたるつばき、

月をさす指、教網なんど下す。小乗律等は、法華経は邪教、天魔の所説と名づけたり。これらあに謗法にあらずや。責めてもなおあまりあり。禁めてもまたたらず。

愚人云わく、日本六十余州、人替わり法異なりといえども、あるいは念仏者、あるいは真言師、あるいは禅、あるいは律、誠に一人として謗法ならざる人はなし。しかりといえども、人の上沙汰して何なにかせん。ただ我が心中に深く信受して、人の誤りをば余所のことにせんと思う。

聖人示して云わく、汝言うところ実にしかなり。我もその義を存せしところに、経文には、あるいは「身命を惜しまず」とも、あるいは「むしろ身命を喪うとも」とも説く。何故にかようには説かるるやと存ずるに、ただ人をはばからず経文のままに法理を弘通せば、謗法の者多からん世には必ず三類の敵人有って命にも及ぶべしと見えたり。その仏法の違目を見ながら、我もせめず国主にも訴えずば、教えに背いて仏弟子にはあらずと説かれたり。

涅槃経第三に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」。この文の意は、仏の正法を弘めん者、経教の義を悪しく説かんを聞き見ながら、我もせめず、我が身及ばずば国主に申し上げてもこれを対治せずば、仏法の中の敵なり。もし経文のごとくに、人をもはばからず、我もせめ国主にも申さん人は、仏弟子にして真の僧なりと説かれて候。

されば、「仏法の中の怨なり」の責めを免れんとて、かように諸人に悪まるれども、命を釈尊と法華経に奉り慈悲を一切衆生に与えて謗法を責むるを、心得ぬ人は、口をすくめ眼を瞋らす。汝実に

後世を恐れば、身を軽しめ、法を重んぜよ。ここをもって、章安大師云わく「『むしろ身命を喪うとも、教えを匿さず』とは、身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」。この文の意は、身命をばほろぼすとも正法をかくさざれ、その故は、身はかろく法はおもし、身をばころすとも法をば弘めよとなり。

悲しいかな、生者必滅の習いなれば、たとい長寿を得たりとも、終には無常をのがるべからず。今世は、百年の内外の程を思えば、夢の中の夢なり。非想の八万歳、いまだ無常を免れず。忉利の一千年も、なお退没の風に破らる。いわんや、人間・閻浮の習いは、露よりもあやうく、芭蕉よりももろく、泡沫よりもあだなり。水中に宿る月のあるかなきかのごとく、草葉におく露のおくれさきだつ身なり。もしこの道理を得ば、後世を一大事とせよ。

歓喜仏の末の世の覚徳比丘、正法を弘めしに、無量の破戒、この行者を怨んで責めしかば、有徳国王、正法を守る故に謗法を責めて、終に命終して阿閦仏の国に生まれて、彼の仏の第一の弟子となる。大乗を重んじて五百人の婆羅門の謗法を誡め仙予国王は、不退の位に登る。憑もしいかな、正法の僧を重んじて邪悪の侶を誡むる人、かくのごとくの徳あり。されば、今の世に摂受を行ぜん人は、謗人とともに悪道に堕ちんこと疑いなし。南岳大師の四安楽行に云わく「もし菩薩有って、悪人を将護して治罰すること能わず乃至その人は命終して、諸の悪人とともに地獄に堕ちん」。この文の意は、もし仏法を行ずる人有って、謗法の悪人を治罰せずして観念・思惟を専らにして、邪正・権実をも簡ばず、詐って慈悲の姿を現ぜん人は、諸の悪人とともに悪道に堕つべしという文なり。今、真言・念仏・禅・律の謗人をたださず、いつわって慈悲を現ずる人、この文のごと！なるべし。

ここに愚人、意を窃かにし、言を顕にして云わく、誠に君を諫めて家を正しくすること、先賢の教え、本文に明白なり。外典かくのごとし、内典これに違うべからず。悪を見ていましめず、謗を知ってせめずば、経文に背き、祖師に違せん。その禁め殊に重し。今より信心を至すべし。ただし、この経を修行し奉らんこと叶いがたし。もしその最要あらば、証拠を聞かんと思う。

聖人示して云わく、今汝の道意を見るに、鄭重・慇懃なり。いわゆる、諸仏の誠諦得道の最要は、ただこれ妙法蓮華経の五字なり。檀王の宝位を退き、竜女が蛇身を改めしも、ただこの五字の致すところなり。夫れ以んみれば、今の経は受持の多少をば「一偈一句」と宣べ、修行の時刻をば「一念随喜」と定めたり。およそ八万法蔵の広きも、一部八巻の多きも、ただこの五字を説かんためなり。霊山の雲の上、鷲峰の霞の中に、釈尊要を結び地涌付嘱を得ることありしも、法体は何事ぞ。ただこの要法に在り。天台・妙楽の六千張の疏の玉を連ぬるも、道邃・行満の数軸の釈の金を並ぶるも、しかしながら、この義趣を出でず。誠に生死を恐れ、涅槃を欣い、信心を運び、渇仰を至さば、遷滅無常は昨日の夢、菩提の覚悟は今日のうつつなるべし。ただ南無妙法蓮華経とだにも唱え奉らば、滅せぬ罪やあるべき、来らぬ福や有るべき。真実なり、甚深なり。これを信受すべし。

愚人掌を合わせ、膝を折って云わく、貴命肝に染み、教訓意を動ぜり。しかりといえども、「上は能く下を兼ぬ」の理なれば、広きは狭きを括り、多きは少なきを兼ぬ。しかるところに五字は少なく、文言は多し。首題は狭く、八軸は広し。いかんぞ功徳斉等ならんや。

聖人云わく、汝愚かなり。少なきを捨てて多きを取るの執、須弥よりも高く、狭きを軽んじ広きを

重んずるの情、溟海よりも深し。今の文の初後は、必ず多きが尊く少なきが卑しきにあらざること、前に示すがごとし。ここにまた、小が大を兼ね、一が多に勝るということ、これを談ぜん。彼の尼拘類樹の実は、芥子三分が一のせいなり。されども五百輛の車を隠す徳あり。これ小が大を含めるにあらずや。また如意宝珠は、一つあれども万宝を雨らして欠くるところこれ無し。これまた少なきが多きを兼ねたるにあらずや。世間のことわざにも「一は万が母」といえり。これらの道理を知らずや。詮ずるところ、実相の理の背契を論ぜよ。あながちに多少を執することなかれ。

汝至って愚かなり。今、一つの譬えを仮らん。夫れ、妙法蓮華経とは、一切衆生の仏性なり。仏性とは法性なり。法性とは菩提なり。いわゆる、釈迦・多宝・十方の諸仏、上行・無辺行等、普賢・文殊、舎利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因、日月明星・北斗七星・二十八宿・無量の諸星、天衆地類・竜神八部・人天大会・閻魔法王、上は非想の雲の上、下は那落の炎の底まで、あらゆる一切衆生の備うるところの仏性を、妙法蓮華経とは名づくるなり。されば、一遍この首題を唱え奉れば、一切衆生の仏性が皆よばれてここに集まる時、我が身の法性の法報応の三身とともにひかれて顕れ出ずる、これを成仏とは申すなり。例せば、籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる、これを見て籠の内の鳥も出でんとするがごとし。

ここに愚人云わく、首題の功徳、妙法の義趣、今聞くところ詳らかなり。ただし、この旨趣、正しく経文にこれをのせたりや、いかん。

聖人云わく、その理詳らかならん上は、文を尋ぬるに及ばざるか。しかれども、請いに随ってこれ

を示さん。法華経第八の陀羅尼品に云わく「汝等はただ能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら、福は量るべからず」。この文の意は、仏、鬼子母神・十羅刹女の法華経の行者を守らんと誓い給うを讃むるとして、汝等「法華の首題を持つ人を守るべし」と誓うその功徳は、三世了達の仏の智慧もなお及びがたしと説かれたり。仏智の及ばぬこと何かあるべきなれども、法華の題名受持の功徳ばかりはこれを知らずと宣べたり。

法華一部の功徳は、ただ妙法等の五字の内に籠もれり。一部八巻、文々ごとに二十八品生起かわれども、首題の五字は同等なり。譬えば、日本の二字の中に六十余州・島二つ、入らぬ国やあるべき、籠もらぬ郡やあるべき。飛鳥とよべば空をかけるものと知り、走獣といえば地をはしるものと心うる。一切、名の大切なること、けだし、もってかくのごとし。天台は「名は自性を詮じ、句は差別を詮ず」とも、「名は大綱なり」とも判ずる、この謂いなり。また名は物をめす徳あり、物は名に応ずる用あり。法華題名の功徳も、またもってかくのごとし。

愚人云わく、聖人の言のごとくんば、実に首題の功、莫大なり。ただし、知ると知らざるとの不同あり。我は弓箭に携わり、兵杖をむねとして、いまだ仏法の真味を知らず。もししからば、得るところの功徳何ぞそれ深からんや。

聖人云わく、円頓の教理は初後全く不二にして、初位に後位の徳あり。「一行は一切行」にして、功徳備わらざるはこれ無し。もし汝が言のごとくんば、功徳を知って植えずんば、上は等覚より下は名字に至るまで得益さらにあるべからず。今の経は「ただ仏と仏とのみ」と談ずるが故なり。譬喩品

に云わく「汝舎利弗すら、なおこの経においては、信をもって入ることを得たり。いわんや余の声聞をや」。文の心は、大智舎利弗も、法華経には信をもって入る。その智分の力にはあらず。いわんや自余の声聞をやとなり。されば、法華経に来って信ぜしかば、「永く成仏せず」の名を削って華光如来となり。嬰児に乳をふくむるに、その味を知らずといえども、自然にその身を生長す。医師が病者に薬を与うるに、病者薬の根源を知らずといえども、服すれば任運と病愈ゆ。もし薬の源を知らずと云って医師の与うる薬を服せずば、その病愈ゆべしや。薬を知るも知らざるも、服すれば病の愈ゆること、もってこれ同じ。

既に仏を良医と号し、法を良薬に譬え、衆生を病人に譬う。されば、如来一代の教法を擣き篩い和合して、妙法一粒の良薬に丸ぜり。あに、知るも知らざるも、服せん者、煩悩の病愈えざるべしや。病者は、薬をもし知らず、病をも弁えずといえども、服すれば必ず愈ゆ。行者もまたしかなり。法理をもしらず、煩悩をもしらずといえども、ただ信ずれば、見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて、実報・寂光の台にのぼり、本有三身の膚を磨かんこと疑いあるべからず。されば、伝教大師云わく「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す」と。法華経の法理を教えん師匠も、また習わん弟子も、久しからずして法華経の力をもって、ともに仏になるべしという文なり。

天台大師も、法華経に付いて、玄義・文句・止観の三十巻の釈を造り給う。妙楽大師は、また釈籤・疏記・輔行の三十巻の末文を重ねて消釈す。天台六十巻とはこれなり。玄義には、名・体・宗・用・教の五重玄を建立して、妙法蓮華経の五字の功能を判釈す。五重玄を釈する中の宗の釈に云わく

「綱維を提くに目として動かざること無く、衣の一角を牽くに縷として来らざること無きがごとし」。意は、この妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功徳として来らざることなく、善根として動かざることなし。譬えば、網の目無量なれども一つの大綱を引くに動かざる目もなく、衣の糸筋巨多なれども一角を取るに糸筋として来らざることなきがごとしという義なり。さて、文句には「かくのごときを我聞きき」より「礼を作して去りにき」まで、文々句々に因縁・約教・本迹・観心の四種の釈を設けたり。次に止観には、妙解の上に立つところの観不思議境の一念三千、これ本覚の立行、本具の理心なり。今ここに委しくせず。

悦ばしいかな、生を五濁悪世に受くといえども、一乗の真文を見聞することを得たり。熙連恒沙の善根を致せる者、この経にあい奉って信を取ると見えたり。汝、今、一念随喜の信を致す。函蓋相応、感応道交疑いなし。

愚人頭を低れ、手を挙げて云わく、我、今よりは一実の経王を受持し三界の独尊を本師として、今身より仏身に至るまで、この信心あえて退転無けん。たとい五逆の雲厚くとも、乞う、提婆達多が成仏を続ぎ、十悪の波荒らくとも、願わくは、王子覆講の結縁に同じからん。

聖人云わく、人の心は水の器にしたがうがごとく、物の性は月の波に動くに似たり。故に、汝、当座は信ずというとも、後日は必ず翻さん。魔来り鬼来るとも、騒乱することなかれ。夫れ、天魔は仏法をにくむ、外道は内道をきらう。されば、猪の金山を摺り、衆流の海に入り、薪の火を盛んになし、風の求羅をますがごとくせば、あに好きことにあらずや。

(035)

祈禱抄

文永9年('72)　51歳

本朝沙門日蓮撰す。

問うて云わく、華厳宗・法相宗・三論宗・小乗の三宗・真言宗・天台宗の祈りをなさんに、いずれか験しるしあるべきや。

答えて云わく、仏説なれば、いずれも一往は祈りとなるべし。ただし、法華経をもっていのらん祈りは必ず祈りとなるべし。

問うて云わく、その所以は、いかん。

答えて云わく、二乗は、大地微塵劫を経て先四味の経を行ずとも、成仏すべからず。法華経は須臾の間これを聞いて仏になれり。もししからば、舎利弗・迦葉等の千二百・万二千、総じて一切の二乗界の仏は、必ず法華経の行者の祈りをかなうべし。また行者の苦にもかわるべし。

故に、信解品に云わく「世尊は大恩ましまします。希有の事をもって、憐愍・教化して、我らを利益したもう。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足もて供給し、頭頂もて礼敬し、一切もて供養すとも、皆報ずること能わじ。もしもって頂戴し、両肩に荷負して、恒沙劫において、心を尽くして

恭敬し、また美膳・無量の宝衣および諸の臥具、種々の湯薬をもってし、牛頭栴檀および諸の珍宝、もって塔廟を起て、宝衣を地に布き、かくのごとき等の事、もって供養すること恒沙劫においてすとも、また報ずること能わじ」等云々。

この経文は、四大声聞、譬喩品を聴聞して仏になるべき由を心得て、仏と法華経の恩の報じがたきことを説けり。されば、二乗の御ためには、この経を行ずる者をば、父母よりも、愛子よりも、両眼よりも、身命よりも、大事にこそおぼしめすらめ。舎利弗・目連等の諸大声聞は、一代聖教いずれも讃歎せん行者をすておぼすことはあるべからずとは思えども、爾前の諸経はすこしうらみおぼすこともあるらん。「仏法の中において、すでに敗種のごとし」なんどしたたかにいましめられ給いし故なり。今の華光如来・名相如来・普明如来なんどならせ給いたることは、おもわざる外の幸いなり。例せば、崑崙山のくずれて宝の山に入りたる心地してこそおわしぬらめ。されば、領解の文に云わく「無上の宝珠は、求めざるに自ずから得たり」等云々。されば、一切の二乗界、法華経の行者をまもり給わんことは疑いあるべからず。

あやしの畜生なんども、恩をば報ずることに候ぞかし。かりと申す鳥あり。必ず母の死なんとする時、孝をなす。狐は塚を跡にせず。畜生すら、なおかくのごとし。いわんや人類をや。されば、王寿といいし者、道を行きしにうえつかれたりしに、路の辺に梅の樹あり。その実多し。寿、とりて食してうえやみぬ。「我この梅の実を食して気力をます。その恩を報ぜずんばあるべからず」と申して、衣をぬぎて梅に懸けてさりぬ。王尹といいし者は、道を行くに水に渇しぬ。河をすぐるに水を飲

んで、銭を河に入れて、これを水の直とす。

竜は必ず袈裟を懸けたる僧を守る。仏より袈裟を給わって竜宮城の愛子に懸けて、金翅鳥の難をま免ぬかるる故なり。金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る。竜は須弥山を動かして金翅鳥の愛子を食す。金翅鳥は、仏の教えによって、父母の孝養をなす者の僧のとるさんばを須弥の頂におきて竜の難をまぬかるる故なり。天は必ず戒を持ち善を修する者を守る。人間界に戒を持たず善を修する者なければ、人間界の人死して多く修羅道に生ず。修羅、多勢なれば、おごりをなして必ず天をおかす。人間界に戒を持ち善を修するの者多ければ、人死して必ず天に生ず。天多ければ、修羅おそれをなして天をおかさず。故に、戒を持ち善を修する者をば天必ずこれを守る。いかにいわんや、二乗は六凡よりも戒徳も勝れ、智慧賢き人々なり。いかでか、我が成仏を遂げたらん法華経を行ぜん人をば捨つべきや。

また、一切の菩薩ならびに凡夫は、仏にならんがために四十余年の経々を無量劫が間行ぜしかども、仏に成ることなかりき。しかるを、法華経を行じて仏と成って、今十方世界におわします仏、仏の三十二相八十種好をそなえさせ給いて、九界の衆生にあおがれて、月を星の回るがごとく、須弥山を八山の回るがごとく、日輪を四州の衆生の仰ぐがごとく、輪王を万民の仰ぐがごとく仰がれさせ給うは、法華経の恩徳にあらずや。されば、仏は法華経に誡めて云わく「また舎利を安んずることを須いず」。涅槃経に云わく「諸仏の師とするところは、いわゆる法なり。この故に、如来は恭敬・供養すべしと云々。法華経には我が舎利を法華経に並ぶべからず、涅槃経には諸仏は法華経を恭敬・供養すべしと説かせ給えり。

仏、この法華経をさとりて仏に成り、しかも人に説き聞かせ給わずば、仏種をたたせ給う失あり。この故に、釈迦如来はこの娑婆世界に出でて説かんとせさせ給いしを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入って、仏をあだみて説かせまいらせじとせしなり。いわゆる、波瑠璃王の五百人の釈子を殺し、鴦崛摩羅が仏を追い、提婆が大石を放ち、旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて仏の御子と云いし、婆羅門城には仏を入れ奉る者は五百両の金をひきき。されば、道にはうばらをたて、井には糞を入れ、門にはさかむぎをひけり、食には毒を入れし、皆これ仏をにくむ故に。華色比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋もれし、皆、仏をあだみし故なり。

しかれども、仏さまざまの難をまぬかれて、御年七十二歳、仏法を説き始められて四十二年と申せしに、中天竺王舎城の丑寅、耆闍崛山と申す山にして、法華経を説き始められて、八年まで説かせ給いて、東天竺倶尸那城跋提河の辺にして、御年八十と申せし二月十五日の夜半に、御涅槃に入らせ給いき。しかりといえども、御悟りをば法華経と説きおかせ給えば、この経の文字は即ち釈迦如来の御魂なり。一々の文字は仏の御魂なれば、この経を行ぜん人をば、釈迦如来、我が御眼のごとくまぼり給うべし。人の身に影のそえるがごとくそわせ給うらん。いかでか祈りとならせ給わざるべき。

一切の菩薩は、また始め華厳経より四十余年の間、仏にならんと願い給いしかども、かなわずして法華経の方便品の略開三顕一の時、「仏を求むる諸の菩薩は、大数八万有り。また諸の万億国の転輪聖王は至れり。合掌し敬心をもって、具足の道を聞きたてまつらんと欲す」と願いしが、広開三顕一を聞いて、「菩薩はこの法を聞いて、疑網は皆すでに断ちぬ」と説かせ給いぬ。

その後、自界・他方の菩薩、雲のごとく集まり、星のごとく列なり給いき。宝塔品の時、十方の諸仏、各々無辺の菩薩を具足して集まり給いき。文殊は海より無量の菩薩を具足し、また八十万億那由他の諸の菩薩、また過八恒河沙の菩薩、地涌千界の菩薩、分別功徳品の六百八十万億那由他恒河沙の菩薩、また千倍の菩薩、また一世界の微塵数の菩薩、また三千大千世界の微塵数の菩薩、また二千中国土の微塵数の菩薩、また小千国土の微塵数の菩薩、また四四天下の微塵数の菩薩、三四天下・二四天下・一四天下の微塵数の菩薩、また八世界の微塵数の衆生、薬王品の八万四千の菩薩、妙音品の八万四千の菩薩、また四万二千の天子、普門品の八万四千、陀羅尼品の六万八千人、妙荘厳王品の八万四千人、勧発品の恒河沙等の菩薩、三千大千世界の微塵数等の菩薩、これらの菩薩を委しく数えば、十方世界の微塵のごとし、十方世界の草木のごとし、十方世界の星のごとし、十方世界の雨のごとし。

これらは皆、法華経にして仏に成ならせ給いて、この三千大千世界の地上・地下・虚空の中にまします。迦葉尊者は鶏足山にあり。文殊師利は清涼山にあり。地蔵菩薩は伽羅陀山にあり。観音は補陀落山にあり。弥勒菩薩は兜率天に、難陀等の無量の竜王・阿修羅王は海底・海畔にあり。帝釈は忉利天に、梵王は有頂天に、魔醯修羅は第六の他化天に、四天王は須弥の腰に、日月・衆星は我らが眼に見えて頂上を照らし給う。江神・河神・山神等も皆、法華経の会上の諸尊なり。

仏、法華経をとかせ給いて、年数二千二百余年なり。人間こそ、寿も短き故に、仏をも見奉り候人も侍らね。天上は日数は永く、寿も長ければ、しかしながら仏をおがみ法華経を聴聞せる天人、かぎり多くおわするなり。人間の五十年は四王天の一日一夜なり。この一日一夜をはじめとして、三十

日は一月、十二月は一年にして五百歳なり。されば、人間の二千二百余年は四王天の四十四日なり。されば、日月ならびに毘沙門天王は、仏におくれたてまつりて四十四日、いまだ二月にたらず。帝釈・梵天なんどは、仏におくれ奉って一月一時にもすぎず。わずかの間に、いかでか、仏前の御誓いならびに自身成仏の御経の恩をばわすれて、法華経の行者をば捨てさせ給うべきなんど思いつらぬれば、たのもしきことなり。されば、法華経の行者の祈る祈りは、響きの音に応ずるがごとし。影の体にそえるがごとし。すめる水に月のうつるがごとし。方諸の水をまねくがごとし。磁石の鉄をすうがごとし。琥珀の塵をとるがごとし。あきらかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし。

世間の法には、我がおもわざることも、父母・主君・師匠・妻子・おろかならぬ友なんどの申すことは、恥ある者は、意にはあわざれども、名利をもうしない、寿ともなることも侍るぞかし。いかにいわんや、我が心からおこりぬることは、父母・主君・師匠なんどの制止を加うれども、なすことあり。されば、はんよきといいし賢人は、我が頸を切ってだにこそ、けいかと申せし人には与えき。季札と申せし人は、約束の剣を徐君が塚の上に懸けたりき。

しかるに、霊山会上にして即身成仏せし竜女は、小乗経には五障の雲厚く三従のきずな強しと嫌われ、四十余年の諸大乗経には、あるいは歴劫修行にたえずと捨てられ、あるいは「初発心の時、便ち正覚を成ず」の言も有名無実なりしかば、女人成仏もゆるさざりしに、たとい人間・天上の女人なりとも成仏の道には望みなかりしに、竜畜下賤の身たるに、女人とだに生まれ、年さえいまだたけず、わずかに八歳なりき。かたがた思いもよらざりしに、文殊の教化によりて、海中にして法師・提婆の

中間、わずかに宝塔品を説かれし時刻に仏になりたりしことは、有難成なり。一代超過の法華経の御力にあらずば、いかでか、かくは候べき。されば、妙楽は「行は浅く功は深し。もって経力を顕す」とこそ書かせ給え。

竜女は、我仏になれる経なれば、仏の御諫めなくとも、いかでか法華経の行者を捨てさせ給うべき。されば、自讃歎仏の偈には「我は大乗の教えを闡いて、苦の衆生を度脱せん」等とこそ進ませ給いしか。竜女の誓いは、その所従の「口の宣ぶるところにあらず、心の測るところにあらず」の一切の竜畜の誓いなり。娑竭羅竜王は、竜畜の身なれども、子を念う志深かりしかば、大海第一の宝、如意宝珠をもむすめにとらせて、即身成仏の御布施にせさせつれ。この珠は直三千大千世界に替かうる珠なり。

提婆達多は、師子頬王には孫、釈迦如来には伯父たりし斛飯王の御子、阿難尊者の舎兄なり。善聞長者のむすめ娘の腹なり。転輪聖王の御一門、南閻浮提には賤しからざる人なり。在家にましまし時は、夫妻となるべきやすだら女を悉達太子に押し取られ、宿世の敵と思いしに、出家の後に、人天大会の集まりたりし時、仏に「汝は癡人、唾を食らえる者」とのられし上、名聞利養深かりし人なれば、仏の人にもてなされしをそねみて、我が身には五法を行じて仏よりも尊げになし、鉄をのして千輻輪につけ、蛍火を集めて白毫となし、六万宝蔵・八万宝蔵を胸に浮かべ、象頭山に戒場を立てて多くの仏弟子をさそいとり、爪に毒を塗り仏の御足にぬらんと企て、蓮華比丘尼を打ち殺し、大石を放って仏の御指をあやまちぬ。

つぶさに三逆を犯し、結句は五天竺の悪人を集め、仏ならびに御弟子・檀那等にあだをなすほどに、頻婆娑羅王は仏の第一の御檀那なり。一日に五百輌の車を送り、日々に仏ならびに御弟子を供養し奉りき。提婆そねむ心深くして、阿闍世太子を語らいて、父を終に一尺の釘七つをもってはりつけになし奉りき。終に王舎城の北門の大地破れて阿鼻大城に堕ちにき。三千大千世界の人、一人もこれを見ざることなかりき。

されば、大地微塵劫は過ぐとも無間大城をば出ずべからずとこそ思い候に、法華経にして天王如来とならせ給いけるにこそ、不思議に尊けれ。提婆達多、仏になり給わば、語らわれしところの無量の悪人、一業の所感なれば、皆、無間地獄の苦ははなれぬらん。これひとえに法華経の恩徳なり。されば、提婆達多ならびに従うところの無量の眷属は、法華経の行者の室宅にこそ住まわせ給うらめと頼たのもし。

諸の大地微塵のごとくなる諸の菩薩は、等覚の位まで迫せめて元品の無明ばかりもちて侍るが、釈迦如来に値い奉って元品の大石をわらんと思うに、教主釈尊、四十余年が間は「因分は説くべし、果分は説くべからず」と申して、妙覚の功徳を説き顕し給わず。されば、妙覚の位に登る人一人もなかりき。本意なかりしことなり。しかるに、霊山八年が間に「ただ一仏乗のみを名づけて果分となす」と説き顕し給いしかば、諸の菩薩、皆妙覚の位に上りて、釈迦如来と悟り等しく、須弥山の頂に登って四方を見るがごとく、長夜に日輪の出でたらんがごとく、あかなくならせ給いたりしかば、仏の仰せ無くとも、「法華経を弘めじ、また行者に替わらじ」とはおぼしめすべからず。されば、「我は身

命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」「身命を惜しまず」「当に広くこの経を説くべし」等とこそ誓い給いしか。

その上、慈父の釈迦仏、悲母の多宝仏、慈悲の父母等、同じく助証の十方の諸仏、一座に列ならせ給いて、月と月とを集めたるがごとく、日と日とを並べたるがごとくましまし時、「諸の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこの経を護持し読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説け」と、三度まで諫めさせ給いしに、八方の四百万億那由他の国土に充満せさせ給いし諸大菩薩、身を曲げ低頭合掌し、ともに同時に声をあげて「世尊の勅のごとく、当につつしさに奉行すべし」と、三度まで声を惜しまずよばわりしかば、いかでか法華経の行者にはかわらせ給わざるべき。

はんよきといいしもの、けいかに頭を取らせ、きさつといいしもの、徐君が塚に刀をかけし、約束を違えじがためなり。これらは、震旦辺土のえびすのごとくなるものどもだにも、友の約束に、命をも亡ぼし、身に代えて思う刀をも塚に懸くるぞかし。まして、諸大菩薩は、本より「大悲もて代わって苦を受けん」の誓い深し。仏の御諫めなくとも、いかでか法華経の行者を捨て給うべき。その上、我が成仏の経たる上、仏懇勤に諫め給いしかば、仏前の御誓い丁寧なり。行者を助けたもうこと疑うべからず。

仏は、人天の主、一切衆生の父母なり。しかも開導の師なり。父母なれども賤しき父母は主君の義をかねず。主君なれども父母ならざればおそろしき辺もあり。父母・主君なれども師匠なることはなし。諸仏は、また世尊にてましませば、主君にてはましませども、娑婆世界に出でさせ給わざれば師匠にあ

らず。また「その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」とも名乗らせ給わず。釈迦仏独り主師親の三義をかね給えり。しかれども、四十余年の間は提婆達多を罵り給い、諸の声聞をそしり、菩薩の果分の法門を惜しみ給いしかば、仏なれども、よりよりは「天魔破旬ばしの我らをなやますか」の疑い、人にはいわざれども心の中には思いしなり。この心は、四十余年より法華経の始まるまで失せず。

しかるを、霊山八年の間に宝塔虚空に現じ、二仏日月のごとく並び、諸仏大地に列なり、大山をあつめたるがごとく、地涌千界の菩薩虚空に星のごとく列なり給いて、諸仏の果分の功徳を吐き給いしかば、宝蔵をかたぶけて貧人にあたうるがごとく、崑崙山のくずれたるにたりき。諸人、この玉をのみ拾うがごとく、この八箇年が間、珍しく貴きこと、心髄にもとおりしかば、諸の菩薩、身命も惜しまず、言をばくくまず誓いをなせしほどに、嘱累品にして、釈迦如来、宝塔を出でさせ給いてとびらを押したて給いしかば、諸仏は国々へ返り給いき。諸の菩薩等も、諸仏に随い奉りて返らせ給いぬ。

ようやく心ぼそくなりしほどに、「却って後三月あって、当に般涅槃すべし」と唱えさせ給いしことこそ、心ぼそく、耳おどろかしかりしかば、諸の菩薩・二乗・人天等、ことごとく法華経を聴聞して、仏の恩徳心肝にそみて、身命をも法華経の御ために投げて仏に見せまいらせんと思いしに、仏の仰せのごとくもし涅槃させ給わば、いかにあさましからんと胸さわぎしてありしほどに、仏の御年満八十と申せし二月十五日の寅卯時、東天竺舎衛国倶尸那城跋提河の辺にして仏御入滅なるべき由の御音、上は有頂、横には三千大千界までひびきたりしこそ、目もくれ、心もきえはてぬれ。

五天竺、十六の大国、五百の中国、十千の小国、無量の粟散国等の衆生、一人も衣食を調えず、上

下をきらわず、牛馬・狼狗・鵰鷲・蚊虻等の五十二類の一類の数、大地微塵をもつくしぬべし。いわんや五十二類をや。この類、皆、華香・衣食をそなえて最後の供養とあてがいき。「一切衆生の宝の橋おれなんとす。一切衆生の眼ぬけなんとす。一切衆生の父母・主君・師匠死なんとす」なんど申すこえひびきしかば、身の毛のいよ立つのみならず、涙を流す。なんだをながすのみならず、頭をたたき、胸をおさえ、音も惜しまず叫びしかば、血の涙・血のあせ、倶尸那城に大雨よりもしげくふり、大河よりも多く流れたりき。これひとえに、法華経にして仏になりしかば、仏の恩の報ずることかたかりしなり。

かかるなげきの庭にても、法華経の敵をば舌をきるべきよし、座につらなるまじきよし、ののしり侍りき。迦葉童子菩薩は、「法華経の敵の国には霜・雹となるべし」と誓い給いき。その時、仏は臥よりおきてよろこばせ給いて、「善きかな、善きかな」と讃め給いき。諸の菩薩は仏の御心を推して、「法華経の敵をうたんと申さば、しばらくもいき給いなん」と思って、一々の誓いはなせしなり。されば、諸の菩薩・諸の天人等は、「法華経の敵の出来せよかし。仏前の御誓いはたして、釈迦尊ならびに多宝仏、諸仏如来にも、『げに仏前にして誓いしがごとく、法華経の御ためには名をも身命をも惜しまざりけり』と思われまいらせん」とこそおぼすらめ。

いかに申すことはおそきやらん。大地はささばはずるとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬことはありとも、日は西より出ずるとも、法華経の行者の祈りのかなわぬことはあるべからず。法華経の行者を、諸の菩薩・人天・八部等、二聖・二天・十羅刹等、千に一つも来ってまぼり給わ

ぬこと侍らば、上は釈迦・諸仏を侮り奉り、下は九界をたぼらかす誑失あり。行者は必ず不実なりとも、智慧はおろかなりとも、身は不浄なりとも、戒徳は備えずとも、南無妙法蓮華経と申さば必ず守護し給うべし。

袋きたなしとて金を捨つることなかれ。伊蘭を憎にくまば栴檀あるべからず。谷の池を不浄なりと嫌わば蓮を取らざるべし。行者を嫌い給わば誓いを破り給いなん。正像既に過ぎぬれば、持戒は市の中の虎のごとし。智者は麟角よりも希ならん。月を待つまでは灯を憑むべし。宝珠の無き処には金銀も宝なり。白烏の恩をば黒烏に報ずべし。聖僧の恩をば凡僧に報ずべし。とくとく利生を授さずけ給えと強盛に申すならば、いかでか祈りのかなわざるべき。

問うて云わく、上にかかせ給う道理・文証を拝見するに、まことに日月の天におわしますならば、大地に草木のおうるならば、昼夜の国土にあるならば、大地だにも反覆せずば、大海の潮満ちひるならば、法華経を信ぜん人、現世の祈のいのり、後生の善処は疑いなかるべし。しかりといえども、この二十余年が間の天台真言等の名匠、多く大事の祈のりをなすに、はかばかしくいみじきいのりありともみえず。なお外典の者どもよりもつたなきようにうちおぼえて見ゆるなり。恐らくは、経文の虚言そらごとなるか、行者のおこないの疎おろかなるか、時機のかなわざるかとうたがわれて、後生もいかんとおぼう。

それはさておきぬ。御房は山僧の御弟子とうけたまわる。父の罪は子にかかり、師の罪は弟子にかかるとうけたまわる。叡山の僧徒の、園城・山門の堂塔・仏像・経巻数千万をやきはらわせ給うが、

ことにお恐しく、世間の人々もさわぎうとみあえるはいかに。前にも少々うけたまわり候いぬれども、今度くわしくききひらき候わん。ただし、不審なることは、かかる悪僧どもなれば、三宝の御意にもかなわず、天地にもうけられ給わずして、祈りも叶わざるやらんとおぼえ候はいかに。

答えて云わく、前々も少々申しぬれども、今度またあらあら申すべし。日本国においてはこのこと大切なり。これをしらざる故に、多くの人、口に罪業をつくる。まず山門はじまりしことは、この国に仏法渡って二百余年、桓武天皇の御宇に伝教大師立て始め給いしなり。当時の京都は、昔聖徳太子、王気ありと相し給いしかども、天台宗の渡らん時を待ち給いしあいだ、都をたて給わず。また上宮太子の記して云わく「我が滅後二百余年に仏法日本に弘まるべし」云々。伝教大師、延暦年中に叡山を立て給う。桓武天皇は平の京都をたて給いき。太子の記文たがわざる故なり。されば、山門と王家とは、松と柏とのごとし、蘭と芝とににたり。松かるれば必ず柏かれ、らんしぼめばまたしばしぼむ。王法の栄えは山の悦び、王位の衰えは山の歎きと見えしに、既に世関東に移りしこと、なにとか思しめしけん。

秘法四十一人の行者。承久三年辛巳四月十九日、京夷乱れし時、関東調伏のため、隠岐法皇の宣旨によって始めて行わるる御修法十五壇の秘法。

一字金輪法〈天台座主・慈円僧正。伴僧十二口。関白殿基通の御沙汰〉

四天王法〈成興寺の宮僧正。伴僧八口。広瀬殿において。修明門院の御沙汰〉

不動明王法〈成宝僧正。伴僧八口。花山院禅門の御沙汰〉

大威徳法〈観厳僧正。伴僧八口。七条院の御沙汰〉
転輪聖王法〈成賢僧正。伴僧八口。同院の御沙汰〉
十壇大威徳法〈伴僧六口。覚朝僧正・俊性法印・永信法印・豪円法印・猷円僧都・慈賢僧正・賢乗僧都・仙尊僧都・行遍僧都・実覚法眼。已上十人、大旨本坊においてこれを修す〉
如意輪法〈妙高院僧正。伴僧八口。宜秋門院の御沙汰〉
毘沙門法〈常住院僧正。三井。伴僧六口。資賃の御沙汰〉。御本尊一日にこれを造らる。調伏の行儀なり。
如法愛染王法〈仁和寺御室の行法。五月三日これを始む。紫宸殿において二七日これを修せらる〉
仏眼法〈太政僧正、三七日これを修す〉
六字法〈快雅僧都〉
愛染王法〈観厳僧正、七日これを修す〉
不動法〈勧修寺の僧正。伴僧八口。皆僧綱〉
大威徳法〈安芸僧正〉
金剛童子法〈同人〉。
已上、十五壇の法了わんぬ。
五月十五日、伊賀太郎判官光季、京にして討たれ、同十九日鎌倉に聞こえ、同二十一日大勢軍兵上ると聞こえしかば、残るところの法、六月八日始めてこれを行わる。尊星王法〈覚朝僧正〉・太元法〈蔵有僧都〉・五壇法〈太政僧正・永信法印・全尊僧都・猷円僧都・行遍僧都〉・守護経法〈御室、これを行わる。我が朝二度これを行う〉。

五月二十一日、武蔵守殿は海道より上洛し、甲斐源氏は山道を上る。式部殿は北陸道を上り給う。六月五日、大津をかたむる手、甲斐源氏に破られ畢わんぬ。同六月十三日十四日、宇治橋の合戦、同十四日に京方破られ畢わんぬ。同十五日に武蔵守殿、六条へ入り給う。諸人入り畢わんぬ。七月十一日に本院は隠岐国へ流され給い、中院は阿波国へ流され給い、第三院は佐渡国へ流され給う。殿上人七人、誅殺せられ畢わんぬ。

かかる大悪法、年を経て漸々に関東に落ち下って、諸堂の別当・供僧となり、連々とこれを行う。本より教法の邪正・勝劣をば知ろしめさず、ただ三宝をばあがむべきこととばかりおぼしめす故に、自然としてこれを用いきたれり。関東の国々のみならず、叡山・東寺・園城寺の座主・別当、皆、関東の御計らいと成りぬる故に、彼の法の檀那と成り給いぬるなり。

問うて云わく、真言の教えをあながちに邪教と云う心、いかん。

答えて云わく、弘法大師云わく「第一大日経・第二華厳経・第三法華経」と。能く能くこの次第を案ずべし。仏はいかなる経にかこの三部の経の勝劣を説き判じ給えるや。もし「第一大日経・第二華厳経・第三法華経」と説き給える経あるならば、もっともしかるべし。その義なくんば、はなはだもって依用し難し。法華経に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところの諸経、しかもこの経の中において、法華は最も第一なり」云々。仏正しく諸教を挙げて、その中において法華第一と説き給う。仏の説法と弘法大師の筆とは、水火の相違なり。尋ね究むべきことなり。この筆を数百年が間、凡僧・高僧これを学し、貴賤上下これを信じて、大日経は一切経の中に第一とあがめけること、仏意に

叶わず。心あらん人は能く能く思い定むべきなり。もし仏意に相叶わぬ筆ならば、信ずともあに成仏すべきや。またこれをもって国土を祈らんに、当に不祥を起こさざるべきや。

また云わく「震旦の人師等、諍って醍醐を盗む」云々。文の意は、天台大師等、真言教の醍醐を盗んで法華経の醍醐と名づけ給えることは、この筆最第一の勝事なり。法華経を醍醐と名づけ給えることは、天台大師、涅槃経の文を勘えて、一切経の中には法華経を醍醐と名づくと判じ給えり。真言教の天竺より唐土へ渡ることは、天台出世の以後二百余年なり。されば、二百余年の後に渡るべき真言の醍醐を盗みて、法華経の醍醐と名づけ給いけるか。このこと、不審なり、不審なり。真言いまだ渡らざる以前の二百余年の人々を盗人とかき給えること、証拠いずれぞや。弘法大師の筆をや信ずべき、涅槃経に法華経を醍醐と説けるをや信ずべき。もし天台大師盗人ならば、涅槃経の文をばいかんがこ心得ころうべき。さては、涅槃経の文真実にして弘法の筆邪義ならば、邪義の教えを信ぜん人々は、いかん。ただ、弘法大師の筆と仏の説法と勘え合わせて、正義を信じ侍るべしと申すばかりなり。

疑って云わく、大日経は大日如来の説法なり。もししからば、釈尊の説法をもって大日如来の教法を打ちたること、すべて道理に相叶わず、いかん。

答えて云わく、大日如来は、いかなる人を父母として、いかなる国に出でて、大日経を説き給いけるやらん。もし父母なくして出世し給うならば、釈尊入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七千万歳が中間に仏出でて説法すべしということ、いかなる経文ぞや。もし証拠なくんば誰人か信ずべきや。かかる僻事をのみ構え申すあいだ、邪教とは申すなり。その迷謬尽くしがたし。わずか一・二を出